

2025 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—



2026 年 3 月

関西大学総合情報学部

はじめに

本報告書は、高槻市と関西大学が共同で、高槻市民を対象に実施した令和7年度市民意識調査「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」の成果を取りまとめたものです。この調査は、関西大学総合情報学部で開講している「社会調査実習」(2025年度)の授業の一環として行われているもので、当授業の受講生が、調査票の設計からデータの入力作業まで、実施全体に大きく関わっています。たとえば、春学期には、受講生各自の関心から調査テーマを設定した上で調査票の設計を行います。そして、秋学期には、調査票のデータ入力と分析、最終報告書の執筆を行うことで、社会調査の実施に必要となる一連の過程を経験します。

このような背景から、例年、この調査では、大学生らしい自由な発想の調査テーマが選ばれる特長があります。今年度も、生活満足度、音楽聴取、地域のつながり、地域ブランド、歴史遺産、地元への愛着など、若者にとって身近なものから、地域や社会の問題に関わるものまで、多様で独創的なテーマが並びました。これらの調査結果は、単に一つの地域の市民調査という枠を超えて、学術的にもさまざまな知見を提供するものだとはいえるでしょう。

本調査は今回で15回目となり、回収率は53.2%でした。過去は回収率が60%前後を推移することが多かったものの、前回の56.5%に続いて、今回も回収率の低下傾向が確認されました。今後はその要因を検討し、再び6割前後の回収率を確保する方策を検討していく必要があります。とはいえ、それでも5割を超える回収率を達成できたのは、関係各位の皆さまのご協力があったからこそ、成しえたことです。まず、関西大学総合情報学部の松本渉先生には、調査の準備から報告書の取りまとめまでのすべての段階で、毎回、的確で丁寧なご助言をいただきました。本調査を無事終えることができたのは松本先生にご尽力いただいたおかげです。また、ティーチング・アシスタントの雷新雨さん、スチューデント・アシスタントの数岡美咲さんには、これまでの社会調査の経験やスキルを活かして、受講生に寄り添った立場から様々なサポートをしていただきました。

この「社会調査実習」の授業では、大規模な郵送調査を実施する都合上、時間的制約のなかで、社会調査の一連の過程を一つずつ進めていく必要があります。受講生の皆さんには、調査テーマの設定、データ入力作業、データ分析と報告書執筆などすべての段階で、熱心に粘り強く、調査や作業に取り組んでもらいました。今年度の受講者は6名と少人数でしたが、その分、雰囲気は良好で、毎回、活発なディスカッションが行われました。一方で、少人数によるデータ入力作業は時間を要し、1年間で調査を実施し、報告書を完成させることは大変だったと思います。この報告書は、こうした受講生一人ひとりの努力の積み重ねによって完成した成果ともいえます。

最後に、本調査の実施にあたり、高槻市市民生活環境部市民生活相談課の皆さま、関西大学総合情報学部オフィスの皆さまに多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。そして何より、本調査にご協力いただきました高槻市民の皆さまに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

2026年3月

関西大学総合情報学部教授 阪口 祐介

目次

はじめに			i
第 1 章	調査の概要	阪口祐介・松本渉	1
第 2 章	調査結果の概要	雷 新雨	8
第 3 章	地域社会におけるつながりと満足度の関係	音田 真希	127
第 4 章	地域性に着目した生活満足度の分析	櫻井 彰吾	136
第 5 章	年齢・性別と音楽聴取形態	玉野 涼聖	152
第 6 章	歴史遺産への訪問頻度	吉田 伊織	162
第 7 章	地域資源・愛着と地域ブランドの認知	渡邊 宏基	173
第 8 章	歴史的興味と地元への愛着	西田カピーリア 桜良	183
資料			191
予告はがき			193
調査票			195

第 1 章 調査の概要

阪口 祐介・松本 渉

1. 調査の概要とスケジュール

高槻市と関西大学による市民意識調査「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」は、2025(令和 7)年 8 月から 9 月にかけて、高槻市と関西大学総合情報学部によって行われた。社会調査実習の一環として、春学期には調査票の作成が、夏休みには調査票発送作業が、秋学期にはデータ入力、データ作成、分析等が行われた(表 1)。

表 1 高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査スケジュール

	日付	授業内	授業外
春学期	4/10	「社会調査実習」前期授業開講	高槻市と関西大学の
	4/17～7/10	調査票の作成	打ち合わせ(随時)
夏休み	7/31		サンプリング
	7/15～7/31		調査票印刷
	8/5	調査票発送準備作業	
	8/25		予告はがき発送
	8/27		調査票発送
	9/12		返送締切日
秋学期	9/25	「社会調査実習」秋学期授業開講	
	9/25～11/13	データの入力・読み合わせ	
	11/14～12/5		データクリーニング
	11/20～12/4	分析方法の習得	
	12/11～1/15	中間レポートの提出・報告	速報版報告書執筆
	1/15	最終授業(最終レポートの提出)	報告書執筆
	1/15～2/28		報告書編集

2. サンプリング

調査対象者： 18歳以上 85歳未満の高槻市民(1940年8月1日～2007年7月31日出生)

抽出名簿： 住民基本台帳 (2025(令和7)年7月31日現在)

標本抽出法：層化抽出法

(具体的な手順)

1. 2025(令和7)年6月末現在の人口に基づいて、性別と年齢によって作成された12の層の人口を算出する。次に、その人口の比率に従って、計画標本2,000を各層に割り当てる(表2)。

表2 層化の基準日の人口構成と計画標本の割り当て

	令和7年6月末現在の人口			計画標本の割り当て		
	男	女	男女計	男	女	男女計
18・19歳	3,398	3,208	6,606	25	23	48
20代	16,462	16,983	33,445	119	124	243
30代	17,232	17,418	34,650	125	127	252
40代	21,854	22,433	44,287	159	162	321
50代	27,165	27,853	55,018	197	202	399
60代	17,881	19,441	37,322	130	141	271
70代以上	27,399	36,806	64,205	199	267	466
合計	131,391	144,142	275,533	954	1,046	2,000

2. 各層で割り当てられた人数を系統的に無作為抽出する。

3. 調査実施上の工夫

この調査では、調査および回収を円滑に実施するために、過年度と同様の工夫を行っている。

予告はがきの送付

調査票が届き次第、スムーズに回答できるように調査票発送の2日前に予告はがきを送付した。このように事前に調査の実施を通知することで、調査対象者は心の準備をすることができ、また調査に対する期待感を高められると考えたからである。なお、見やすくシンプルな文面とするため、ご挨拶以外にはがきに掲載した情報は最低限(「近日中に大きな茶封筒(ボールペン入り)が届くこと」「対象者が無作為で選ばれたこと」の2点)にとどめた。今回は8月25日(月)に予告はがきを送付した。

調査票送付日

調査票の送付は、大学の窓口の盆休み終了後、最初の水曜日である 2025(令和 7)年 8 月 27 日(水)に行った。勤め人の夏休みを避けた上で、金曜日頃に調査票を受け取れるようにするためである。なお、2022 年度までは、調査票の送付は木曜日であったが、2023 年度から水曜日に変更している。2021 年 10 月より土曜日の郵便配達休止されたことで、以前は土曜日に届いていた配達が月曜日になったため、週末に調査票が届くように 1 日発送を早くした。

同封物

筆記具を探す必要がないようにという配慮から、箱入りボールペンを同封した。また、箱を同封することで封筒の形状を目立たせ、ほかの郵便物に紛れなくなるという効果もある。2025 年度は、これまでの無地箱が廃盤となったため、同じサイズの熨斗箱(関西大学と印刷)に変更した。なお事前にも事後にも金銭的な謝礼は一切行っていない。

調査票の用紙

目立つように、鶯色(なお前年は水色)の紙を使用した。また、やや重くなるが、裏面が透けて読みにくくならないように厚手の紙を利用した。

調査票における挨拶文

すぐに質問文が目に入るようにするため、挨拶文は 1 ページの上段のみにとどめた。その主な内容は、①調査目的以外に一切利用しないこと、②結果の公表を約束すること、③住所や名前を記入しないことをお願いすることの 3 点である。それぞれ、①安心感の付与、②社会還元の明示、③匿名性の担保を示している。

調査票の構成デザイン

二段組にすることによってスペースを有効に利用し、A4 サイズ 8 ページ(両面)の範囲に収まる調査票とした。文字フォントは、質問文を太字の MS ゴシック、選択肢を MS 明朝としてメリハリをつけた。

封筒

調査票送付用封筒については、A4 サイズの調査票を折り曲げずに済むように、角 2 サイズの糊付封筒を利用した。

一方、返信用の封筒については、ハイシール加工済みの角 2 サイズの封筒を利用した。調査対象者が、回答票を封入して返送しやすくするためである。

催促状(なし)

催促状の送付は行っていない。

4. 調査票の回収状況

4.1. 返送状況

調査票の返送状況について述べる。図 1 は、消印の日付から調査票の返送状況の経過を示したものである。

最も早い消印は翌 8 月 28 日(金)である。返送日の山が二つみられる。第 1 の山は、返送数 165 となった 8 月 30 日(土)であり、調査票受取直後の記入・返送のピークといえる。第 2 の山は、最大の返送数 171 となった 9 月 1 日(月)である。調査票受領後におとずれた土日を利用して記入・返送のピークといえる。これに続く山は、返送数 39 であった 9 月 6 日(土)から返送数 39 であった 9 月 9 日(火)までの期間であり、調査票受取直後の時期に生じる 2 つのピークの後に、平坦な山が続く返送のパターンはおおむね例年の調査と同様といえる。

累積返送率については、調査票の返送受け取り期間の前半で返送率が 50%台に達している。累積返送率のグラフ(図 1)が示しているように、回収期間後半に入ってもなだらかに上昇を続け、受け取り締切日頃には返送率が 53%を推移する結果になった。

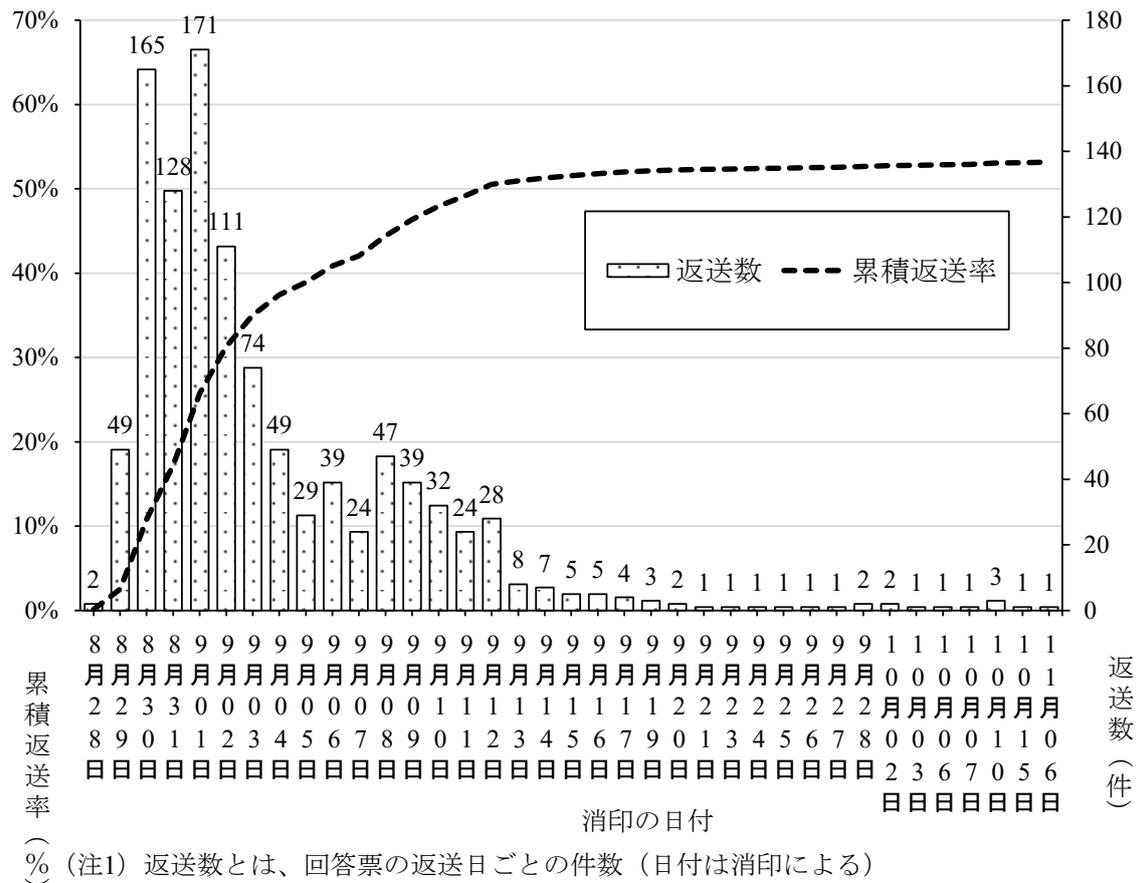


図 1 時系列に見た調査票の返送状況

4.2. 回収率と調査不能の内訳

郵送調査の特質上、締切日の9月12日(金)以降も調査票の返送が続いた。そのためしばらくの間返送を受け付け、11月10日(月)で打ち切った。返送されてきた調査票総数は1,068件であり、無効調査票は5であった。最終的に有効な回答票数を1,063件、回収率を53.2%とした。調査不能の内訳も含めた調査の状況は表3の通りである。

表3 回収率と調査不能の内訳

		件数	(%)
1. 調査不能	尋ね当たらず等	5	(0.3%)
	未返送	927	(46.4%)
	無効調査票	5	(0.3%)
	計	937	(46.9%)
2. 有効回答票		1,063	(53.2%)
3. 計画標本サイズ(合計)		2,000	100.0%

4.3. 回収率の詳細

男女別の回収率については、男性44.1%、女性59.2%となり、女性の方が15%ほど高い(表4)。年齢層別の回収率では、70代以上で70.4%、60代で61.6%と高く、年齢が下がるにつれて回収率が低下し、20代で26.8%、18・19歳で25.0%まで低下する(表5)。社会調査において、男性よりも女性において、若年層よりも高年齢層において回収率が高くなることは一般的な傾向である。

表4 男女別の回収率

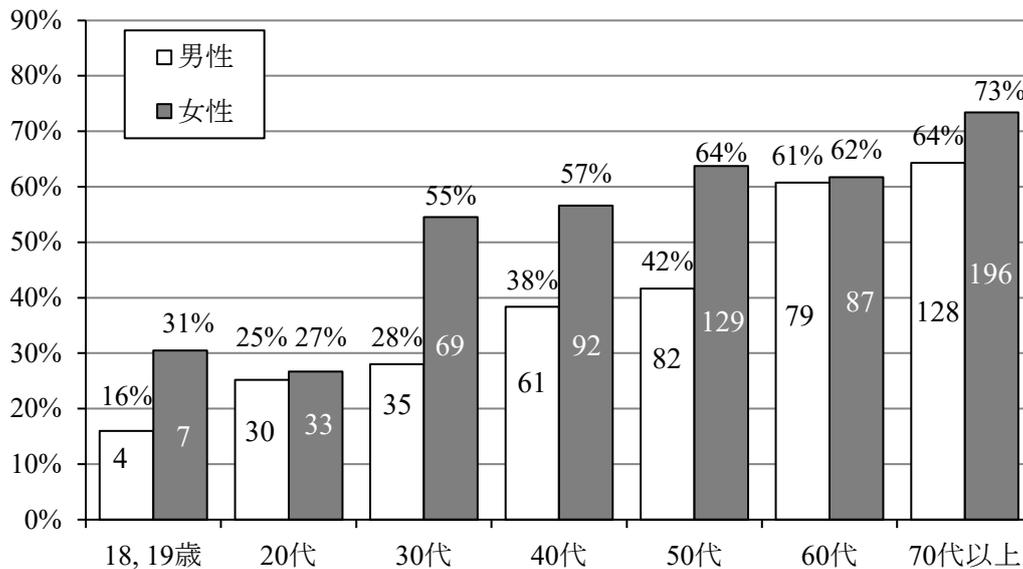
	男性	女性	不明	合計
回収標本	421	619	23	1,063
計画標本	954	1046	—	2,000
回収率 (%)	44.1%	59.2%	—	53.2%

(注) 男女別の回収率の計算には、不明分23が含まれていない。

表5 年齢層別の回収率

	18, 19歳	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	不明	合計
回収標本	12	65	105	153	212	167	328	21	1,063
計画標本	48	243	252	321	399	271	466	—	2,000
回収率 (%)	25.0%	26.8%	41.7%	47.6%	53.1%	61.6%	70.4%	—	53.2%

(注) 年齢別の回収率の計算には、不明分21が含まれていない。



(注1) 棒グラフの高さおよび上側の数字は、回収率をあらわしている。
(注2) 棒グラフの内側の数字は、各層における実際の回収数である。

図2 男女・年齢層別の回収率

5. 回収標本の特徴

前述した男女別・年齢層別の回収率の違いにより、回収標本が母集団からある程度ずれている可能性があるため、その確認を行った。

表6は、母集団における男女・年齢別の人口分布と回収標本における男女・年齢別の人口分布を比較したものである。適合度検定*から、男女・年齢別の人口分布について、回収標本が母集団と乖離していることが統計学的に示されている。とりわけ、20代から50代の男性といった回収率の低い層では母集団よりも過小な人口割合である一方で、70代以上の男性、30代以上の女性といった回収率の高い層では母集団より過大な人口割合である。

高槻市の統計では、世帯人数別の人口分布もわかるので、この点についても回収標本と母集団との間の人口分布の比較を行った(表7)。その結果、この比較においても適合度検定*から両者が乖離していることが統計学的に示された。一人暮らしの多い20代、30代の回収率の低さがここにも影響したと考えられる。

*適合度検定

観測したデータの分布が、理論上の分布にあてはまっているかどうかを調べる統計学的手法。表6と表7では、2025(令和7)年6月末時点での高槻市全体の人口の分布を理論上の分布としている。なお、表6と表7の注釈にある統計量 χ^2 は適合度基準と呼ばれる値で、この値が0の場合二つの分布は同一であり、値が大きいほど乖離していることを示している。 df は、自由度と呼ばれる値(表6と表7では、「性別と年齢」「世帯人員数」の各カテゴリ数から1を引いた数に相当)である。 p は、二つの分布が同一の分布である確率を表しており、統計量 χ^2 と自由度 df から計算されている。

表 6 男女・年齢別の人口分布の比較

性別	年齢	回収標本	%	R7年6月末	
				人口	%
男性	18, 19歳	4	0.4%	3,398	1.2%
男性	20代	30	2.9%	16,462	6.0%
男性	30代	35	3.4%	17,232	6.3%
男性	40代	61	5.9%	21,854	7.9%
男性	50代	82	7.9%	27,165	9.9%
男性	60代	79	7.7%	17,881	6.5%
男性	70～84歳	128	12.4%	27,399	9.9%
女性	18, 19歳	7	0.7%	3,208	1.2%
女性	20代	33	3.2%	16,983	6.2%
女性	30代	69	6.7%	17,418	6.3%
女性	40代	92	8.9%	22,433	8.1%
女性	50代	129	12.5%	27,853	10.1%
女性	60代	87	8.4%	19,441	7.1%
女性	70～84歳	196	19.0%	36,806	13.4%
合計		1,032	100.0%	275,533	100%

(注1) 表左側の回収標本には、性別または年齢の不明分31件が含まれていない。

(注2) 表右側のR7年6月末人口は、高槻市全体の人口である

(<https://www.city.takatsuki.osaka.jp/soshiki/11/33243.html>) 参照

(適合度検定) $\chi^2=104.2629$, $df=13$, $p<0.0001$

表 7 世帯人員別世帯数分布の比較

世帯人員数	回収標本	%	R7年6月末	
			世帯人員数別人口	%
1人	141	13.3%	70,173	20.4%
2人	361	34.0%	93,778	27.2%
3人	240	22.6%	74,460	21.6%
4人	182	17.1%	77,008	22.3%
5人	63	5.9%	23,940	6.9%
6人	16	1.5%	4,008	1.2%
7人	8	0.8%	1,022	0.3%
8人	1	0.1%	152	0.0%
9人	1	0.1%	90	0.0%
10人	0	0.0%	50	0.0%
11人以上	0	0.0%	22	0.0%
無回答	50	4.7%	—	—
合計	1,063	100.0%	344,703	100.0%

(注1) 表右側の世帯人数別人口は母集団の分布であり、高槻市の人口

(<https://www.city.takatsuki.osaka.jp/soshiki/11/33243.html>) から算出した。ただし、回収標本が18～84歳で構成されているのに対し、表右側の世帯人数別人口には未成年および85歳以上も含まれている。

(適合度検定) $\chi^2=70.3536$, $df=10$, $p<0.0001$

第2章 調査結果の概要

雷 新雨

1. 調査対象者の属性

調査票の質問順とは異なるが、はじめに本調査における回答者の属性を確認する。ただし、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示している。よって合計%は100.0%になるとは限らない。回答者の性別は男性が421人で女性が619人であり女性の方が多（図1）。年齢は70代が約3割と多く、18歳、19歳と20代は1割未満と少ない（図2）。男女別に年齢を確認してもほぼ同様の傾向が見られる（図3）。

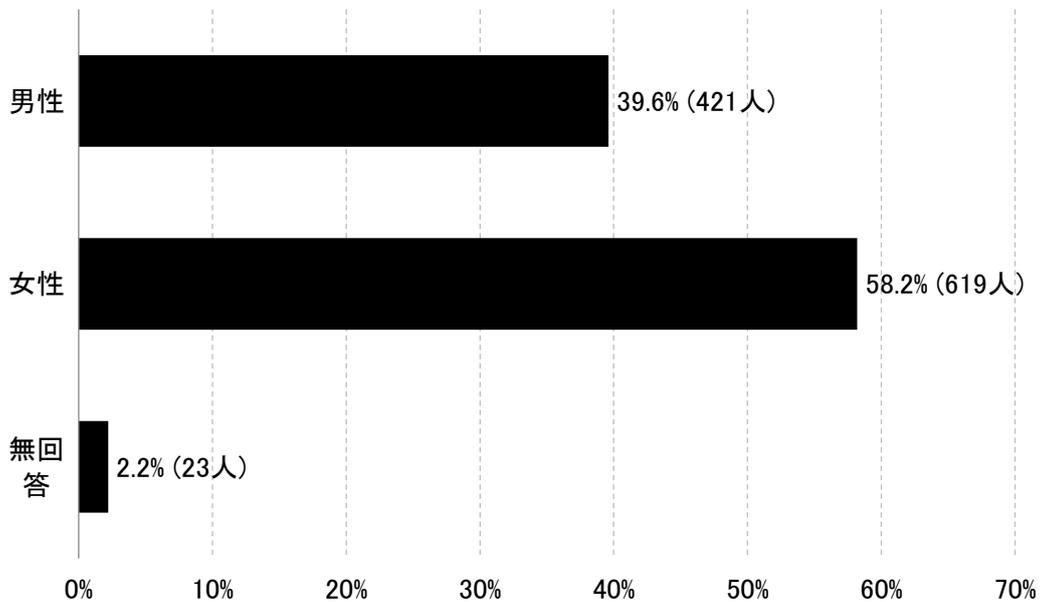


図1 Q47 性別

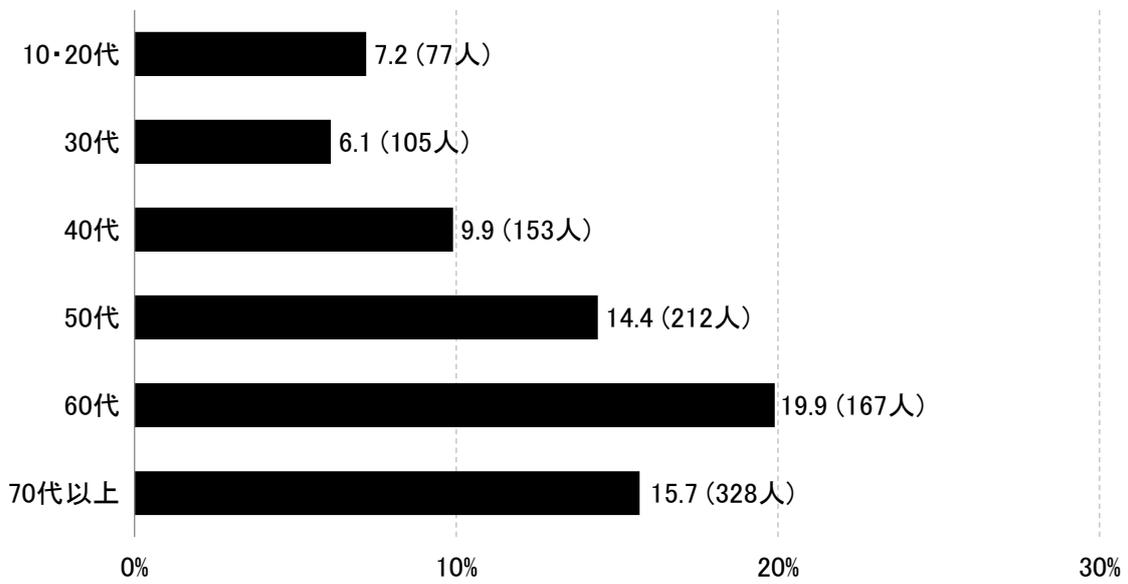


図 2 Q48 年齢

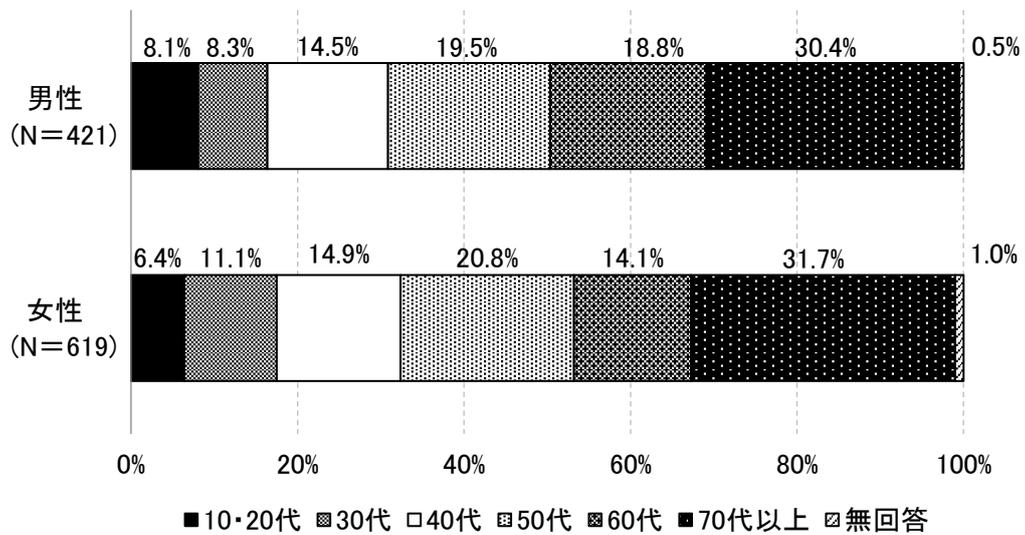


図 3 性別×年齢

以降、基本的にはすべての質問項目に関して性別・年齢とのクロス集計を提示する。ただし、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関して、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。なお、本調査の全回答者数は1,063人である。性別・年齢の内訳については図1と図2を参照のこと。また、質問項目ごとの設問提案者と例年の質問項目との対応関係の一覧については本章の最後を参照のこと。

職業は、合計を見ると常時雇用者が30.6%と最も多く、次いで無職が多い。男女別で見ると、男性は常時雇用者が43.9%と最も多く、女性は臨時雇用、パート、アルバイトが24.1%と最も多い。年代別で見ると、60代・70代以上で常時雇用者の割合が大きく減少し、無職が大きく増加している。臨時雇用、パート、アルバイトと回答した人は、50代から60代が2割以上となっている(表1)。

表1 Q49 職業

		(%)									
		常時雇用 の勤め人	臨時雇用、 パート、 アルバイト	自営業主	自営業の 家族従業 者	経営者、 役員	家事専業	学生	無職	その他	無回答
男女別	合計 (N=1063)	30.6	17.7	3.5	1.5	2.4	12.8	2.5	24.1	1.1	3.9
	男性 (N=421)	43.9	9.3	5.9	0.5	3.8	0.0	3.8	30.2	1.0	1.7
	女性 (N=619)	21.8	24.1	1.9	2.3	1.5	21.6	1.8	20.5	1.1	3.4
年代別	10・20代 (N=77)	42.9	7.8	0.0	0.0	0.0	2.6	33.8	9.1	1.3	2.6
	30代 (N=105)	55.2	15.2	3.8	2.9	2.9	14.3	1.0	1.9	1.9	1.0
	40代 (N=153)	57.5	19.6	2.6	0.7	2.0	9.2	0.0	3.3	2.0	3.3
	50代 (N=212)	44.3	29.7	3.3	1.4	3.8	9.4	0.0	5.2	0.9	1.9
	60代 (N=167)	22.8	27.5	4.8	2.4	4.2	13.2	0.0	22.2	1.2	1.8
	70代以上 (N=328)	2.4	7.6	4.3	1.5	1.2	19.2	0.0	59.1	0.6	4.0

最終学歴は、男女別で見ると、男性が「大学（旧高専）・大学院」が48.0%と最も多いのに対し、女性が25.5%と男性よりも少ない。女性で最も多いのは「高校（または旧制中学など）」であり、32.1%である。また、「短大・高専（5年制）」は男性が3.3%と最も少ないのに対して、女性が19.5%と「高校（または旧制中学など）」や「大学（旧高専）・大学院」に次いで3番目の多さである。年代別で見ると、10・20代が「大学（旧高専）・大学院」が59.7%であるが、年代が上がるごとに減少傾向にあり、70代以上が17.4%である。反対に、10・20代は「高校（または旧制中学など）」が16.9%であるが、年代が上がるごとに増加し、70代以上が51.5%となっている（図4）。

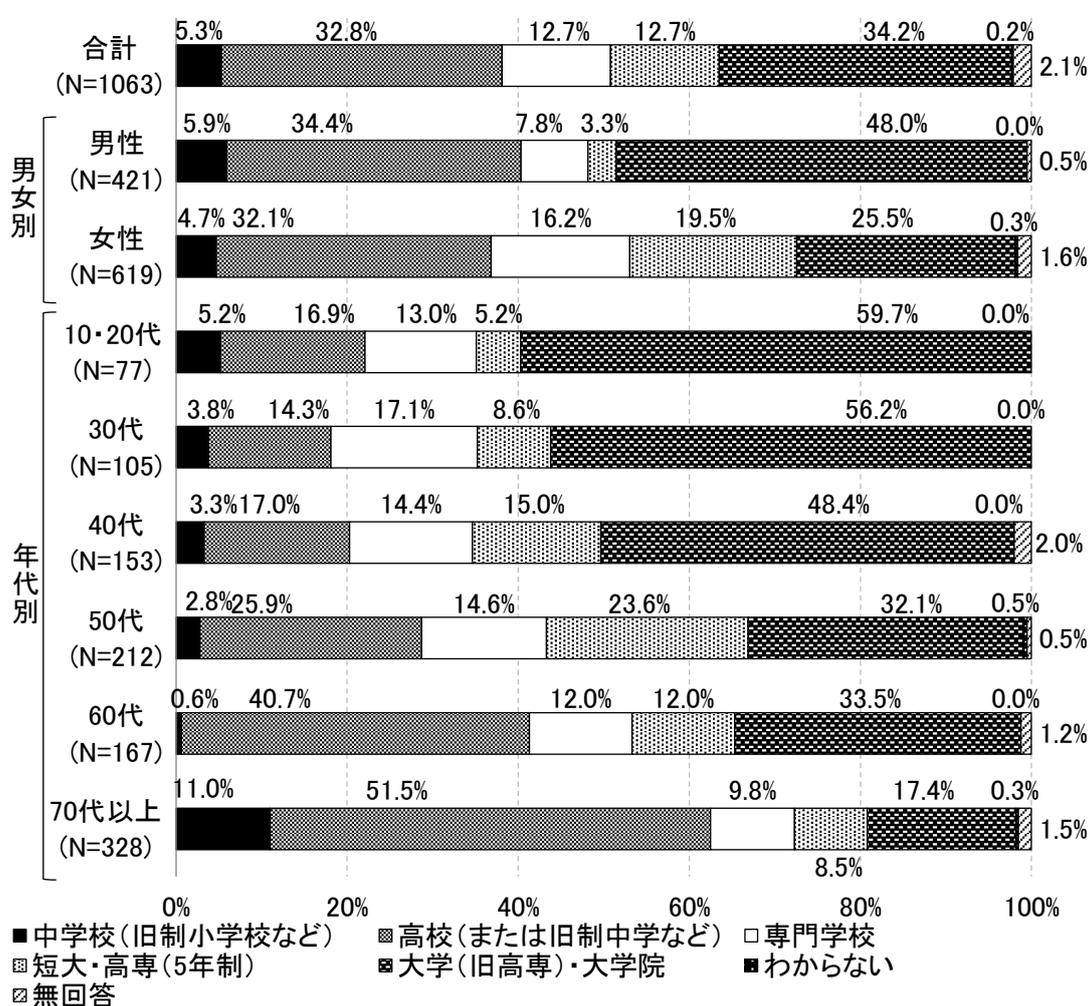


図4 Q50 最終学歴

居住地域については昨年のおり、単純集計のみを提示する。ここでの地区とは小学校の校区を参考としている。各地区と該当小学校区は、檜田地区（檜田小学校）、高槻北地区（芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小学校）、高槻南地区（高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校）、五領地区（五領・上牧小学校）、高槻西地区（郡家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校）、如是・富田地区（芝生・丸橋・寿栄・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校）、三箇牧地区（三箇牧・柱本小学校）である（図 5）。

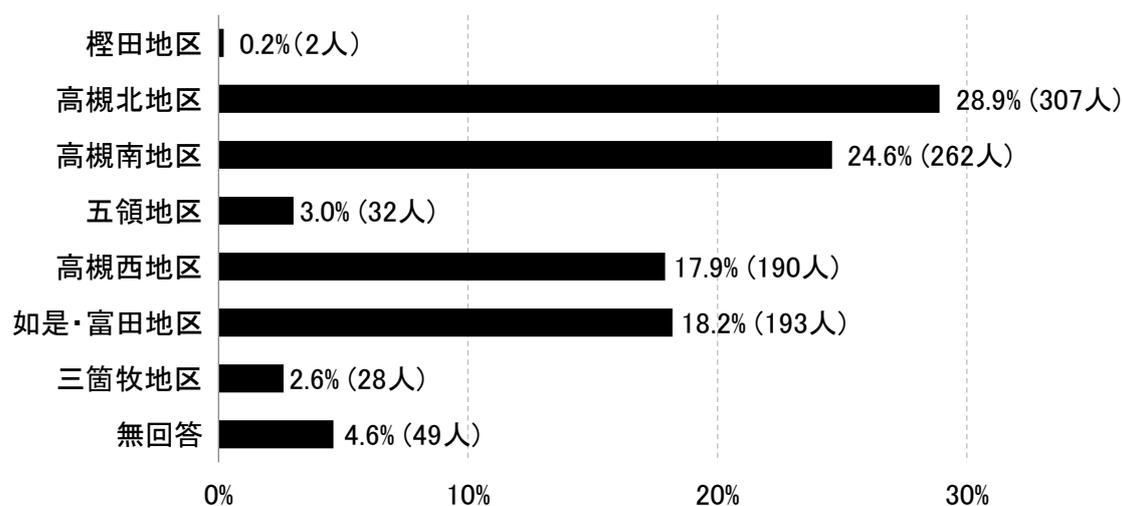


図 5 Q51 居住地域

高槻市内での居住年数に関して、全体の8割以上が10年以上市内に居住していることがわかる。年代別で見ると、10・20代が「20年以上30年未満」が53.2%と最も多く、子どもころから市内に居住していることがわかる。70代以上が「50年以上」が43.3%と最も多い。なお、大きな男女差は見られない(表2)。

表2 Q52 市内居住年数

		(%)									
		1年未満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上 40年未満	40年以上 50年未満	50年以上	無回答
男女別	合計 (N=1063)	2.0	2.9	1.2	6.5	11.9	17.3	16.3	17.9	22.8	1.3
	男性 (N=421)	2.1	3.1	1.2	5.2	11.9	18.1	16.2	17.1	24.5	0.7
	女性 (N=619)	1.5	2.9	1.1	7.4	12.3	17.0	16.6	19.1	21.5	0.6
年代別	10・20代 (N=77)	5.2	10.4	2.6	6.5	19.5	53.2	0.0	0.0	2.6	0.0
	30代 (N=105)	5.7	9.5	4.8	28.6	10.5	16.2	23.8	0.0	0.0	1.0
	40代 (N=153)	2.0	2.0	2.6	10.5	26.1	11.8	11.8	32.0	0.0	1.3
	50代 (N=212)	1.4	2.8	0.0	4.2	15.1	26.9	13.7	9.9	25.9	0.0
	60代 (N=167)	1.8	1.2	0.0	2.4	7.2	12.6	31.1	18.0	25.1	0.6
	70代以上 (N=328)	0.6	0.6	0.3	1.5	4.6	7.6	14.3	27.1	43.3	0.0

市民の住居は、男女別・年代別のすべての層で「一戸建て」の方が「集合住宅（アパート・マンションなど）」よりも高い割合である。（図 6）。

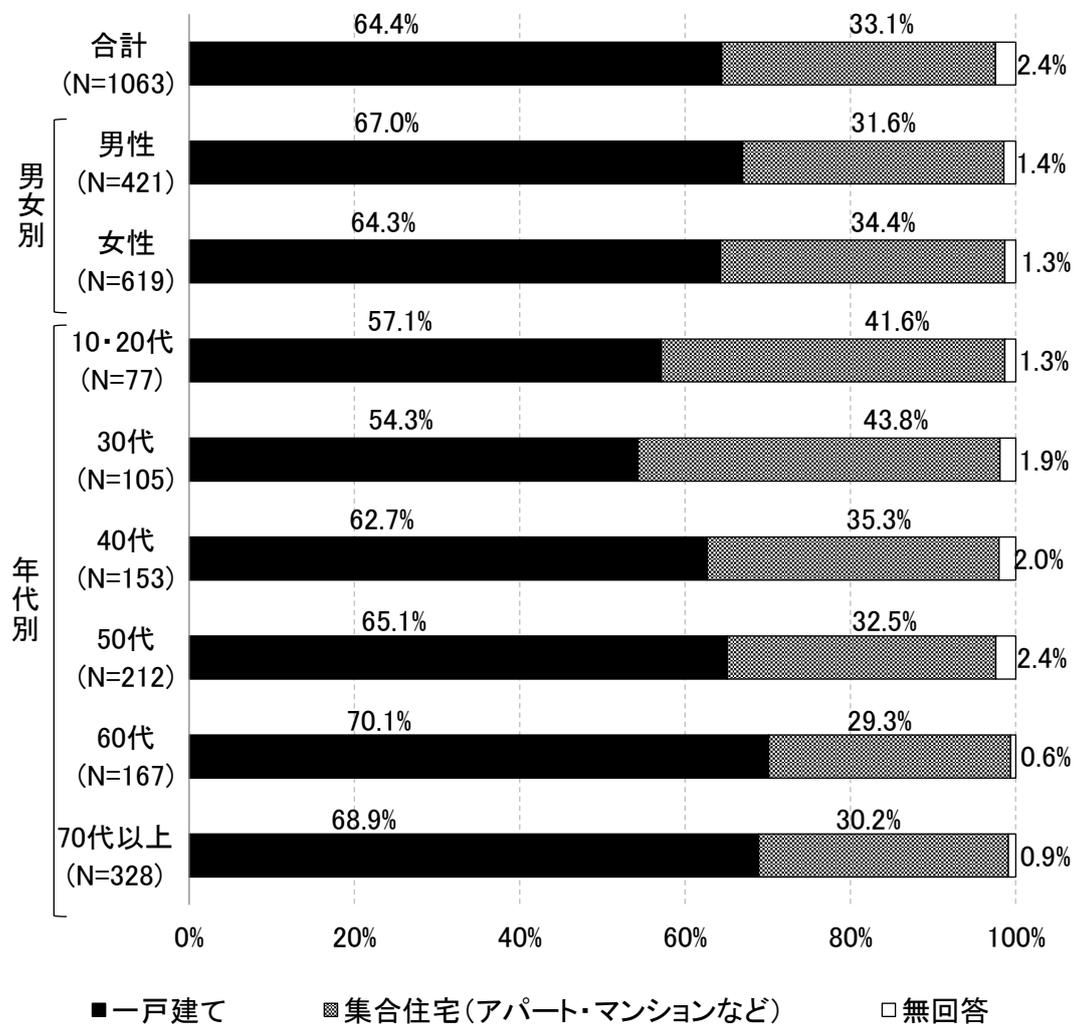


図 6 Q53 住居

居住形態は、男女別・年代別のすべての層で「持ち家」が6割以上と最も高い割合である。40代以上は7割以上が「持ち家」である。「民間の賃貸住宅」では、30代が29.5%と一定割合いるが、年代が上がるにつれて減少傾向にあり、70代以上で8.5%になる。「公社・公団等の公営の賃貸住宅」の割合は、70代以上が8.5%と最も高く、次いで50代の5.2%である（図7）。

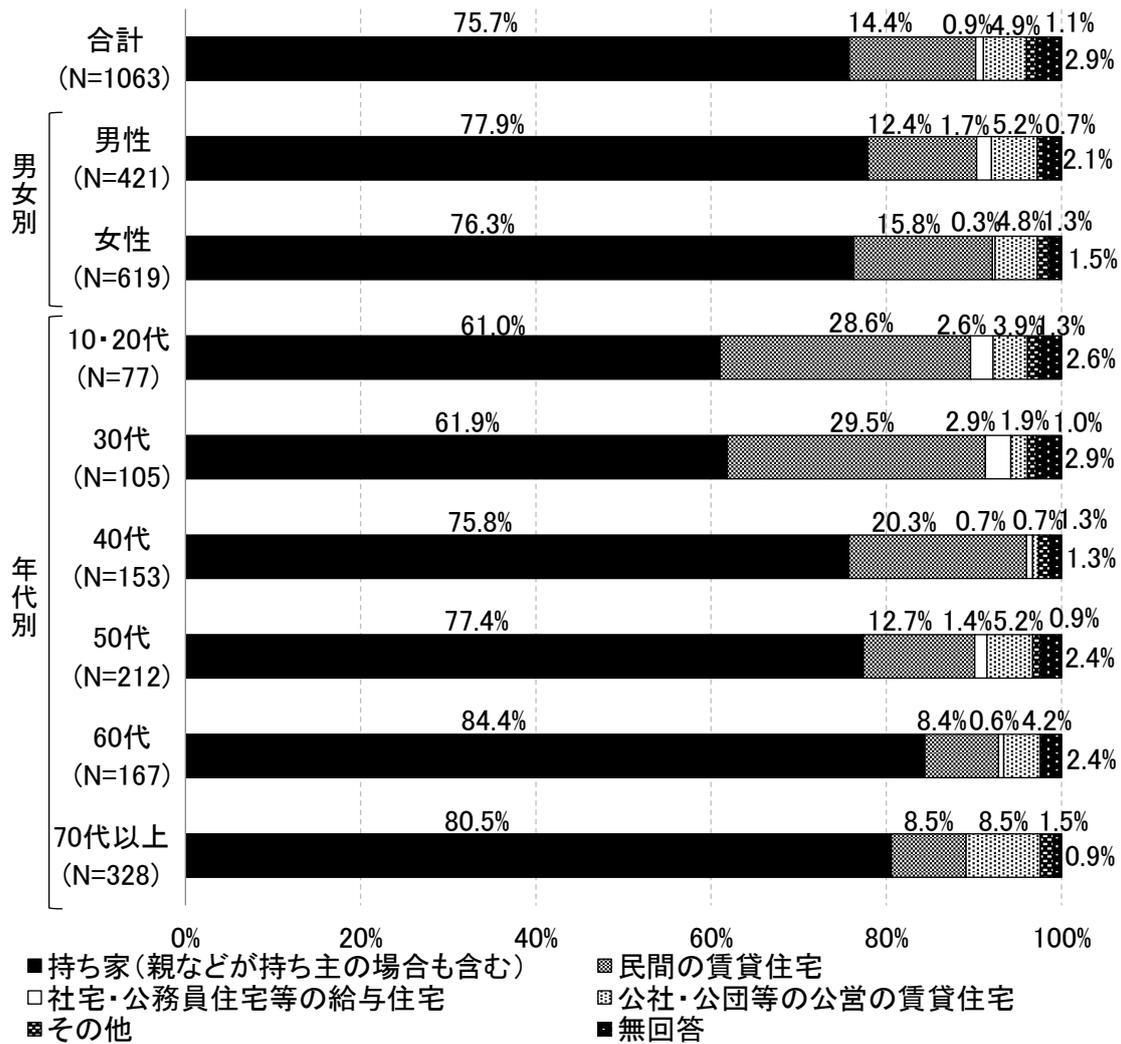


図7 Q54 居住形態

婚姻状況に関して、男女別・年代別の30代以上の層で、「既婚（配偶者あり）」が最も高い割合を占める。10・20代は「未婚」の割合が8割以上である。男女別で見ると、「既婚（離別・死別）」の割合は、男性で10.0%、女性で17.9%と、女性の方が7.9ポイント高い（図8）。

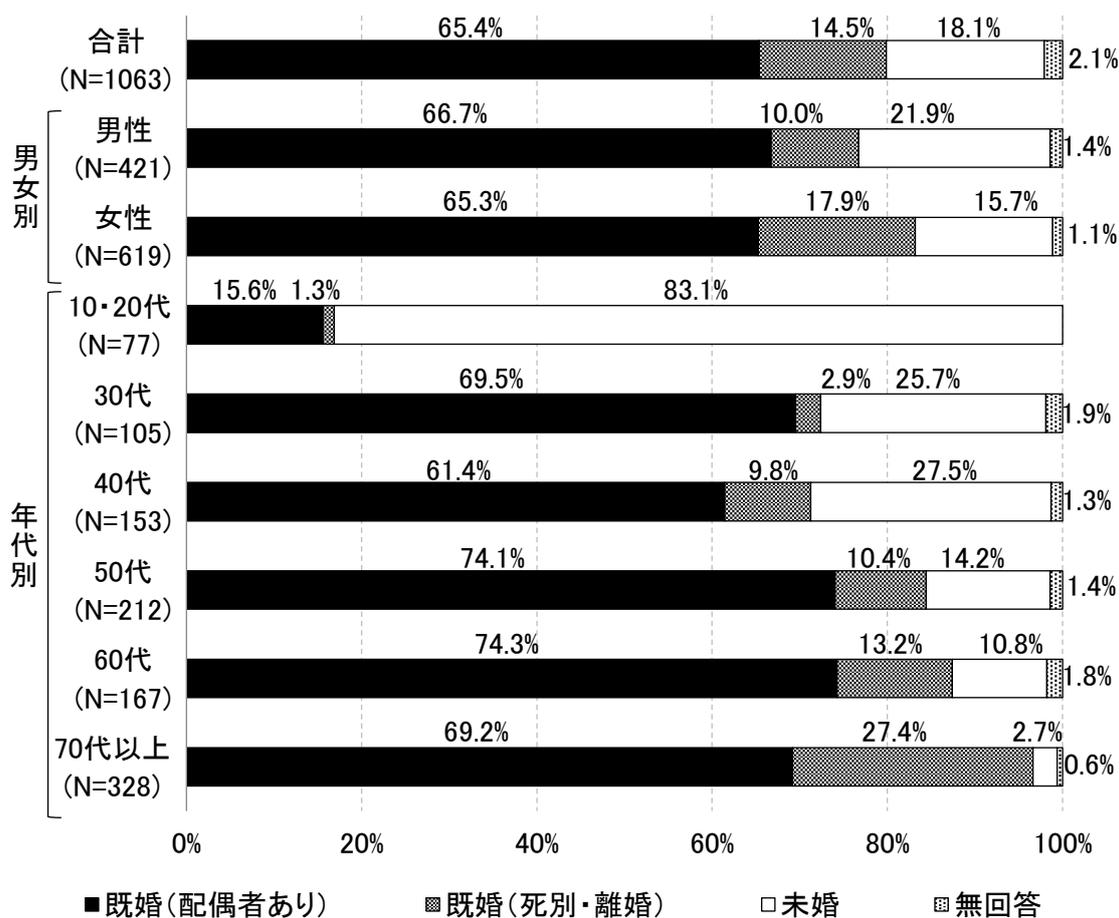


図8 Q55 婚姻状況

子どもの有無に関して、男女別の各層・年代別の30代以上の層で、「いる」と回答した人の割合が「いない」と回答した人の割合より高い。10・20代は「いない」割合が8割以上である。なお、「いる」と回答した人の割合は、女性の方が男性よりも7.3ポイント高い(図9)。

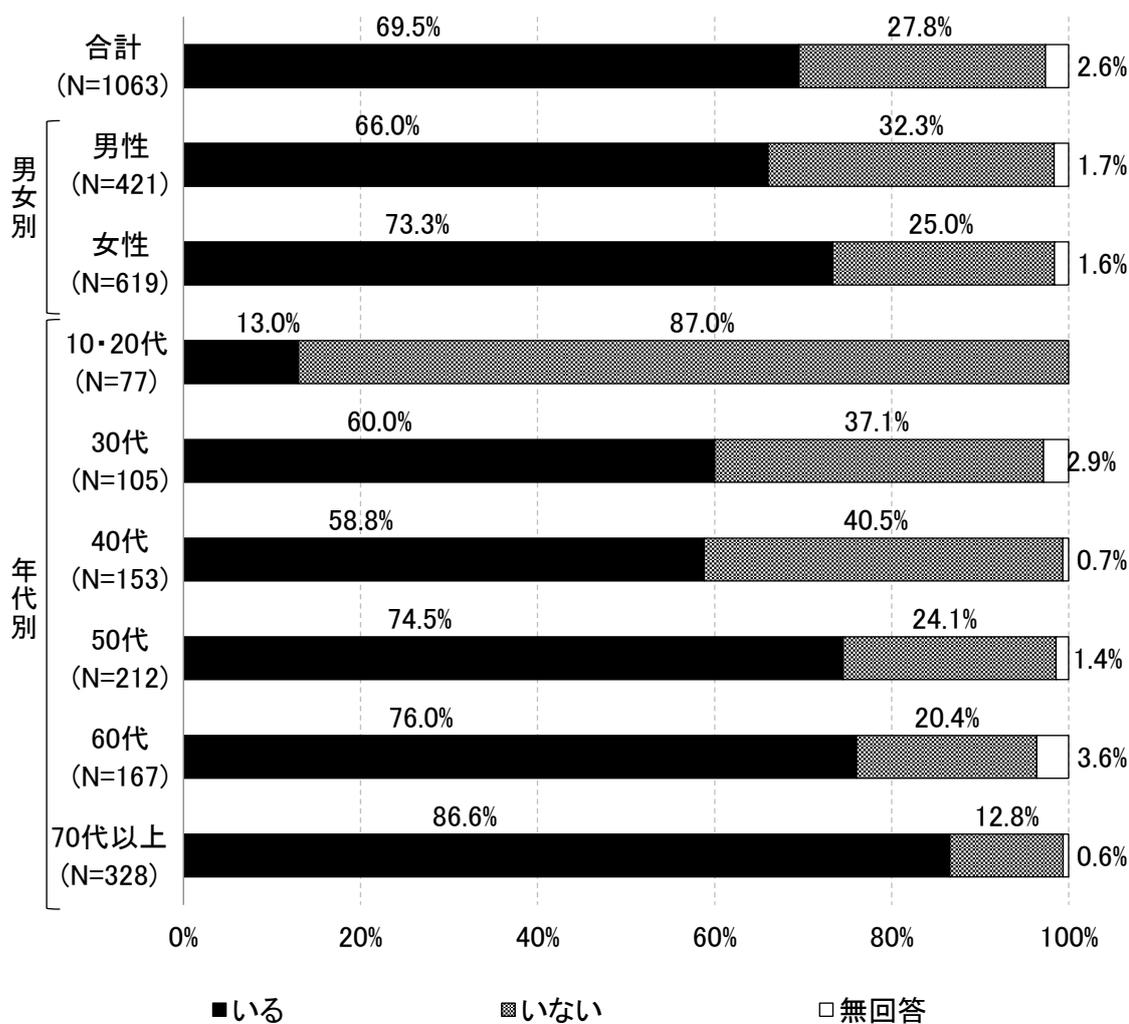


図9 Q56 子どもの有無

世帯人数に関して、2～3人世帯で5割以上を占める。年代別で見ると、10・20代、30代は3人世帯が最も多い。一方で40代と50代は4人世帯が最も多い。また、70代以上は2人世帯が5割以上を占めている（表3）。

表3 Q57 世帯人数

											(%)
		1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	無回答
男女別	合計 (N=1063)	13.3	34.0	22.6	17.1	5.9	1.5	0.8	0.1	0.1	4.7
	男性 (N=421)	15.4	34.9	22.1	18.3	4.5	1.4	0.5	0.0	0.0	2.9
	女性 (N=619)	12.1	33.6	23.6	16.5	7.1	1.6	0.8	0.2	0.2	4.4
年代別	10・20代 (N=77)	13.0	10.4	33.8	26.0	9.1	1.3	3.9	0.0	0.0	2.6
	30代 (N=105)	6.7	18.1	34.3	25.7	9.5	1.9	0.0	0.0	0.0	3.8
	40代 (N=153)	13.1	22.9	19.6	25.5	11.1	2.0	1.3	0.0	0.0	4.6
	50代 (N=212)	11.8	19.3	22.2	31.1	9.4	2.8	0.0	0.0	0.0	3.3
	60代 (N=167)	16.8	43.1	25.1	7.8	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	4.2
	70代以上 (N=328)	15.2	56.1	17.7	4.6	2.4	0.9	0.6	0.0	0.0	2.4

世帯年収は、合計および男性・女性が「200～400万円未満」が最も多い。年代別で見ると、「わからない」を除いて割合が最も高いのは、10・20代が「400万円～600万円未満」、30代～40代が「800万円～1000万円未満」と、年代が上がるごとに年収が高額になっている。ただし、60代と70代以上は「200万円～400万円未満」の割合が最も高い（表4）。

表4 Q58 世帯年収

										(%)	
		100万円未満	100万円～200万円未満	200万円～400万円未満	400万円～600万円未満	600万円～800万円未満	800万円～1000万円未満	1000万円～1500万円未満	1500万円以上	わからない	無回答
男女別	合計 (N=1063)	5.3	8.9	22.2	11.8	11.2	10.5	6.8	3.9	8.6	10.9
	男性 (N=421)	5.0	6.7	27.6	10.5	12.4	14.3	8.6	3.1	6.2	5.9
	女性 (N=619)	5.3	10.7	19.2	13.1	10.7	8.4	5.8	4.5	10.2	12.1
年代別	10・20代 (N=77)	10.4	2.6	10.4	14.3	9.1	7.8	5.2	2.6	35.1	2.6
	30代 (N=105)	4.8	4.8	10.5	13.3	15.2	16.2	9.5	4.8	13.3	7.6
	40代 (N=153)	4.6	3.9	9.2	15.0	17.0	20.3	11.1	5.9	6.5	6.5
	50代 (N=212)	4.2	4.7	9.9	11.3	18.9	13.7	11.3	8.5	8.0	9.4
	60代 (N=167)	6.0	10.2	24.6	11.4	8.4	11.4	7.2	2.4	4.8	13.8
	70代以上 (N=328)	5.2	16.8	42.4	10.1	4.9	3.0	1.5	0.9	4.3	11.0

2. 各質問項目の結果

ここからは回答者個人の属性だけでなく、意識や行動などの項目についての結果の概要を示す。ここでも基本的には性別・年齢によるクロス集計を提示する。なお、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関して、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。回答者の性別と年齢の分布については、図1と図2を参照のこと。

なお、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示している。よって合計%は100.0%になるとは限らない。

Q1の生活満足度に関して、男女別・年代別のすべての層で6割以上が「満足」または「やや満足」と回答している。年代別で見ると、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は10・20代が80.5%と最も高く、50代が62.7%と最も低い(図10)。

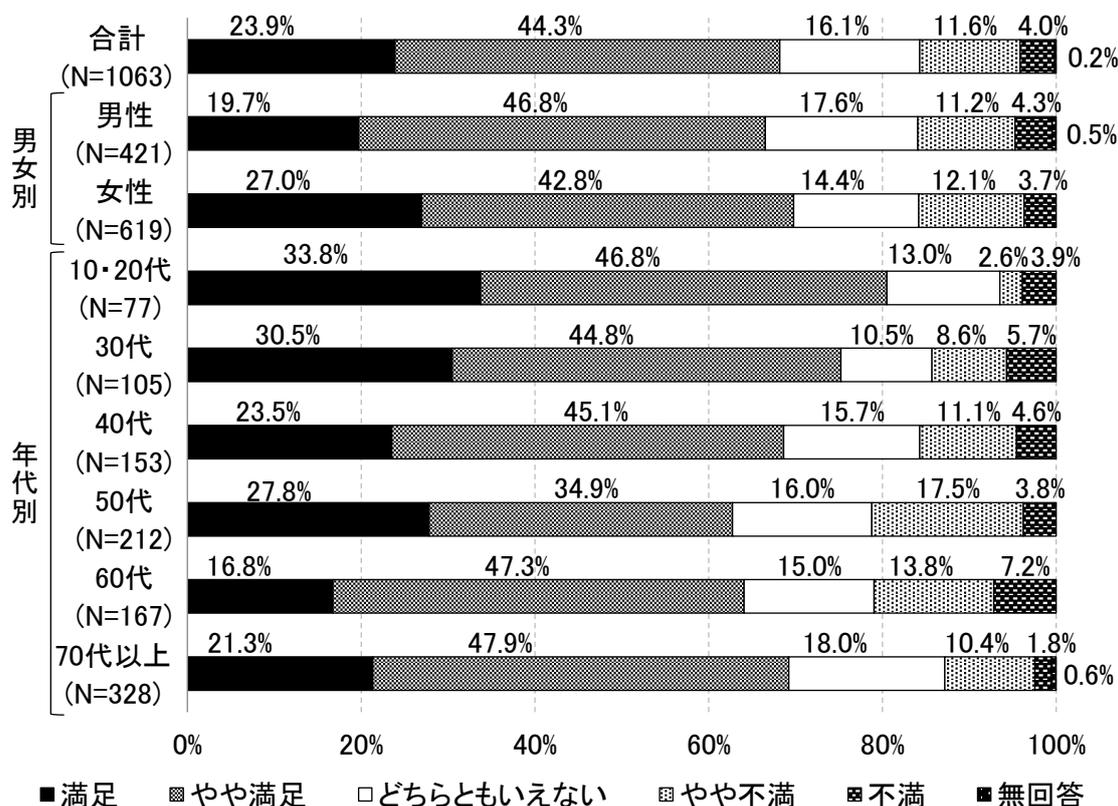


図10 Q1 生活満足度

Q2の幸福度に関して、男女別で見ると、男女ともに「幸せ」または「やや幸せ」と回答した人の割合は7割程度である。年代別で見ると、「幸せ」または「やや幸せ」と回答した人の割合はすべての層で7割を超えており、10・20代が80.5%と最も高い（図11）。

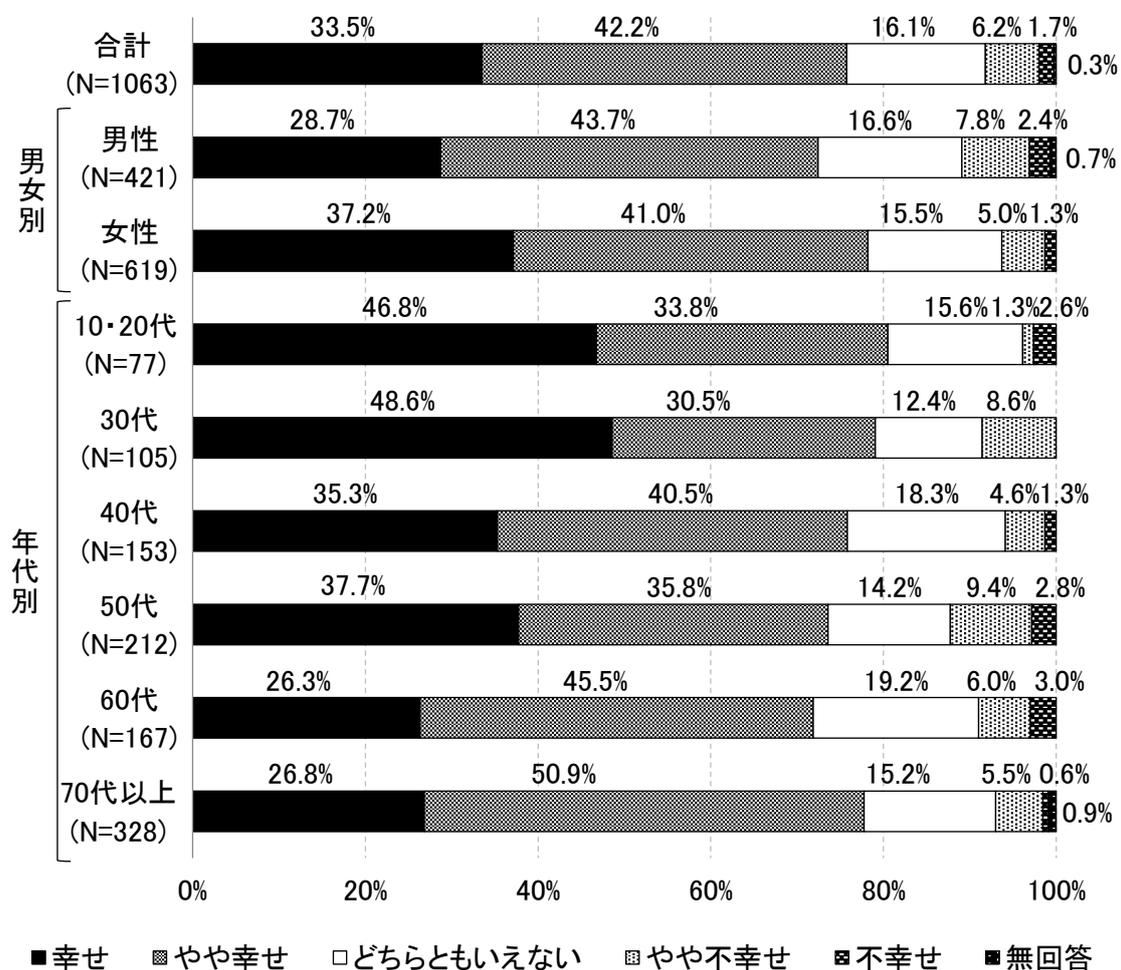


図 11 Q2 幸福度

Q3 の高槻市に愛着を感じますかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が7割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は70代以上が86.6%と最も高い。反対に10・20代が77.9%と最も低い(図12)。

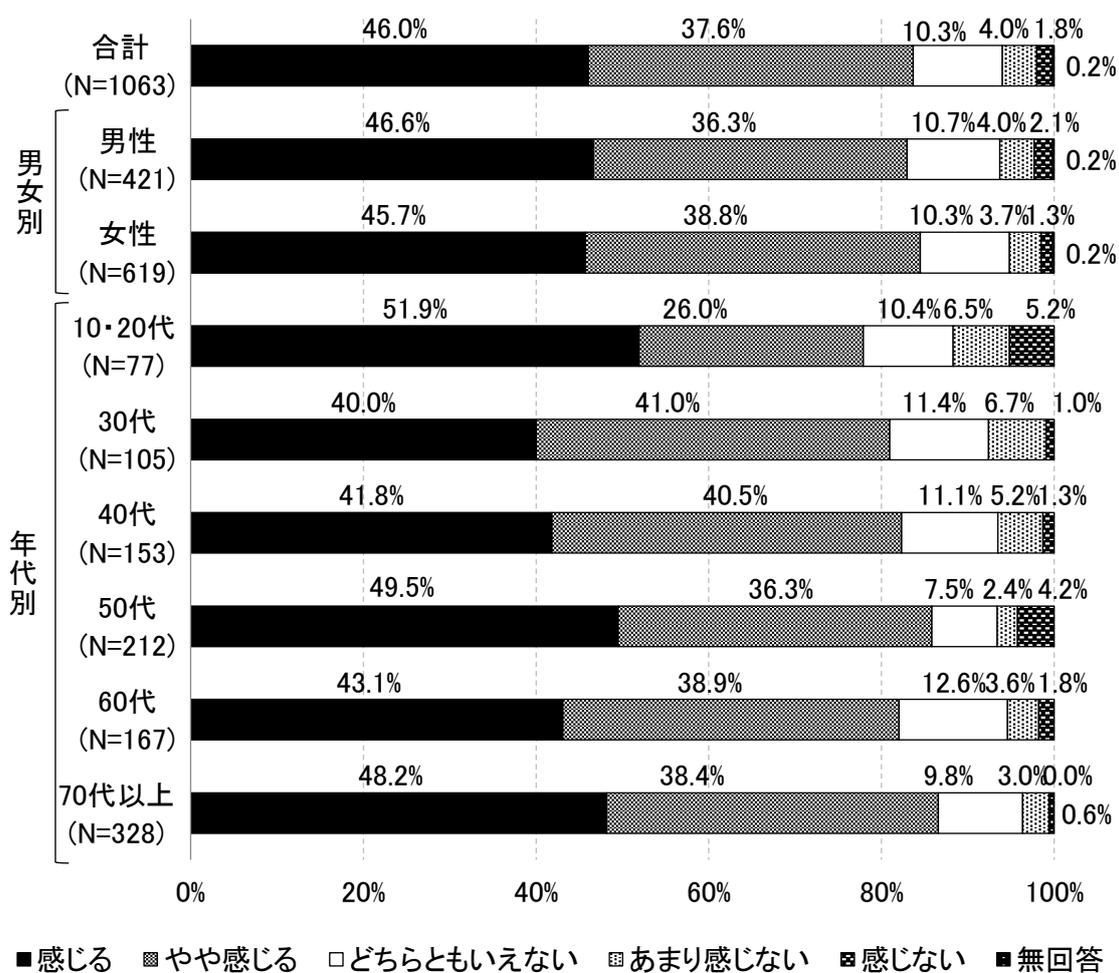
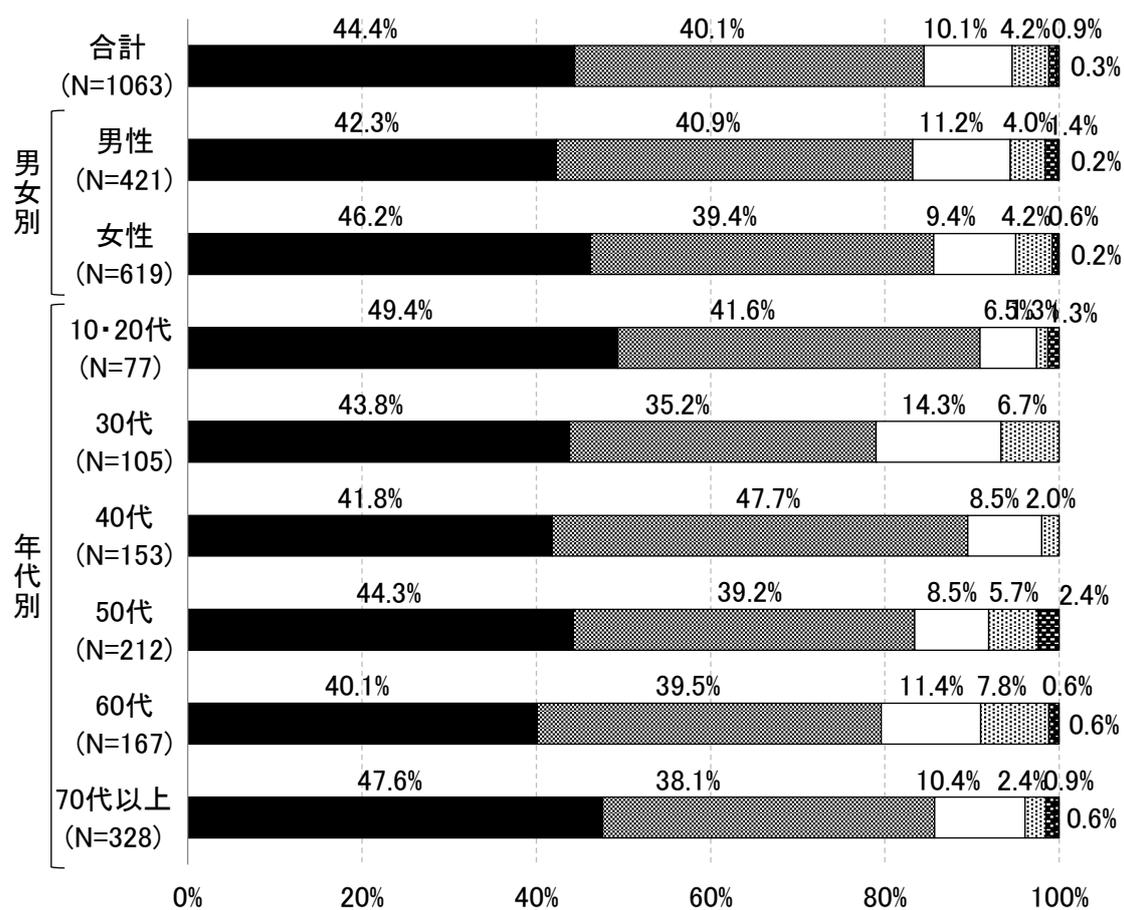


図12 Q3 高槻市に愛着を感じますか

Q4 の居住地は暮らしやすいかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が7割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は10・20代が91.0%と最も高い。反対に30代が79.0%と最も低い（図13）。



■そう思う ■ややそう思う □どちらともいえない ■あまりそう思わない ■そう思わない ■無回答

図13 Q4 居住地は暮らしやすいか

Q5の地域に住み続けたいかに関して、男女別・年代別のすべての層で5割以上が「ずっと住み続けたい」または「住み続けたい」と回答している。年代別で見ると、「ずっと住み続けたい」または「住み続けたい」と回答した人の割合は70代以上が71.3%と最も高い。反対に、10・20代は57.2%と最も低い(図14)。

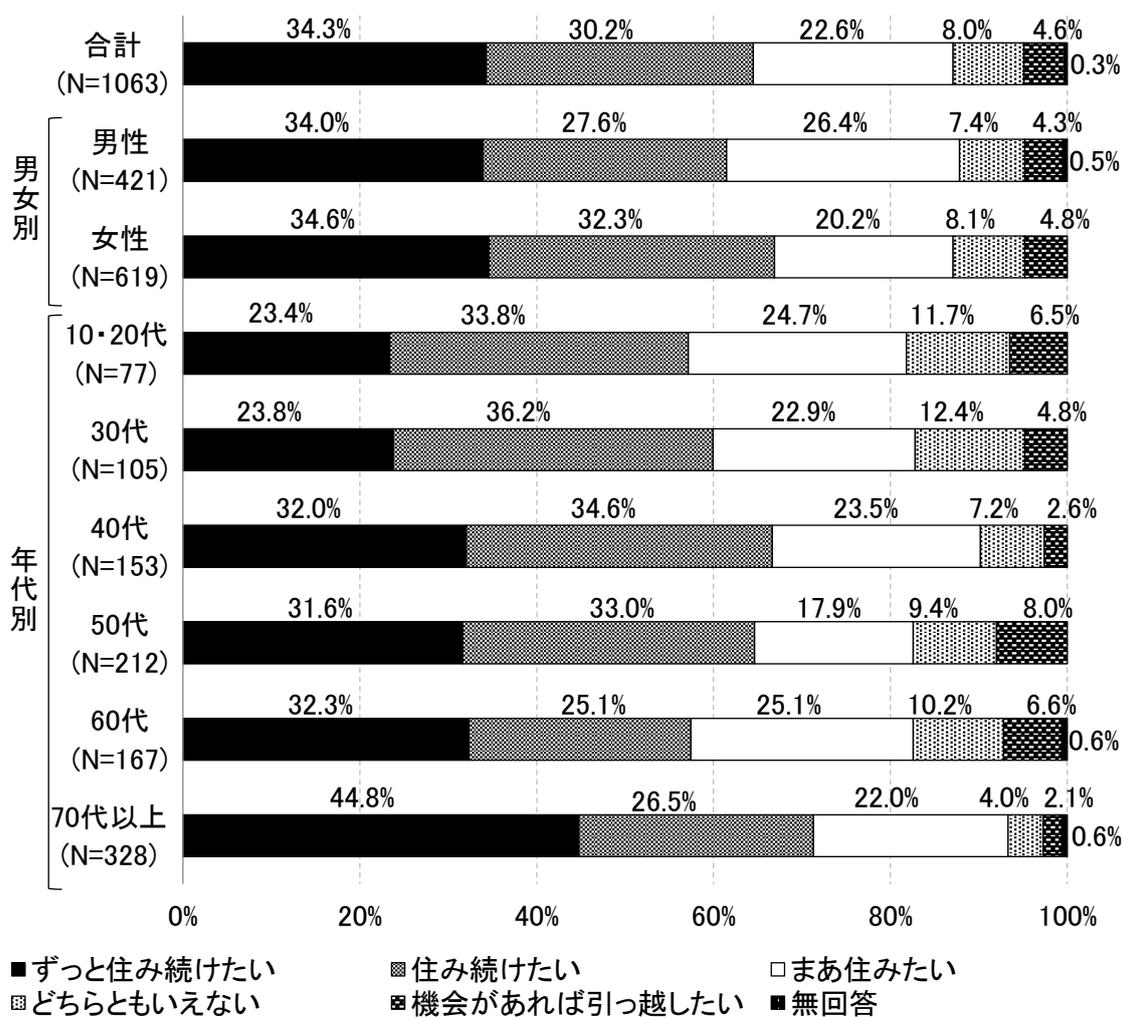


図14 Q5 地域に住み続けたいか

Q6の地域活動に参加する頻度に関して、男女別・年代別のすべての層で5割以上が「ほとんど参加していない」または「まったく参加していない」と回答している。年代別で見ると、「ほとんど参加していない」または「まったく参加していない」と回答した人の割合は10・20代が90.9%と最も高い。反対に、70代以上は54.6%と最も低い（図15）。

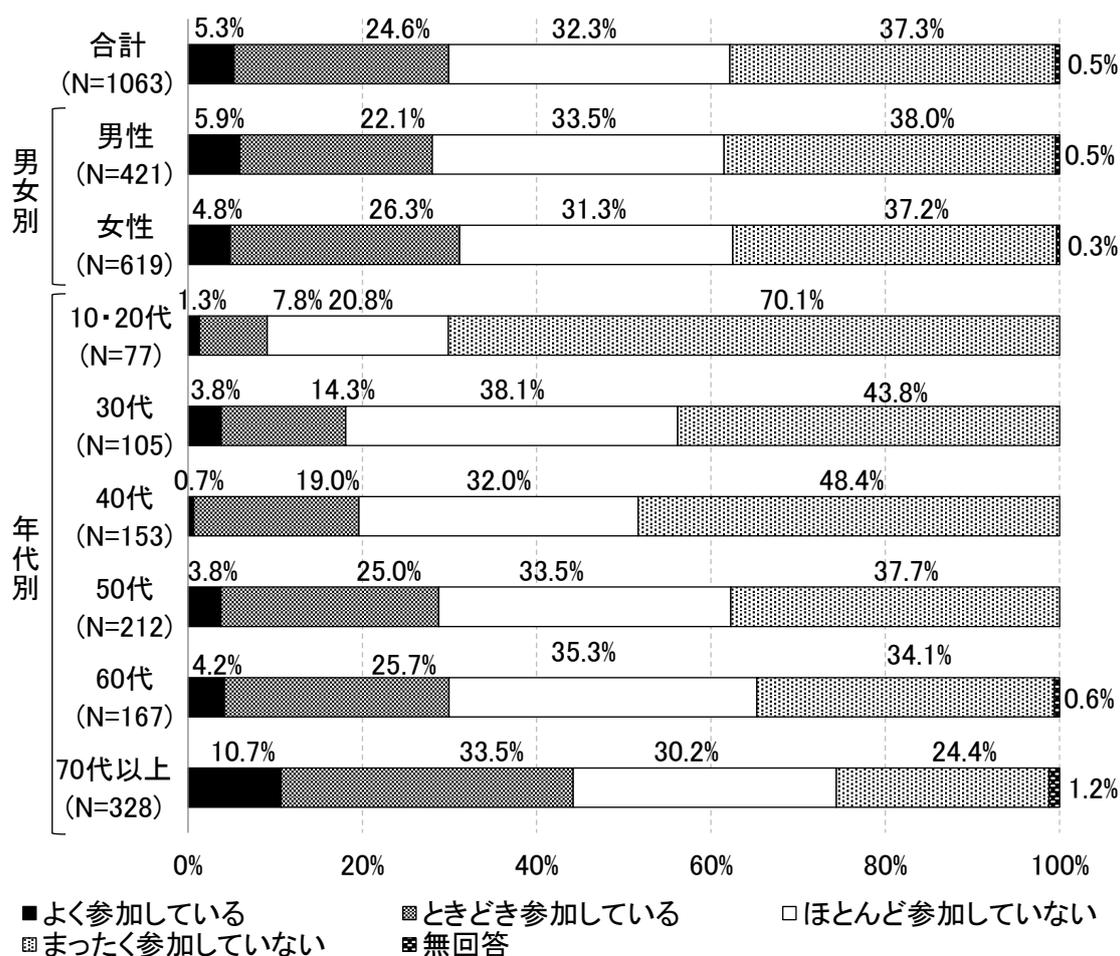


図15 Q6 地域活動に参加する頻度

Q7の近所の人と世間話をする頻度に関して、男女別で見ると、「月に1~2」または「まったく話さない」と回答した人の割合が男性で73.6%、女性が60.1%であり、男性の方が13.5ポイントほど高い。年代別で見ると、「月に1~2」または「まったく話さない」と回答した人の割合は10・20代が92.2%と最も高い。反対に70代以上は39.3%と最も低い（図16）。

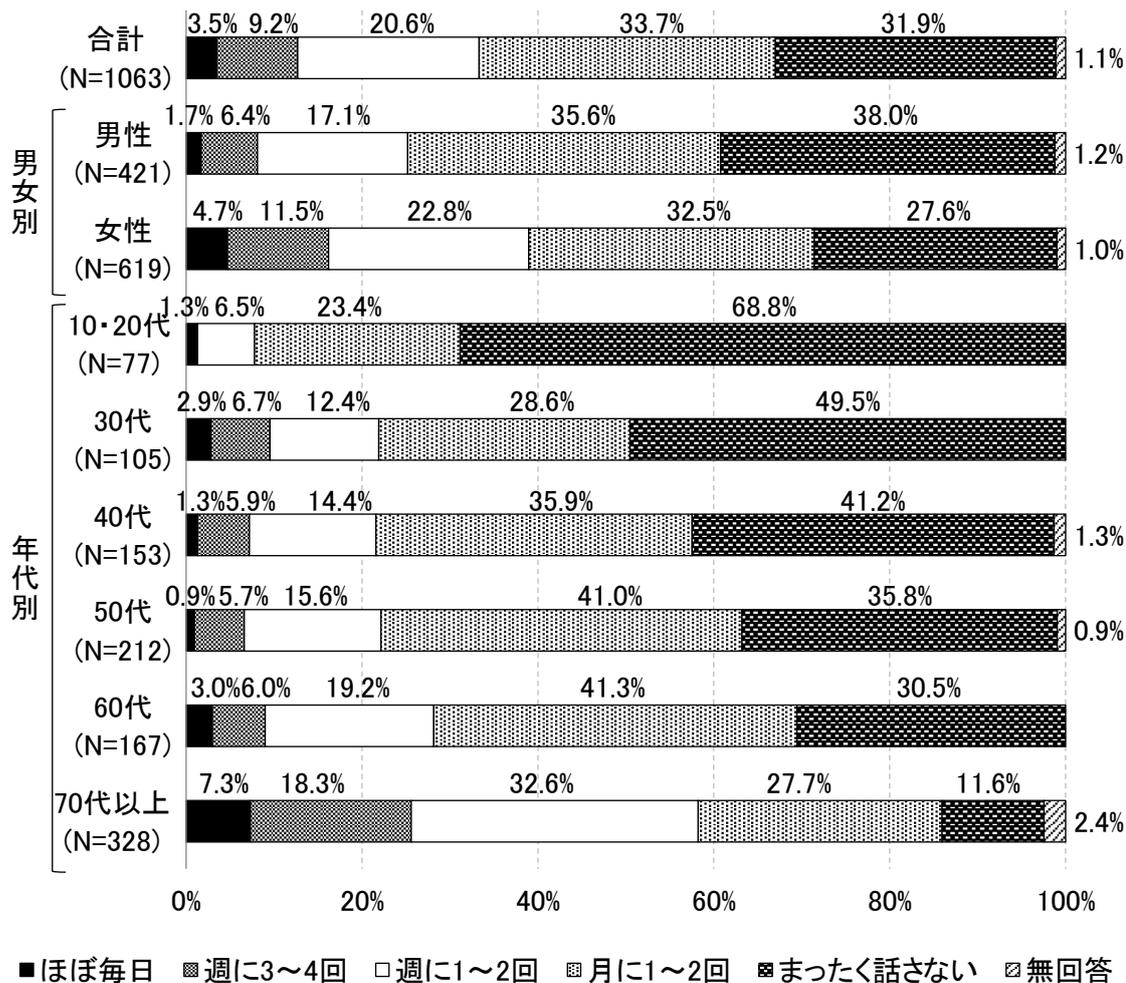


図 16 Q7 近所の人と世間話をする頻度

Q8の親しい付き合いをしているご近所の数に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「やや少ない」または「少ない」と回答した人の割合の方が「多い」または「やや多い」と回答した人の割合よりも高い。40代は「やや少ない」、「少ない」と回答した人の割合が90.8%と最も高い。反対に、70代以上が70.4%と最も低い（図 17）。

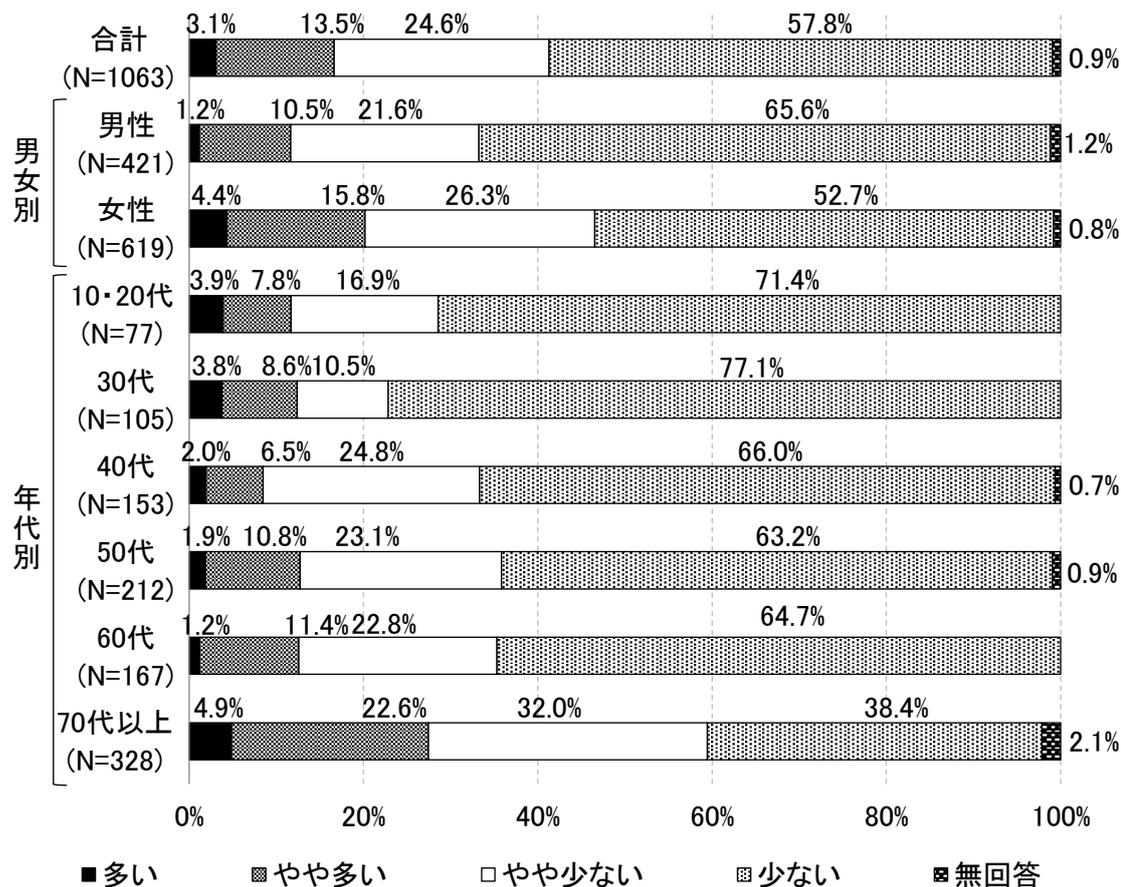


図 17 Q8 親しい付き合いをしているご近所の数

Q9の困っているとき、近所の人たちは手助けしてくれると思うかに関して、年代別で見ると、70代以上を除くすべての年代で、「あまりそう思わない」または「そう思わない」と回答した人の割合の方が「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合よりも高い。10・20代が「あまりそう思わない」、「そう思わない」と回答した人の割合が46.8%と高い。反対に、70代以上が23.4%と最も低い（図18）。

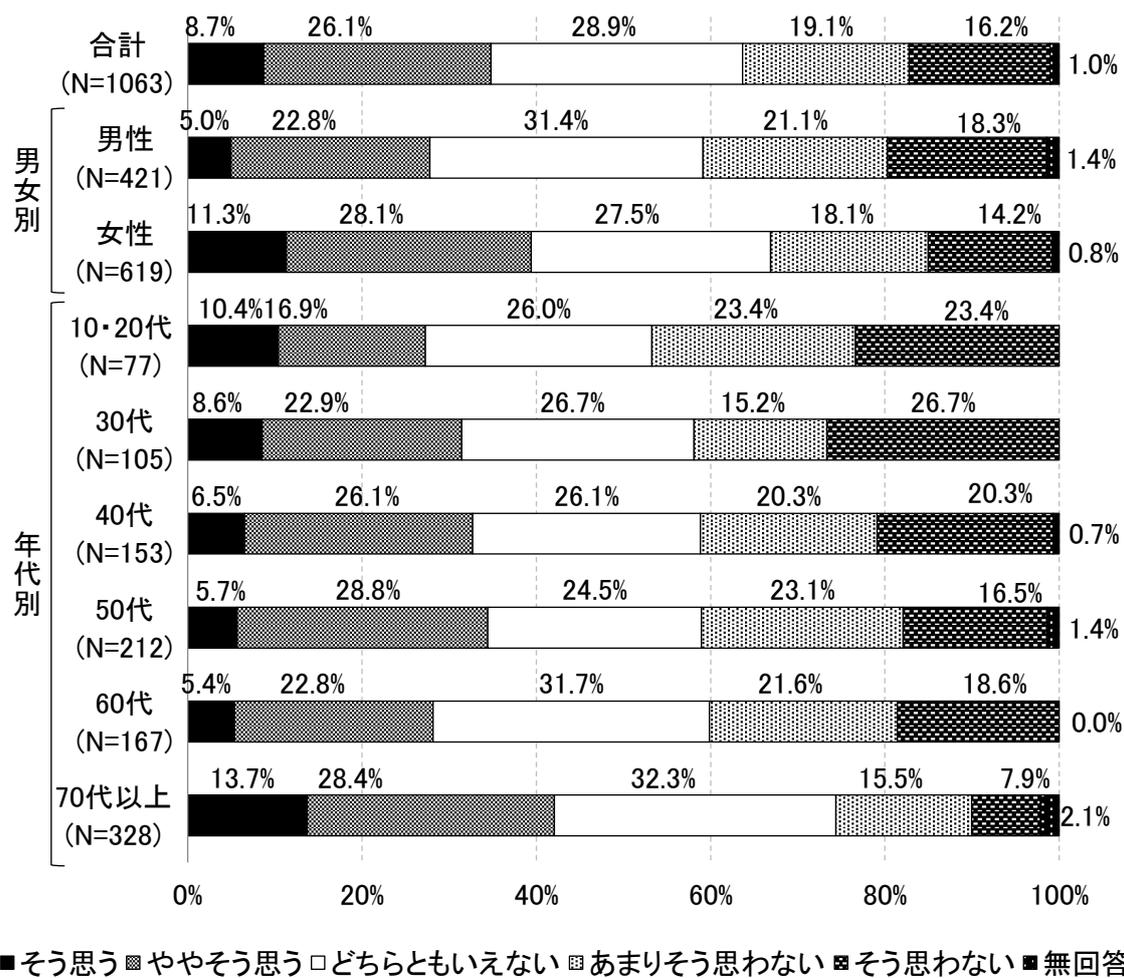


図18 Q9 困っているとき、近所の人たちは手助けしてくれると思うか

Q10 の近所の人たちが強いきずなで結ばれているに関して、男女別・年代別のすべての層で、「あまりそう思わない」または「そう思わない」と回答した人の割合の方が「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合よりも高い。年代別で見ると、10・20代は「あまりそう思わない」、「そう思わない」と回答した人の割合が最も67.5%と高い。反対に、70代以上が39.9%と最も低い（図 19）。

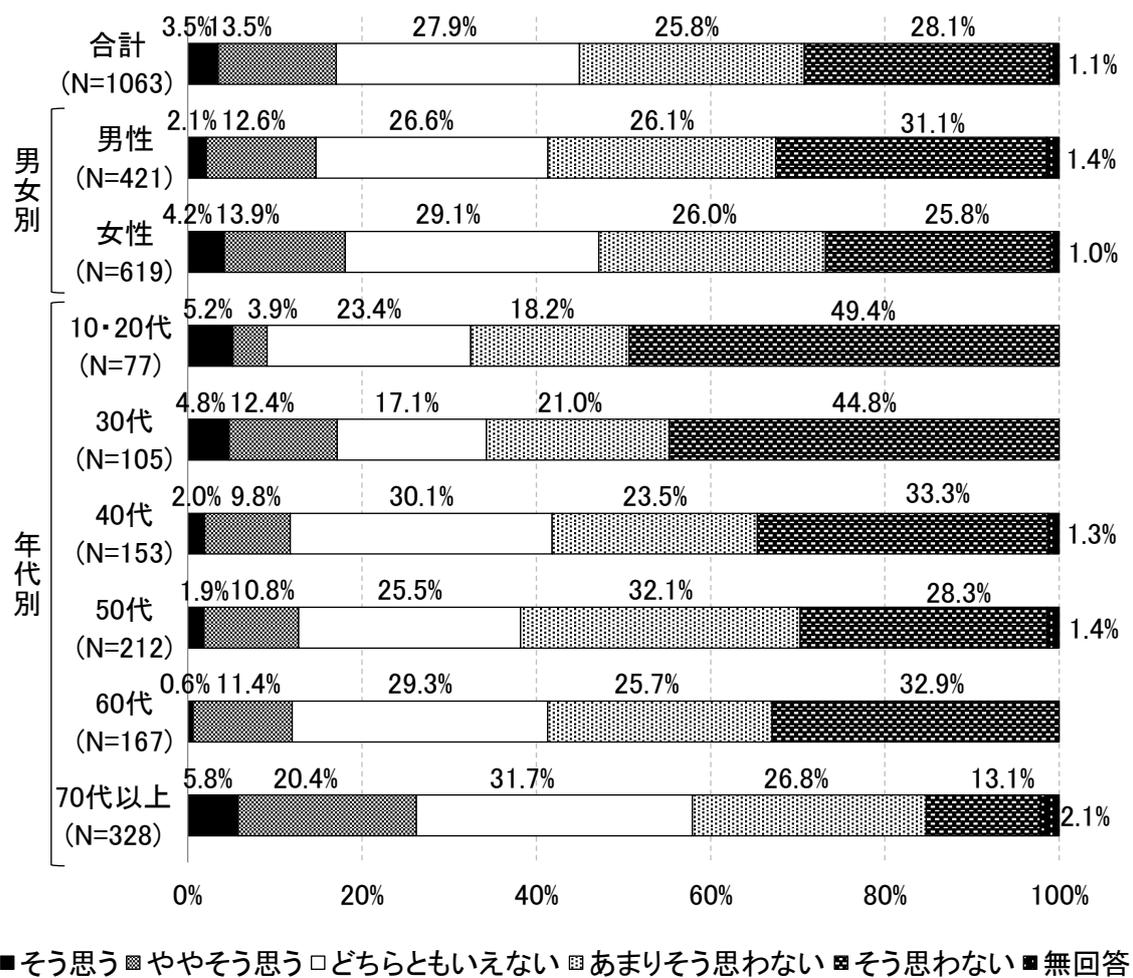


図 19 Q10 近所の人たちが強いきずなで結ばれている

Q11 の最寄りの商店街に行く頻度に関して、男女別で見ると、「ほぼ毎日」または「週に2～3日」と回答した人の割合が男性で33.5%、女性が40.2%であり、女性の方が6.7ポイントほど高い。年代別で見ると、「ほぼ毎日」または「週に2～3日」と回答した人の割合は70代以上が64.3%と最も高い。反対に、10・20代は11.7%と最も低い（図20）。

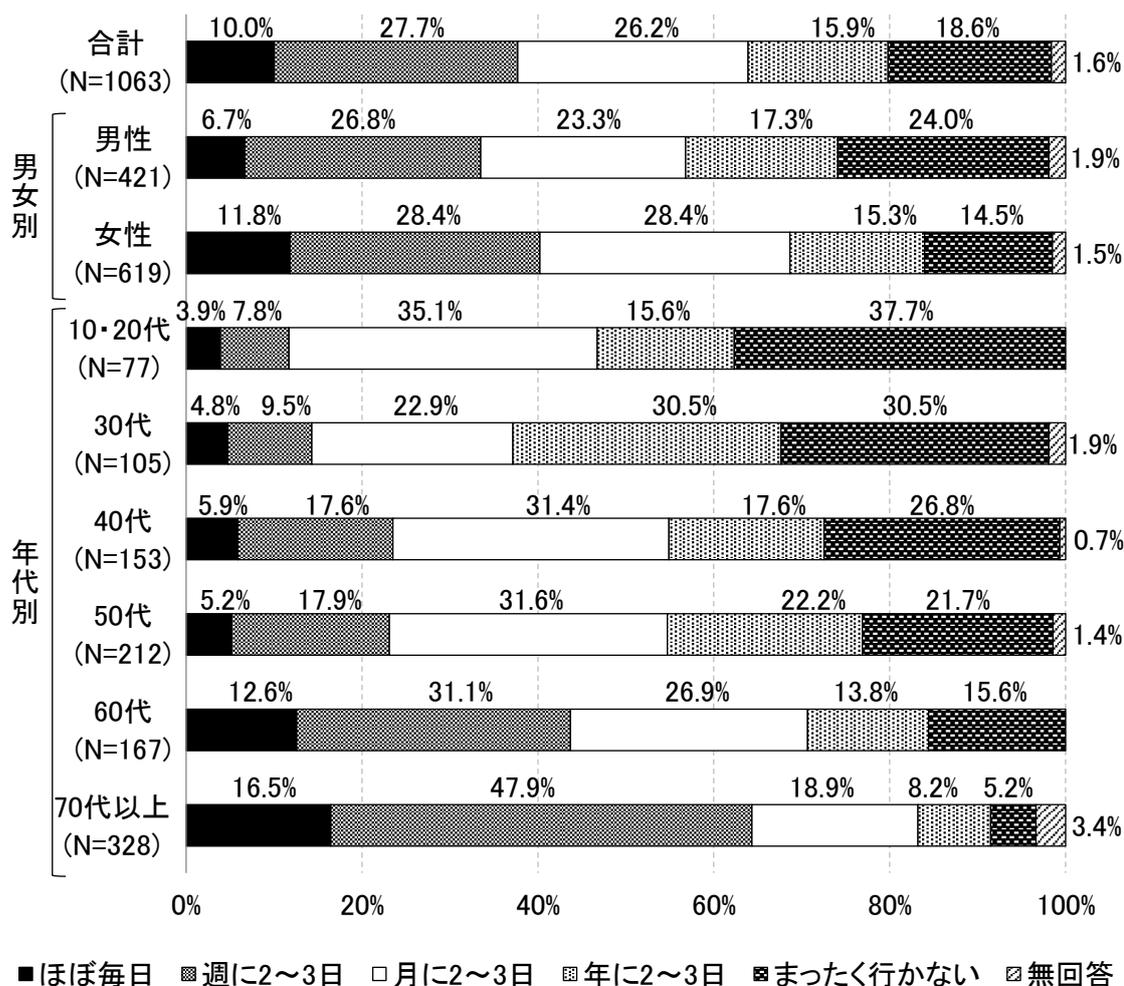
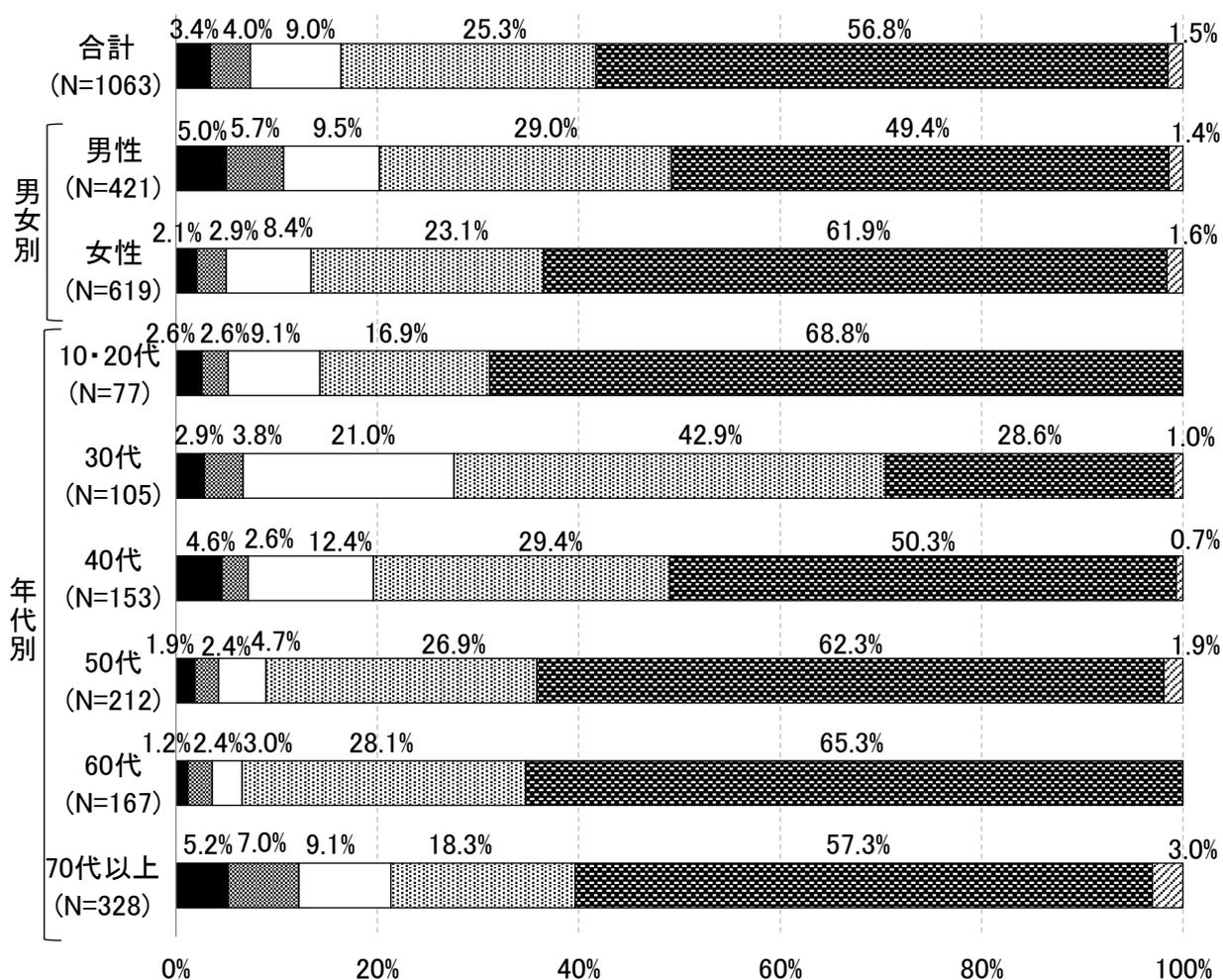


図20 Q11 最寄りの商店街に行く頻度

Q12 の市内公園に出かける頻度に関して、「公園にはいかない」と回答した人の割合が、男女別で見ると男性で 49.4%、女性が 61.9%であり、女性の方が 12.5 ポイント高い。年代別で見ると 10・20 代が 68.8%と最も高い。反対に、30 代は 28.6%と最も低い。

次いで割合の高い「月に 1～2 日」と回答した人の割合が、男女別で見ると男性で 29.0%、女性が 23.1%であり、男性の方が 5.9 ポイント高い。年代別で見ると 30 代が 42.9%と最も高い。反対に、10・20 代は 16.9%と最も低い（図 21）。



■ほぼ毎日 ■週に3～4日程度 □週に1～2日程度 ▨月に1～2日程度 ■公園には行かない ▩無回答

図 21 Q12 市内公園に出かける頻度

Q13 の一日の平均歩行時間に関して、男女別で見ると、「30分未満」（「10分未満」または「10分以上20分未満」または「20分以上30分未満」）と回答した人の割合は、男性では40.1%、女性では45.5%である。年代別で見ると、「30分未満」と回答した人の割合は30代が50.5%と最も高い。反対に60代が38.4%と最も低い（図22）。

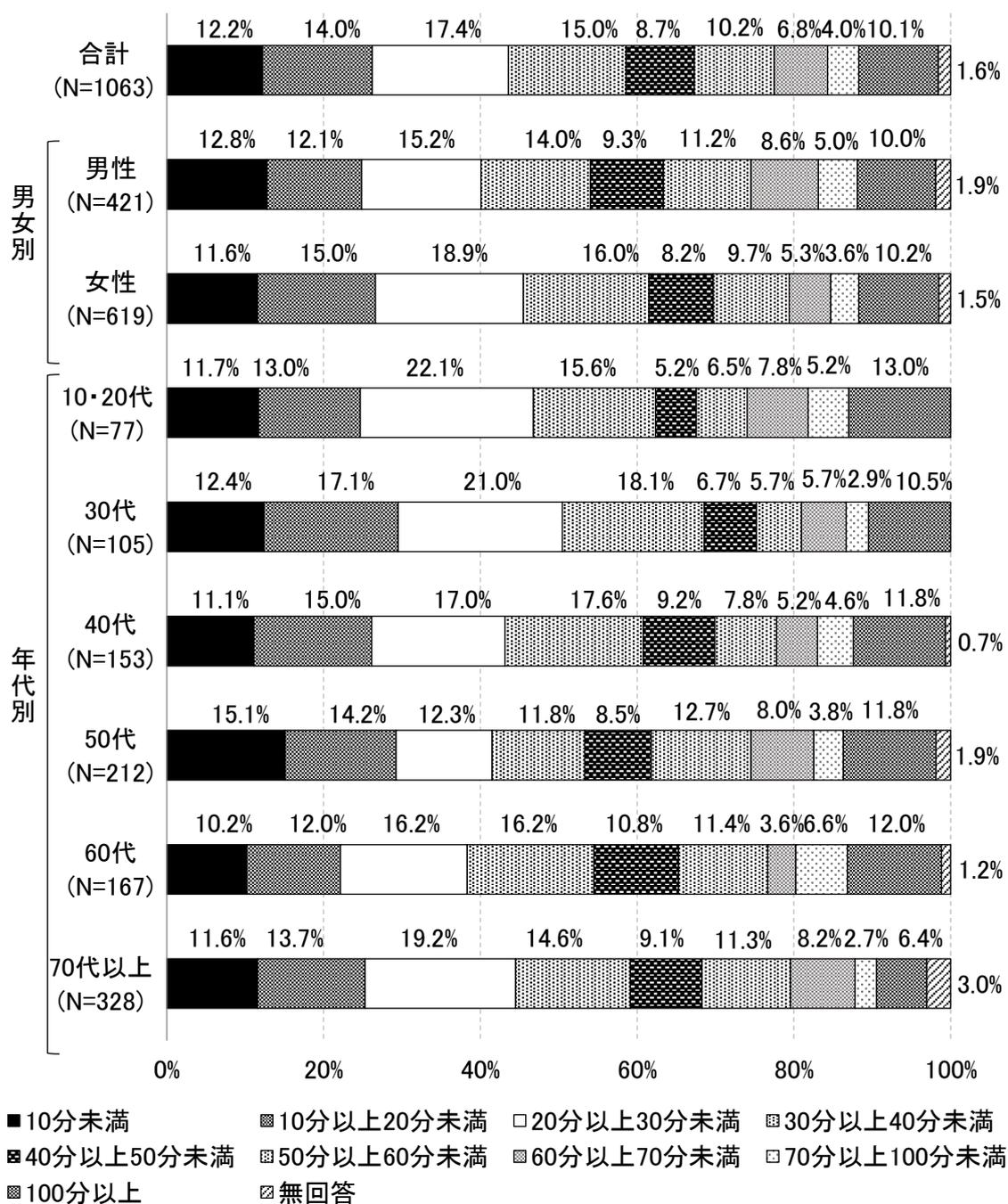


図 22 Q13 一日の平均歩行時間

Q14A～Q4Bが、普段一日にどのくらい音楽を聴いているかを質問している。

Q14Aの自宅内で音楽を聴く時間に関して、男女別で見ると、「30分未満」（「まったく聴かない」または「10分未満」または「10分以上30分未満」）と回答した人の割合は、男性では65.3%、女性では65.1%である。年代別で見ると、「30分未満」と回答した人の割合は60代が70.1%と最も高い。反対に10・20代が44.2%と最も低い（図23）。

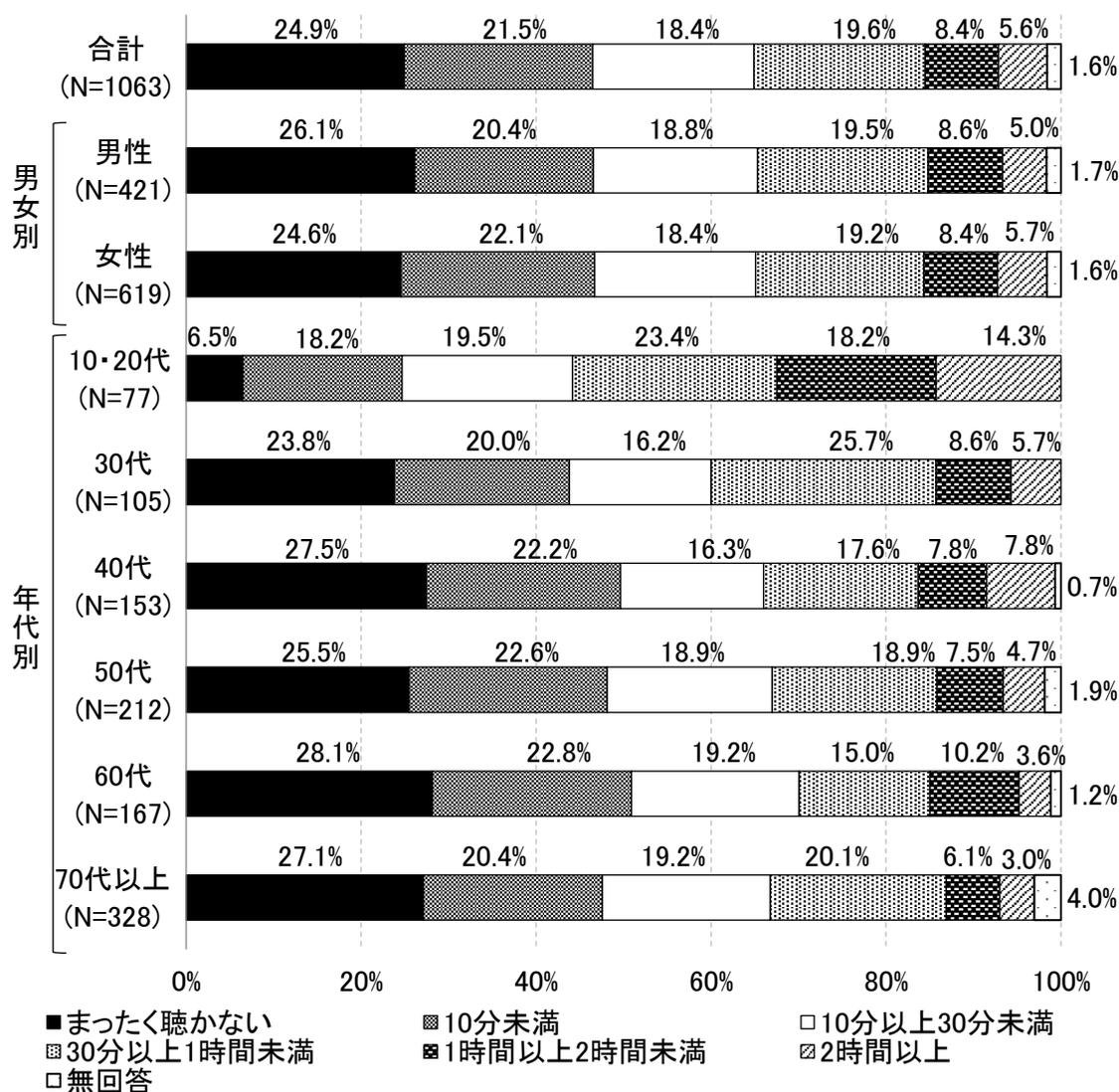


図 23 Q14A 自宅内で音楽を聴く時間

Q14B の自宅外で音楽を聴く時間に関して、男女別で見ると、「30分未満」（「まったく聴かない」または「10分未満」または「10分以上30分未満」と回答した人の割合は、男性では68.4%、女性では76.6%である。年代別で見ると、「30分未満」と回答した人の割合は60代が84.4%と最も高い。反対に10・20代が44.2%と最も低い（図24）。

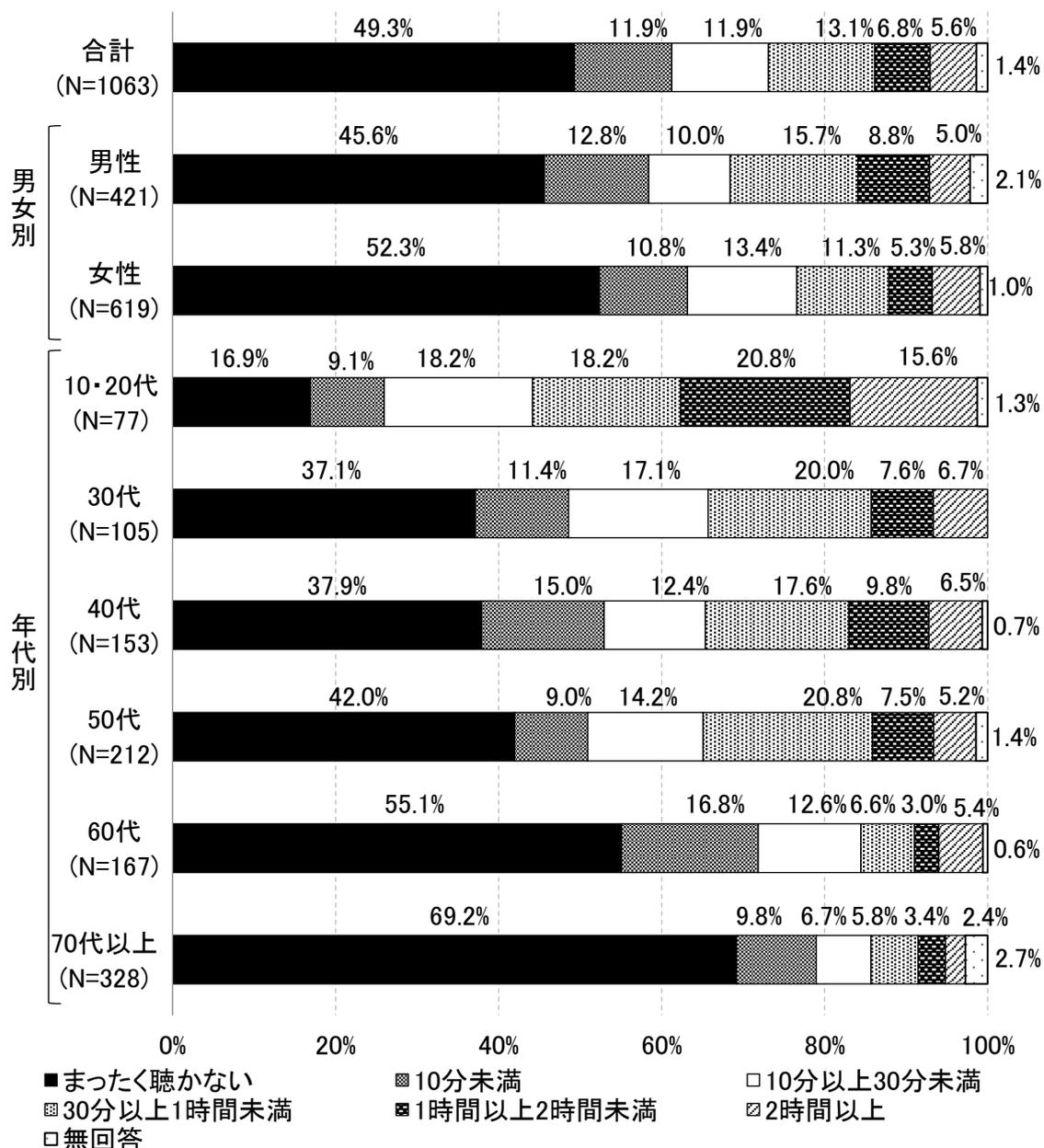


図 24 Q14B 自宅外で音楽を聴く時間

Q15 の JR 高槻駅の利用に関して、年代別で見ると、すべての年代で「利用する」と回答した人の割合が「利用しない」と回答した人の割合よりも高い。「利用」と回答した人の割合は 10・20 代以上が 67.5%と最も高い（図 25）。

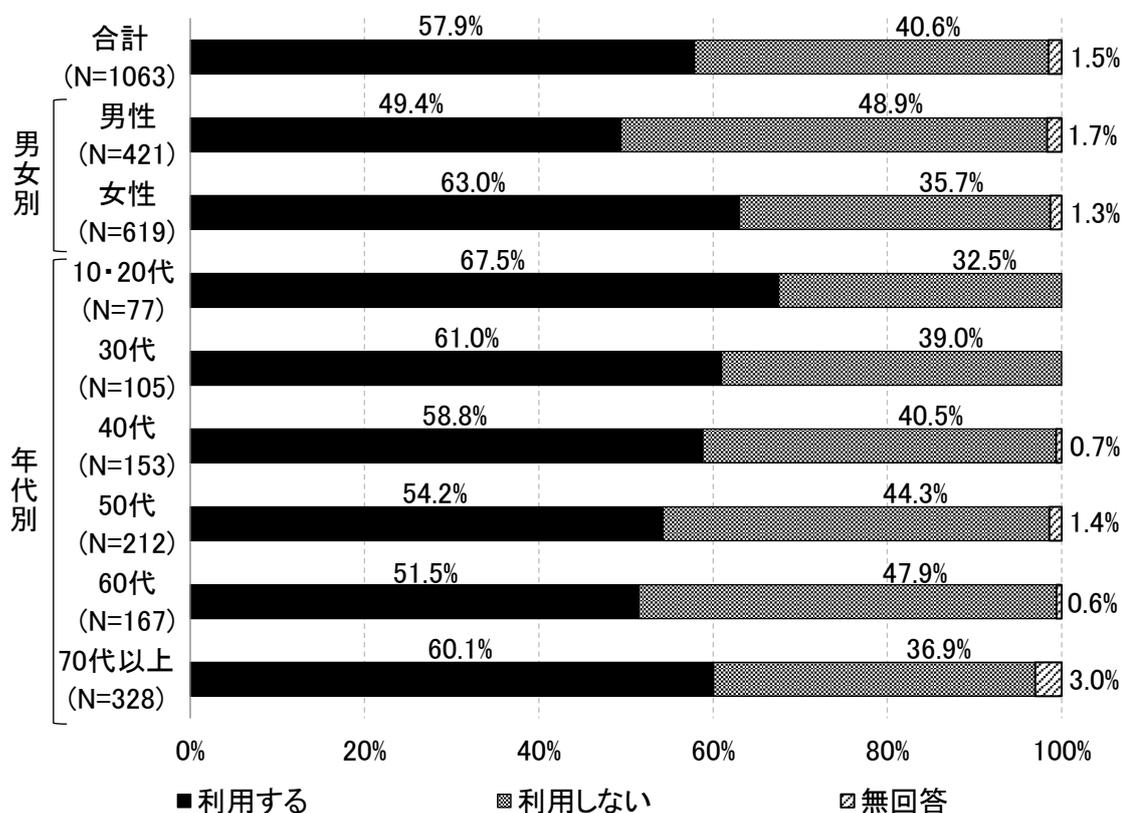


図 25 Q15 JR 高槻駅を利用するか

Q16 の JR 高槻駅周辺が高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間だと感じるかに関して、年代別で見ると、すべての年代で「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合が「あまり感じない」または「感じない」と回答した人の割合よりも高い。「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は 40 代が 66.7%と最も高い。反対に、60 代は 59.3%と最も低い（図 26）。

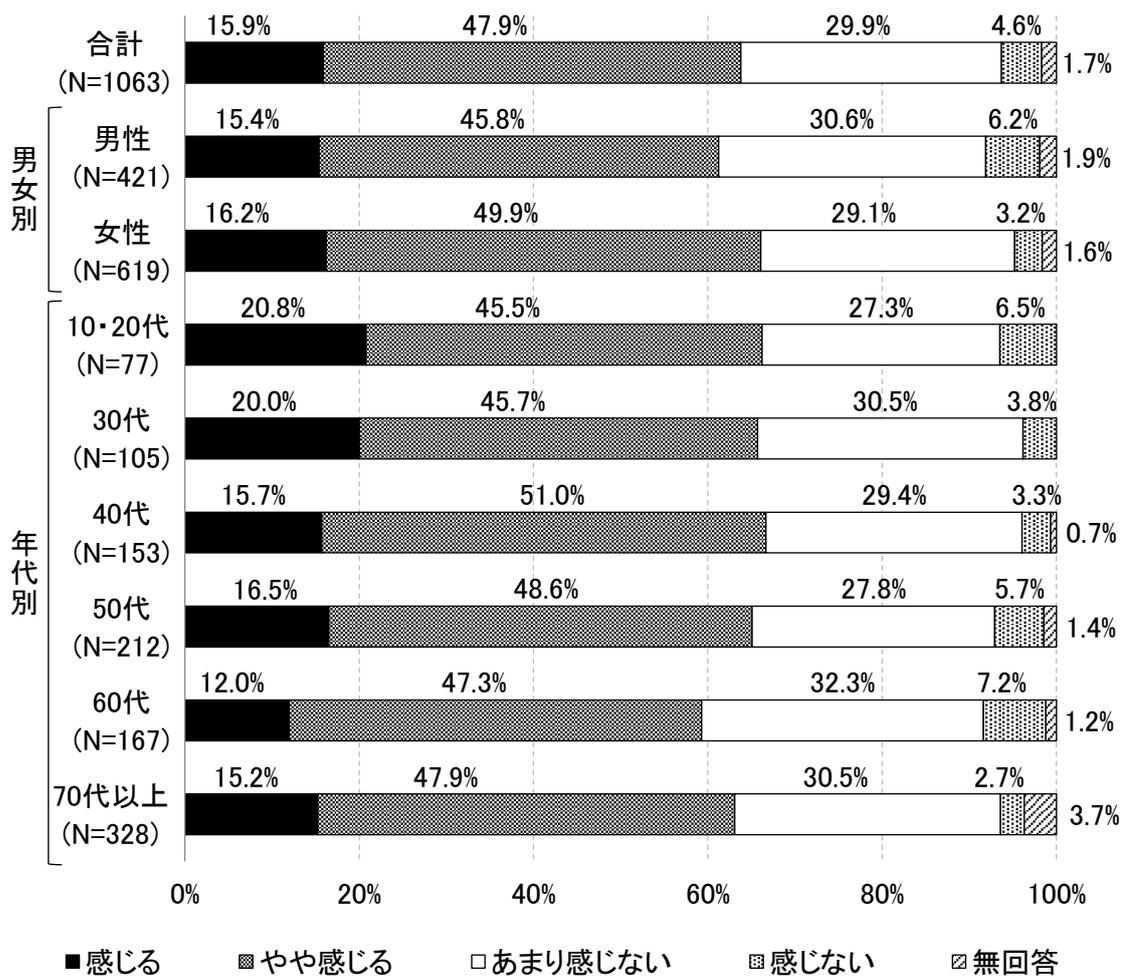


図 26 Q16 JR 高槻駅周辺が高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間だと感じるか

Q17の阪急高槻市駅の利用に関して、年代別で見ると、10・20代と30代では、「利用する」と回答した人の割合が「利用しない」と回答した人の割合よりも高い。「利用」と回答した人の割合は10・20代以上が57.1%と最も高い（図27）。

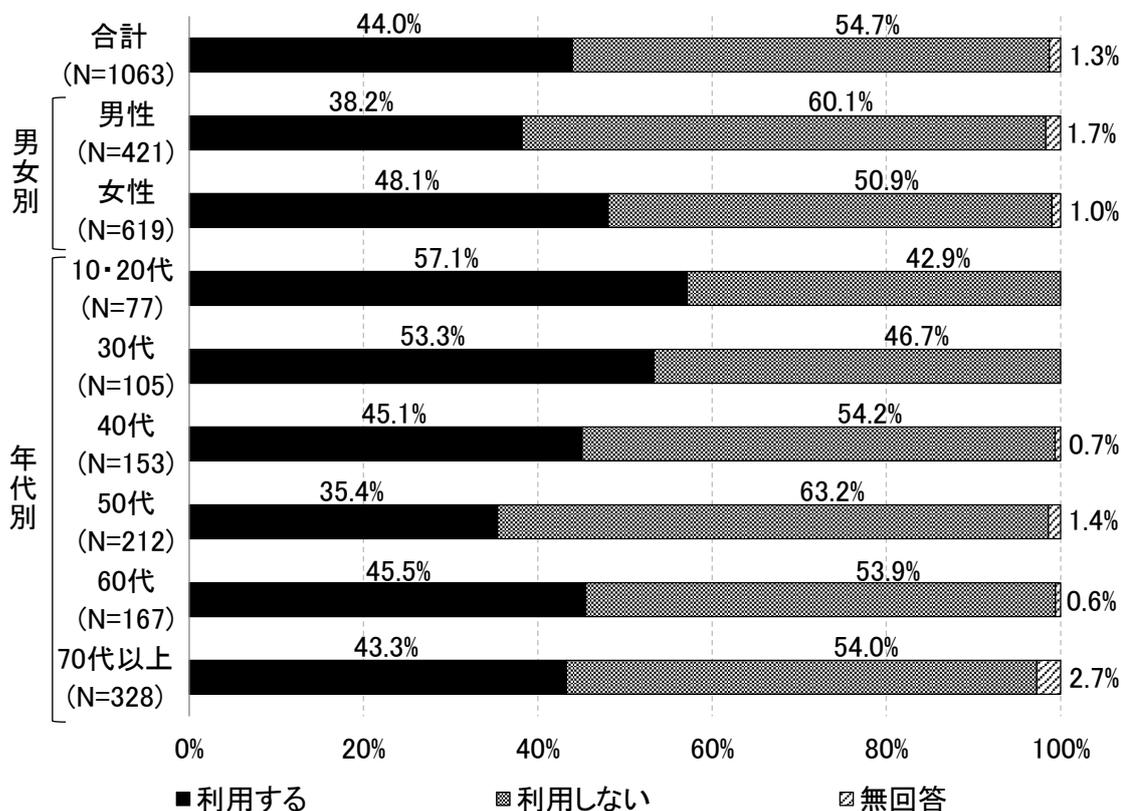


図 27 Q17 阪急高槻市駅を利用するか

Q18 の阪急高槻市駅が高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間だと感じるかに関して、年代別で見ると、10・20代では、「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合が「感じない」または「あまり感じない」と回答した人の割合よりも高い。「感じない」または「あまり感じない」と回答した人の割合は60代が65.9%と最も高い。反対に、10・20代は45.5%と最も低い（図28）。

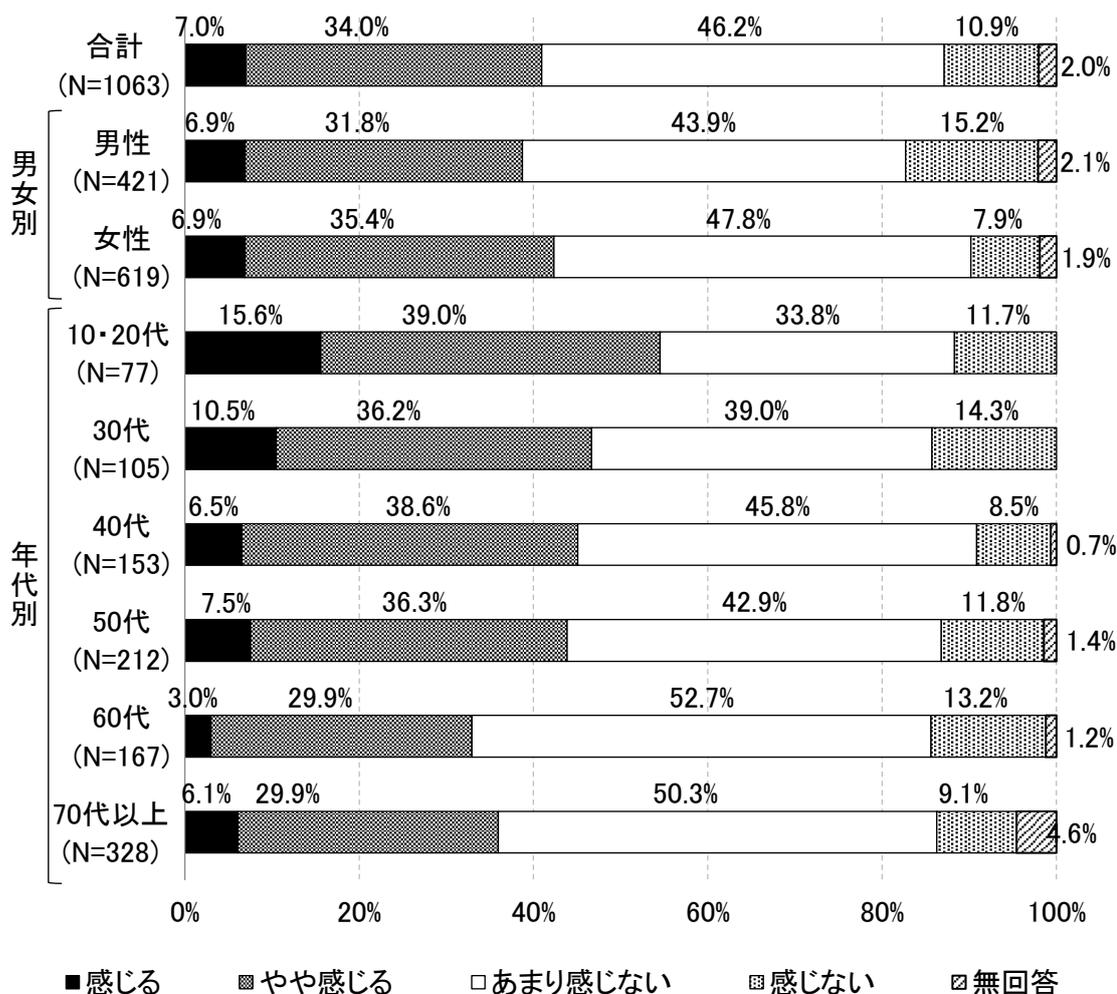


図28 Q18 阪急高槻市駅周辺が高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間だと感じるか

Q19A～Q19R が、高槻市の交通手段におけるそれぞれの現状について、あなたはどのくらい満足しているかを質問している。

Q19A の徒歩における歩道の整備の状況の満足度に関して、年代別で見ると、50代と60代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。それ以外の年代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「不満」または「やや不満」と回答した人の割合は60代が41.3%と最も高い。反対に、10・20代は23.4%と最も低い（図29）。

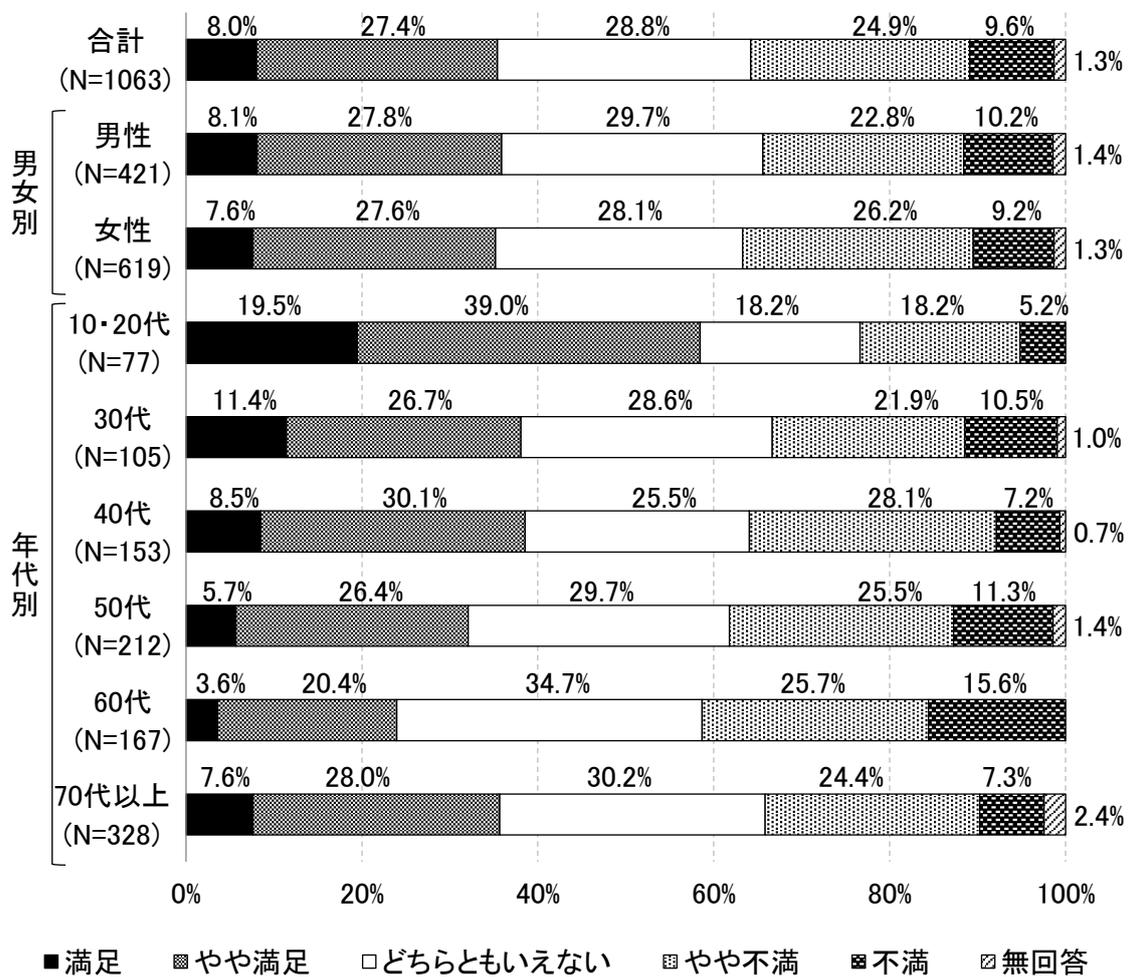


図29 Q19A 交通手段満足度（徒歩：歩道の整備の状況）

Q19Bの徒歩におけるバリアフリー化の満足度に関して、年代別で見ると、10・20代と30代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合より高い。それ以外の年代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は10・20代が37.7%と最も高い(図30)。

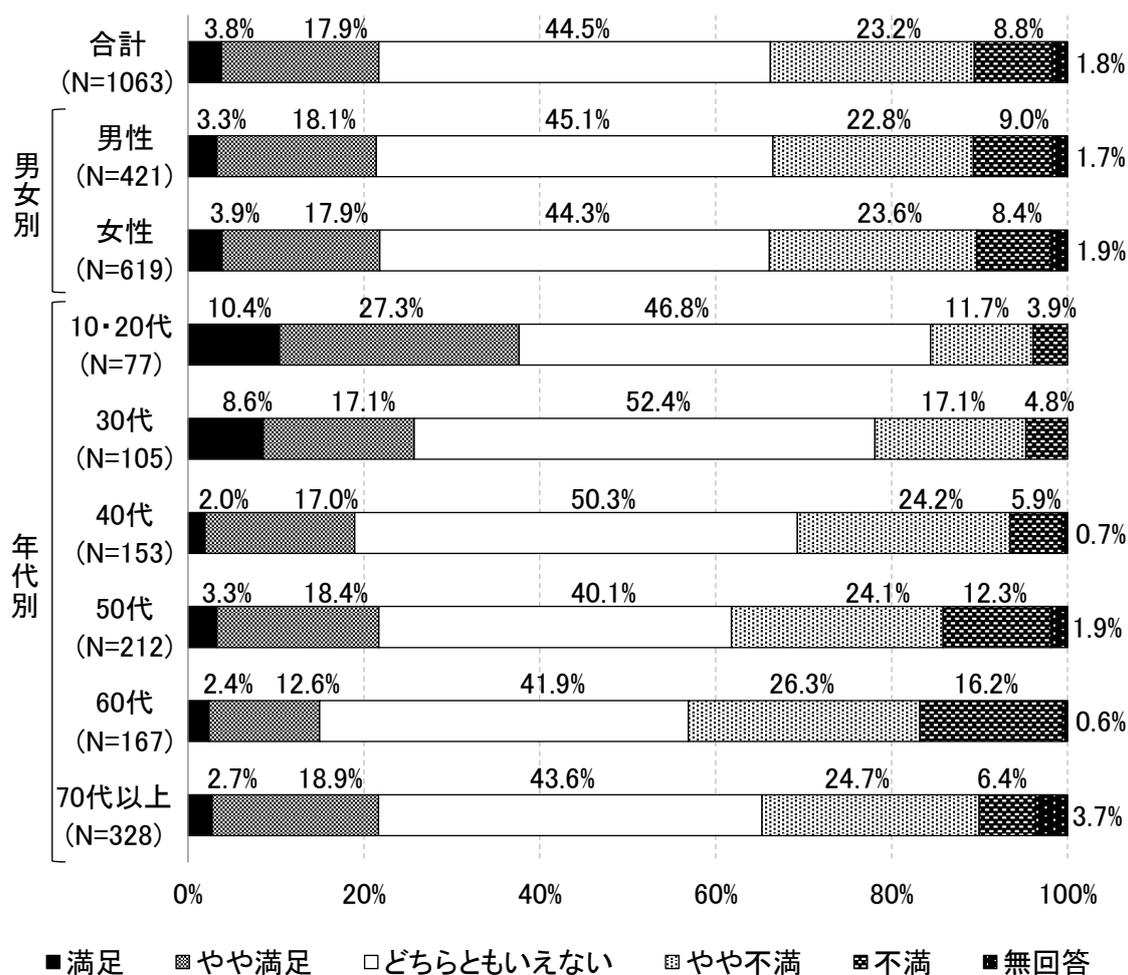


図30 Q19B 交通手段満足度 (徒歩：バリアフリー化)

Q19Cの自転車が通行するために必要なスペースの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で「不満」または「やや不満」と回答した人の割合が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「不満」または「やや不満」と回答した人の割合は40代が60.1%と最も高い。反対に、70代以上は41.2%と最も低い（図31）。

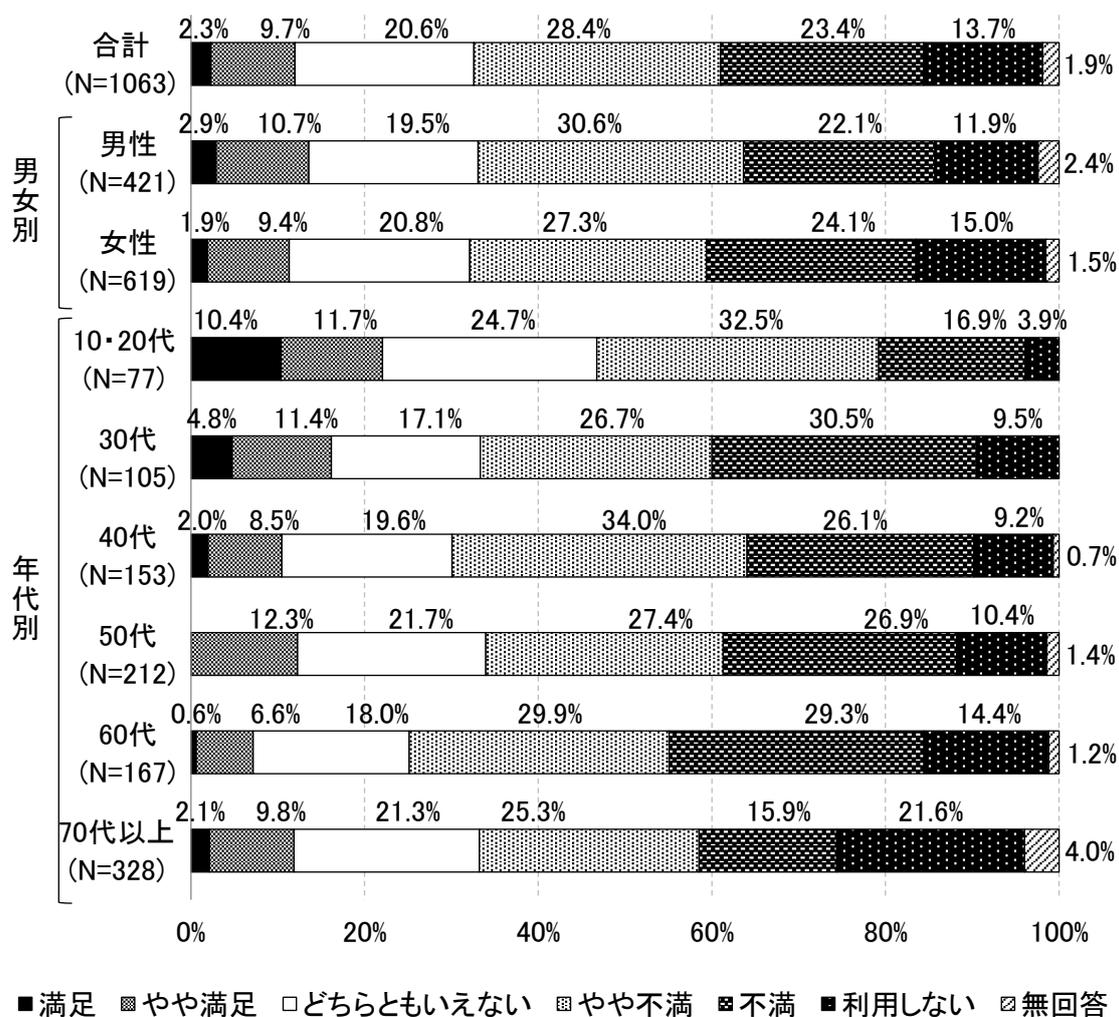


図31 Q19C 交通手段満足度（自転車：通行するために必要なスペース）

Q19Dの自転車の駐輪場の満足度に関して、年代別で見ると、10・20代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合より高い。それ以外の年代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は10・20代が37.7%と最も高い。反対に、60代は14.4%と最も低い（図32）。

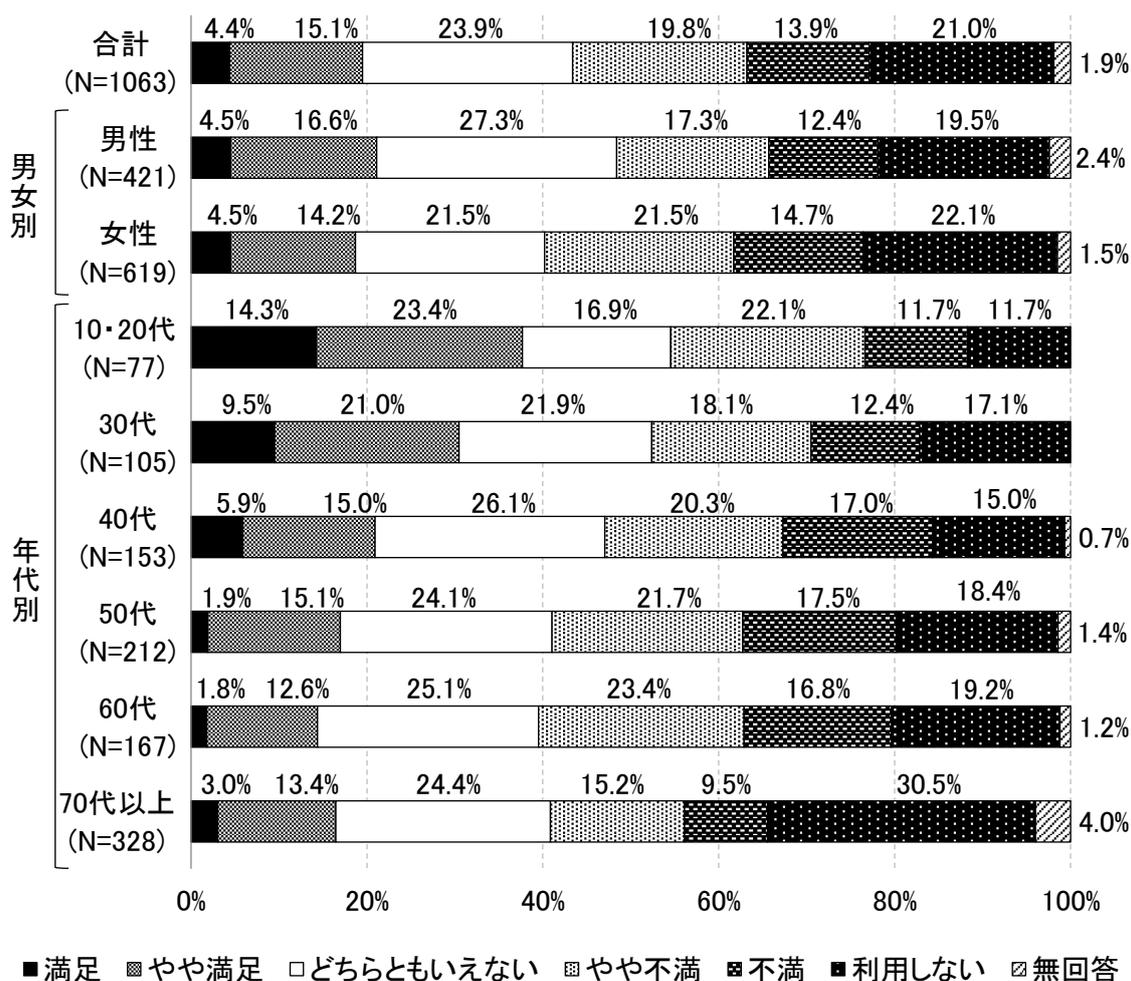


図 32 Q19D 交通手段満足度（自転車：駐輪場）

Q19Eの自転車に乗っている人々のマナーの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「不満」または「やや不満」と回答した人の割合は60代が70.0%と最も高い。反対に10・20代が、33.8%と最も低い(図33)。

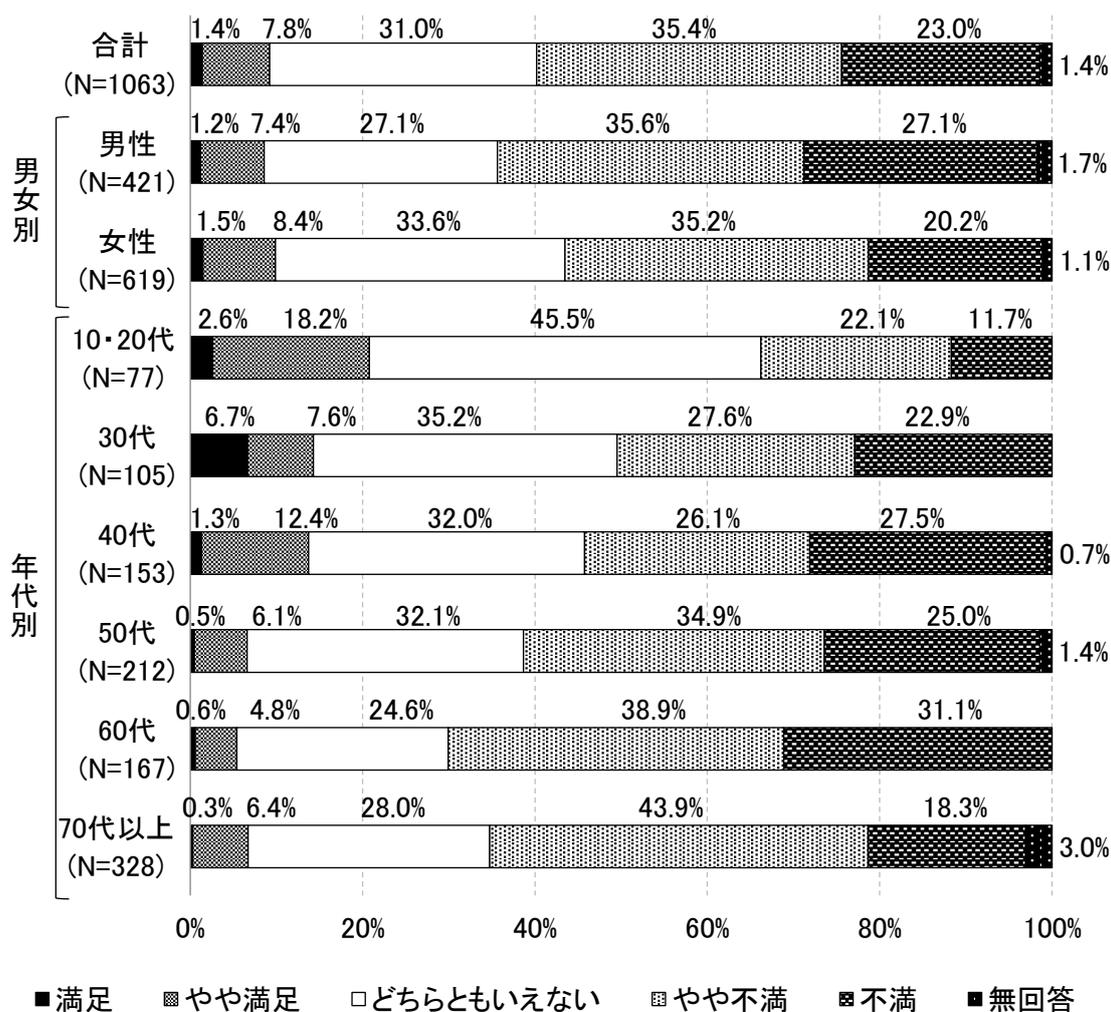


図 33 Q19E 交通手段満足度 (自転車：乗っている人々のマナー)

Q19Fのバイクが通行するために必要なスペースの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は30代が10.5%と最も高い。反対に60代が、3.0%と最も低い（図34）。

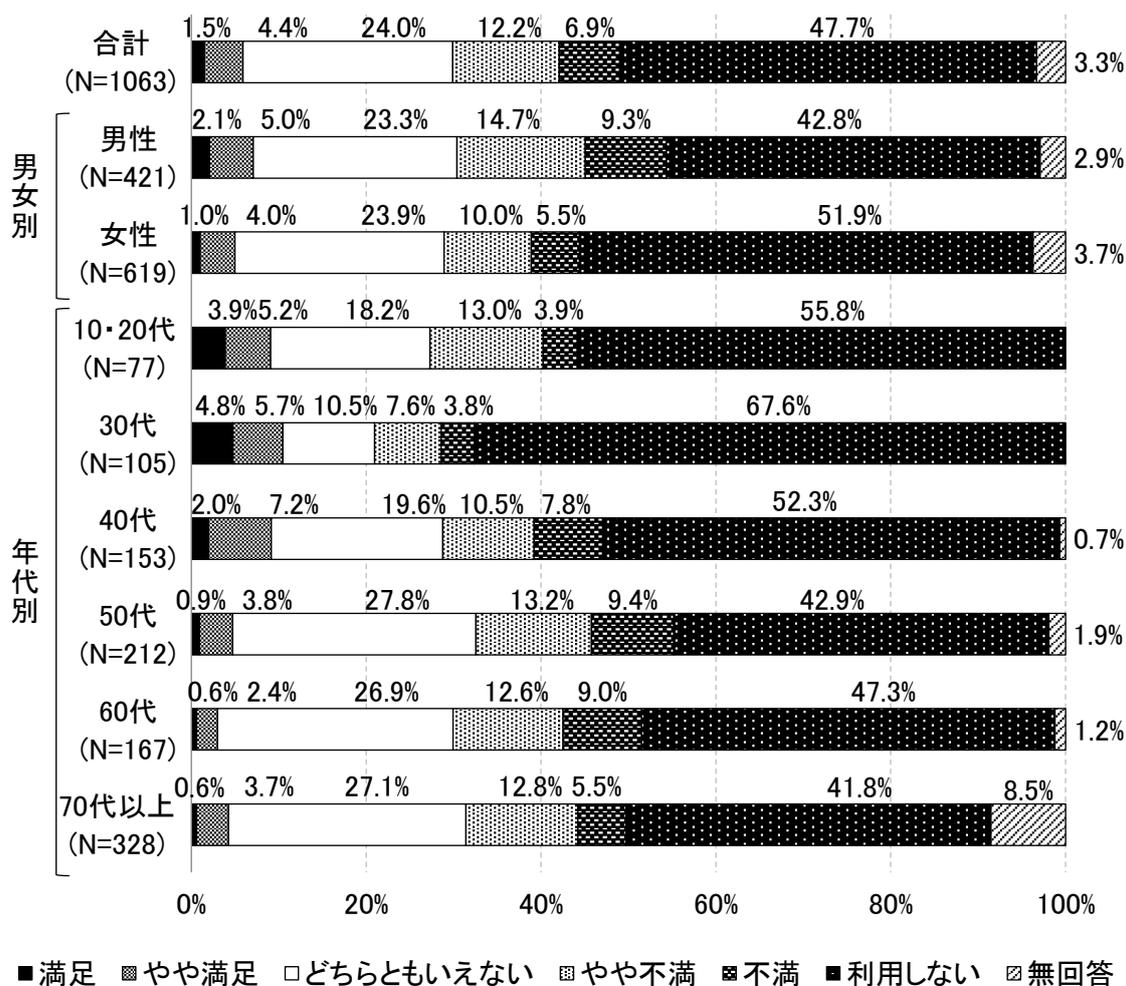


図34 Q19F 交通手段満足度（バイク：通行するために必要なスペース）

Q19Gのバイクの駐車場の満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は30代が5.7%と最も高い。反対に10・20代が、2.6%と最も低い(図35)。

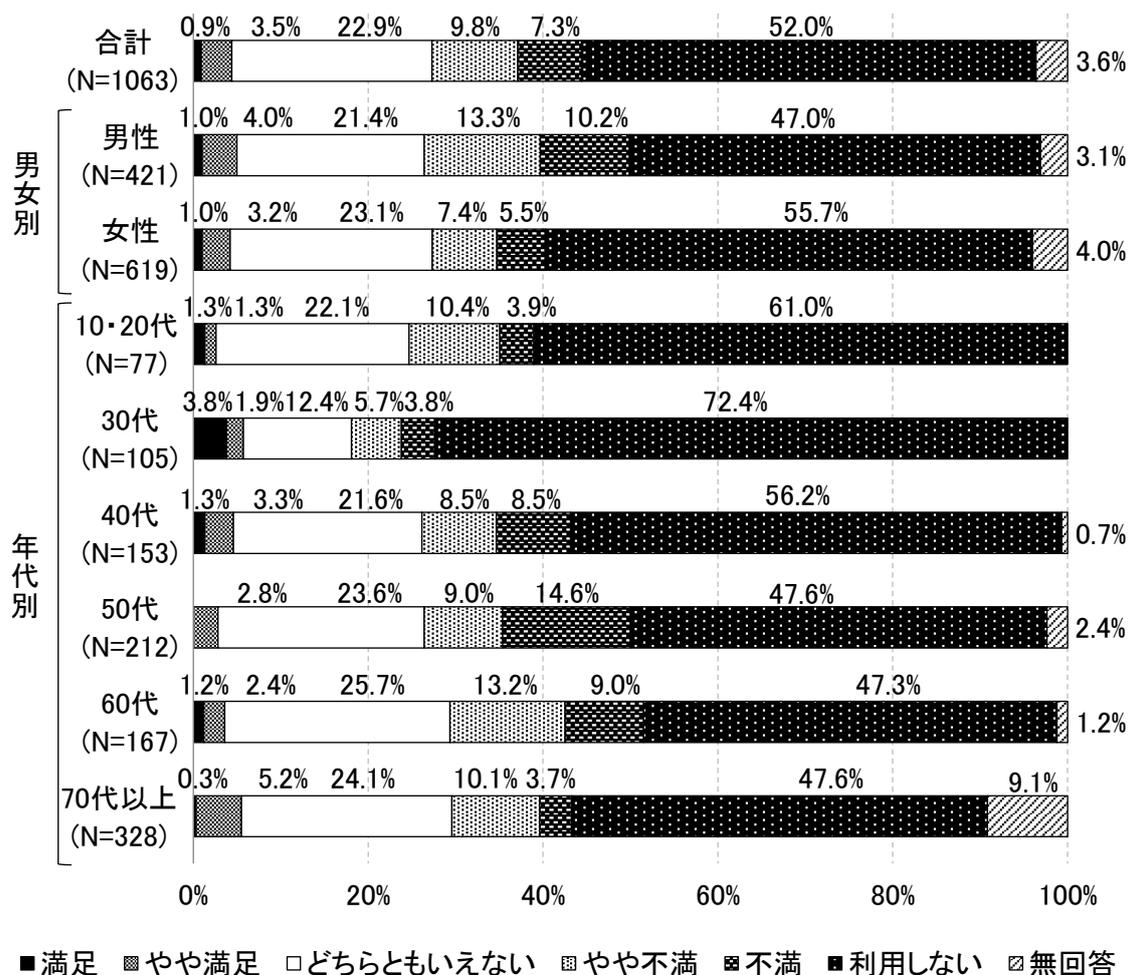


図35 Q19G 交通手段満足度 (バイク：駐車場)

Q19Hのバイクに乗っている人々のマナーの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は10・20代が18.2%と最も高い。反対に60代が、4.8%と最も低い(図36)。

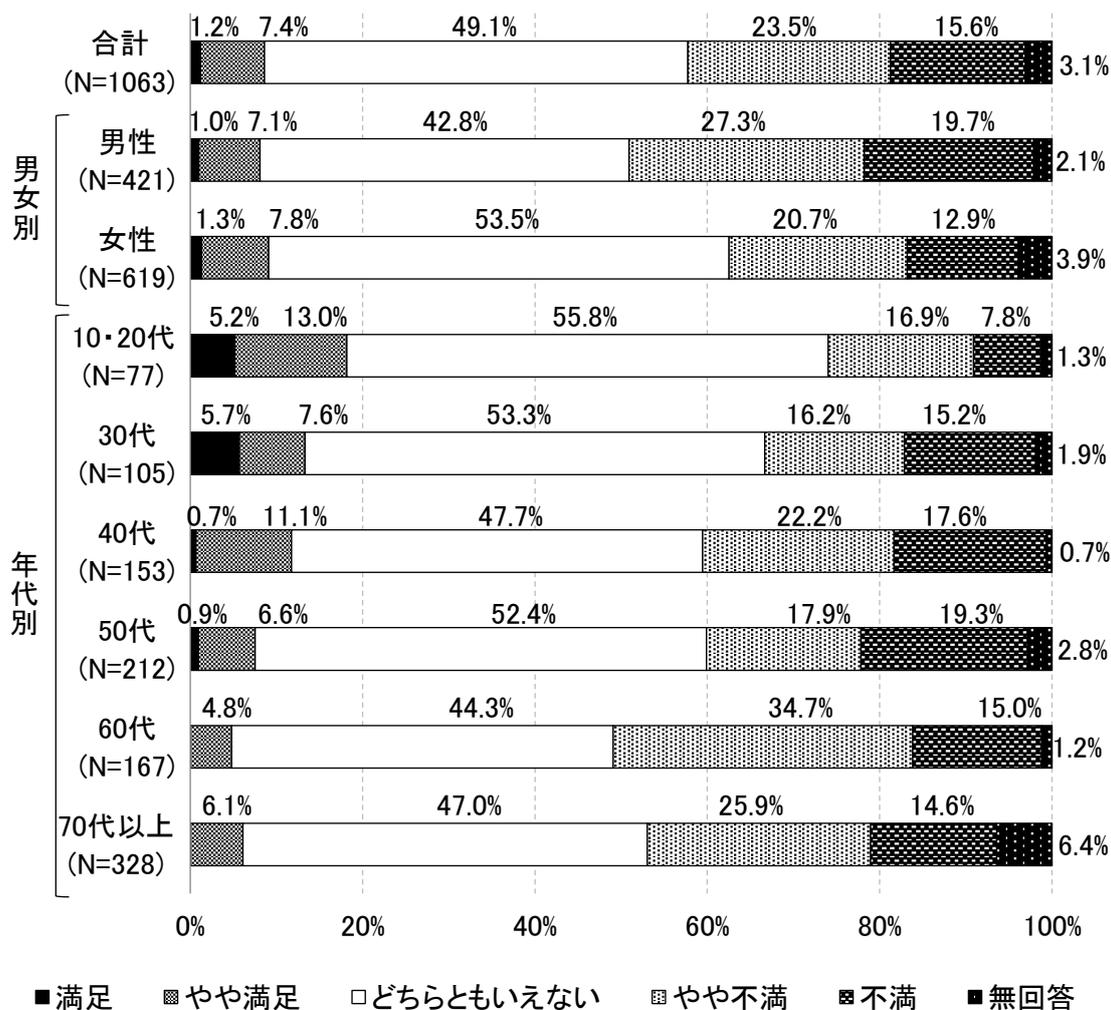


図 36 Q19H 交通手段満足度 (バイク : 乗っている人々のマナー)

Q19I のバスの路線・系統の満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は70代以上で49.7%と最も高い。反対に60代が25.8%と最も低い（図37）。

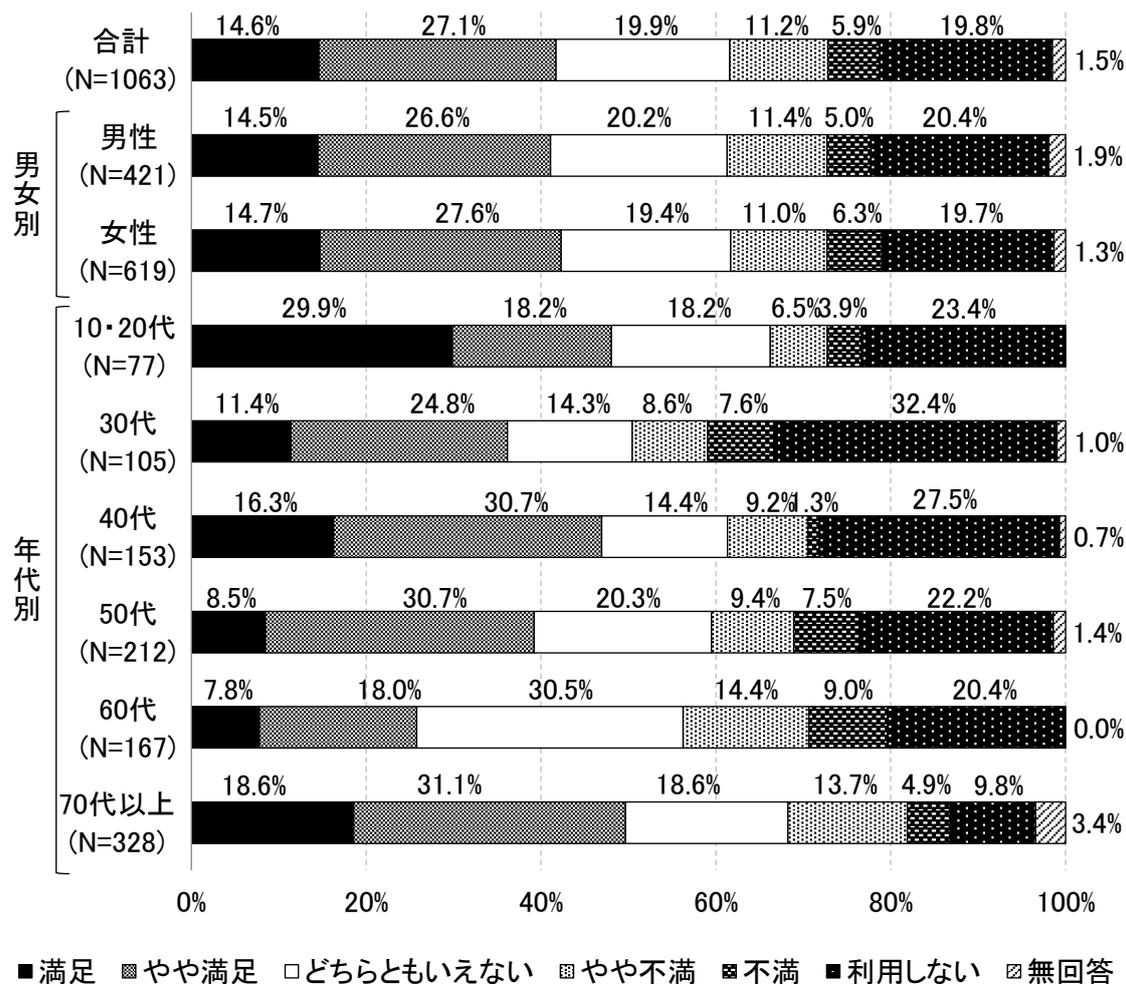


図37 Q19I 交通手段満足度（バス：路線・系統）

Q19Jのバスのダイヤの満足度に関して、年代別で見ると、60代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。それ以外の年代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は70代以上で43.0%と最も高い。反対に、60代が24.0%と最も低い（図38）。

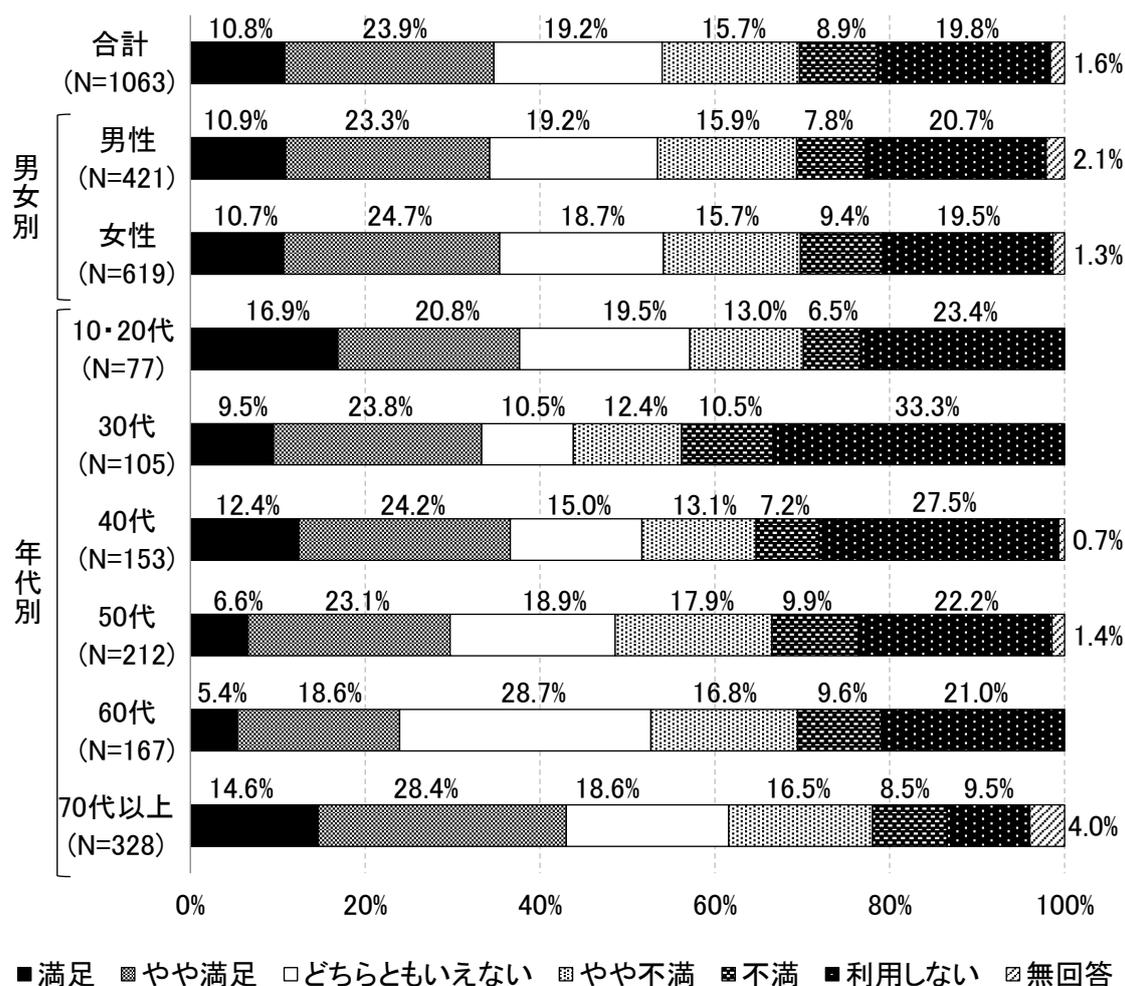


図 38 Q19J 交通手段満足度 (バス：ダイヤ)

Q19Kのバス停の満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は70代以上が51.2%と最も高い。反対に30代が33.3%と最も低い(図39)。

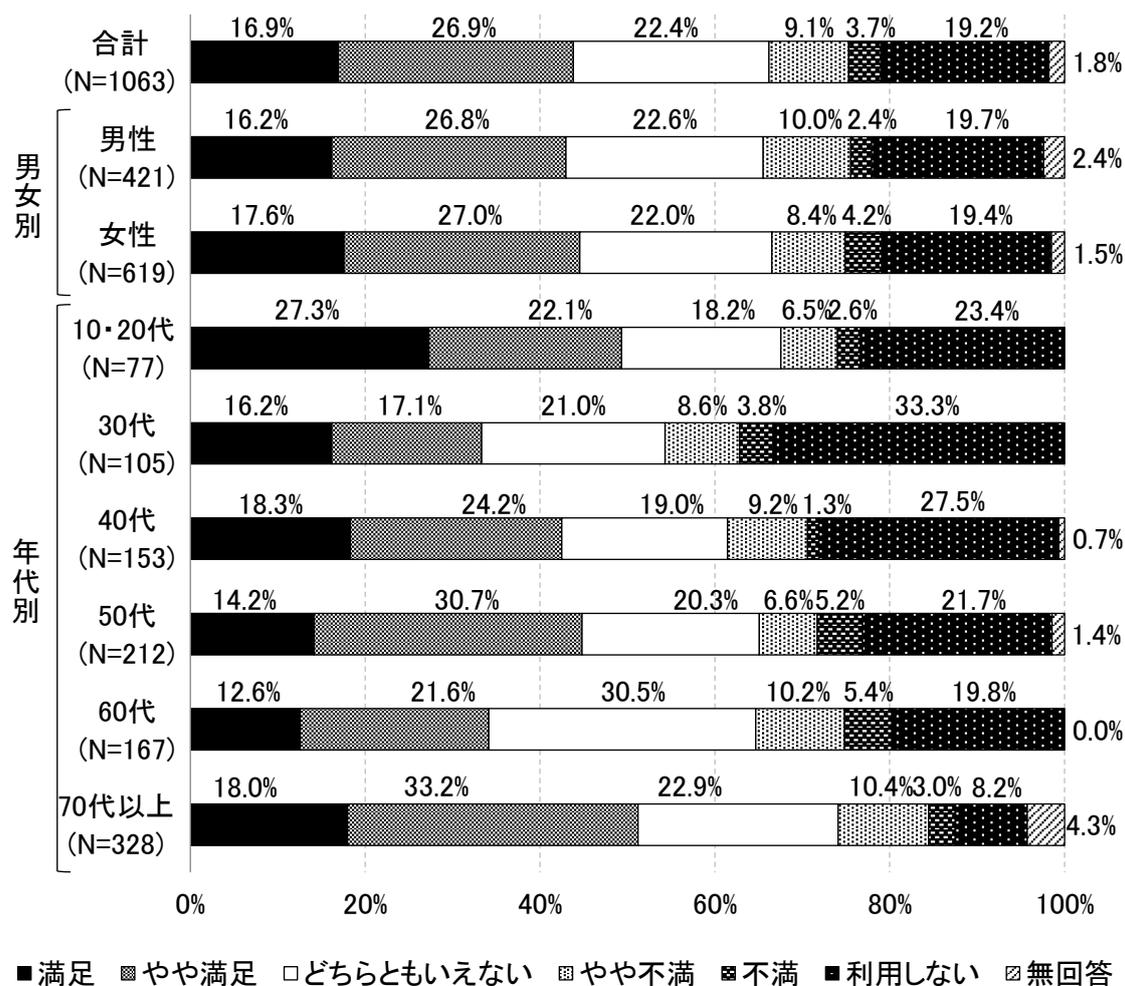


図 39 Q19K 交通手段満足度 (バス:バス停)

Q19Lのバスの乗り方の分かりやすさの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は70代以上で56.1%と最も高い。反対に、60代が33.0%と最も低い(図40)。

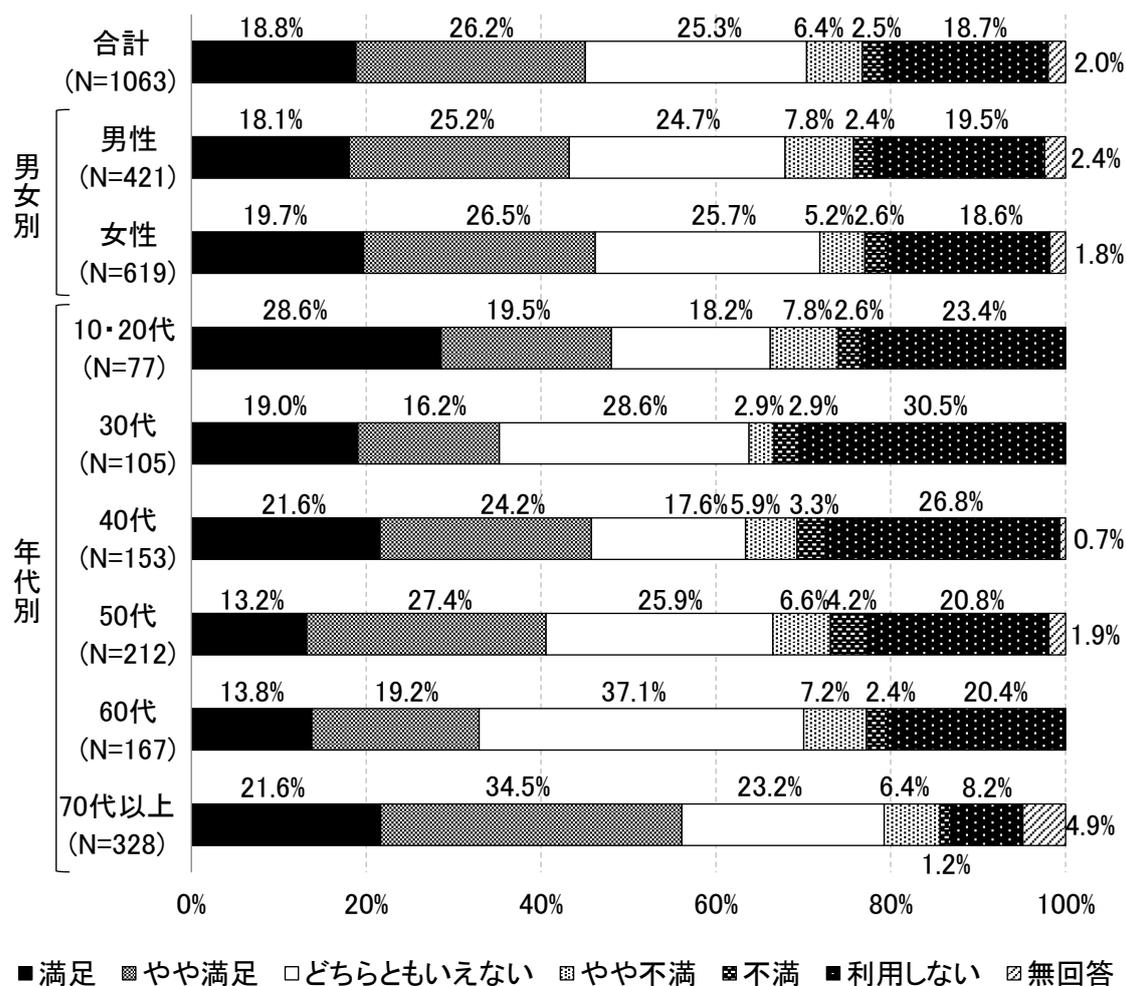


図40 Q19L 交通手段満足度 (バス：乗り方の分かりやすさ)

Q19M の鉄道の駅の使いやすさの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は10・20代が76.7%と最も高い。反対に60代が59.9%と最も低い(図41)。

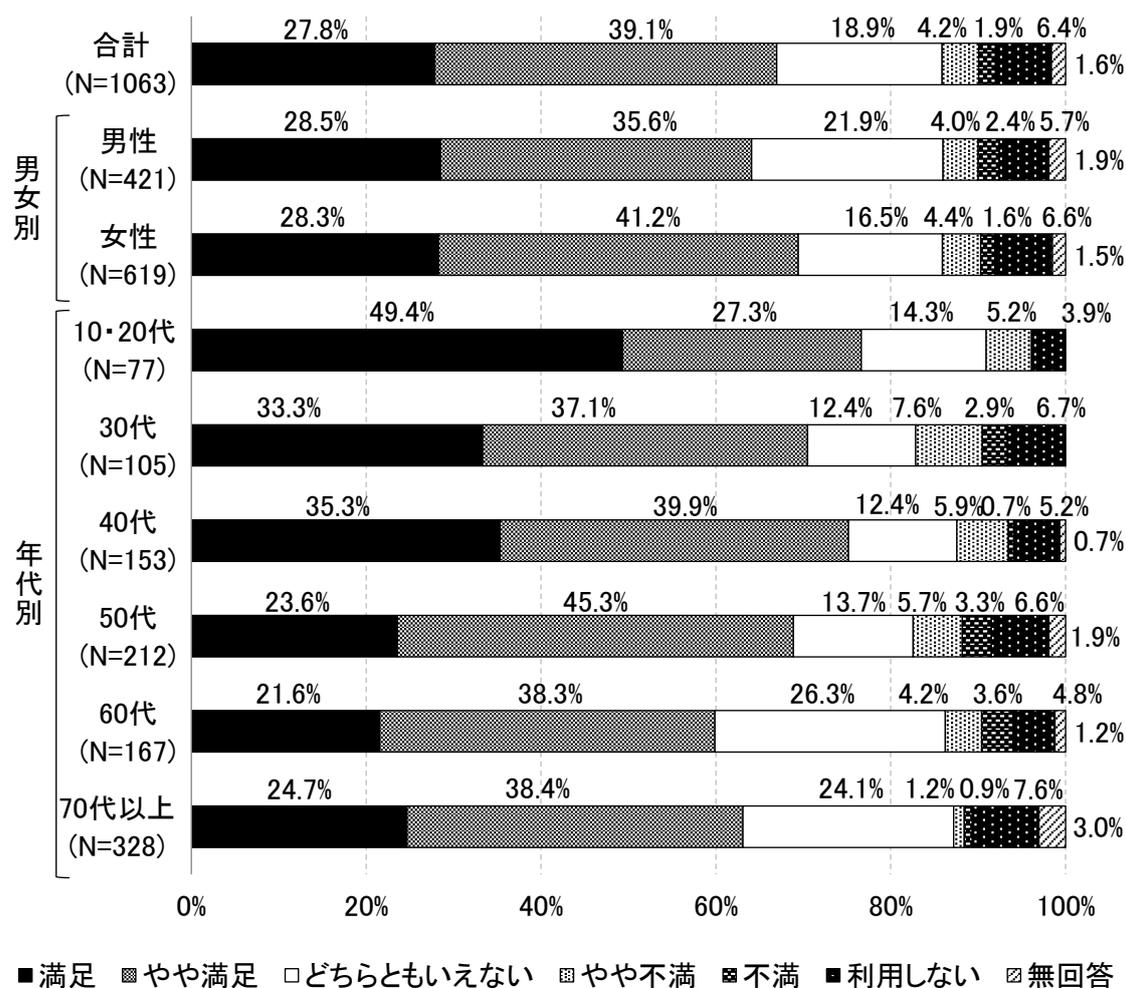


図41 Q19M 交通手段満足度 (鉄道：駅の使いやすさ)

Q19N の鉄道の列車ダイヤの満足度に関して、年代別で見ると、すべての年代で、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は40代が76.4%と最も高い。反対に、70代以上が61.0%と最も低い（図42）。

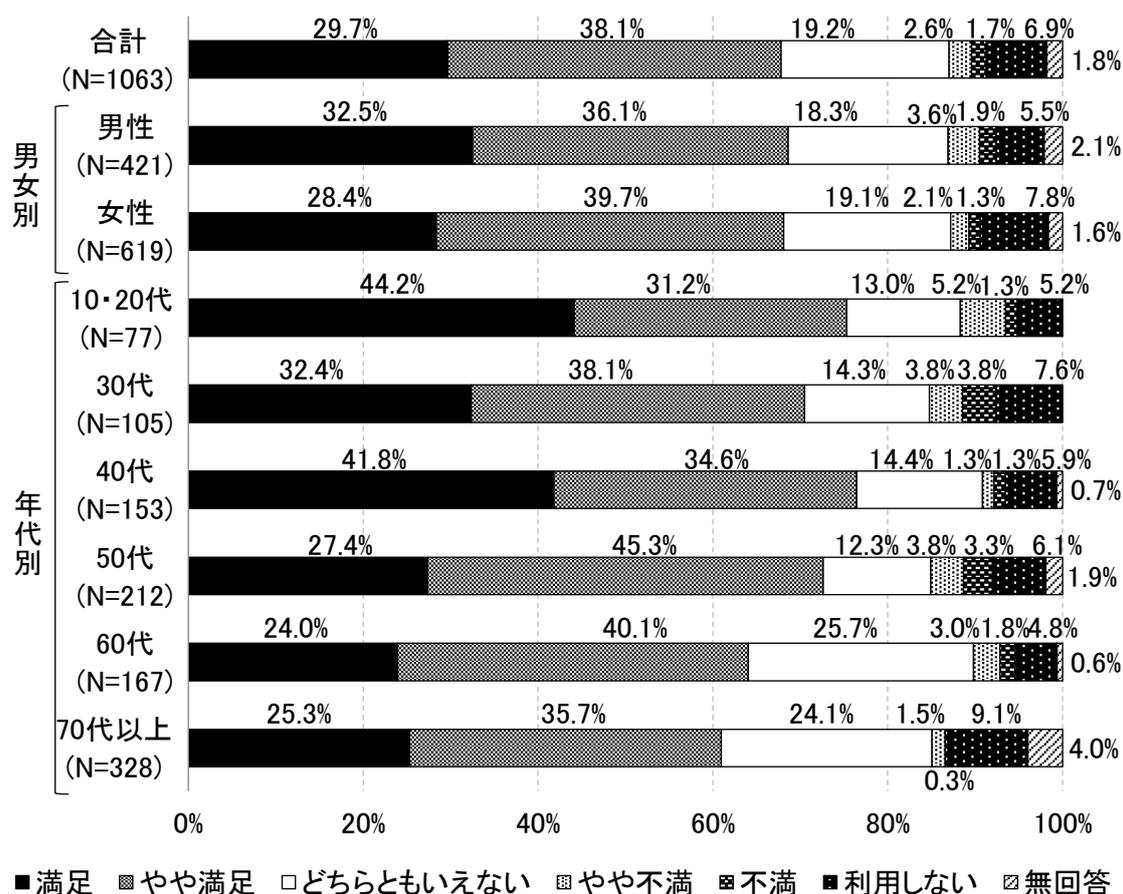


図42 Q19N 交通手段満足度（鉄道：列車ダイヤ）

Q190の自動車が通行する道路の整備状況の満足度に関して、年代別で見ると、60代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。それ以外の年代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合の方が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は40代が41.2%と最も高い。反対に、60代が18.6%と最も低い(図43)。

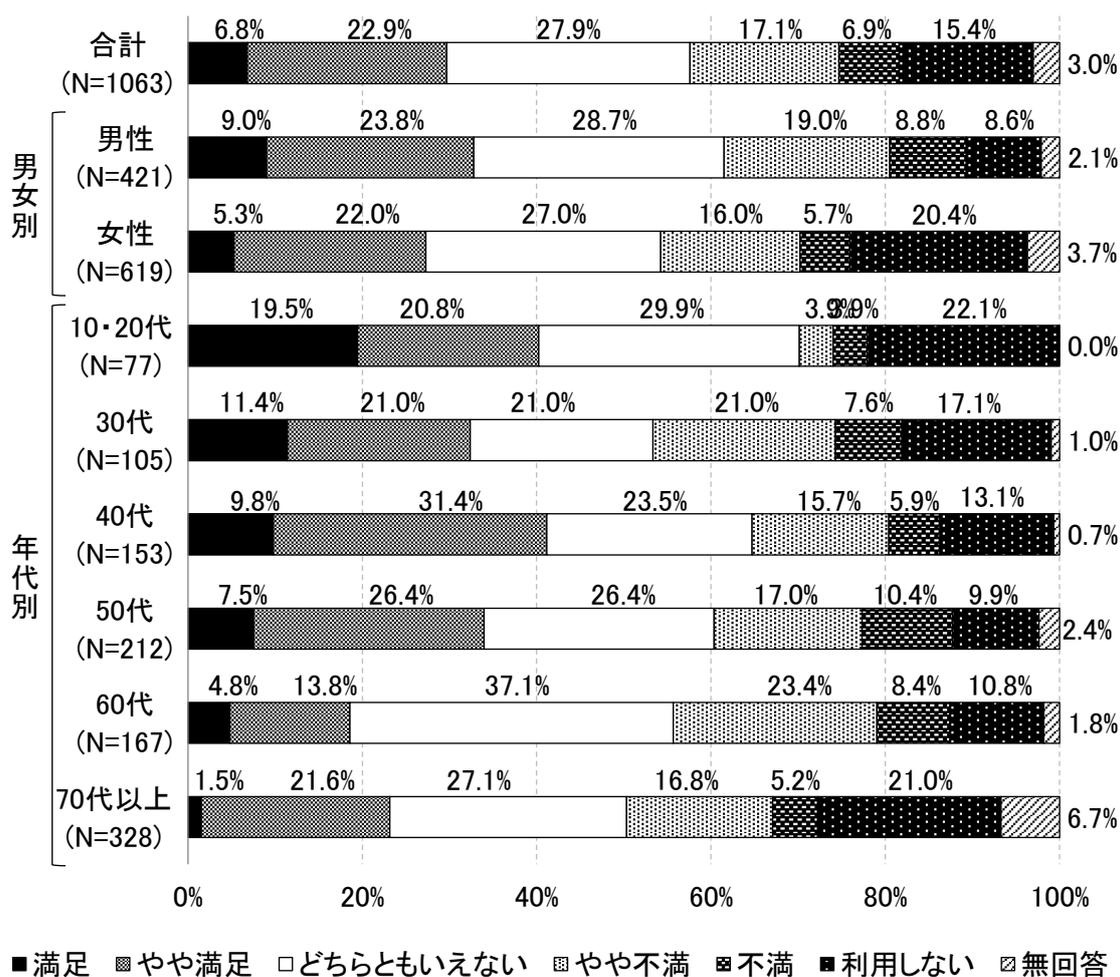


図43 Q190 交通手段満足度 (自動車：道路の整備の状況)

Q19Pの自動車の駐車場の満足度に関して、年代別で見ると、10・20代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合の方が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。それ以外の年代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。「不満」または「やや不満」と回答した人の割合は60代が32.4%と最も高い。反対に、10・20代が13.0%と最も低い(図44)。

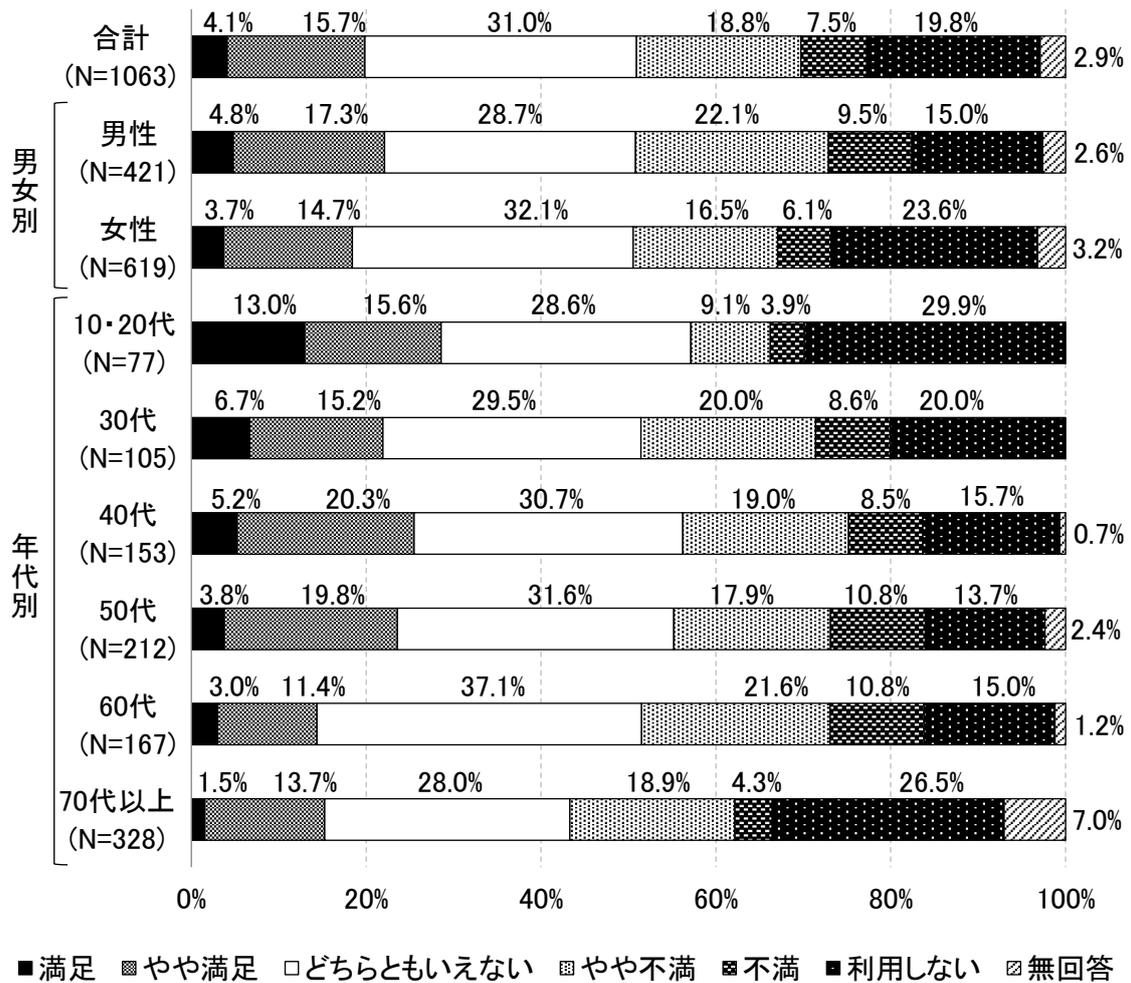


図44 Q19P 交通手段満足度 (自動車: 駐車場)

Q19Qのタクシーの利用しやすさの満足度に関して、年代別で見ると、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は10・20代で26.0%と最も高い。反対に60代が12.0%と最も低い(図45)。

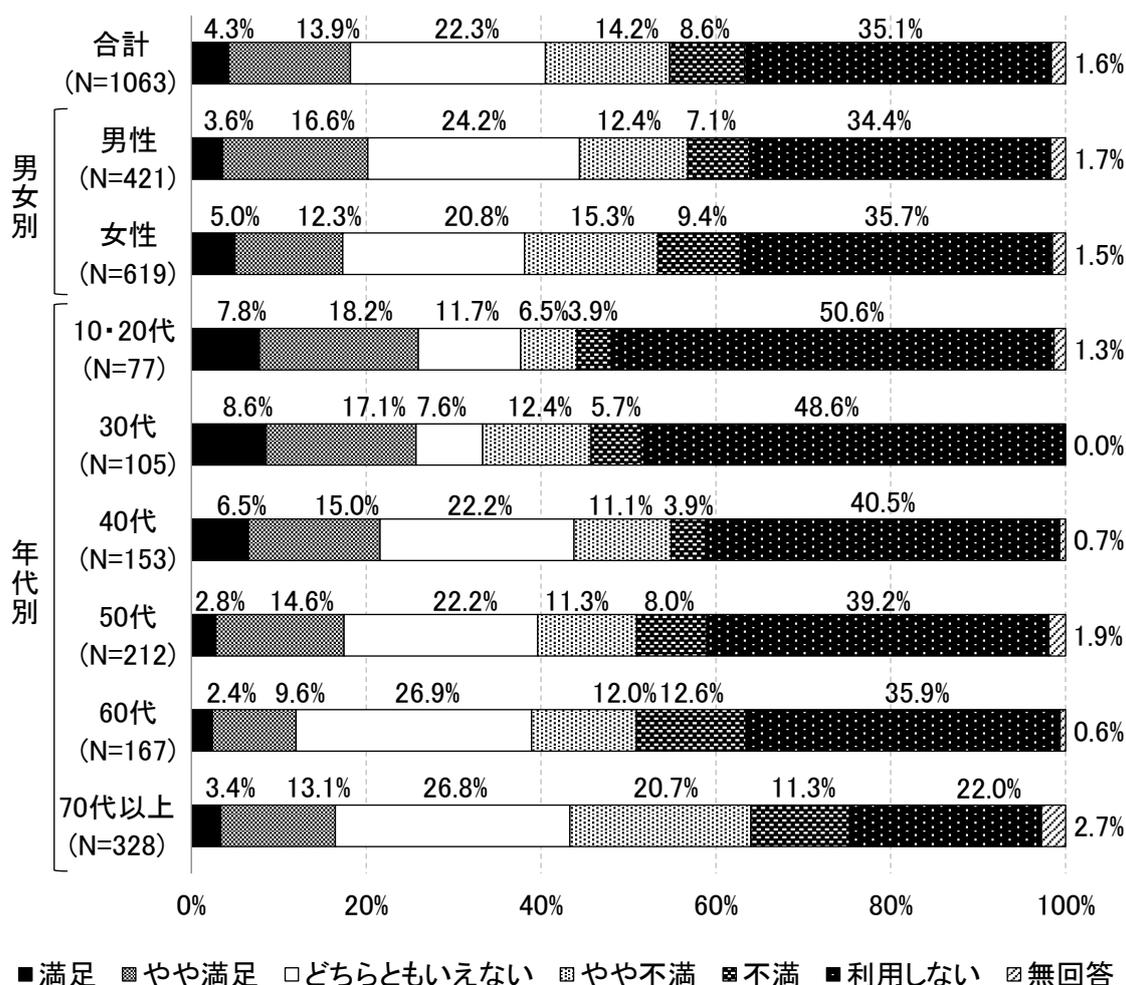


図45 Q19Q 交通手段満足度 (タクシー：利用しやすさ)

Q19Rの駅前広場の満足度に関して、年代別で見ると、60代では、「不満」または「やや不満」と回答した人の割合の方が「満足」または「やや満足」と回答した人の割合よりも高い。それ以外の年代では、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合の方が「不満」または「やや不満」と回答した人の割合よりも高い。「不満」または「やや不満」と回答した人の割合は60代が24.6%と最も高い。反対に、10・20代が13.0%と最も低い(図46)。

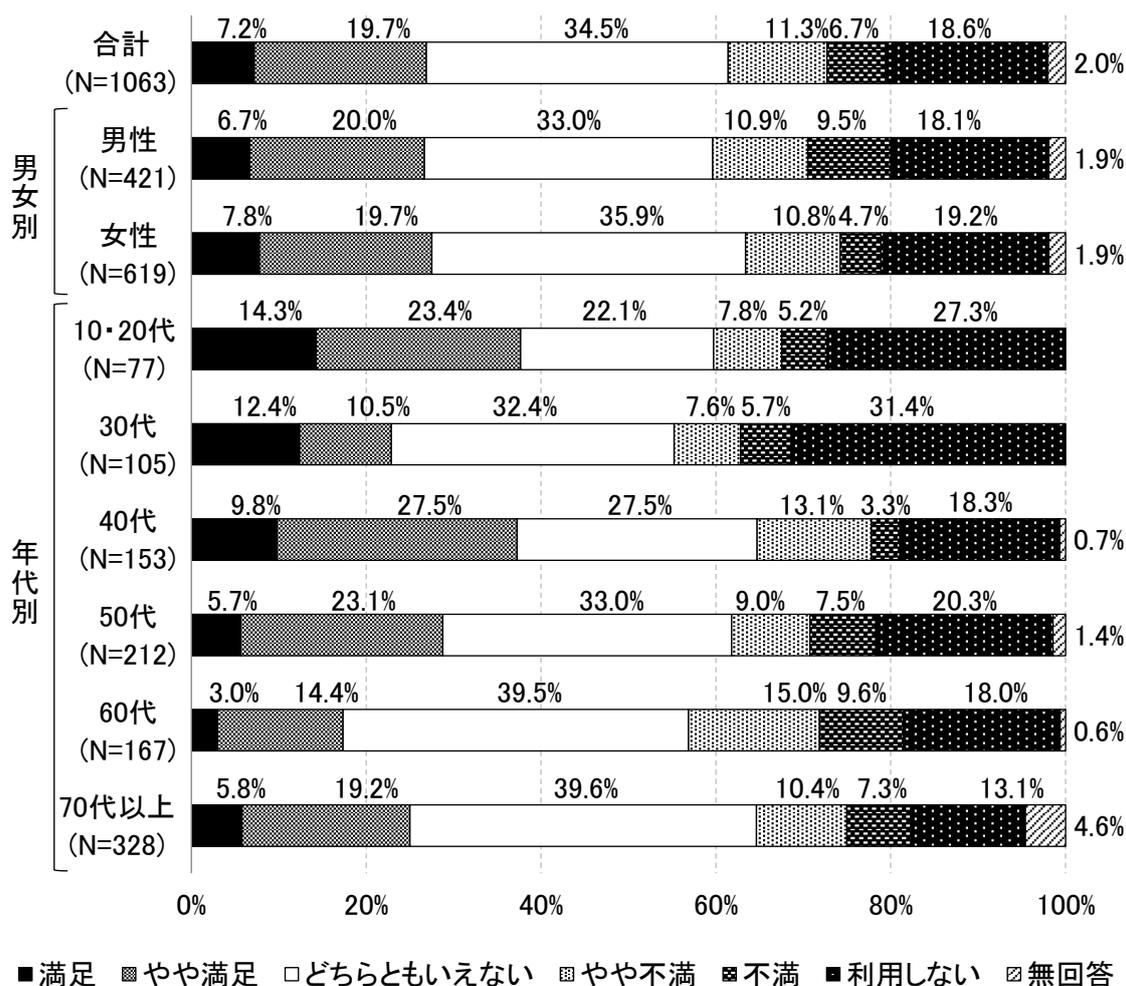


図 46 Q19R 交通手段満足度 (その他：駅前広場)

Q20 の「駅前広場」の満足度を回答した際に、どこの「駅前」をイメージしたかに関して、「JR 高槻駅」が 69.4%で最も高く、「阪急高槻市駅」が 35.1%と続く（図 47）。

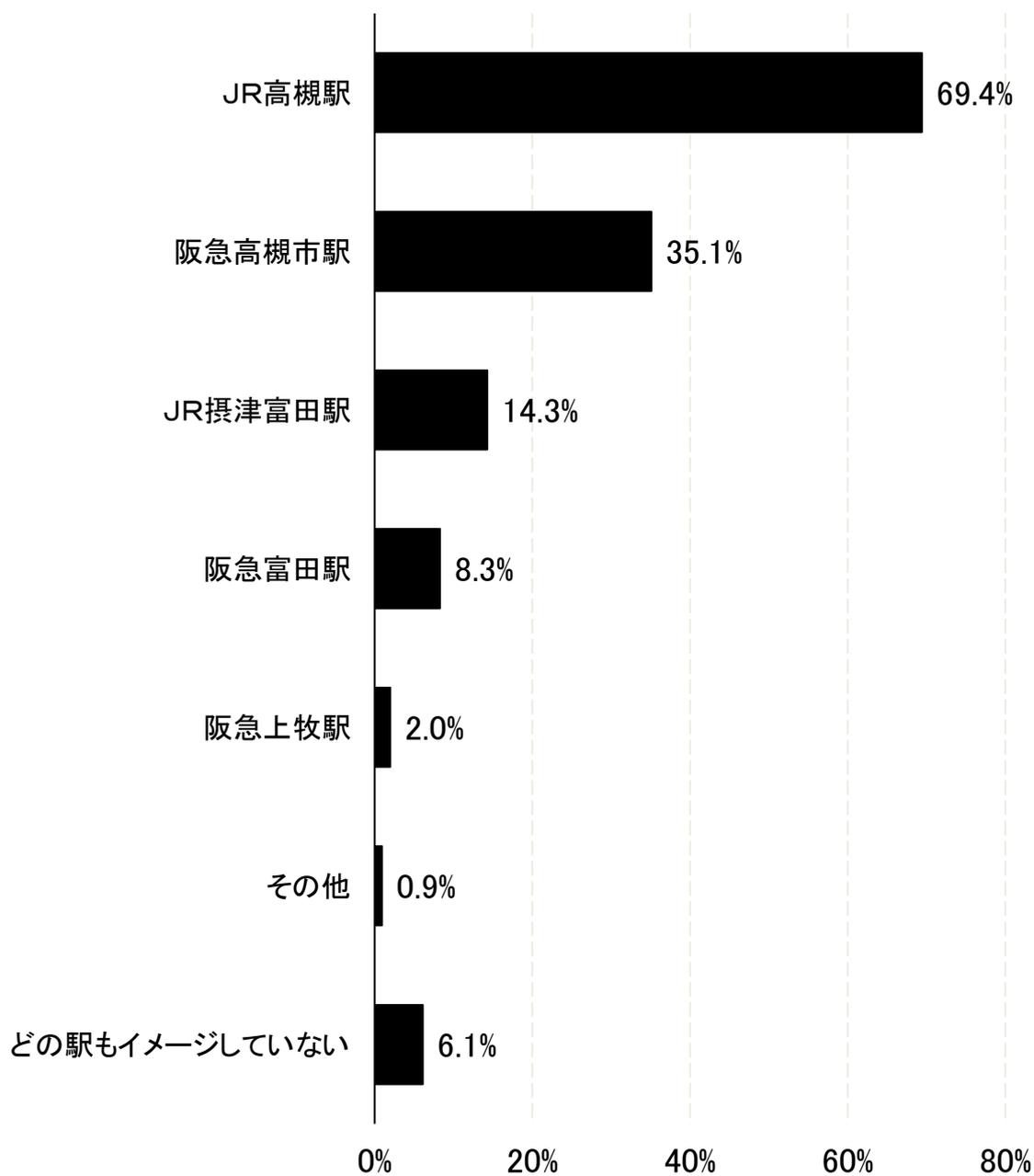


図 47 Q20 どこの「駅前」をイメージしたか（複数回答・全体 N=1063）

Q20 のどこの「駅前」をイメージしたかに関して、男女別で見ると、「JR 高槻駅」は、男性よりも女性の方が 8.6 ポイント高い（図 48）。

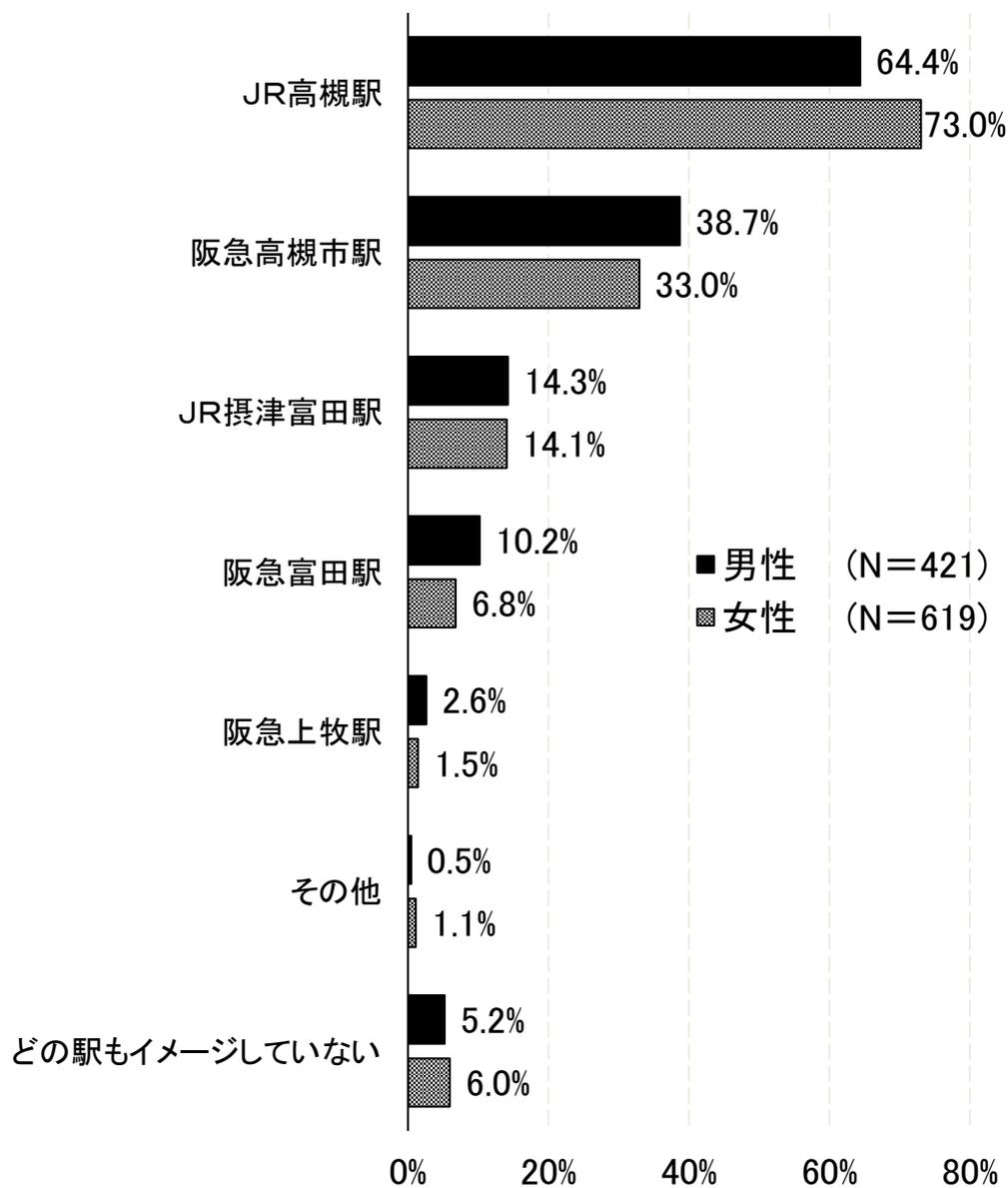


図 48 Q20 どの「駅前」をイメージしたか（複数回答・男女別）

Q20 のどこの「駅前」をイメージしたかに関して、年代別で見ると、「JR 高槻駅」は、40代が 75.2%と最も高く、反対に 30代は 65.7%と最も低い（図 49）。

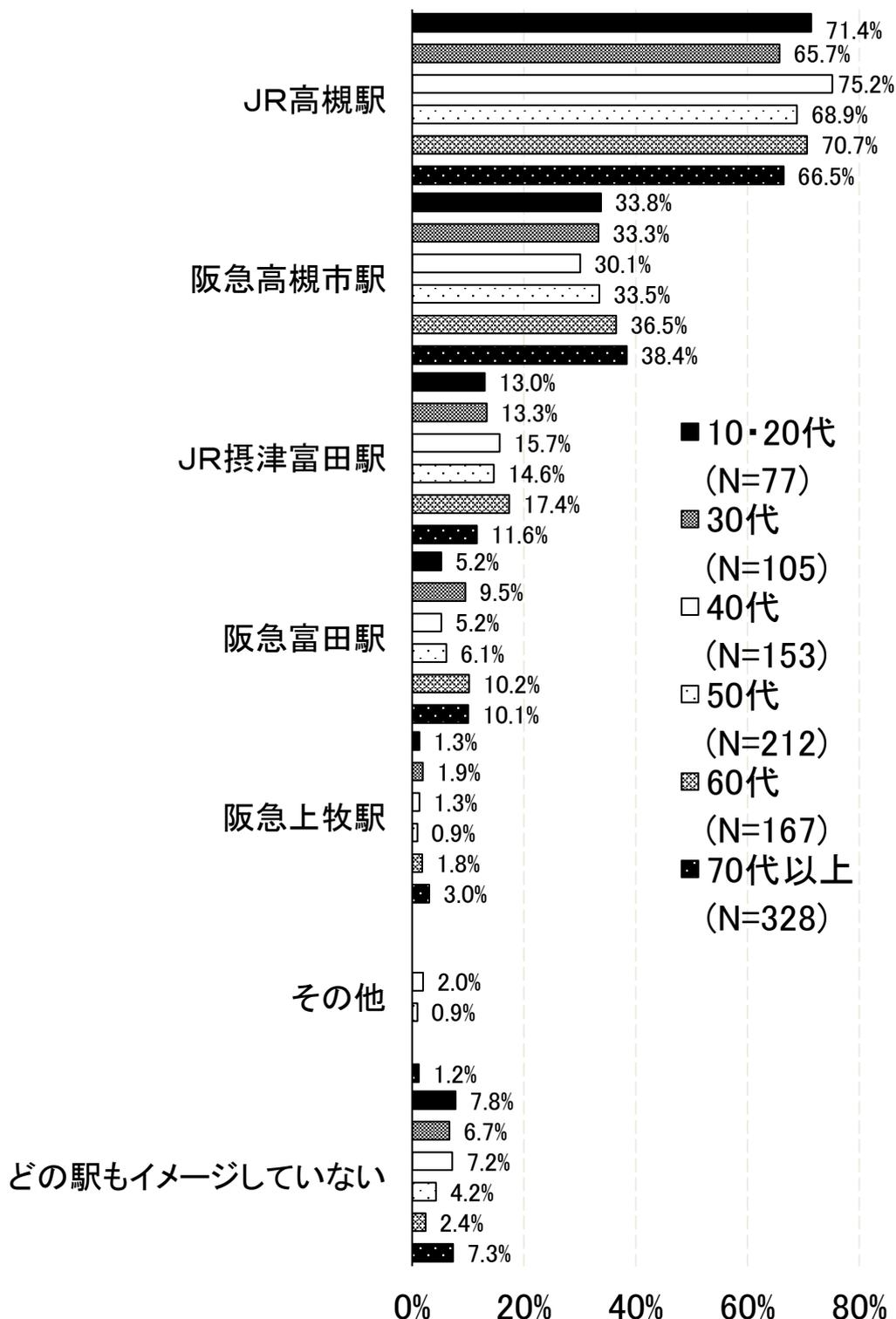


図 49 Q20 どの「駅前」をイメージしたか（複数回答・年代別）

Q21 の高槻市の歴史遺産や施設についてご存知かに関して、「安満遺跡（安満遺跡公園）」が 81.4%で最も高く、「高槻城跡（高槻城公園）」が 76.2%と続く（図 50）。

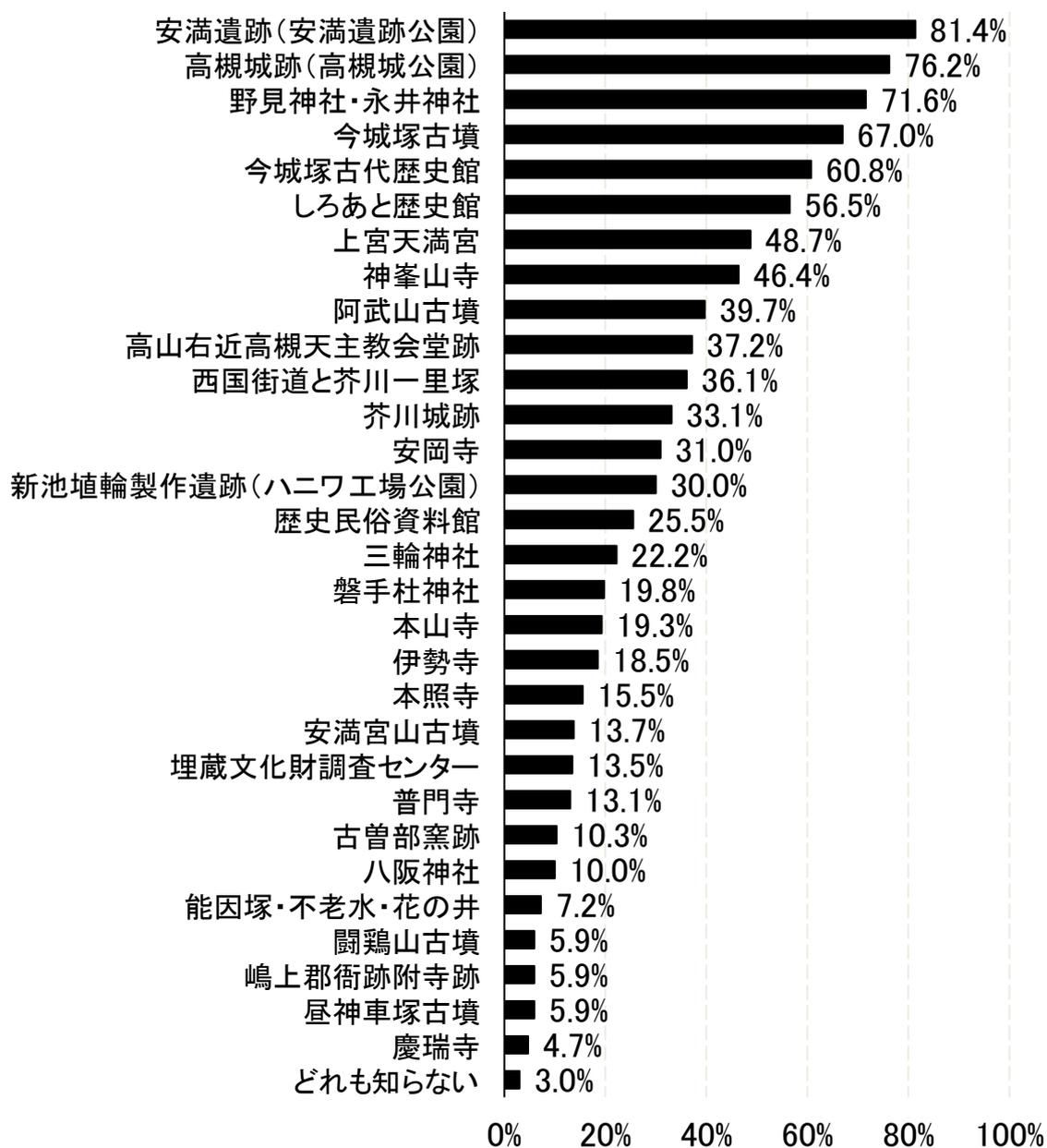


図 50 Q21 歴史遺産や施設についてご存知か（複数回答・全体 N=1063）

Q21 の高槻市の歴史遺産や施設についてご存知かに関して、男女別で見ると、「野見神社・永井神社」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 11.3 ポイント高い（図 51）。

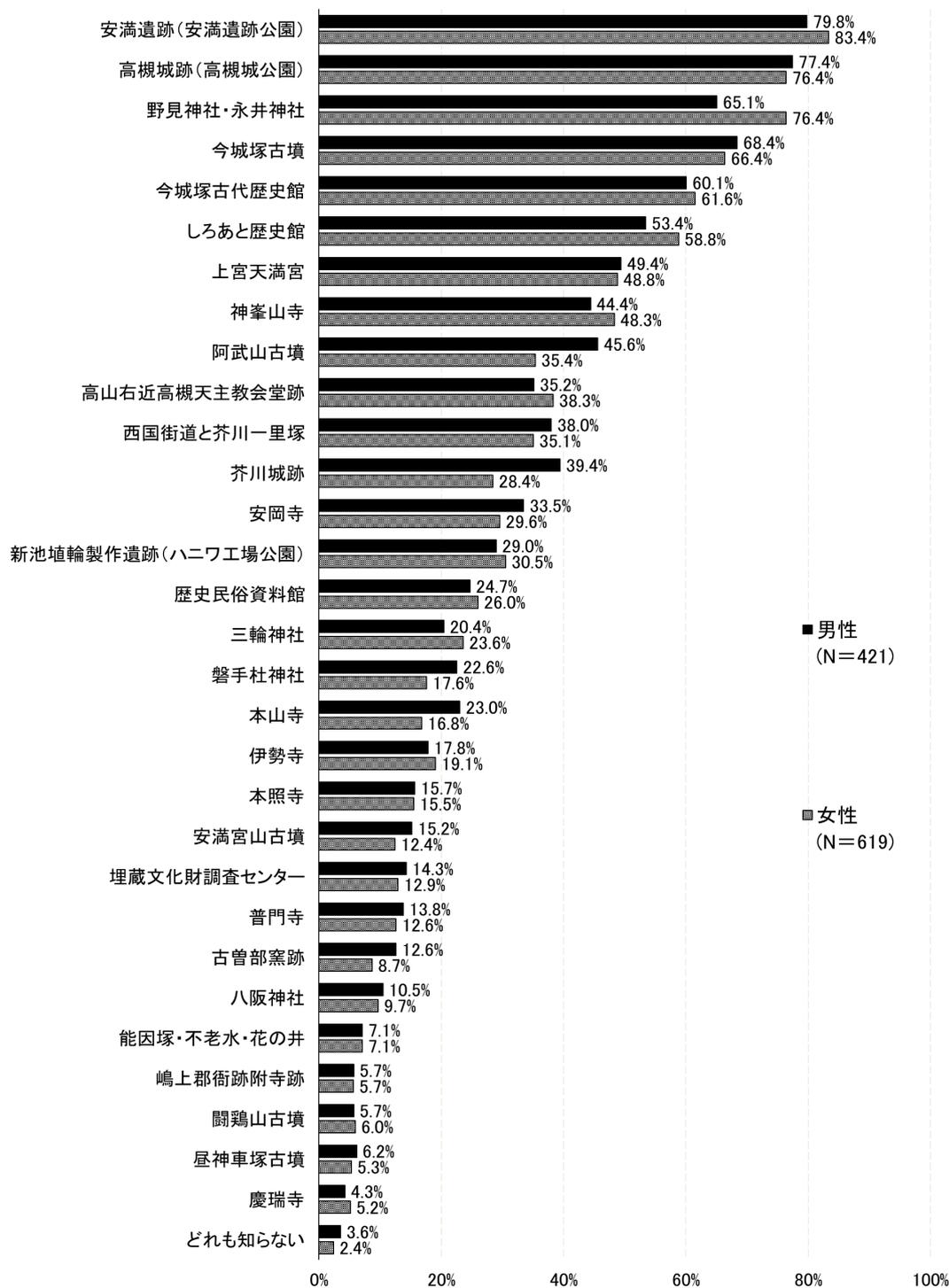


図 51 Q21 歴史遺産や施設についてご存知か（複数回答・男女別）

Q21 の高槻市の歴史遺産や施設についてご存知かに関して、年代別で見ると、「安満遺跡（安満遺跡公園）」は年代で差があり、30代が90.5%と最も高く、反対に70代以上は72.6%と最も低い（図 52）。

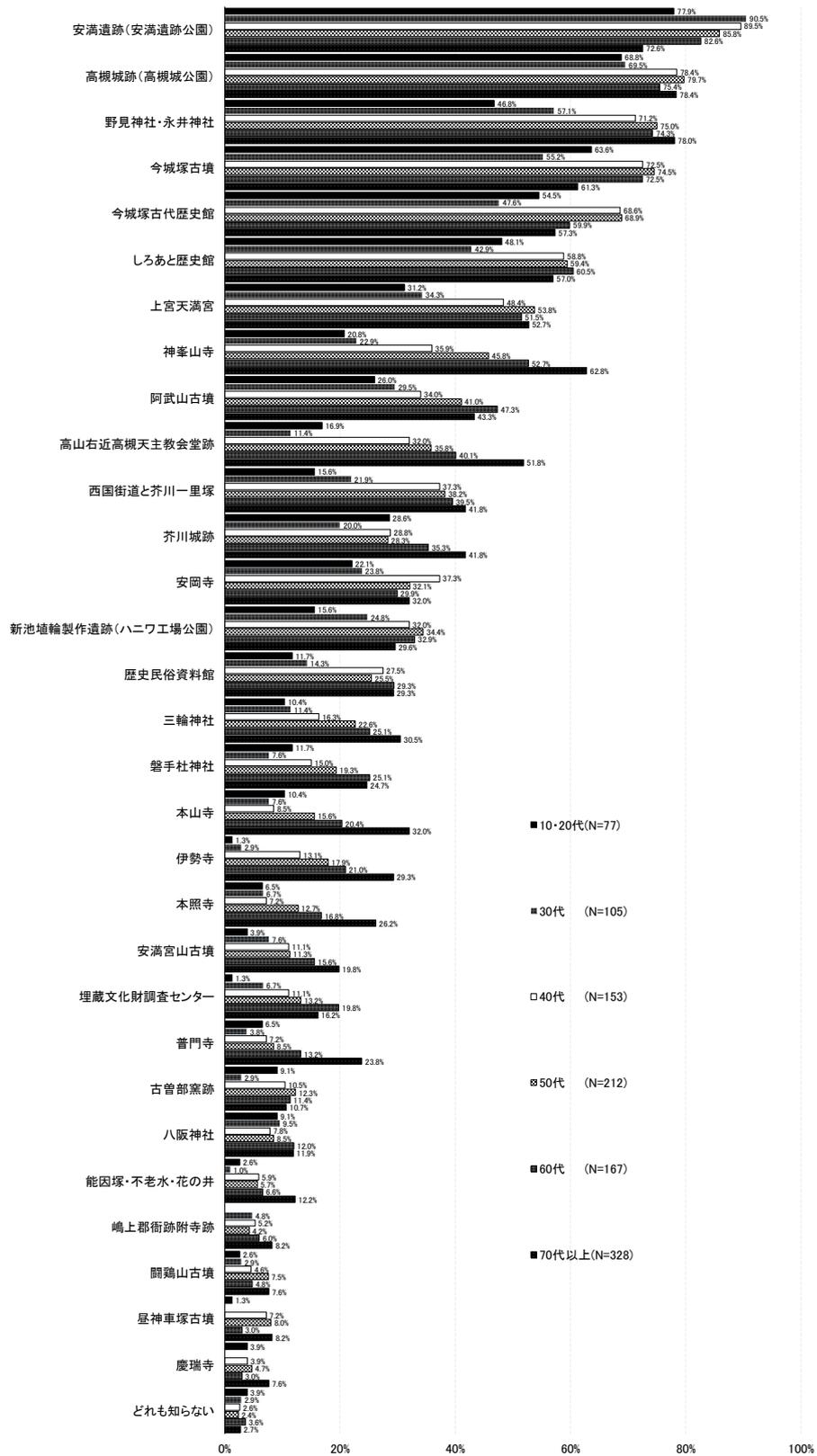


図 52 Q21 歴史遺産や施設についてご存知か（複数回答・年代別）

Q22 の最も身近な歴史遺産の訪問頻度に関して、男女別・年代別のすべての層で「年に数回」と回答した人が最も多い。年代別で見ると、60代の割合が52.7%と最も高く、反対に10・20代が32.5%と最も低い（図53）。

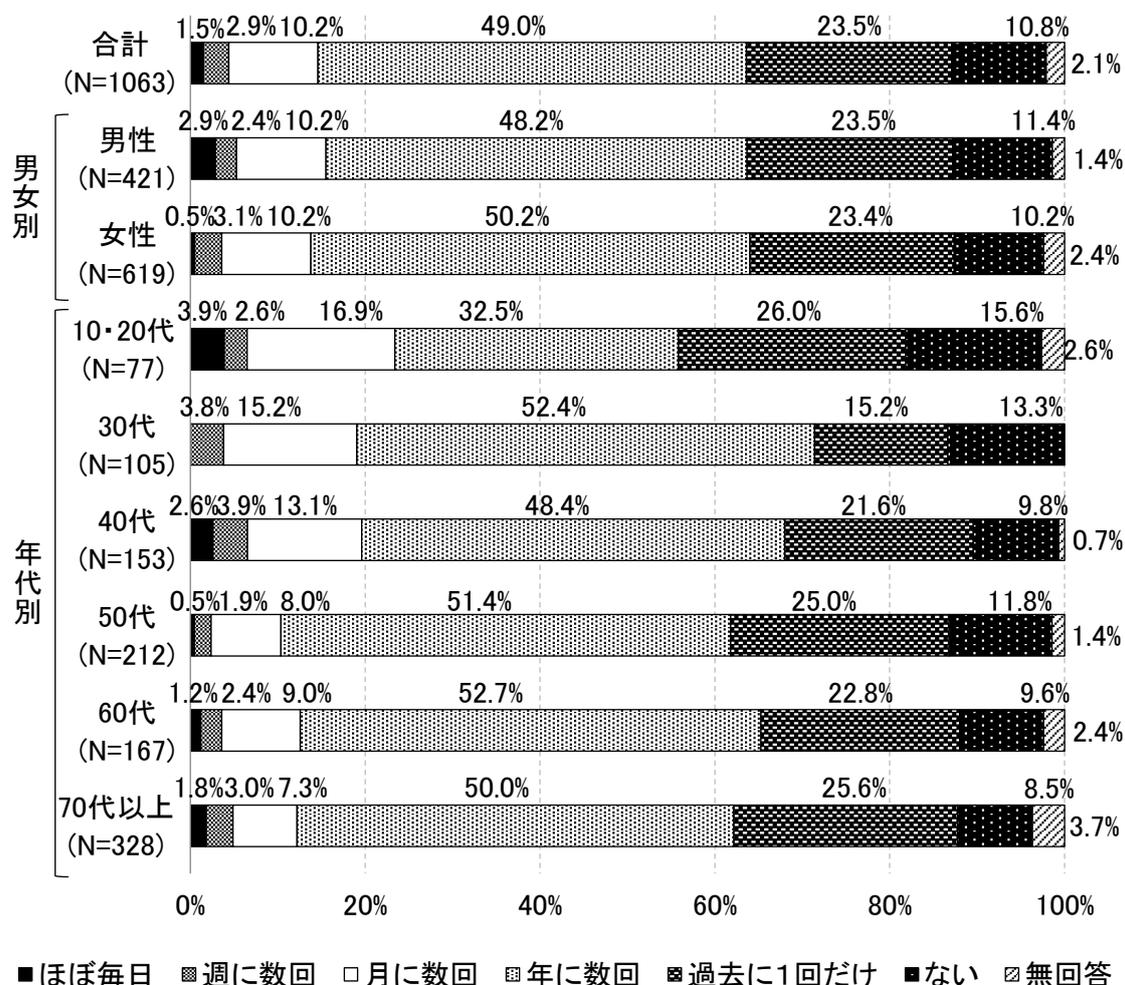


図53 Q22 最も身近な歴史遺産の訪問頻度

Q23 の歴史館・歴史資料館の訪問頻度に関して、年代別で見ると 30 代を除くすべての層で「過去に1回だけ」と回答した人の割合が最も高い。「年に数回」と回答した人の割合は 70 代以上が 33.5%と最も高く、反対に 10 代・20 代の 10.4%が最も低い（図 54）。

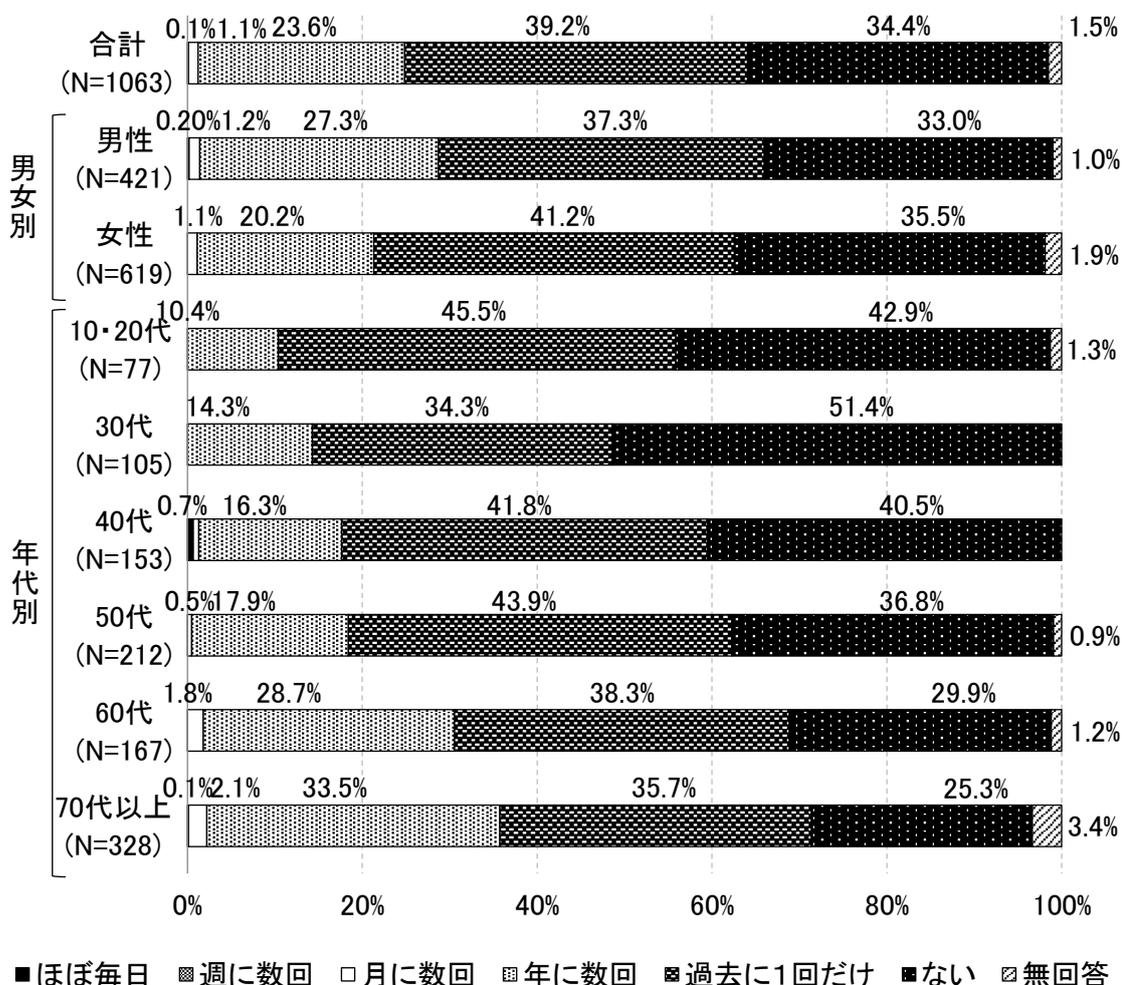
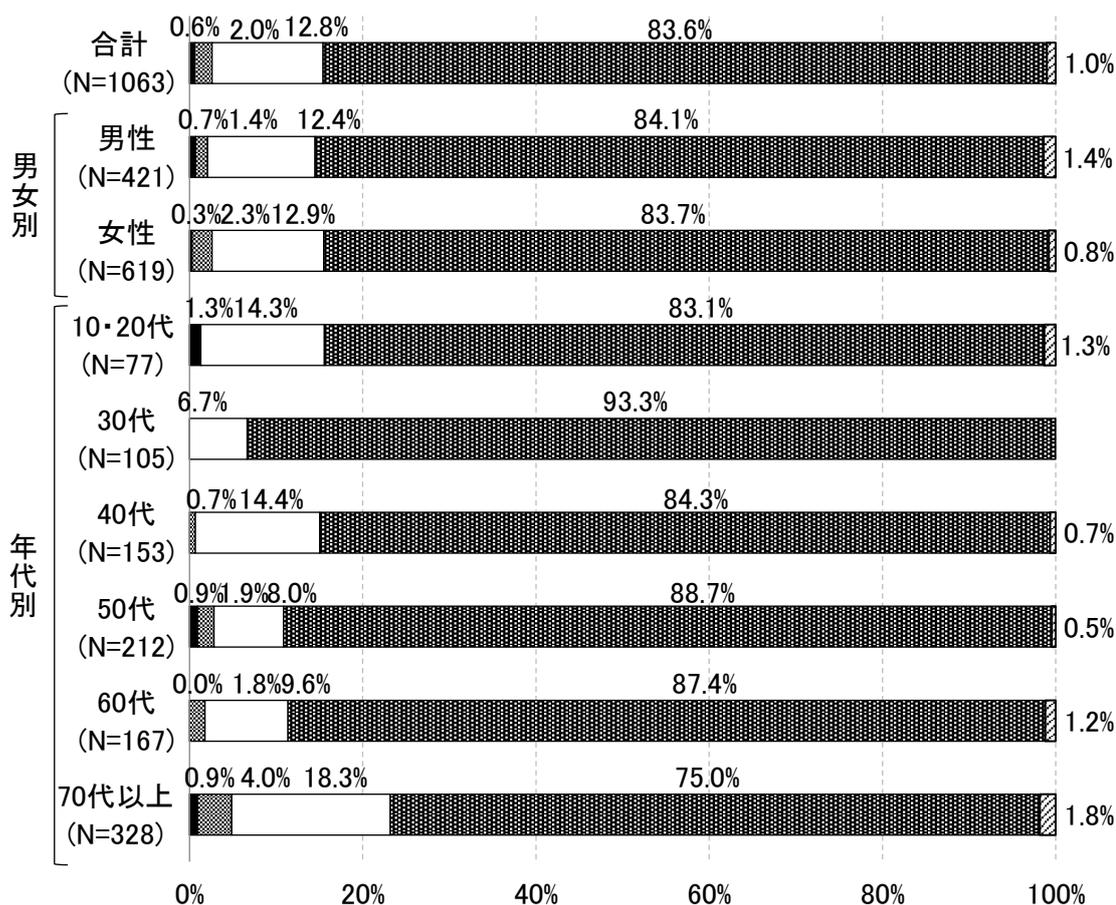


図 54 Q23 歴史館・歴史資料館の訪問頻度

Q24 の文化財の現地説明会・体験学習会の参加経験に関して、男女別・年代別のすべての層で「参加したことがない」と回答した人が 8 割以上である。年代別で見ると、「参加したことがある」と回答した人の割合は 70 代が 18.3%と最も高く、反対に 30 代が 6.7%と最も低い (図 55)。



■よく参加している ■たまに参加する □参加したことがある ■参加したことがない ▨無回答

図 55 Q24 文化財の現地説明会・体験学習会の参加経験

Q25 の高槻市の文化財や歴史資産についての情報を何から得ているかに関して、年代別で見ると、10・20代では、「家族や知人」と回答した人の割合の方が最も高い。それ以外の年代では、「市の広報誌」と回答した人が3割以上である。年代別で見ると、「市のホームページ」と回答した人の割合は60代が4.8%と最も高く、反対に40代が0.7%と最も低い(図56)。

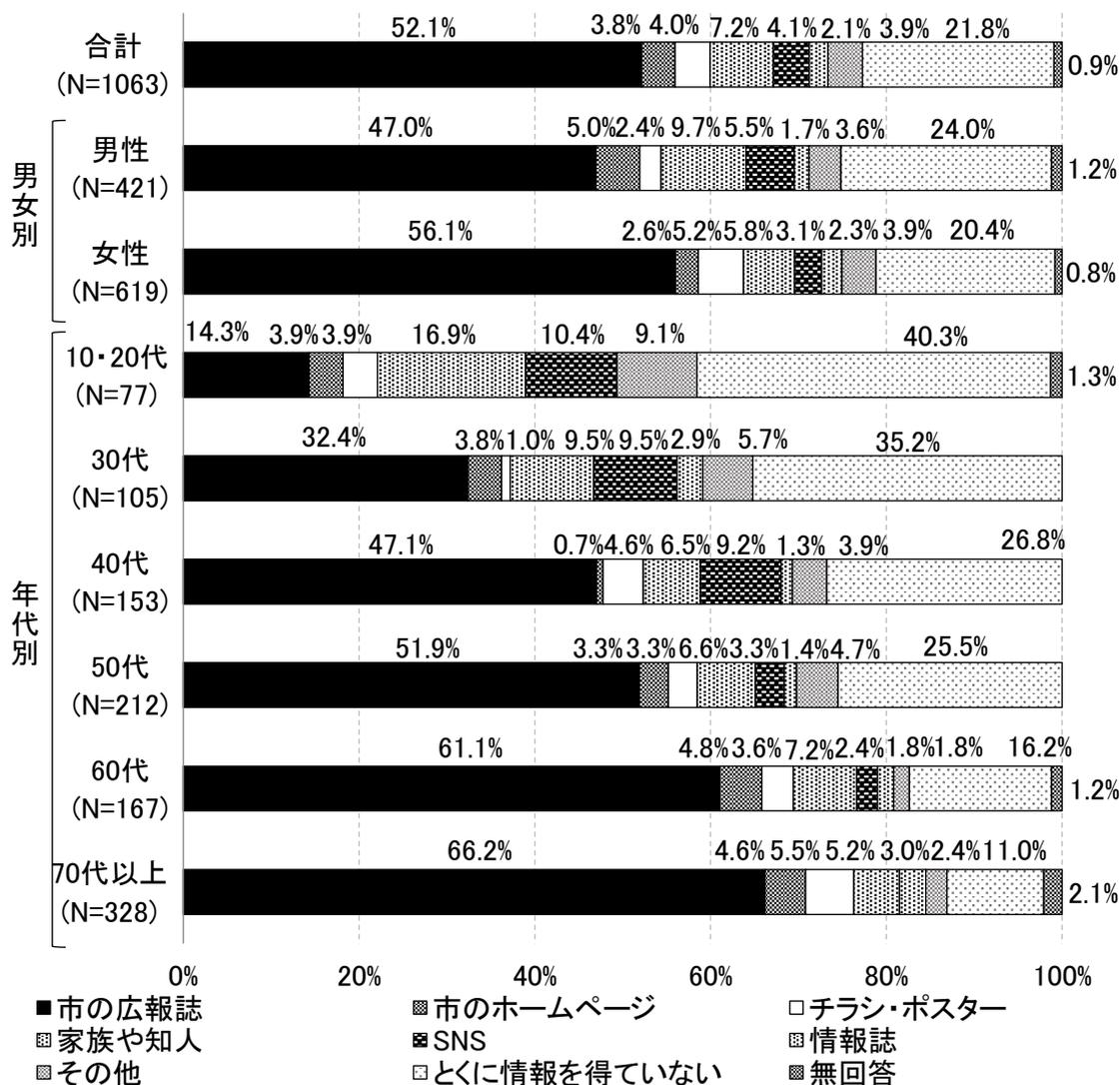


図 56 Q25 高槻市の文化財や歴史資産についての情報を何から得ている

Q26 摂津峡・三好山周辺を訪れた目的に関して、「花見(桜など)」が21.4%で最も高く、「ハイキング」が6.9%と続く(図57)。

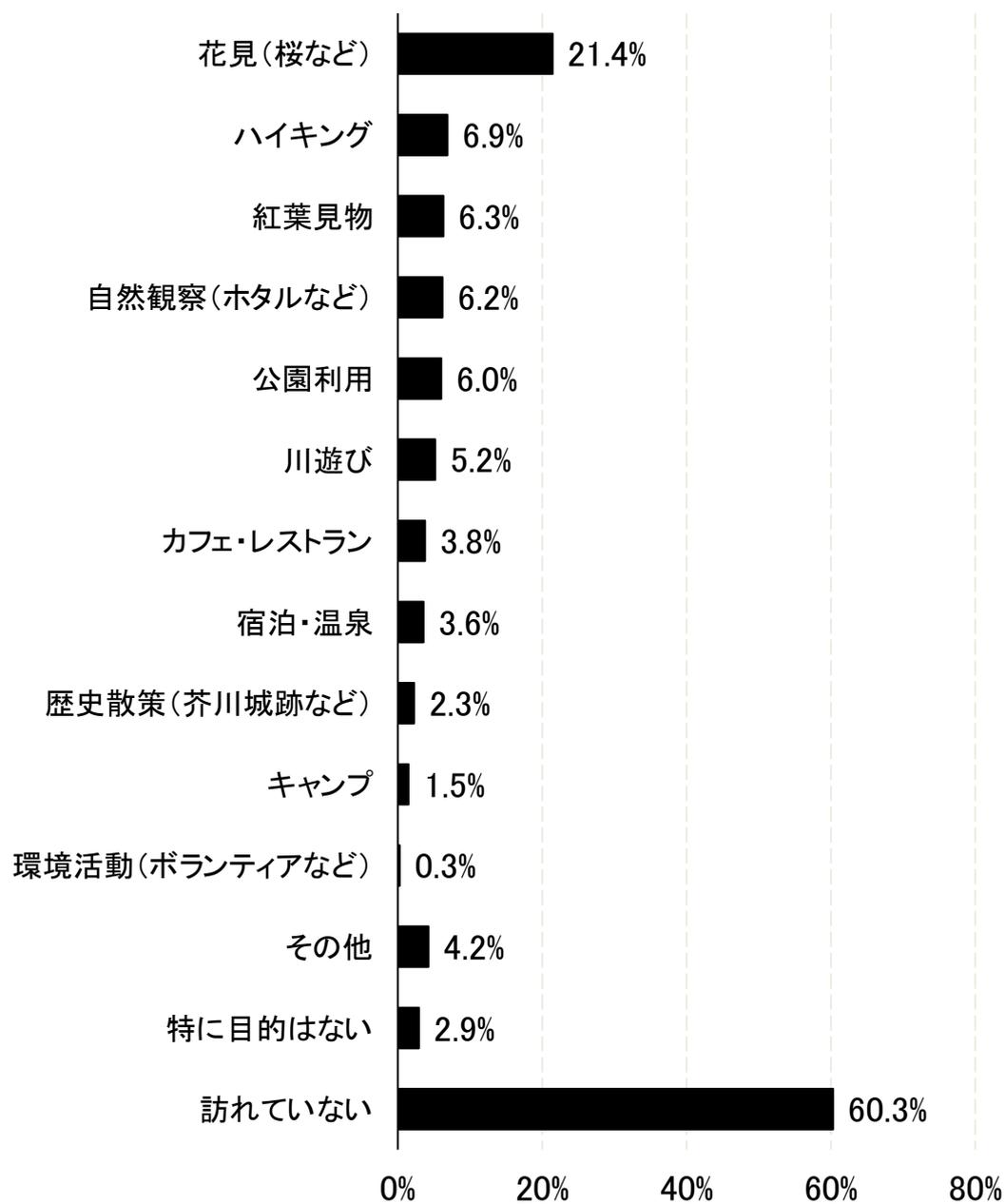


図57 Q26 摂津峡・三好山周辺を訪れた目的(複数回答・全体 N=1063)

Q26 の摂津峡・三好山周辺を訪れた目的に関して、男女差が大きい項目は「ハイキング」と「カフェ・レストラン」であり、「ハイキング」は男性の方が 3.8 ポイント高く、「カフェ・レストラン」は女性の方が 2.3 ポイント高い（図 58）。

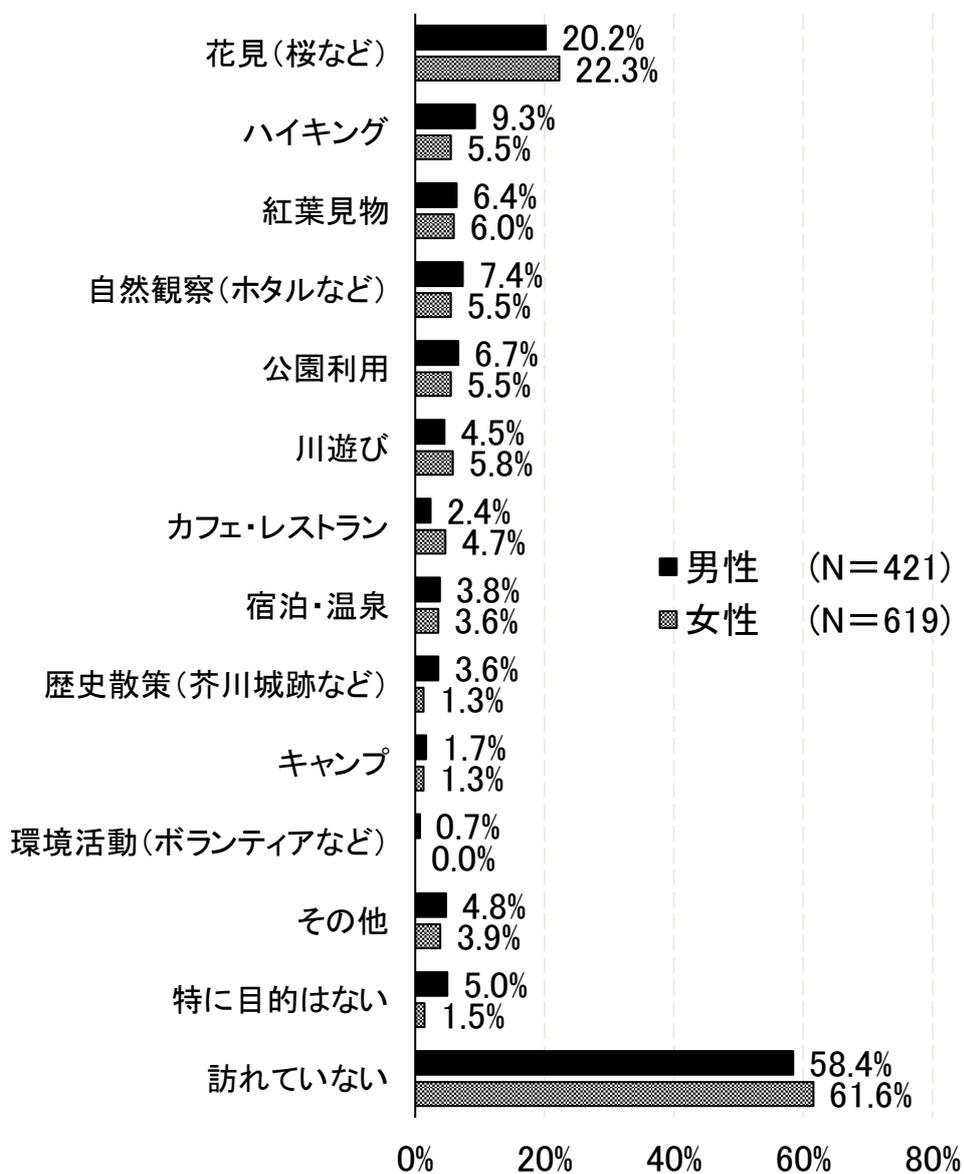


図 58 Q26 摂津峡・三好山周辺を訪れた目的（複数回答・男女別）

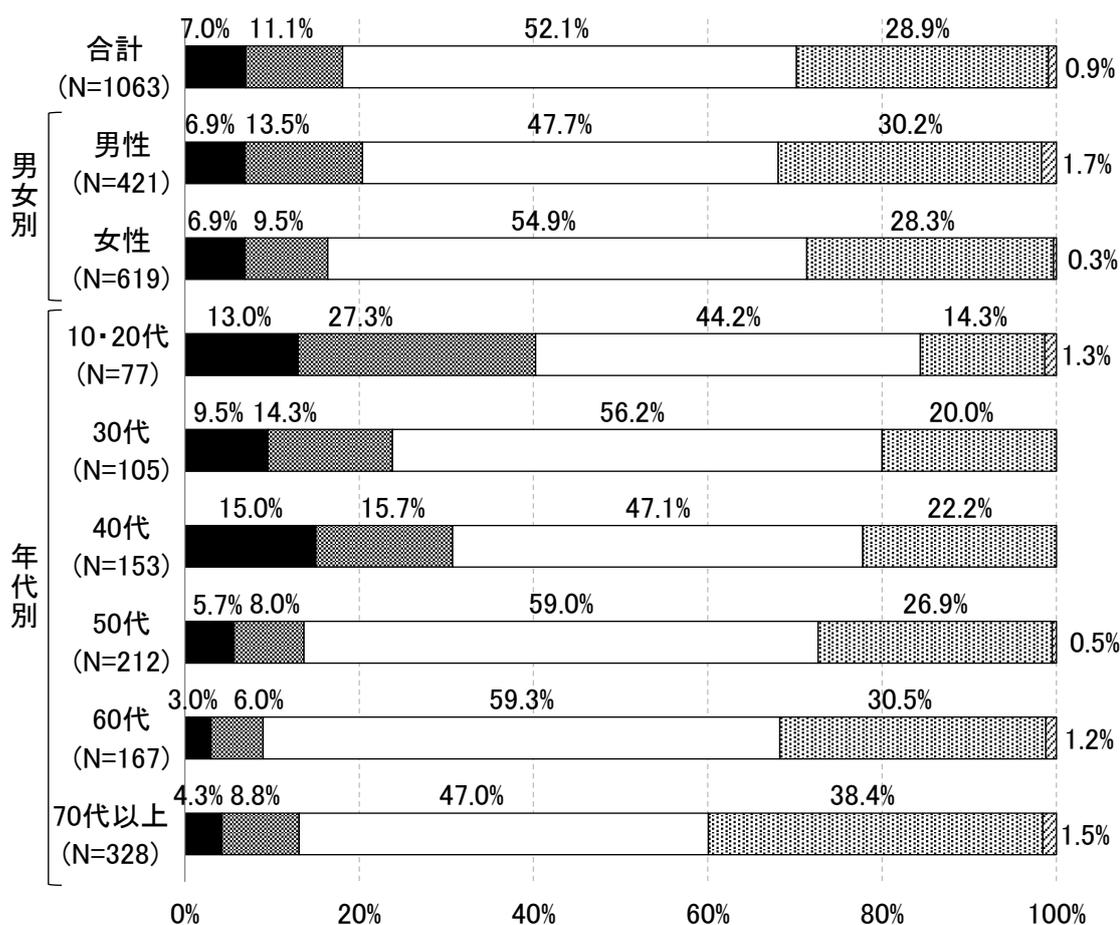
Q26 の摂津峡・三好山周辺を訪れた目的に関して、30代が最も高い項目が「自然観察(ホテルなど)」、「公園利用」、「川遊び」、「カフェ・レストラン」、「宿泊・温泉」の5項目となっている(図59)。



図 59 Q26 摂津峡・三好山周辺を訪れた目的(複数回答・年代別)

Q27A～Q27B が、高槻市内で行われているイベントにどのくらい参加したことあるかを質問している。

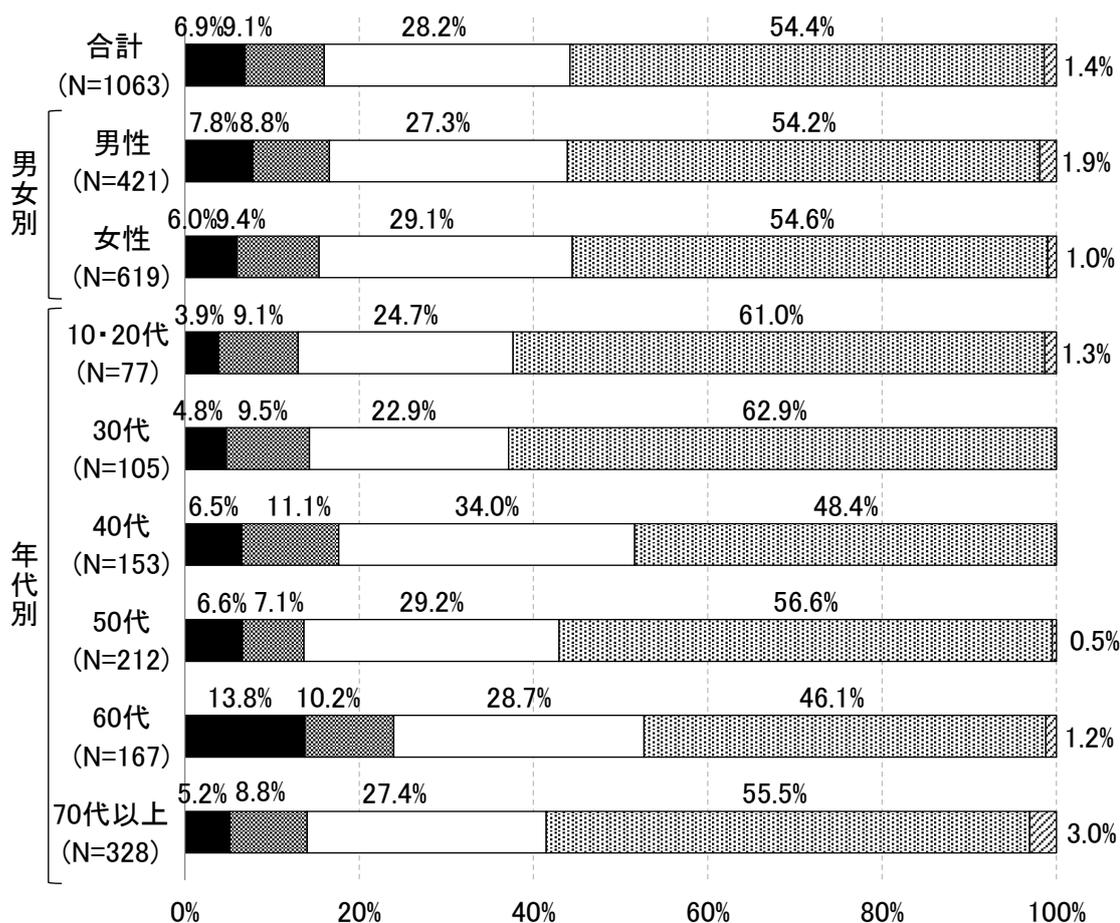
Q27A の高槻まつりの参加頻度に関して、男女別で見ると、「参加したことがある」と回答した人の割合は、男性では 47.7%、女性では 54.9%である。年代別で見ると、「よく参加している」と回答した人の割合は 40 代が 15.0%と最も高い。反対に 60 代が 3.0%と最も低い (図 60)。



■よく参加している ■たまに参加する □参加したことがある ■参加したことがない □無回答

図 60 Q27A 高槻市内で行われているイベント：高槻まつり

Q27B の高槻ジャズストリートの参加頻度に関して、男女別で見ると、「参加したことがある」と回答した人の割合は、男性では 27.3%、女性では 29.1%である。年代別で見ると、「よく参加している」と回答した人の割合は 60 代が 13.8%と最も高い。反対に 10・20 代が 3.9%と最も低い（図 61）。



■よく参加している ■たまに参加する □参加したことがある ■参加したことがない ▨無回答

図 61 Q27B 高槻市内で行われているイベント：高槻ジャズストリート

Q28 の環境に関する問題への関心度に関して、「地球温暖化」が 61.0%で最も高く、「異常気象」が 57.6%と続く（図 62）。



図 62 Q28 環境に関する問題への関心度（複数回答・全体 N=1063）

Q28 の環境に関する問題への関心度に関して、男女別で見ると、「食品ロス」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 7.2 ポイント高い（図 63）。

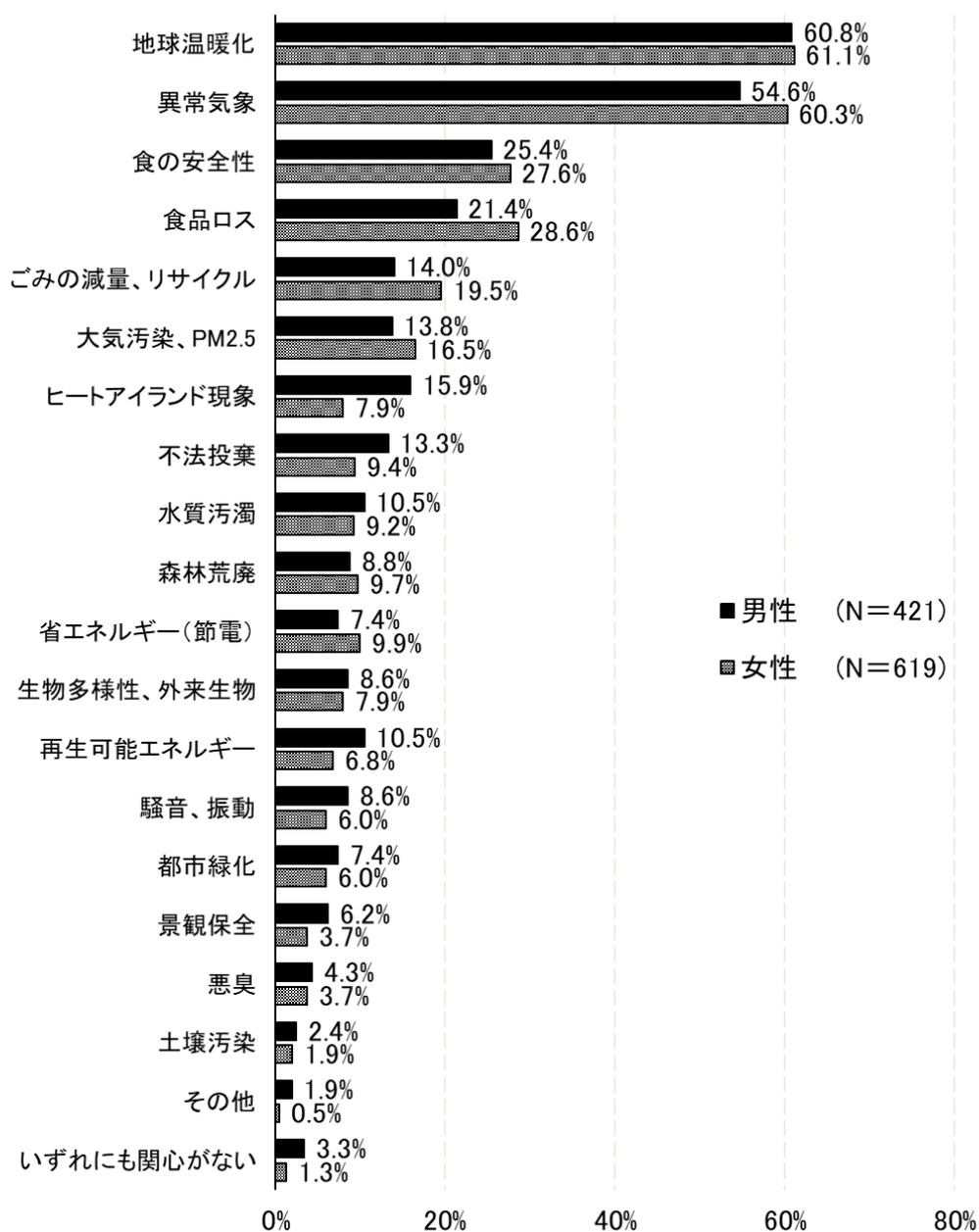


図 63 Q28 環境に関する問題への関心度（複数回答・男女別）

Q28 の環境に関する問題への関心度に関して、年代別で見ると、「食品ロス」は年代で差があり、30代が 34.3%と最も高く、反対に 60代が 18.6%と最も低い（図 64）。

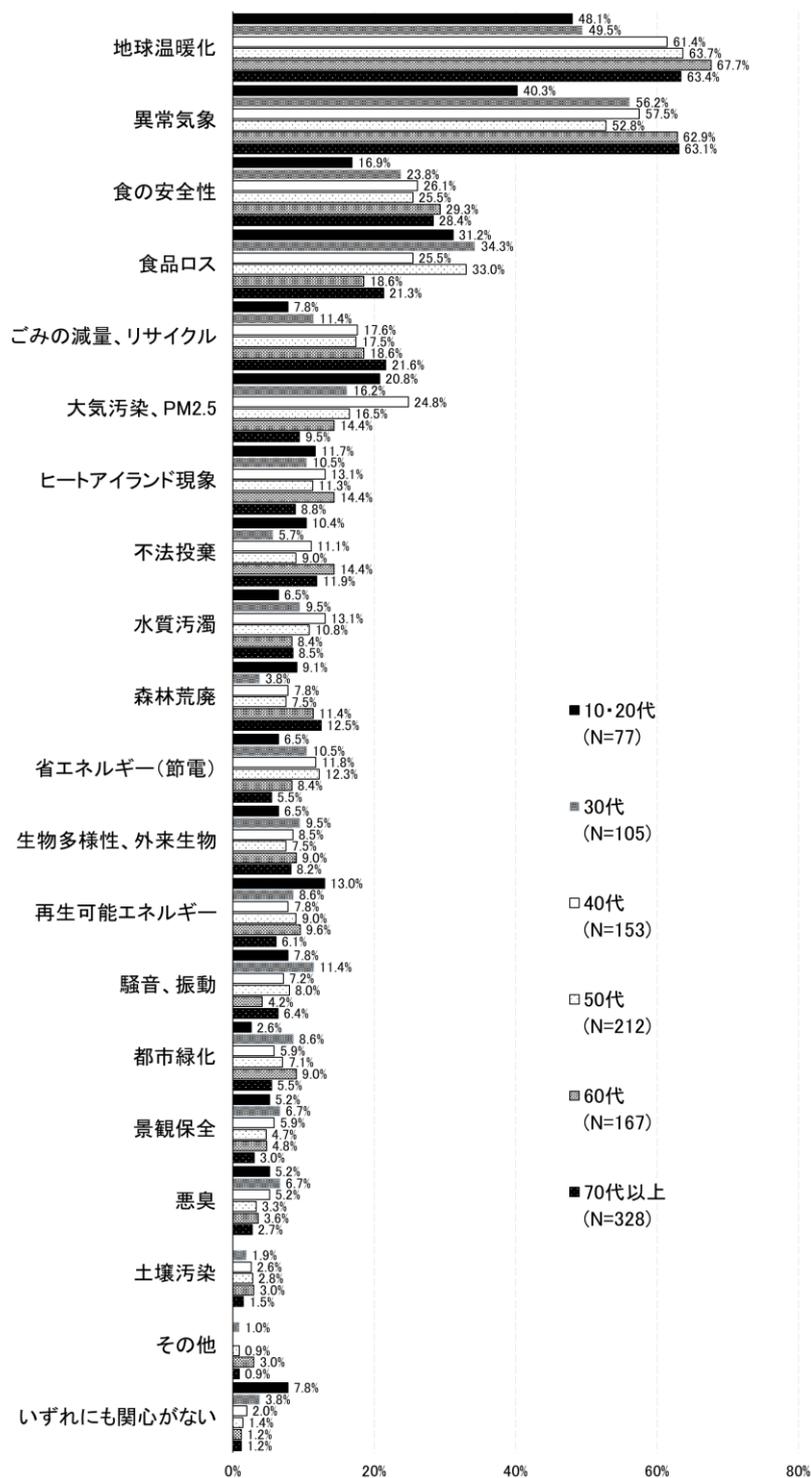


図 64 Q28 環境に関する問題への関心度（複数回答・年代別）

Q29A の高槻市には身近な自然環境とのふれあいがあるかに関して、男女別・年代別では 10・20 代を除いて、すべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が 7 割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 50 代が 86.3%と最も高く、反対に 10・20 代が 68.9%と最も低い (図 65)。

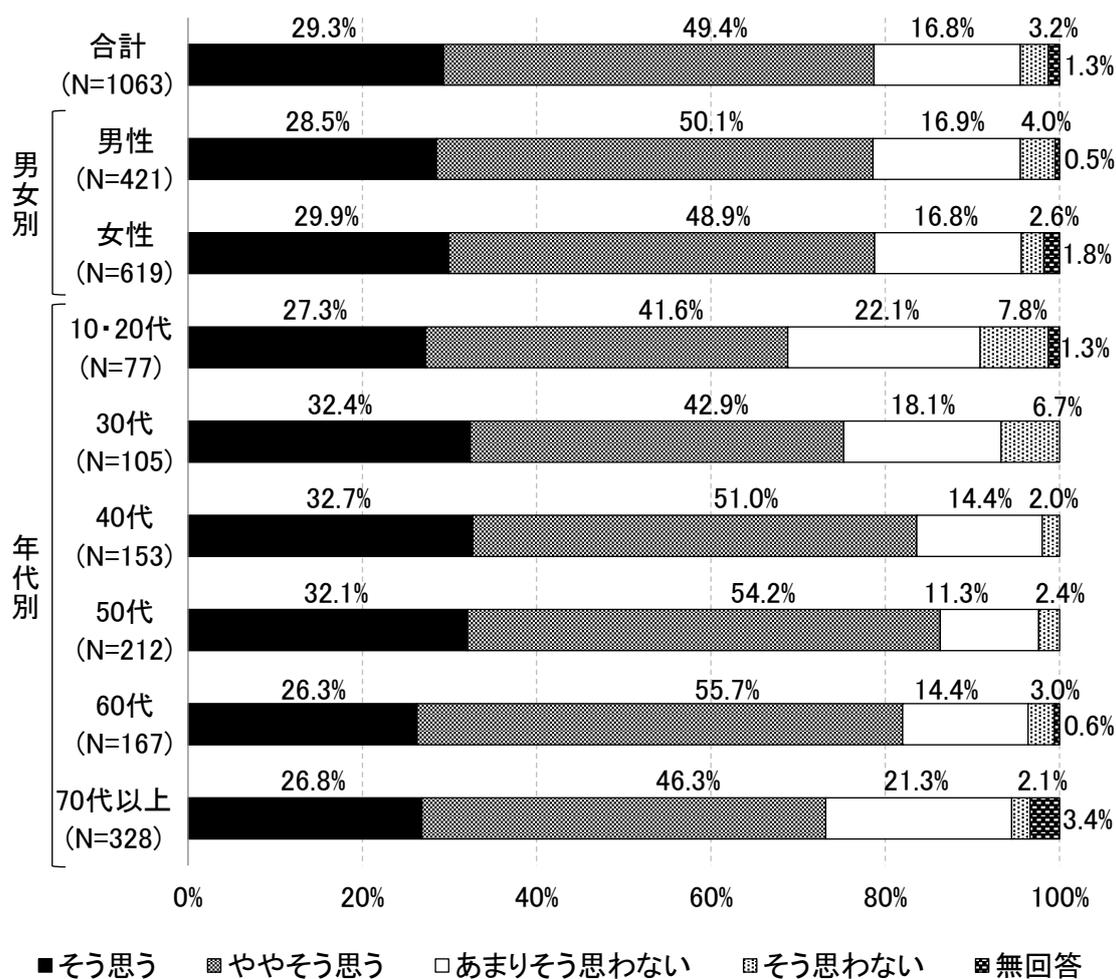


図 65 Q29A 高槻市の環境：身近な自然環境とのふれあいがあるか

Q29Bの高槻市は不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が5割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は50代および70代以上が63.7%と最も高く、反対に30代が59.1%と最も低い(図66)。

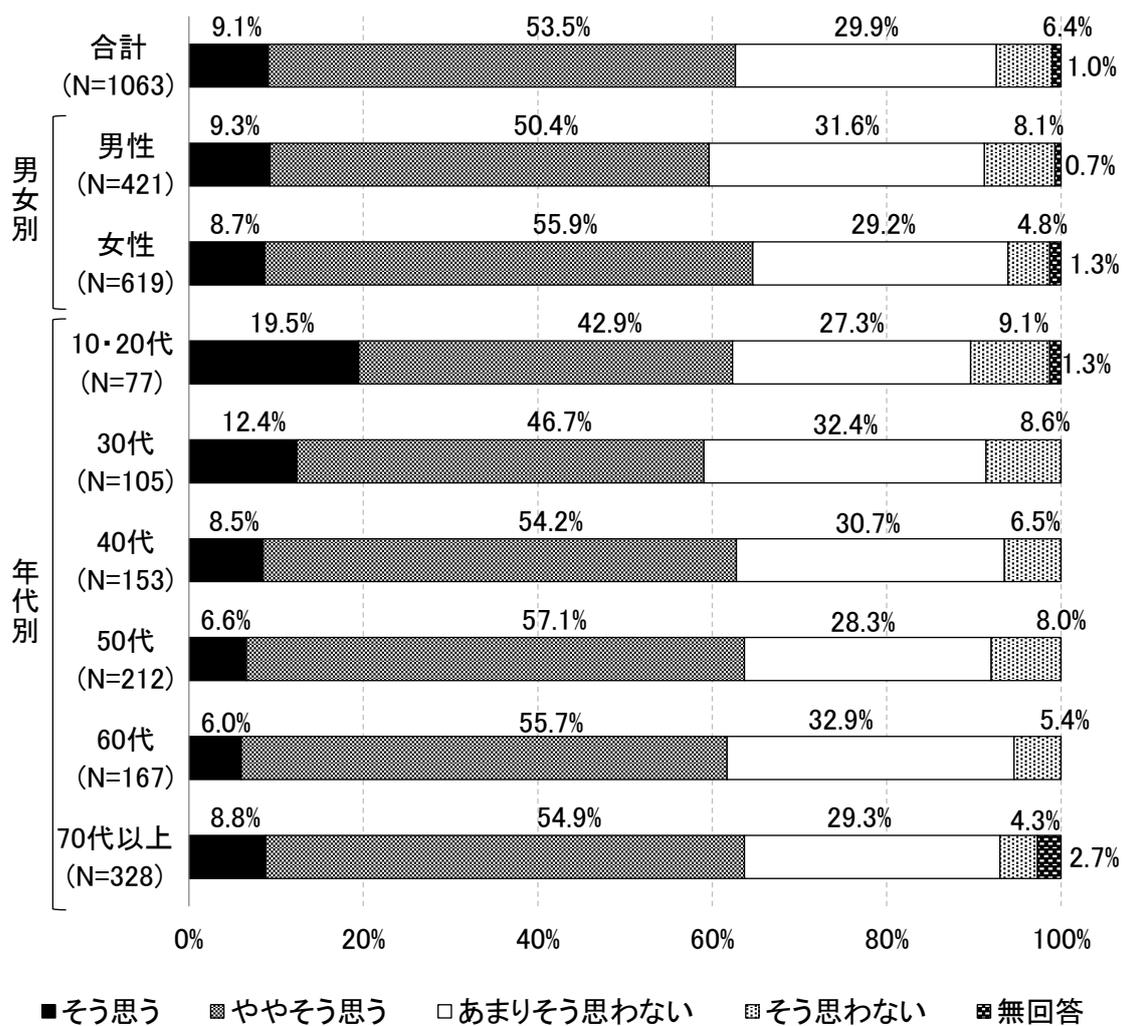


図66 Q29B 高槻市の環境：不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちか

Q29C の高槻市は良好な環境づくりを目指した活動が豊富かに関して、年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 50 代以上が 54.8%と最も高く、反対に 30 代が 40.0%と最も低い（図 67）。

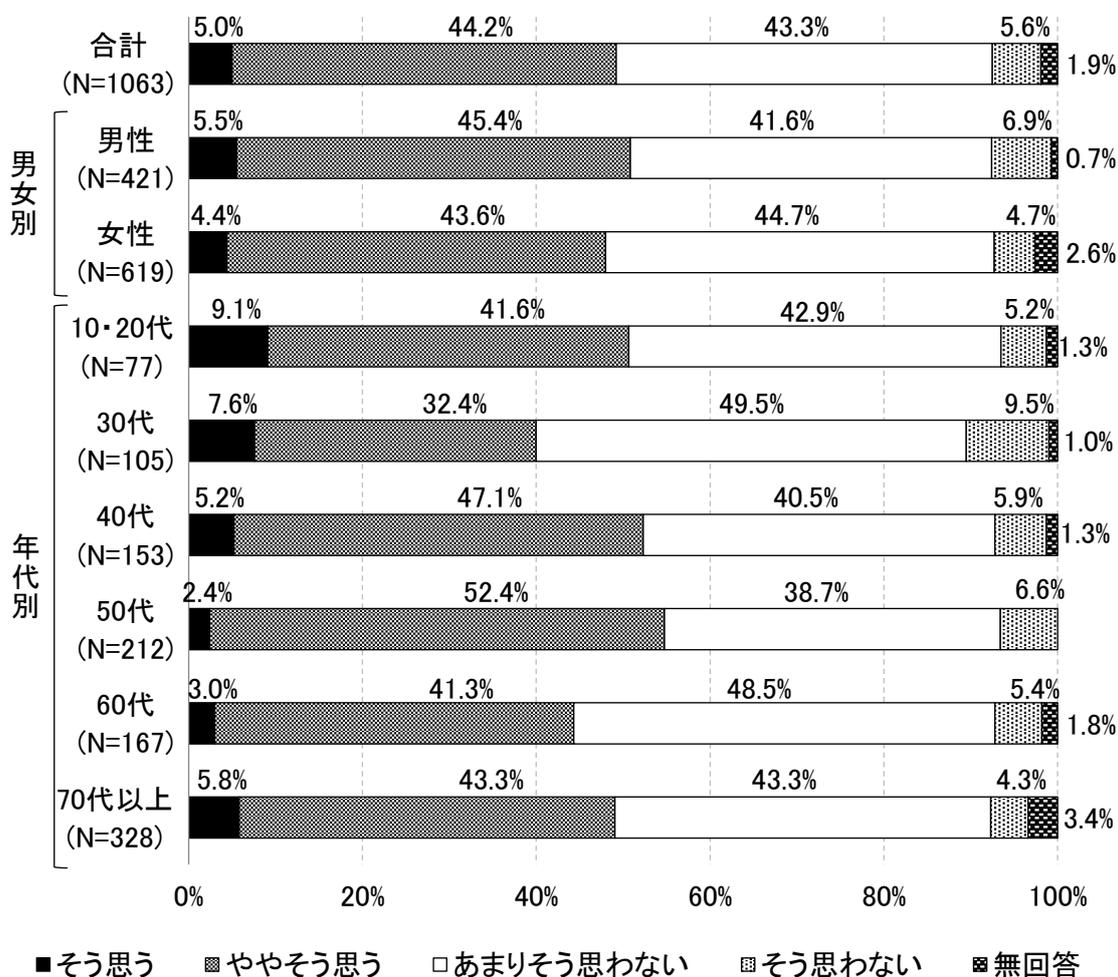


図 67 Q29C 高槻市の環境：良好な環境づくりを目指した活動が豊富か

Q29D の高槻市は環境活動に関する情報や呼びかけが十分かに関して、男女別・年代別では30代を除いて、すべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が3割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は10・20代以上が37.7%と最も高く、反対に30代が21.0%と最も低い（図 68）。

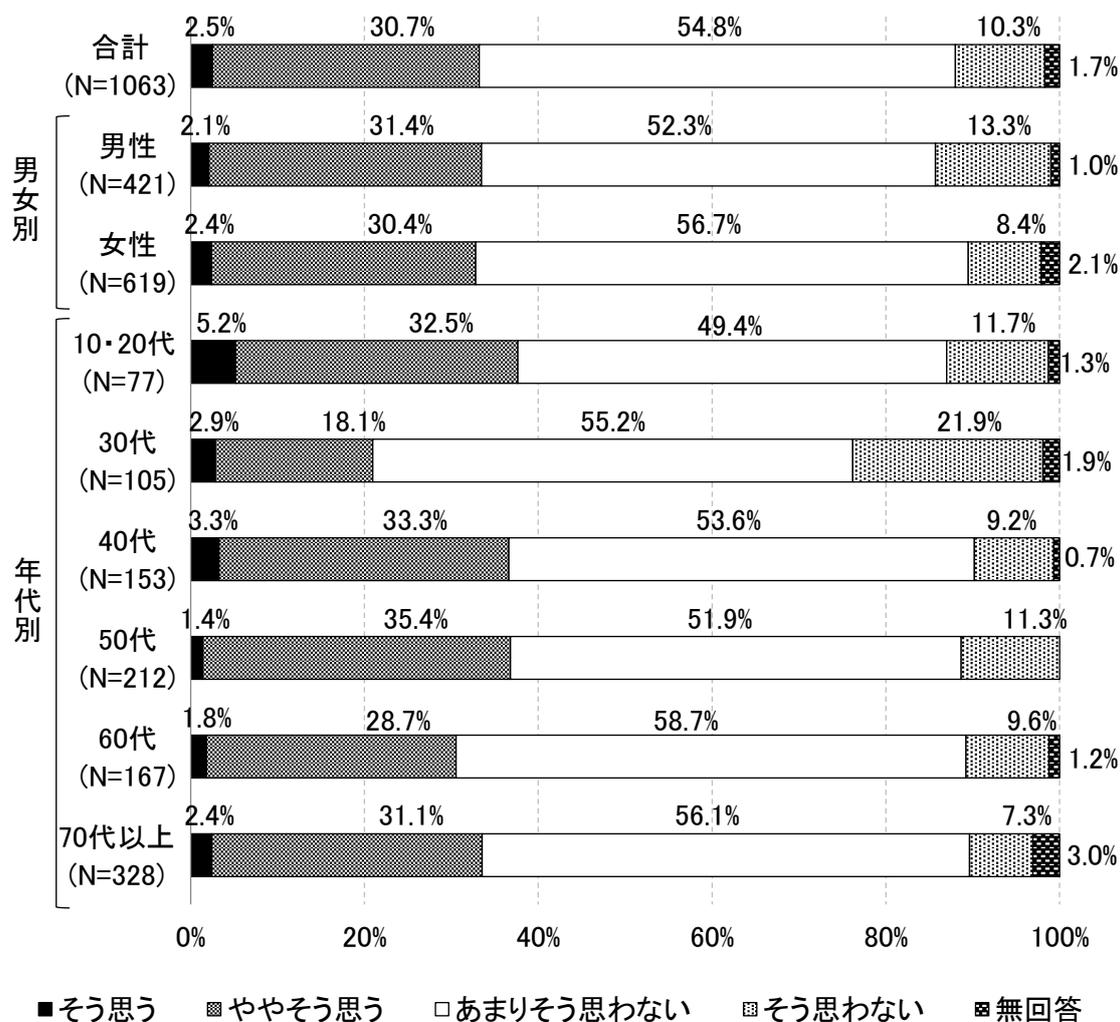


図 68 Q29D 高槻市の環境：環境活動に関する情報や呼びかけが十分か

Q30の自宅周辺（徒歩圏内）でみどりを感じる場所に関して、「公園・緑地」が65.5%で最も高く、「河川など水辺」が34.4%と続く（図69）。

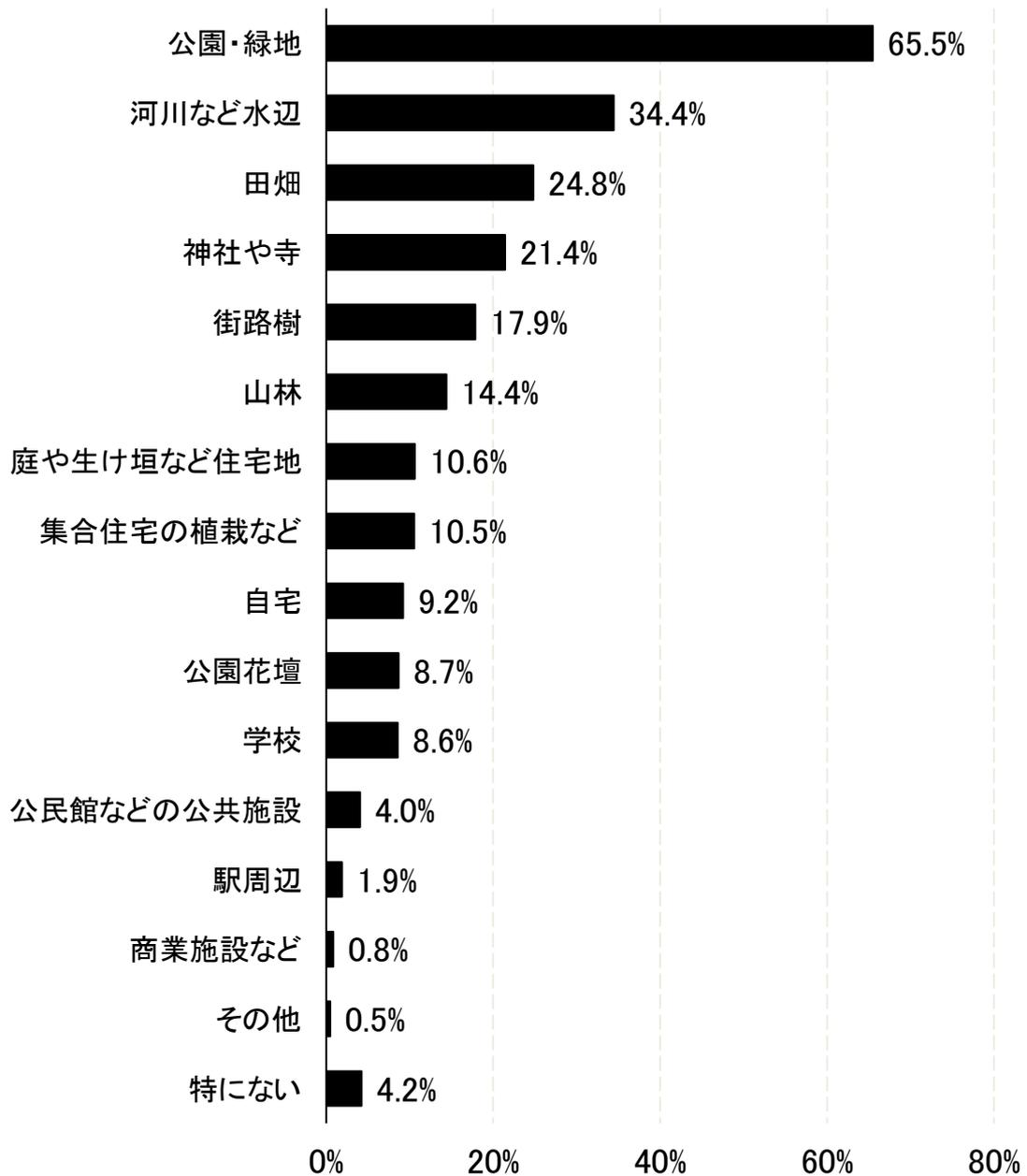


図69 Q30 みどりを感じる場所（複数回答・全体 N=1063）

Q30 の自宅周辺（徒歩圏内）でみどりを感じる場所に関して、男女別で見ると、「山林」は男女差があり、女性よりも男性の方が 7.7 ポイント高い。続いて、「河川など水辺」は女性よりも男性の方が 5.7 ポイント高い（図 70）。

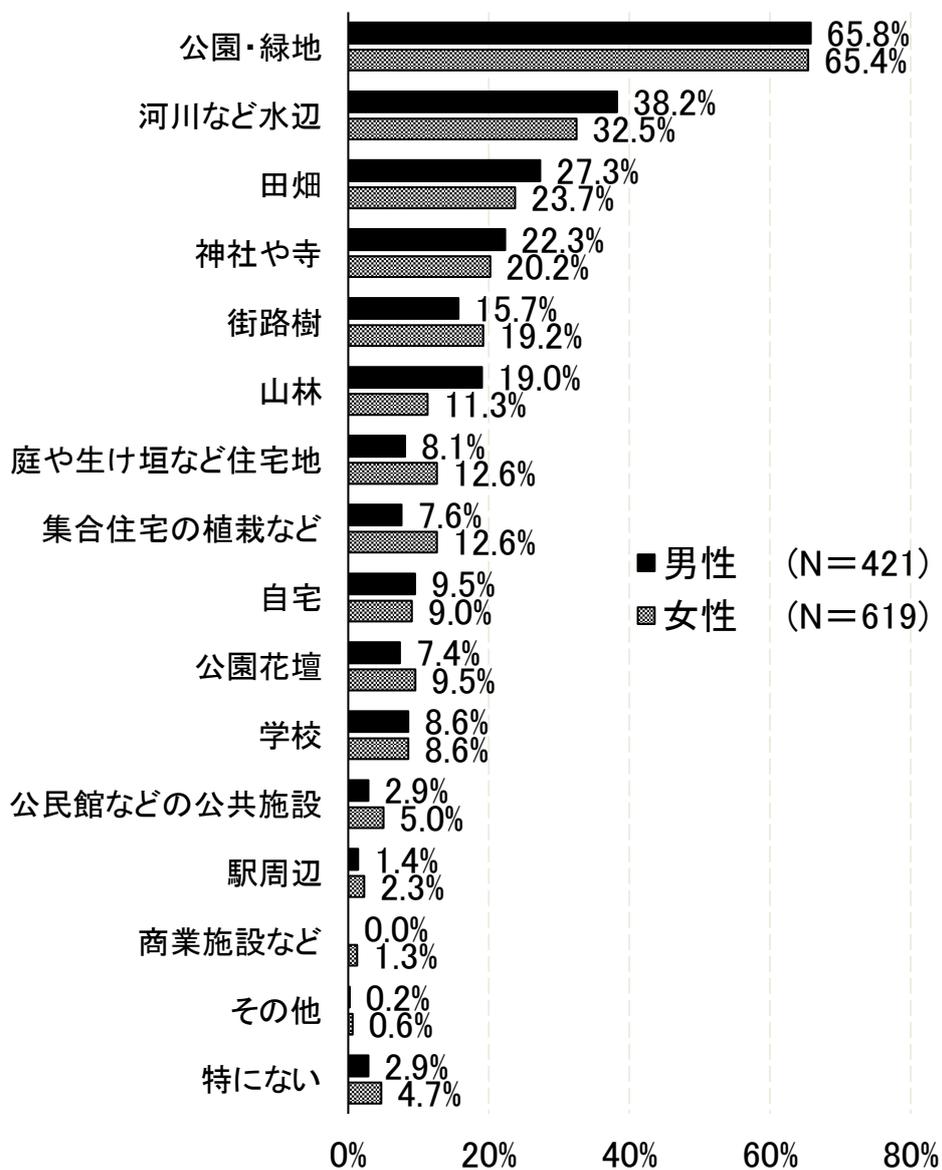


図 70 Q30 みどりを感じる場所（複数回答・男女別）

Q30の自宅周辺（徒歩圏内）でみどりを感じる場所に関して、年代別で見ると、「公園・緑地」は年代で差があり、30代が73.3%と最も高く、反対に10・20代は57.1%と最も低い（図71）。

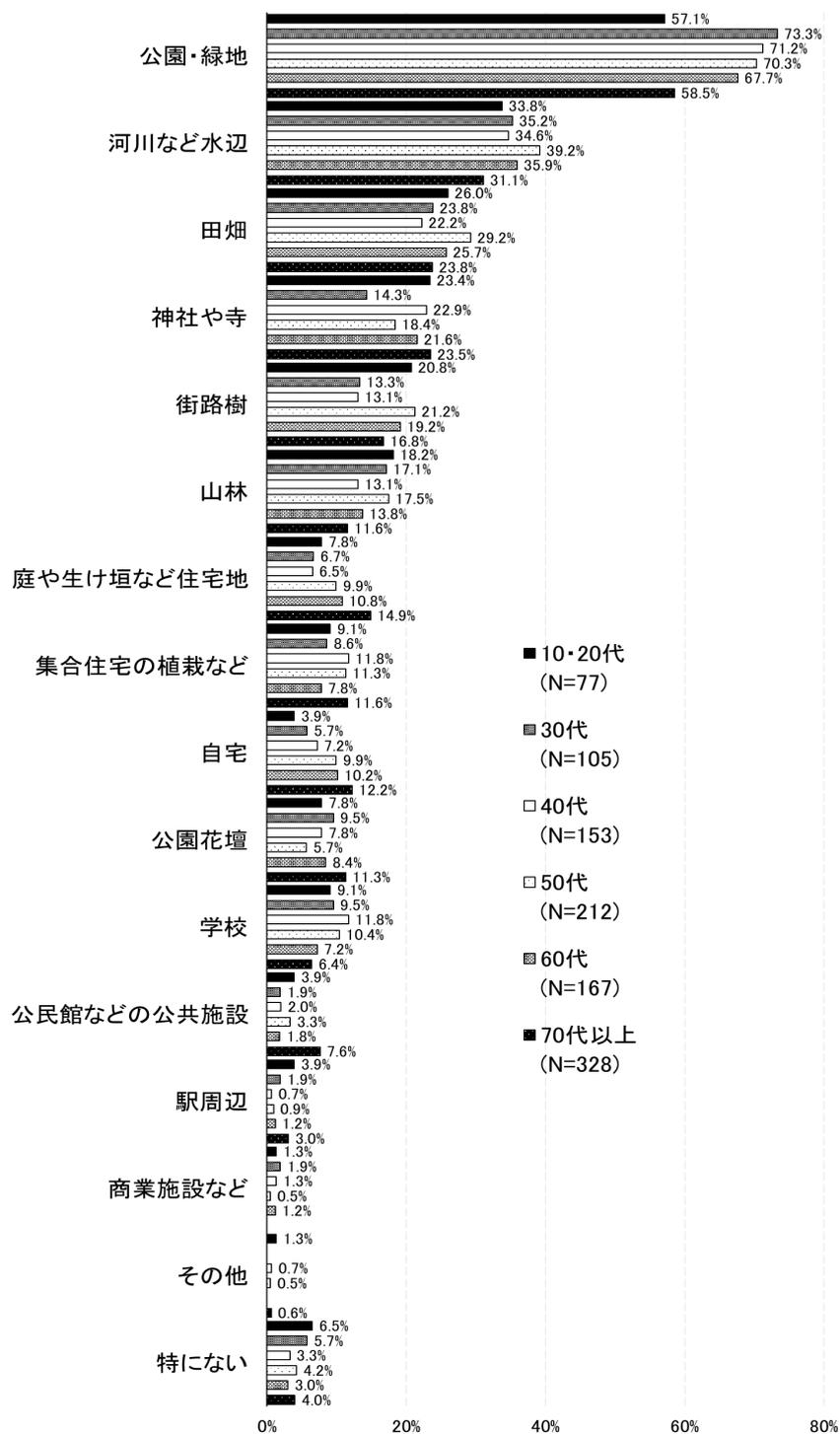
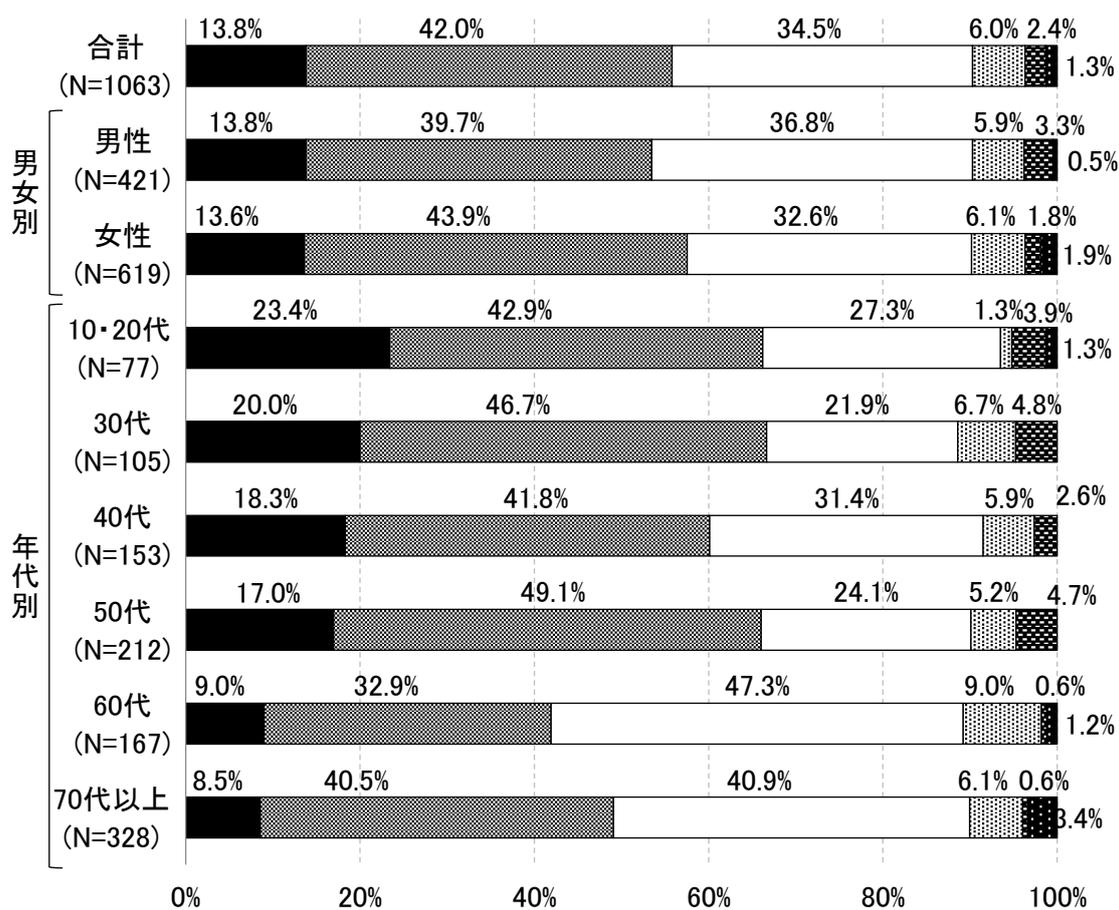


図71 Q30 みどりを感じる場所（複数回答・年代別）

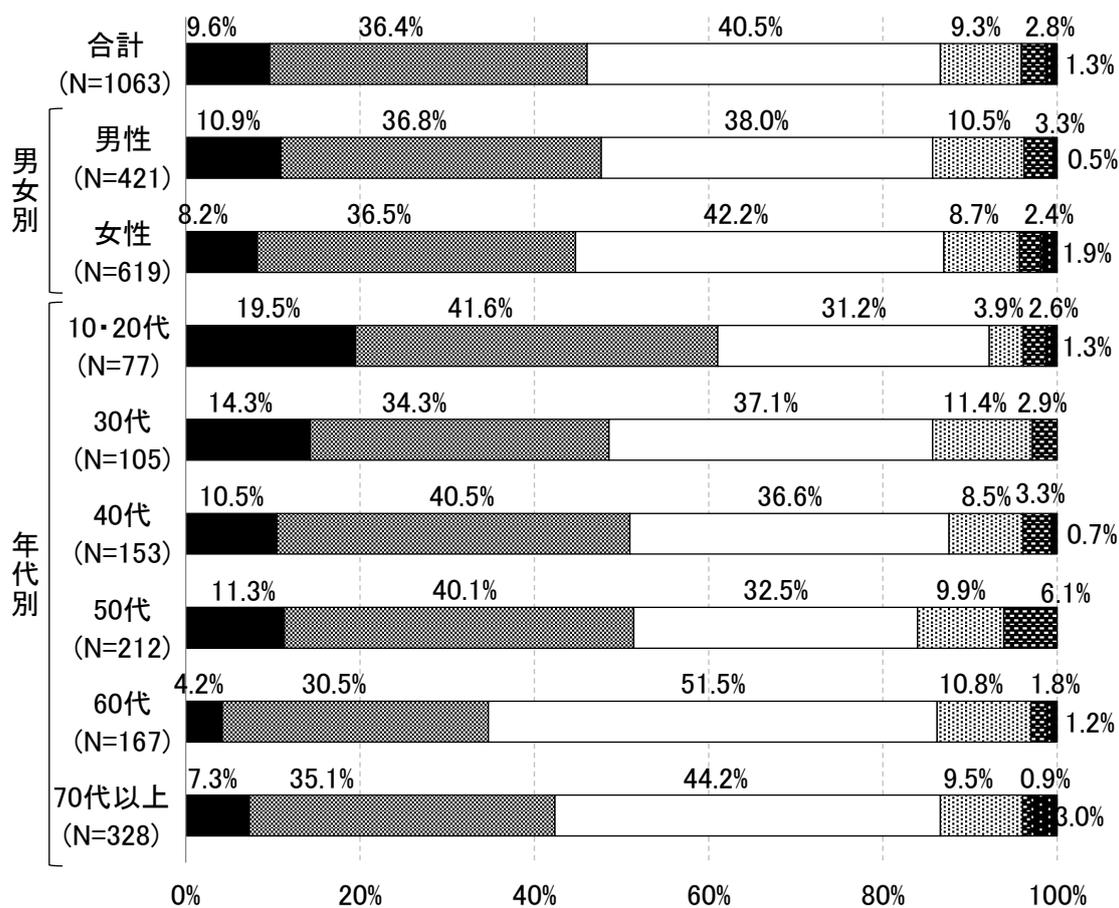
Q31 の高槻市は子育て環境が整っているまちだと思うかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が4割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は30代が66.7%と最も高く、反対に60代が41.9%と最も低い（図72）。



■ そう思う ▨ ややそう思う □ どちらともいえない ▩ あまりそう思わない ▤ そう思わない ■ 無回答

図72 Q31 高槻市は子育て環境が整っているまちだと思うか

Q32 の高槻市は教育環境が整っているまちだと思うかに関して、男女別で見ると、男女ともに「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は4割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は10・20代が61.1%と最も高く、反対に60代が34.7%と最も低い(図73)。



■そう思う ■ややそう思う □どちらともいえない ■あまりそう思わない ■そう思わない ■無回答

図73 Q32 高槻市は教育環境が整っているまちだと思うか

Q33 の高槻市に地域ブランドがあると思うかに関して、男女別で見ると、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合が男性で 44.6%、女性が 37.3%であり、男性の方が 7.3 ポイントほど高い。年代別で見ると、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合は 30 代が 43.1%と最も高い。反対に、50 代と 60 代は 37.7%と最も低い（図 74）。

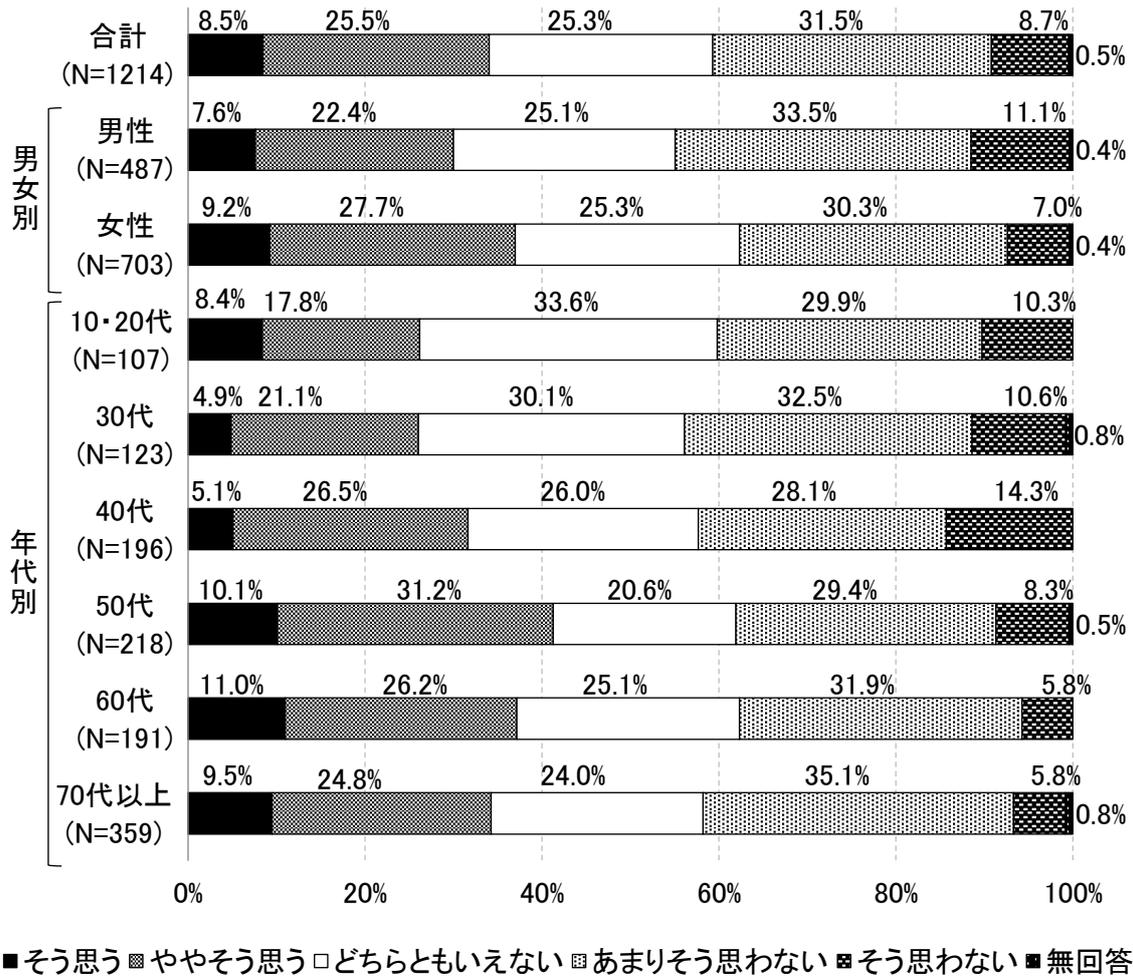
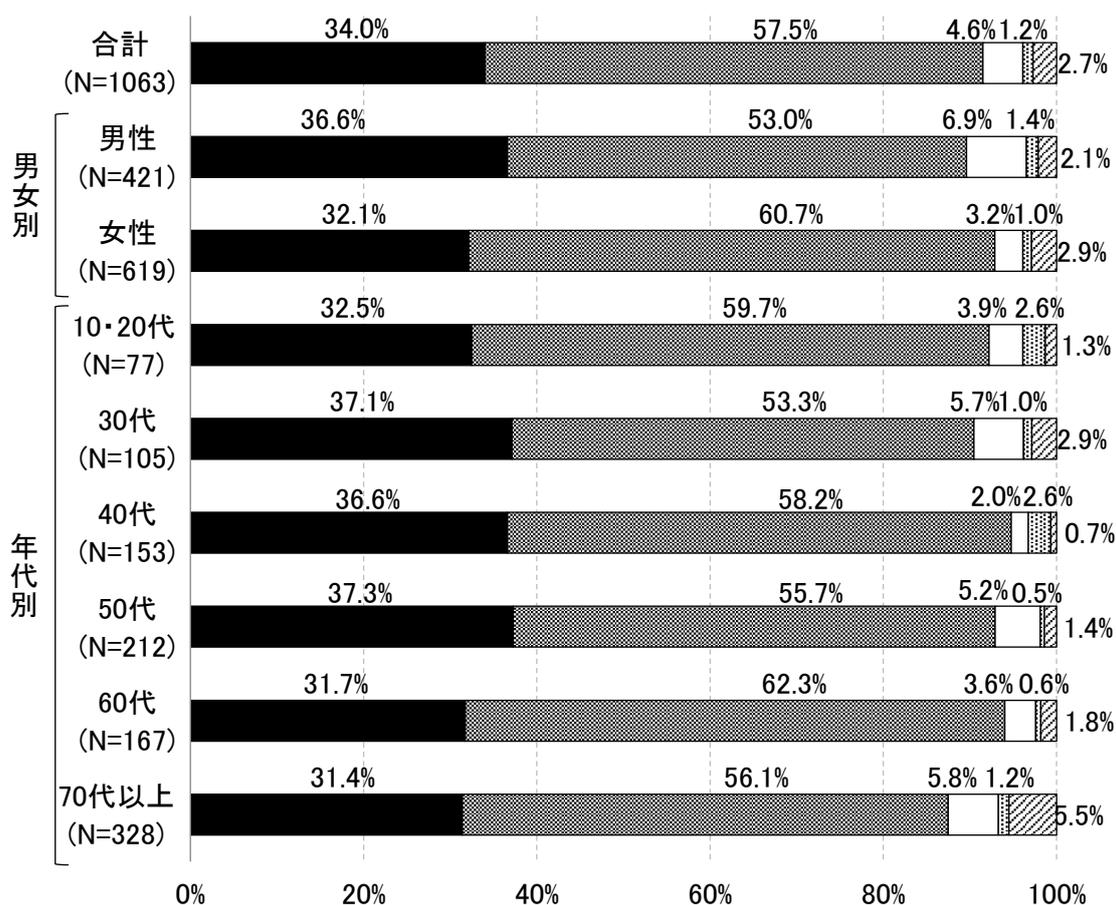


図 74 Q33 高槻市に地域ブランドがあると思うか

Q34の「食品ロス」が社会的に問題となっていることを知っているかに関して、男女別で見ると、「よく知っている」と回答した人の割合は、男性で36.6%、女性で32.1%と、女性よりも男性の方が4.5ポイント高い。年代別で見ると、「よく知っている」と回答した人の割合は50代が37.3%と最も高い。反対に、70代と60代は31.4%と最も低い（図75）。



■よく知っている ■ある程度知っている □あまり知らない ▨まったく知らない ▩無回答

図75 Q34 「食品ロス」が社会的に問題となっていることを知っているか

Q35の「食品ロス」を減らすために取り組んでいることにはあるかに関して、「残さずに食べる」が72.0%で最も高く、「賞味期限」を過ぎてもすぐに捨てるのではなく、自分で食べられるか判断する」が65.1%と続く（図76）。

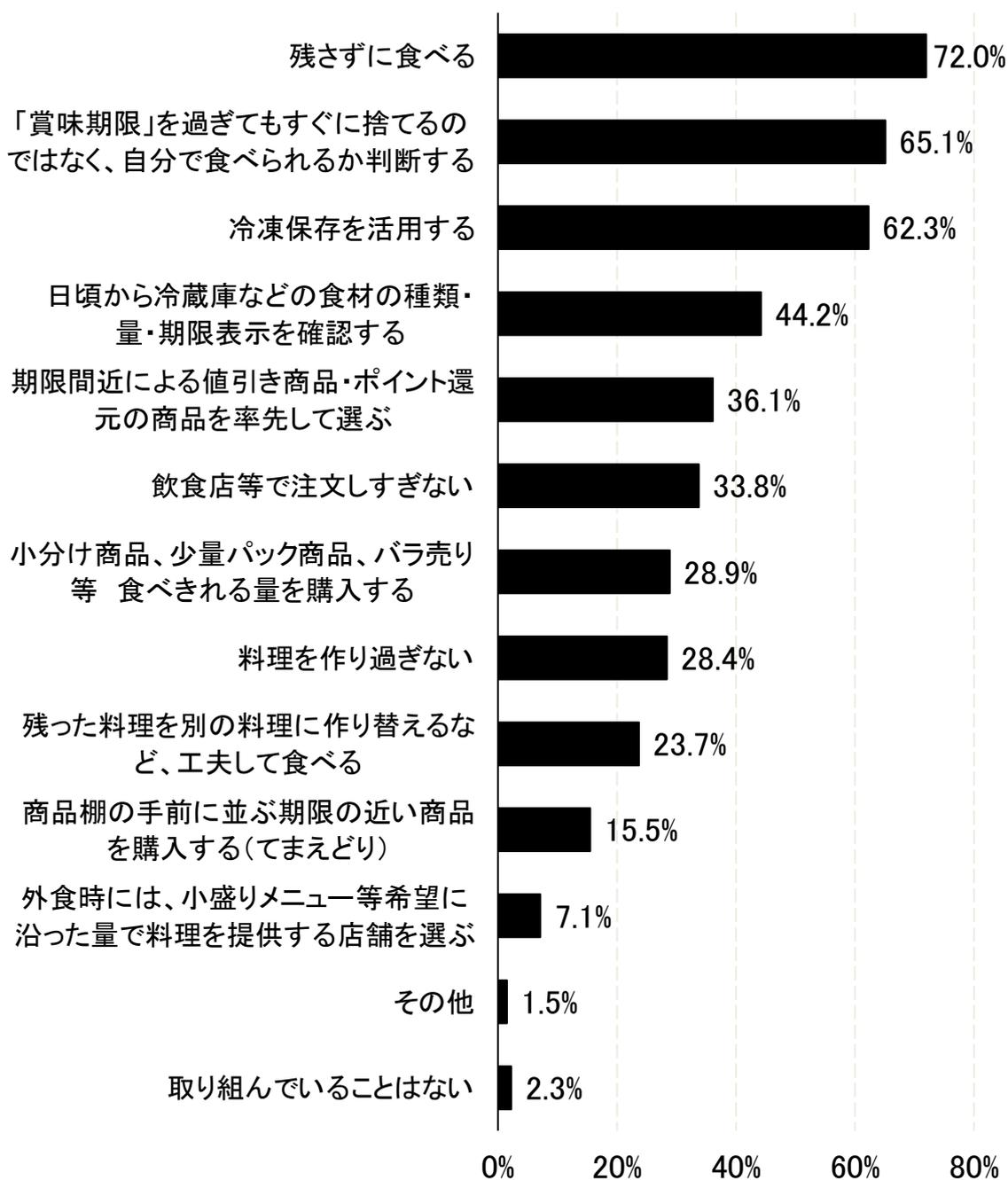


図 76 Q35 「食品ロス」を減らすために取り組んでいることはあるか
(複数回答・全体 N=1063)

Q35の「食品ロス」を減らすために取り組んでいることはあるかに関して、男女別で見ると、「冷凍保存を活用する」は男女で差があり、男性よりも女性の方が18.9ポイント高い(図77)。

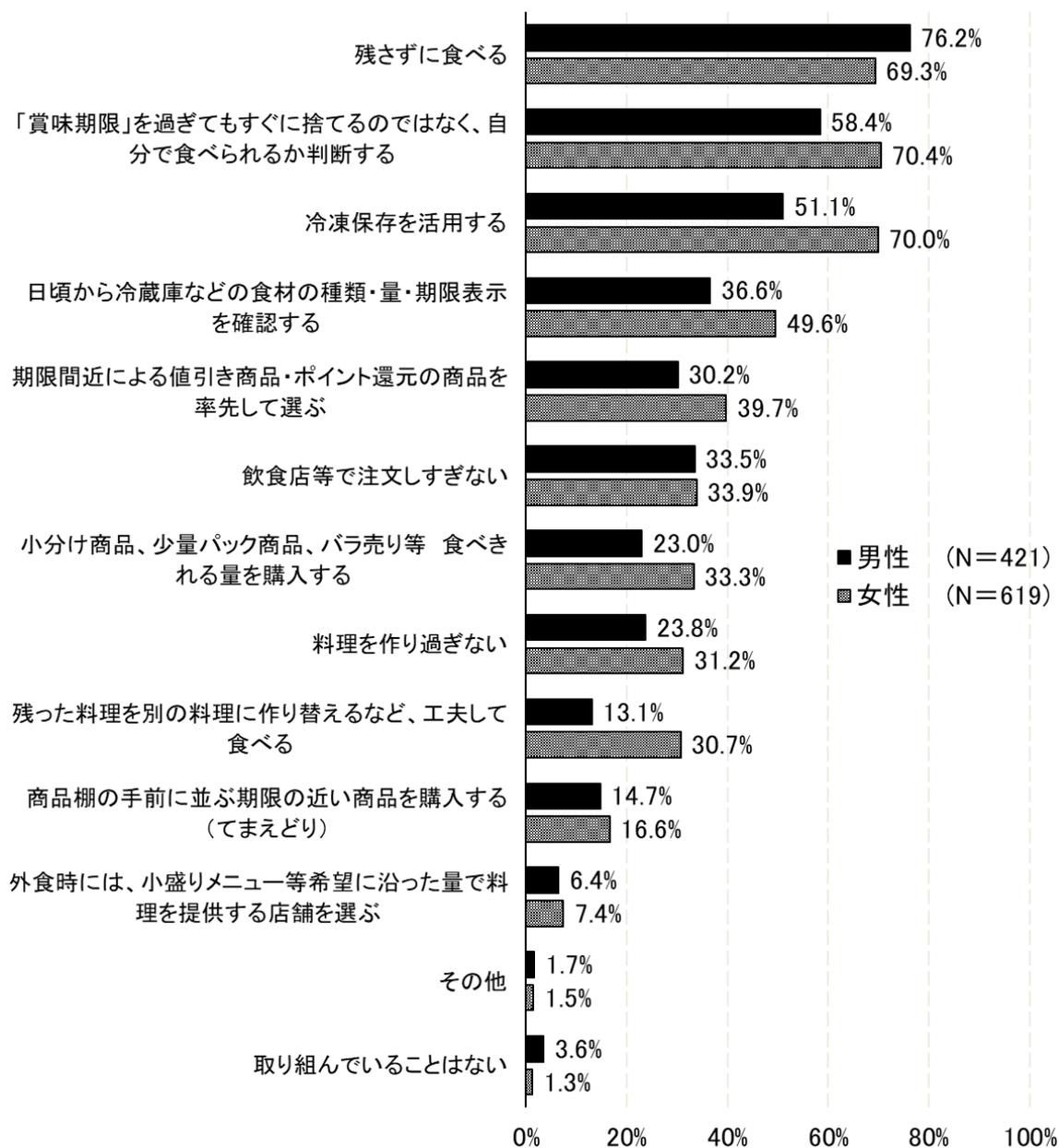


図77 Q35 「食品ロス」を減らすために取り組んでいることはあるか (複数回答・男女別)

Q35の「食品ロス」を減らすために取り組んでいることはあるかに関して、年代別で見ると、「小分け商品、少量パック商品、バラ売り等 食べきれる量を購入する」は年代で差があり、70代以上が36.9%と最も高く、反対に50代は21.7%と最も低い（図78）。

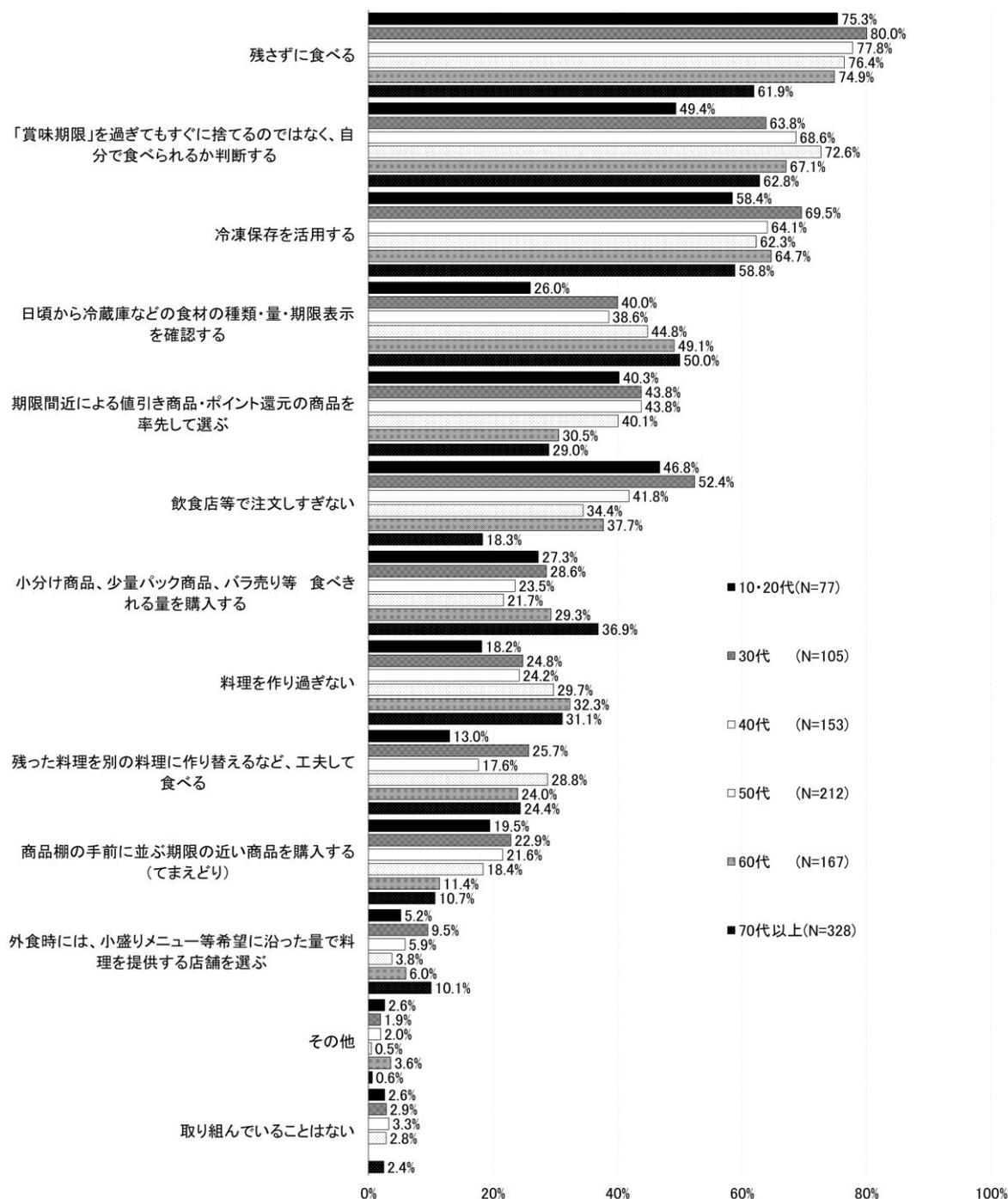


図78 Q35 「食品ロス」を減らすために取り組んでいることはあるか
(複数回答・年代別)

Q36の「生物多様性」という言葉とその意味を知っているかに関して、男女別・年代別のすべての層で「言葉も意味も知っている」または「言葉は知っているが意味は知らない」と回答した人が合わせて5割以上である。年代別で見ると、「言葉も意味も知っている」と回答した人の割合は30代が34.3%と最も高く、反対に70代以上が15.2%と最も低い(図79)。

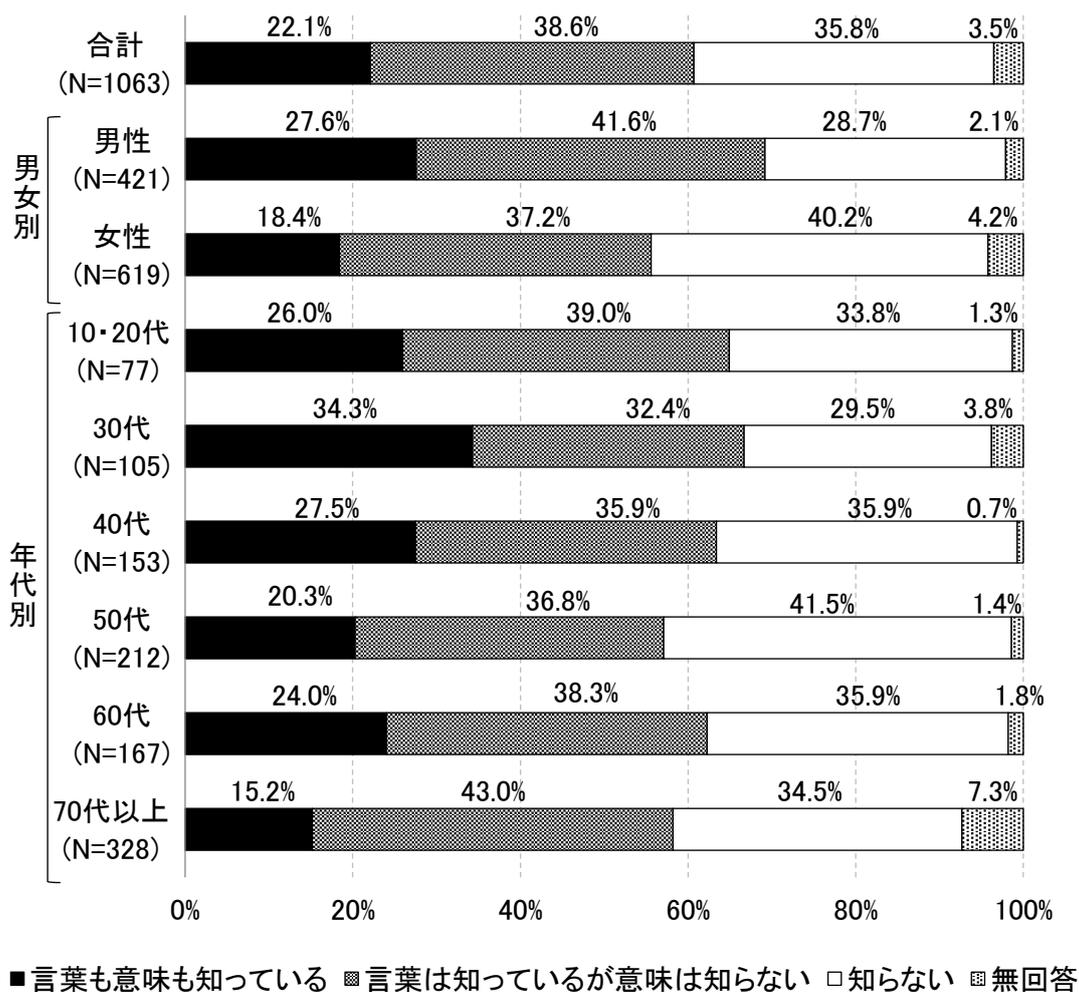


図 79 Q36 「生物多様性」という言葉とその意味を知っているか

Q37の「生物多様性」の保全に向けた取り組みをしたかに関して、「取り込んだことはない」が83.6%で最も高く、「日常生活で取り組んだ」が6.0%と続く（図80）。

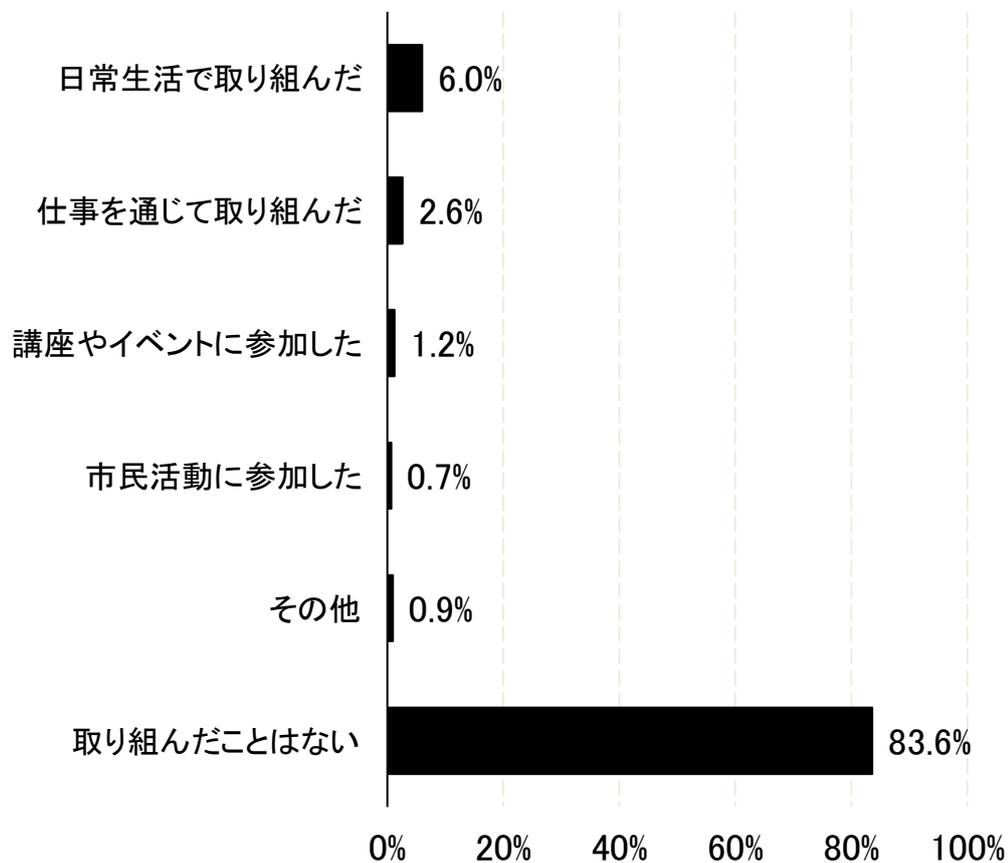


図80 Q37 「生物多様性」の保全に向けた取り組みをしたか
(複数回答・全体 N=1063)

Q37の「生物多様性」の保全に向けた取り組みをしたかに関して、男女別で見ると、「仕事を通じて取り組んだ」は男女で差があり、女性よりも男性の方が3.0ポイント高い(図81)。

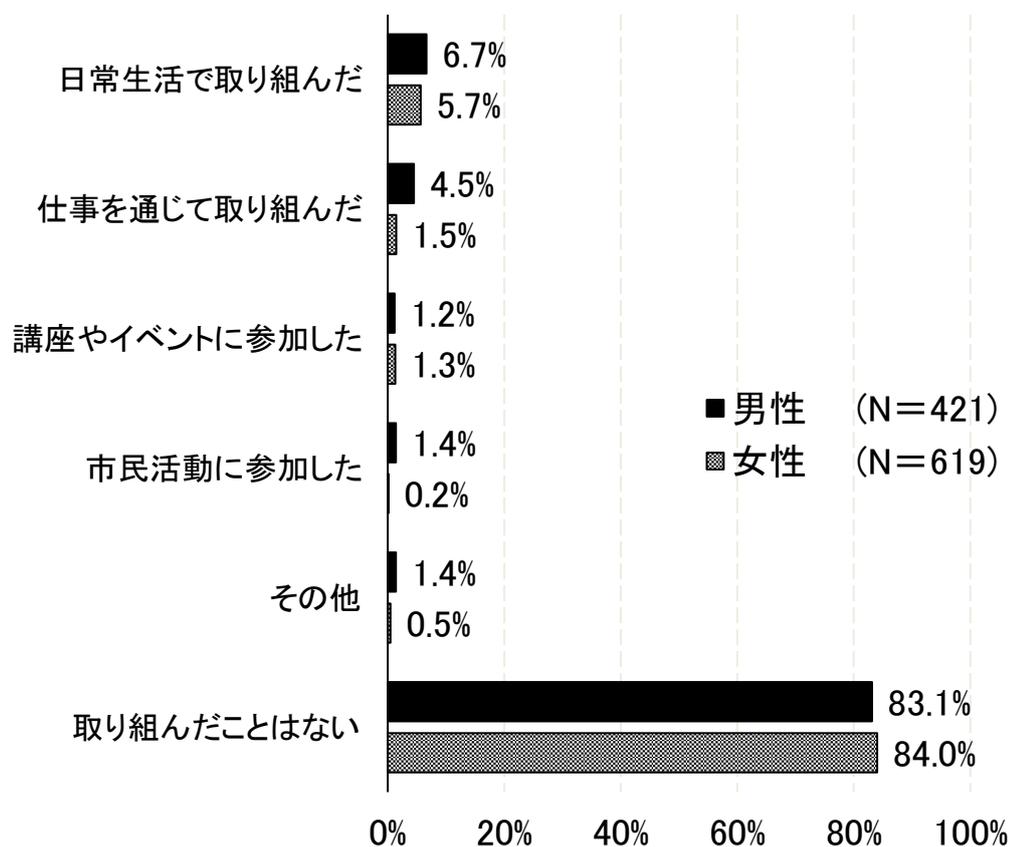


図 81 Q37 「生物多様性」の保全に向けた取り組みをしたか
(複数回答・男女別)

Q37の「生物多様性」の保全に向けた取り組みをしたかに関して、年代別で見ると、「日常生活で取り組んだ」は年代で差があり、40代が9.8%と最も高く、反対に50代は3.8%と最も低い(図82)。

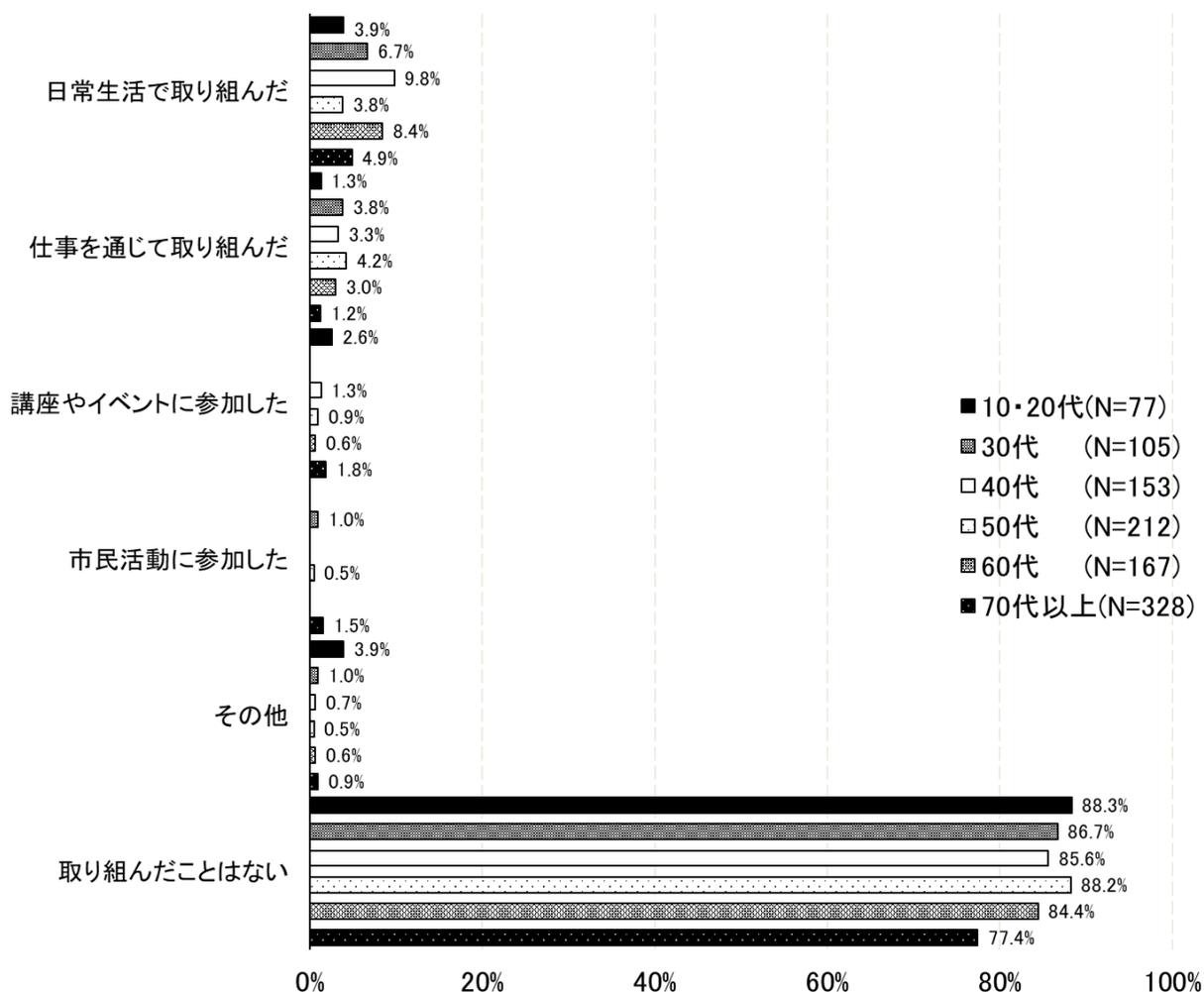


図 82 Q37 「生物多様性」の保全に向けた取り組みをしたか
(複数回答・年代別)

Q38の年間の自殺者数の認知度に関して、男女別・年代別のすべての層で「知っている」と回答した人が6割以上である。年代別で見ると、「知っている」と回答した人の割合は50代が72.6%と最も高く、反対に10・20代が63.6%と最も低い（図83）。

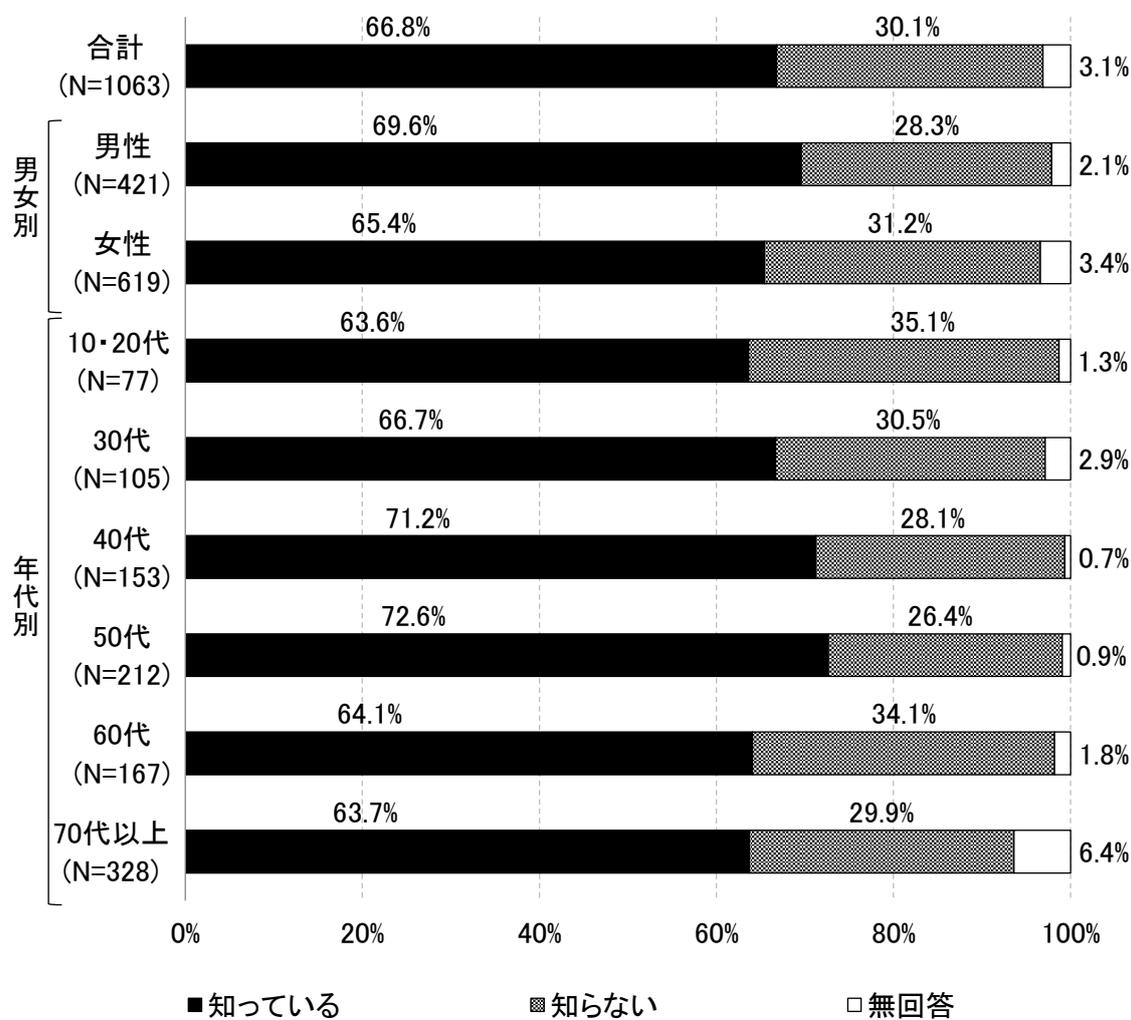


図 83 Q38 年間の自殺者数の認知度

Q39の自殺に関する相談機関の認知度に関して、男女別・年代別で見ると、70代以上を除いて、すべての層で7割以上が「知っている」と回答している。年代別で見ると、「知っている」と回答した人の割合は40代が85.6%と最も高く、反対に70代以上が63.1%と最も低い(図84)。

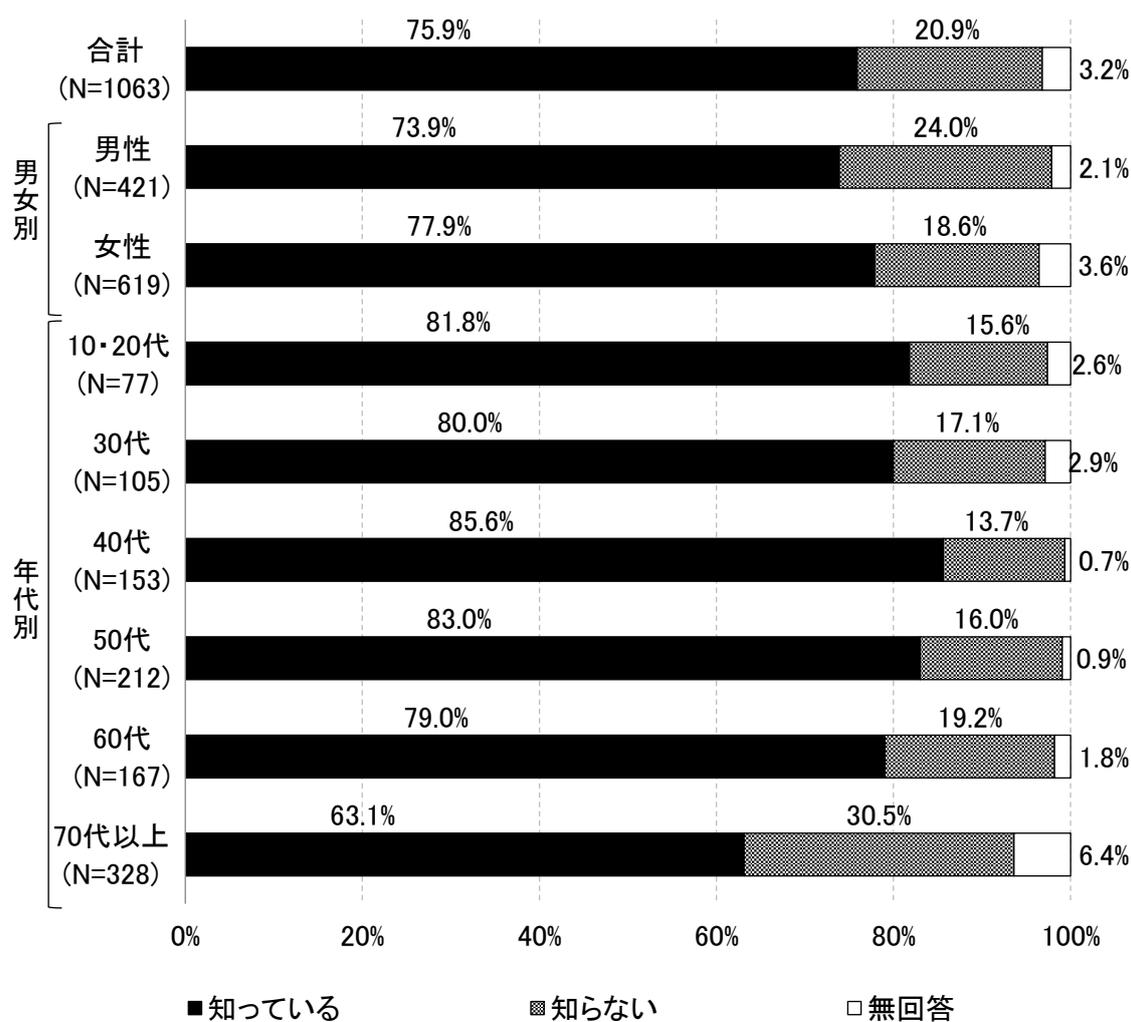


図 84 Q39 自殺に関する相談機関の認知度

Q40 の本気で自殺を考えたことがあるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「ない」と回答した人が7割以上である。年代別で見ると、「ない」と回答した人の割合は60代が83.8%と最も高く、反対に30代が71.4%と最も低い（図 85）。

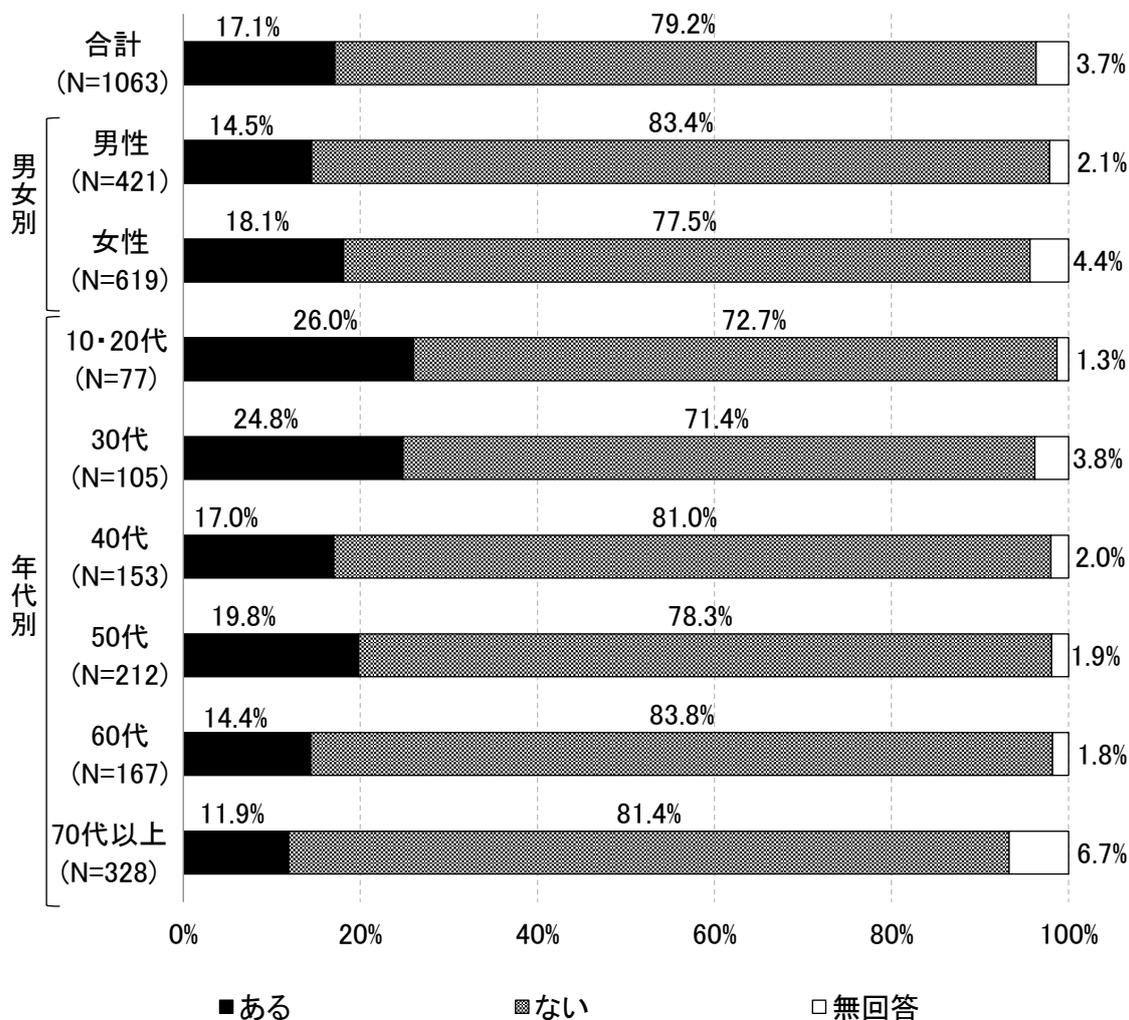


図 85 Q40 本気で自殺を考えたことがあるか

Q41 の自殺願望を聞いたときの対応に関して、「耳を傾けて聞く」が 58.3%で最も高く、「共感を示す」が 43.4%と続く（図 86）。

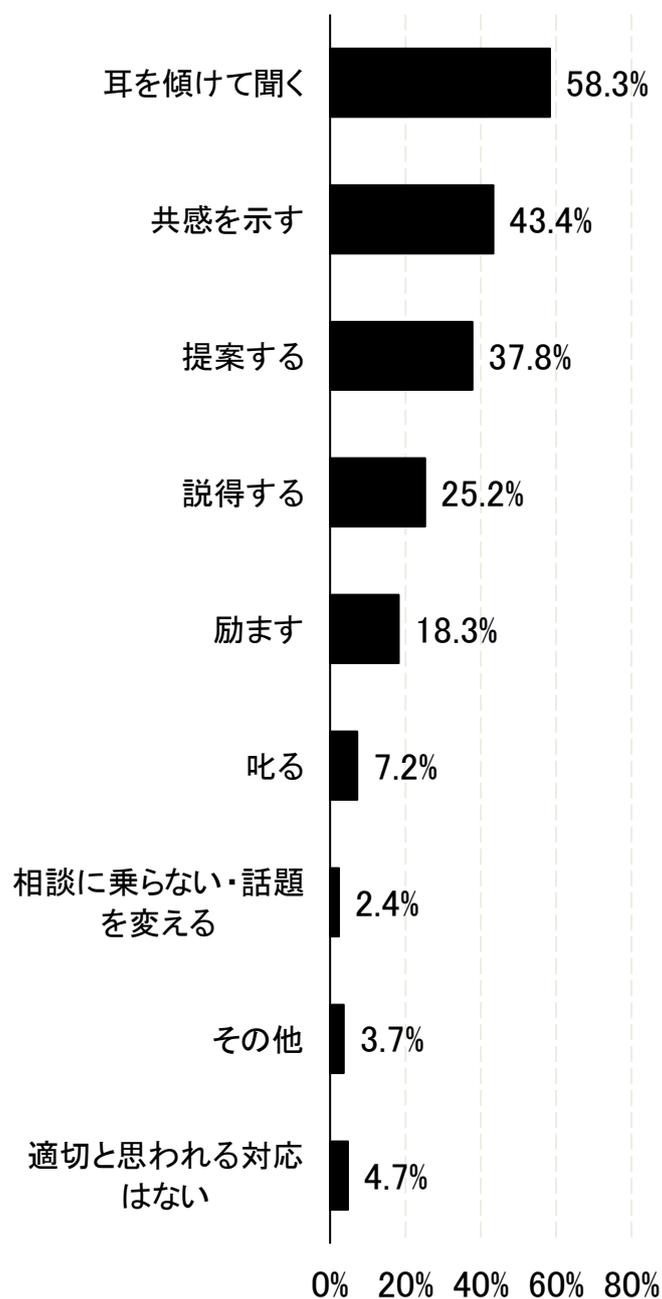


図 86 Q41 自殺願望を聞いたときの対応（複数回答・全体 N=1063）

Q41の自殺願望を聞いたときの対応に関して、男女別で見ると、「共感を示す」は男女で差があり、男性よりも女性の方が16.9ポイント高い(図87)。

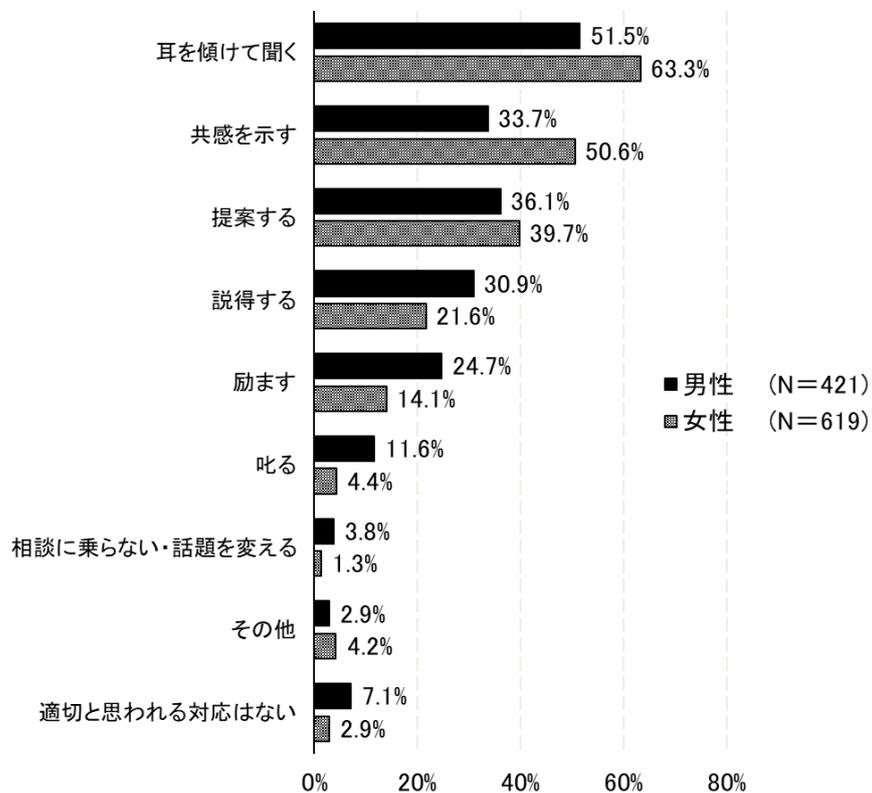


図 87 Q41 自殺願望を聞いたときの対応 (複数回答・男女別)

Q41の自殺願望を聞いたときの対応に関して、年代別で見ると、「説得する」は年代で差があり、70代以上が34.5%と最も高く、反対に30代は11.4%と最も低い(図88)。

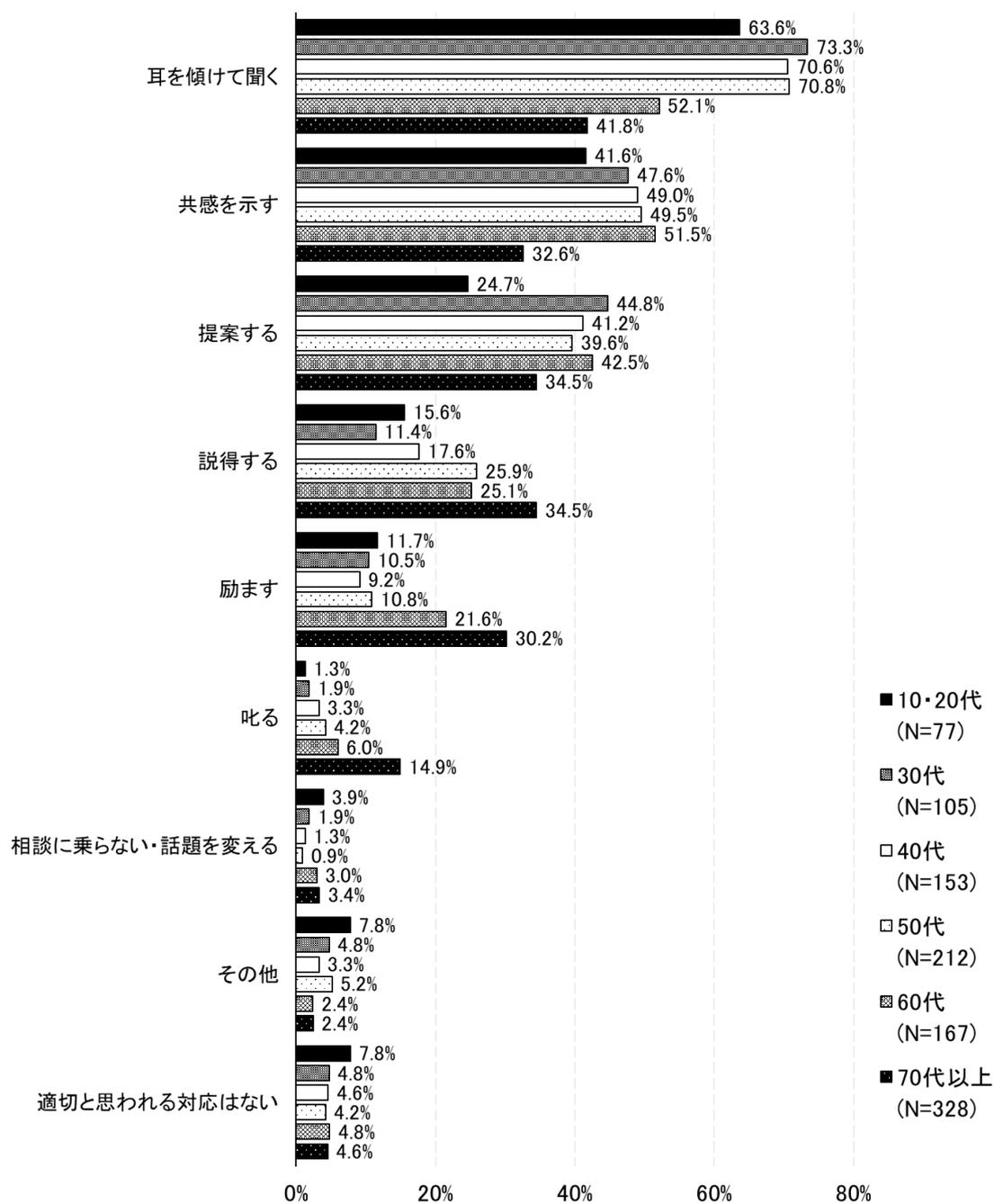


図 88 Q41 自殺願望を聞いたときの対応 (複数回答・年代別)

Q42 の今後求められる自殺対策に関して、「様々な悩みに対応した相談窓口の設置」が 43.7%で最も高く、「子どもの自殺予防」が 40.9%と続く（図 89）。

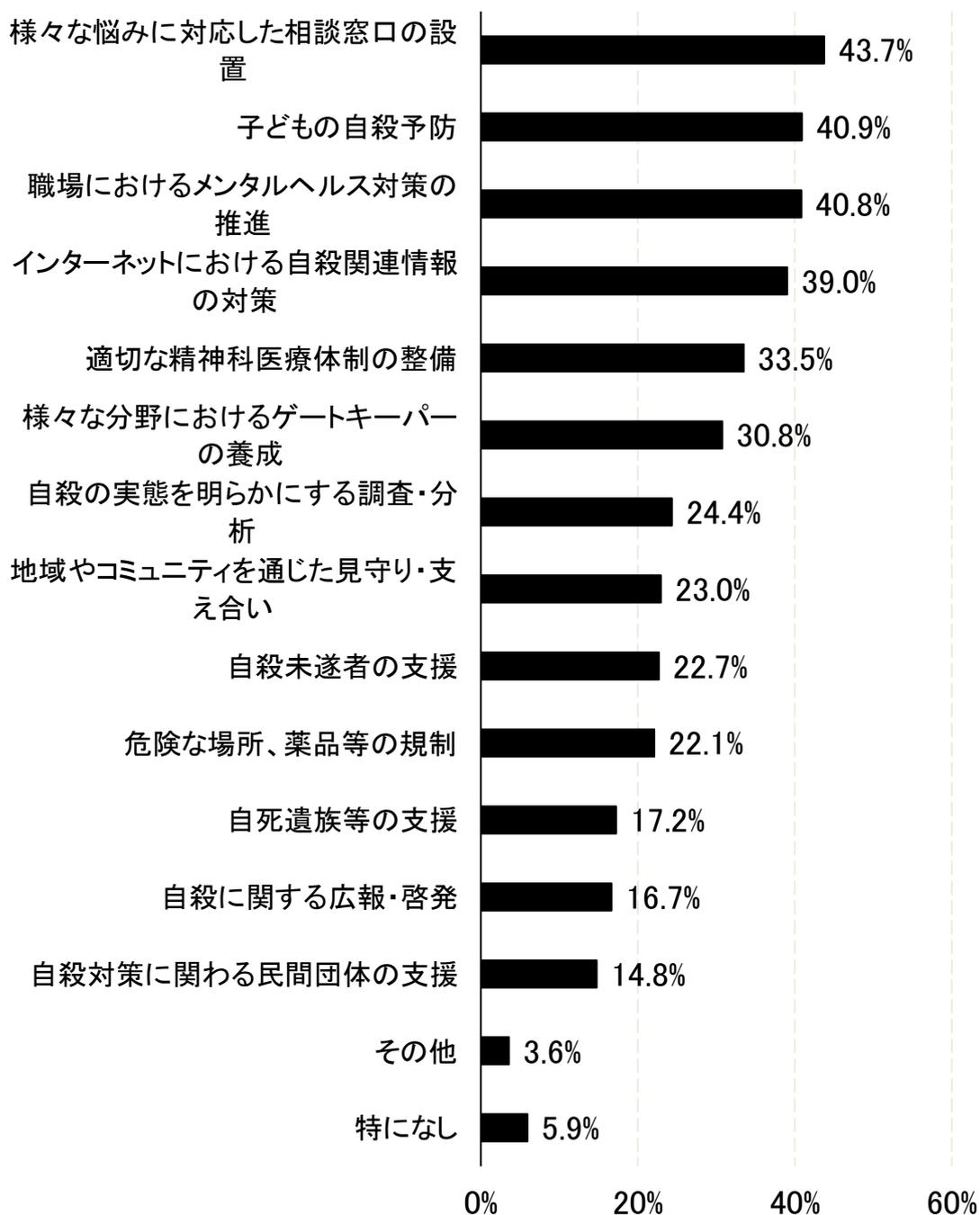


図 89 Q42 今後求められる自殺対策（複数回答・全体 N=1063）

Q42 の今後求められる自殺対策に関して、男女別で見ると、「自殺の実態を明らかにする調査・分析」は男女で差があり、女性よりも男性の方が 8.4 ポイント高い（図 90）。

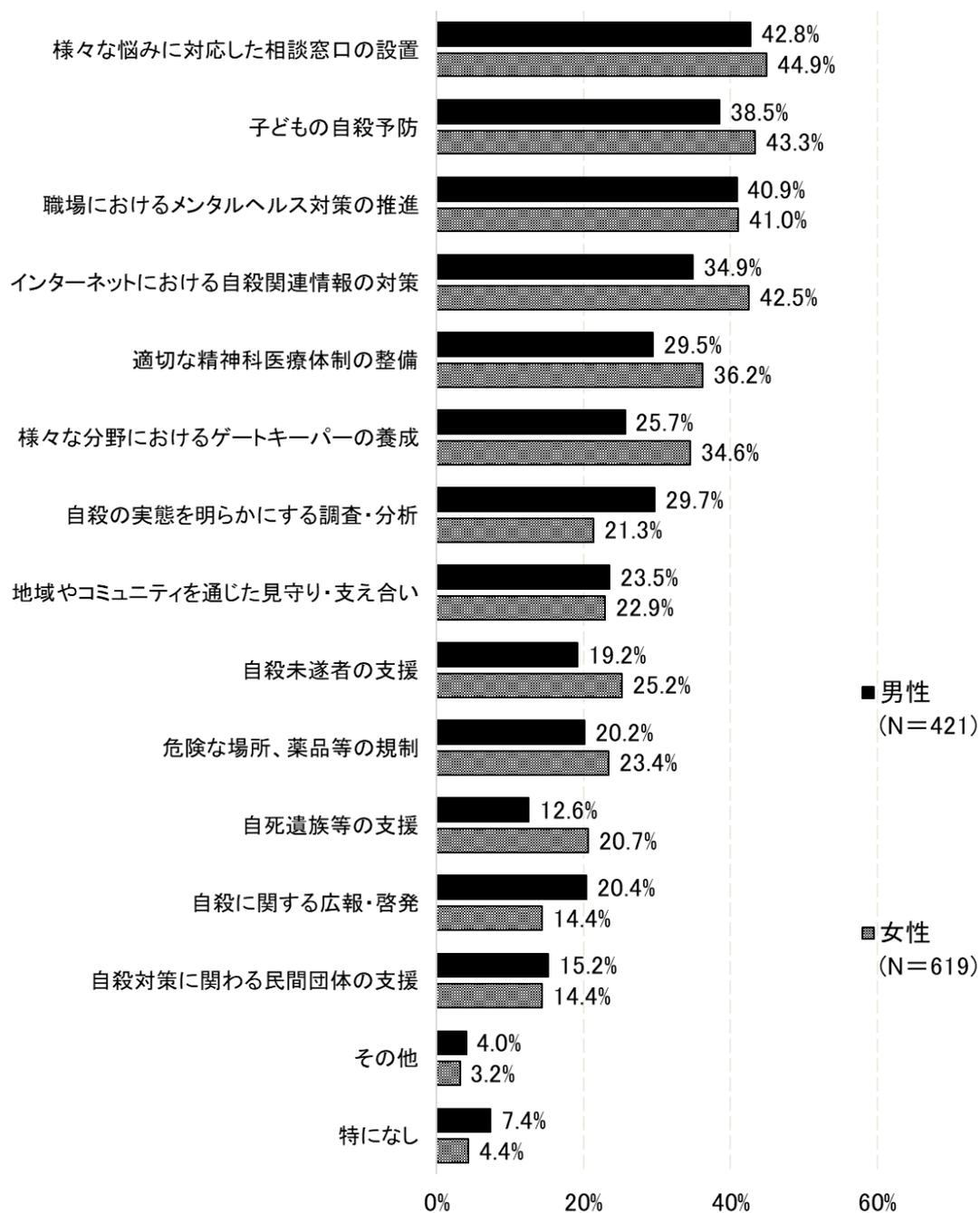


図 90 Q42 今後求められる自殺対策（複数回答・男女別）

Q42 の今後求められる自殺対策に関して、「職場におけるメンタルヘルス対策の推進」は年代で差があり、30代が61.0%と最も高く、70代以上は27.4%と最も低い（図 91）。

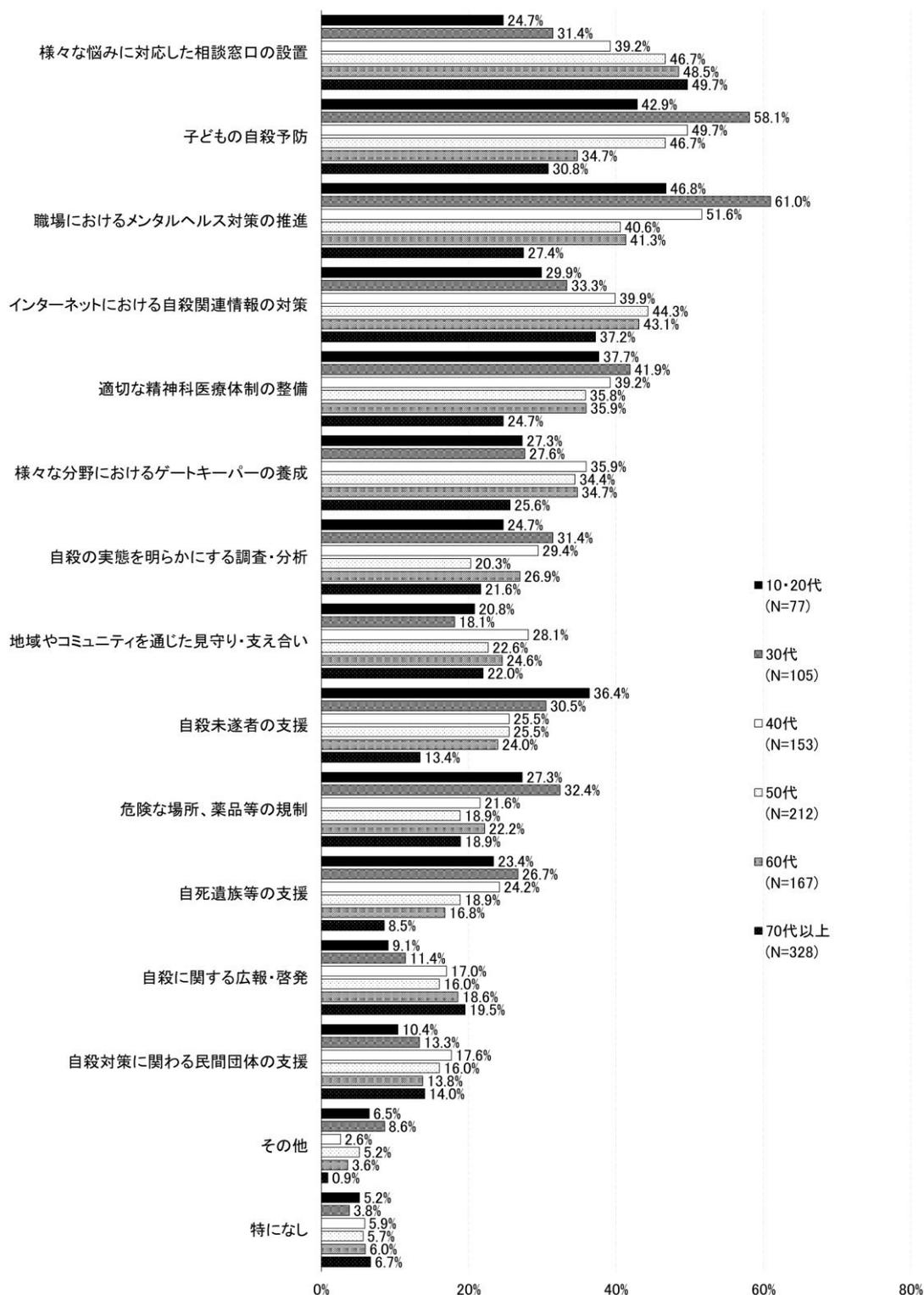


図 91 Q42 今後求められる自殺対策（複数回答・年代別）

Q43 の自殺したい気持ちを乗り越える方法に関して、「身近な人に悩みを聞いてもらう」が 63.0%で最も高く、「心の専門家に相談する」が 57.0%と続く（図 92）。

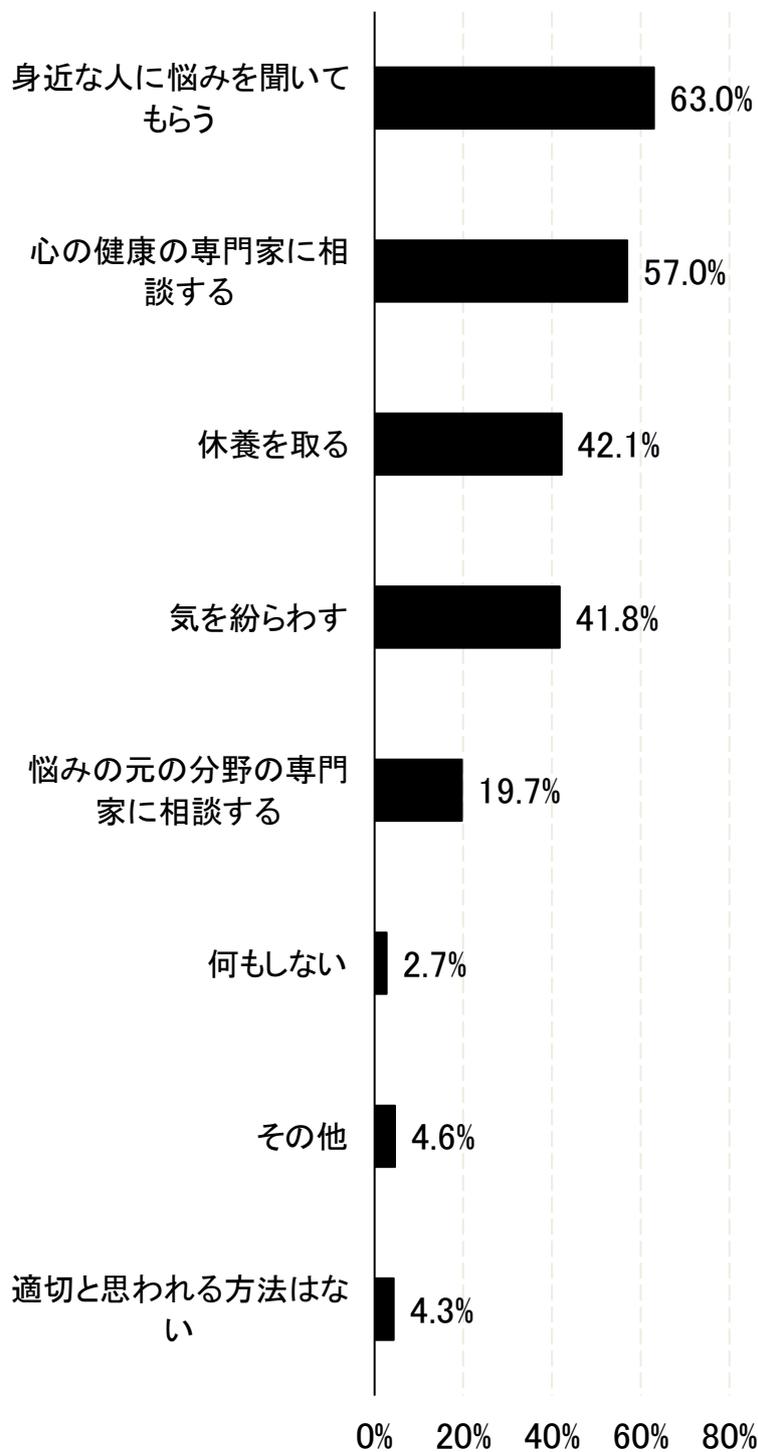


図 92 Q43 自殺したい気持ちを乗り越える方法（複数回答・全体 N=1063）

Q43 の自殺したい気持ちを乗り越える方法に関して、男女別で見ると、「心の健康の専門家に相談する」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 5.2 ポイント高い（図 93）。

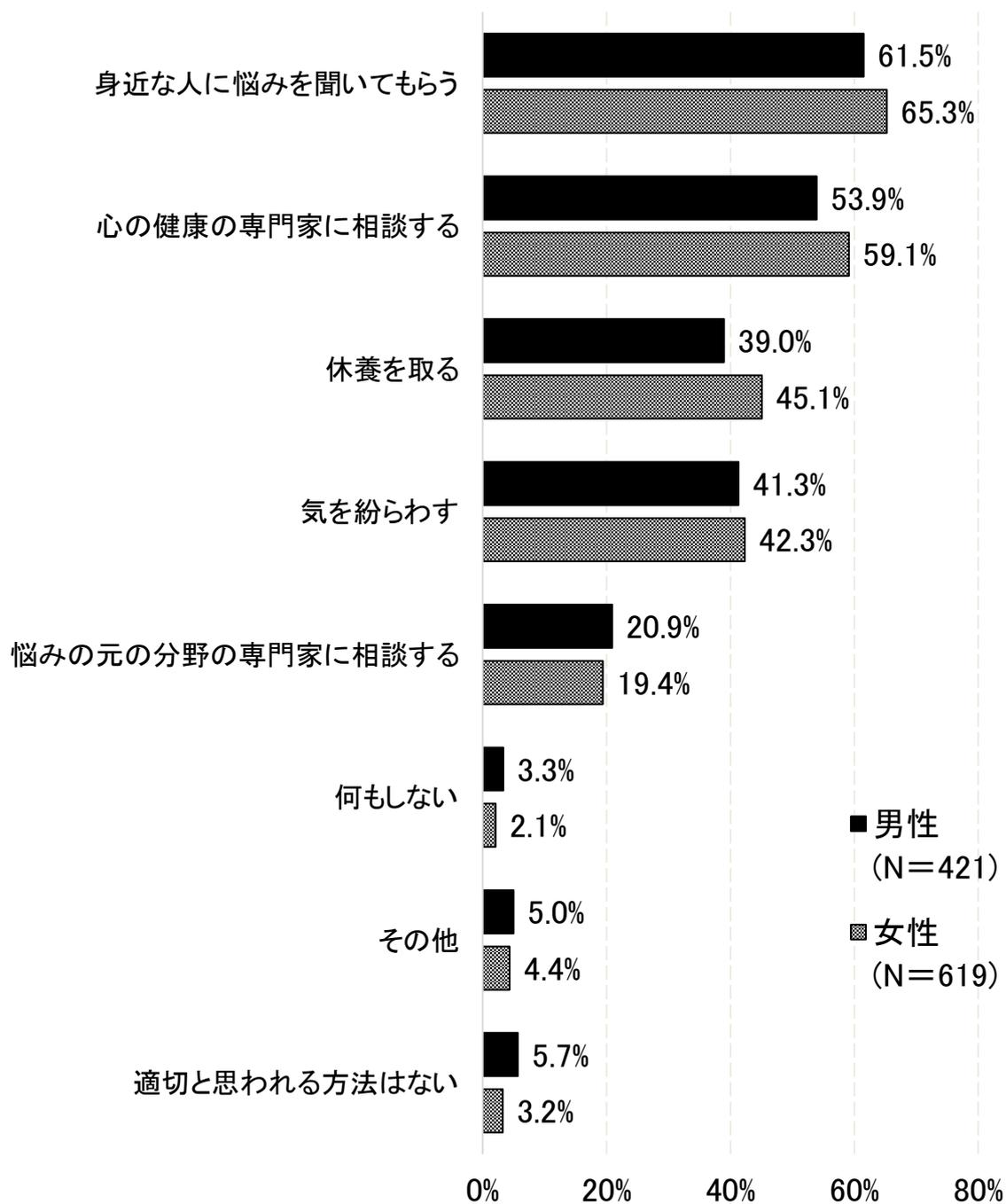


図 93 Q43 自殺したい気持ちを乗り越える方法（複数回答・男女別）

Q43の自殺したい気持ちを乗り越える方法に関して、年代別で見ると、「休養を取る」は年代で差があり、10・20代が66.2%と最も高く、反対に70代以上は25.0%と最も低い(図94)。

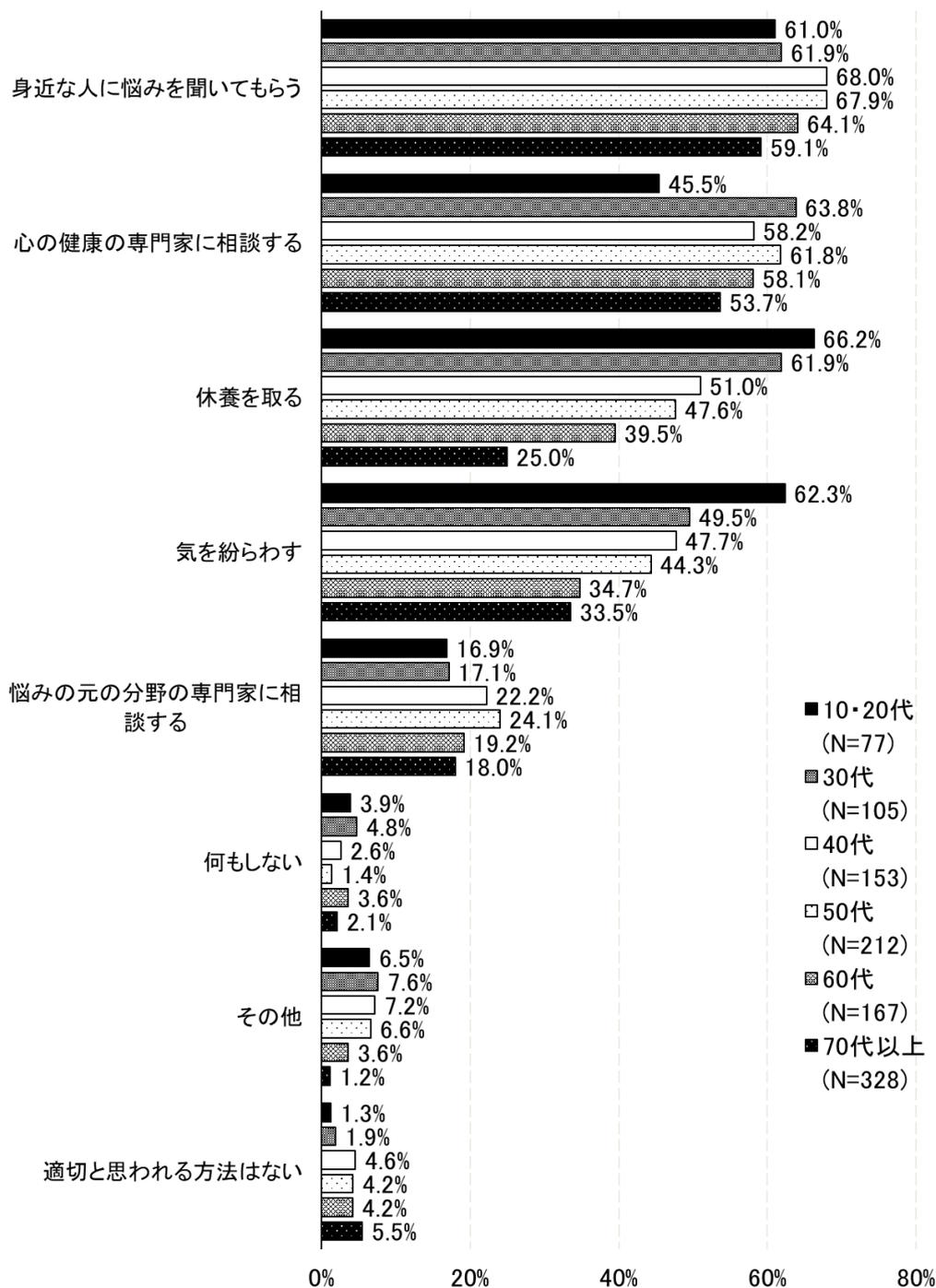


図 94 Q43 自殺したい気持ちを乗り越える方法 (複数回答・年代別)

Q44①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、「公園の整備や自然・緑の保全」が 32.3%と最も高く、「医療施設や救急医療体制の整備」が 28.1%と続く（図 95）。

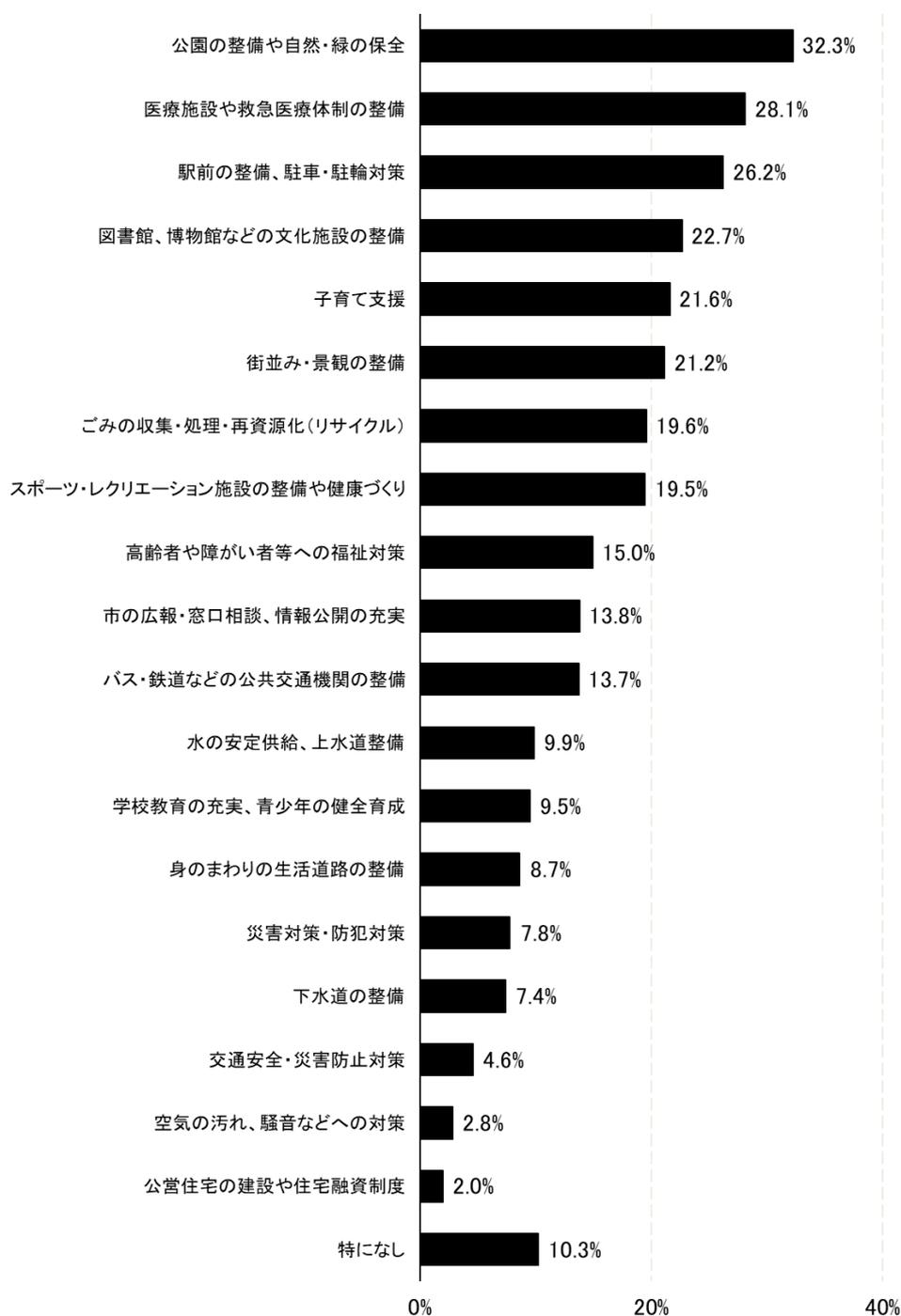


図 95 Q44① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの
(複数回答・全体 N=1063)

Q44①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、男女別で見ると、「子育て支援」では、男性よりも女性の方が4.7ポイント高い（図96）。

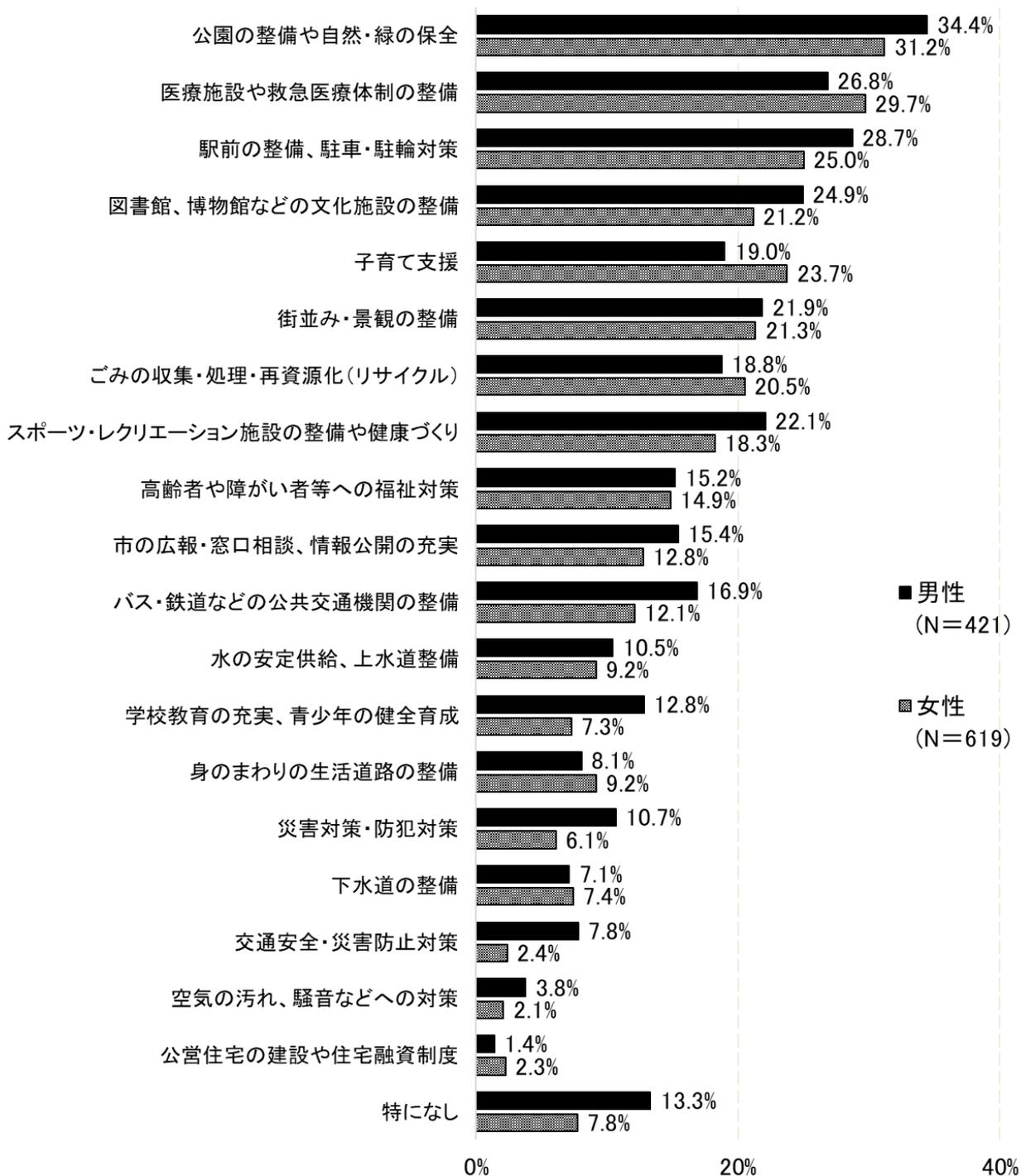


図96 Q44① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・男女別）

Q44①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、全年代で「公園の整備や自然・緑の保全」が25%を超え、60代以下では、30%を超えている（表5、図97）。

表5 Q44① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・年代別）

	公園の整備や自然・緑の保全	医療施設や救急医療体制の整備	駅前の整備、駐車・駐輪対策	図書館、博物館などの文化施設の整備	子育て支援	街並み・景観の整備	ごみの収集・処理・資源化（リサイクル）
10・20代 (N=77)	33.8	20.8	31.2	18.2	22.1	27.3	7.8
30代 (N=105)	34.3	29.5	28.6	21.0	36.2	31.4	11.4
40代 (N=153)	39.9	33.3	26.1	24.2	27.5	26.1	10.5
50代 (N=212)	33.5	26.9	25.0	17.0	26.4	26.9	15.6
60代 (N=167)	32.9	19.2	19.8	28.1	18.6	15.0	19.8
70代以上 (N=328)	26.8	32.9	29.0	24.4	13.1	14.0	32.3

	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	高齢者や障がい者等への福祉対策	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	水の安定供給、上下水道整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	身のまわりの生活道路の整備
10・20代 (N=77)	11.7	10.4	13.0	16.9	3.9	14.3	13.0
30代 (N=105)	21.9	9.5	12.4	14.3	7.6	14.3	10.5
40代 (N=153)	21.6	13.1	13.1	11.8	9.2	13.7	6.5
50代 (N=212)	14.6	6.6	11.8	8.5	6.1	8.5	9.9
60代 (N=167)	22.2	12.6	9.6	10.2	9.0	7.8	4.2
70代以上 (N=328)	22.0	25.9	18.0	19.5	15.2	6.4	9.5

	災害対策・防犯対策	下水道の整備	交通安全・災害防止対策	空気の汚れ、騒音などへの対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	特になし
10・20代 (N=77)	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1
30代 (N=105)	0.1	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1
40代 (N=153)	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
50代 (N=212)	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1
60代 (N=167)	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1
70代以上 (N=328)	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1

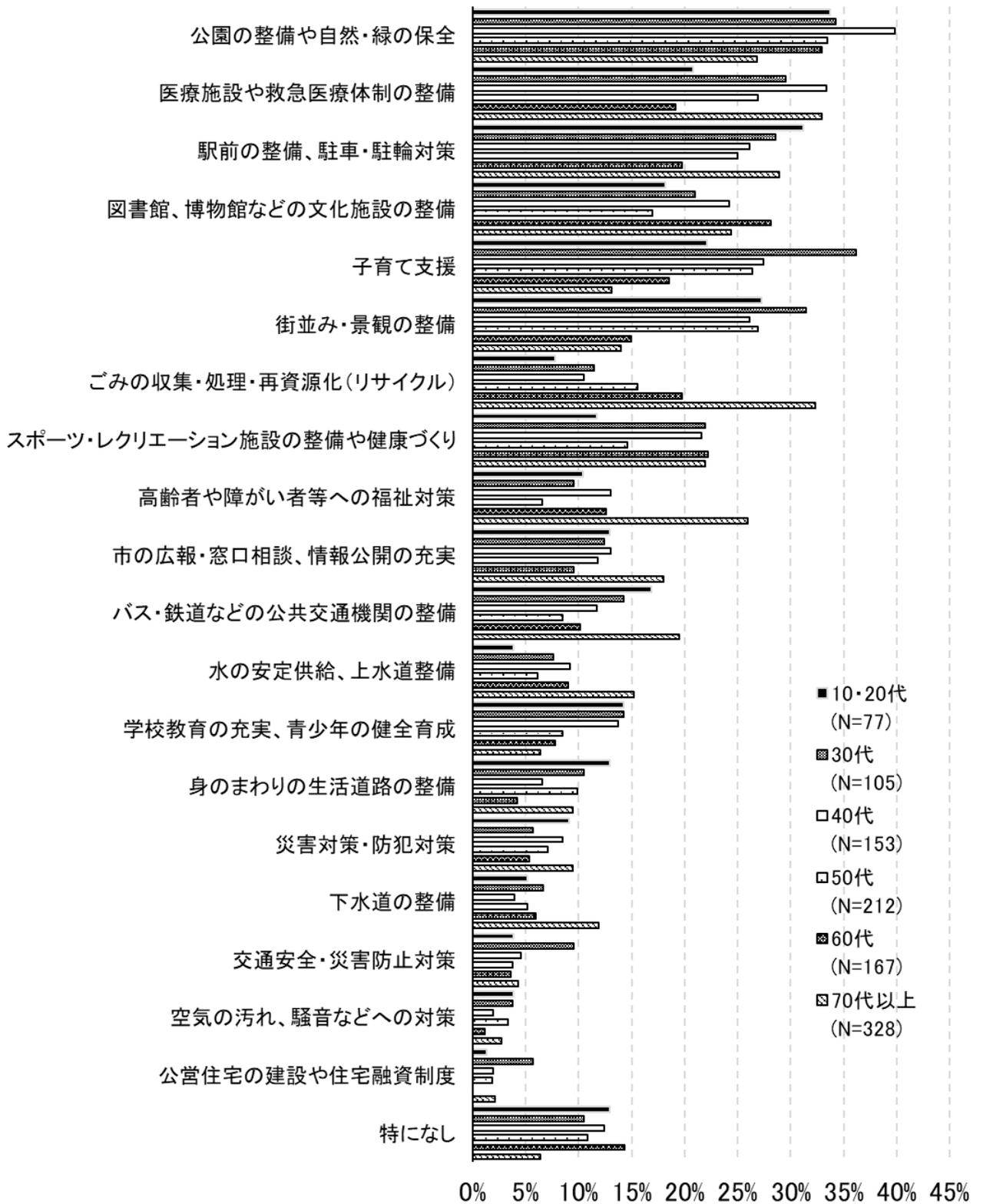


図 97 Q44① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・年代別）

Q44①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、居住地域別で見ると、「公園の整備や自然・緑の保全」及び「医療施設や救急医療体制の整備」は全地域で20%を超えている（表6、図98）。

表6 Q44① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・居住地域別）

	公園の整備や自然・緑の保全	医療施設や救急医療体制の整備	駅前の整備、駐車・駐輪対策	図書館、博物館などの文化施設の整備	子育て支援	街並み・景観の整備	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）
高槻北地区 (N=307)	33.6	33.9	33.6	25.7	25.1	24.1	18.6
高槻南地区 (N=262)	37.4	27.5	26.7	19.5	20.6	20.6	21.4
五領地区 (N=32)	50.0	25.0	21.9	18.8	28.1	21.9	25.0
高槻西地区 (N=190)	28.4	26.3	26.8	24.2	17.4	18.4	18.9
如是・富田地区 (N=193)	28.5	23.3	20.2	22.3	19.7	21.2	21.8
三箇牧地区 (N=28)	25.0	35.7	10.7	28.6	21.4	21.4	14.3

	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	高齢者や障がい者等への福祉対策	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	水の安定供給、上水道整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	身のまわりの生活道路の整備
高槻北地区 (N=307)	21.2	12.7	16.0	15.3	8.5	11.7	10.1
高槻南地区 (N=262)	19.8	16.0	14.1	14.1	6.9	10.7	6.9
五領地区 (N=32)	21.9	21.9	15.6	21.9	3.1	0.0	12.5
高槻西地区 (N=190)	22.1	18.9	13.2	15.3	12.1	7.9	8.9
如是・富田地区 (N=193)	16.6	13.5	12.4	10.9	15.0	8.3	8.3
三箇牧地区 (N=28)	14.3	17.9	7.1	3.6	14.3	7.1	7.1

	災害対策・防犯対策	下水道の整備	交通安全・災害防止対策	空気の汚れ、騒音などへの対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	特になし
高槻北地区 (N=307)	9.8	7.8	4.6	2.0	1.3	6.2
高槻南地区 (N=262)	5.7	5.0	4.2	3.4	2.3	12.6
五領地区 (N=32)	3.1	9.4	3.1	0.0	0.0	6.3
高槻西地区 (N=190)	9.5	7.9	4.2	3.2	2.1	12.6
如是・富田地区 (N=193)	8.8	10.4	6.7	2.1	2.1	9.8
三箇牧地区 (N=28)	7.1	0.0	3.6	7.1	3.6	10.7

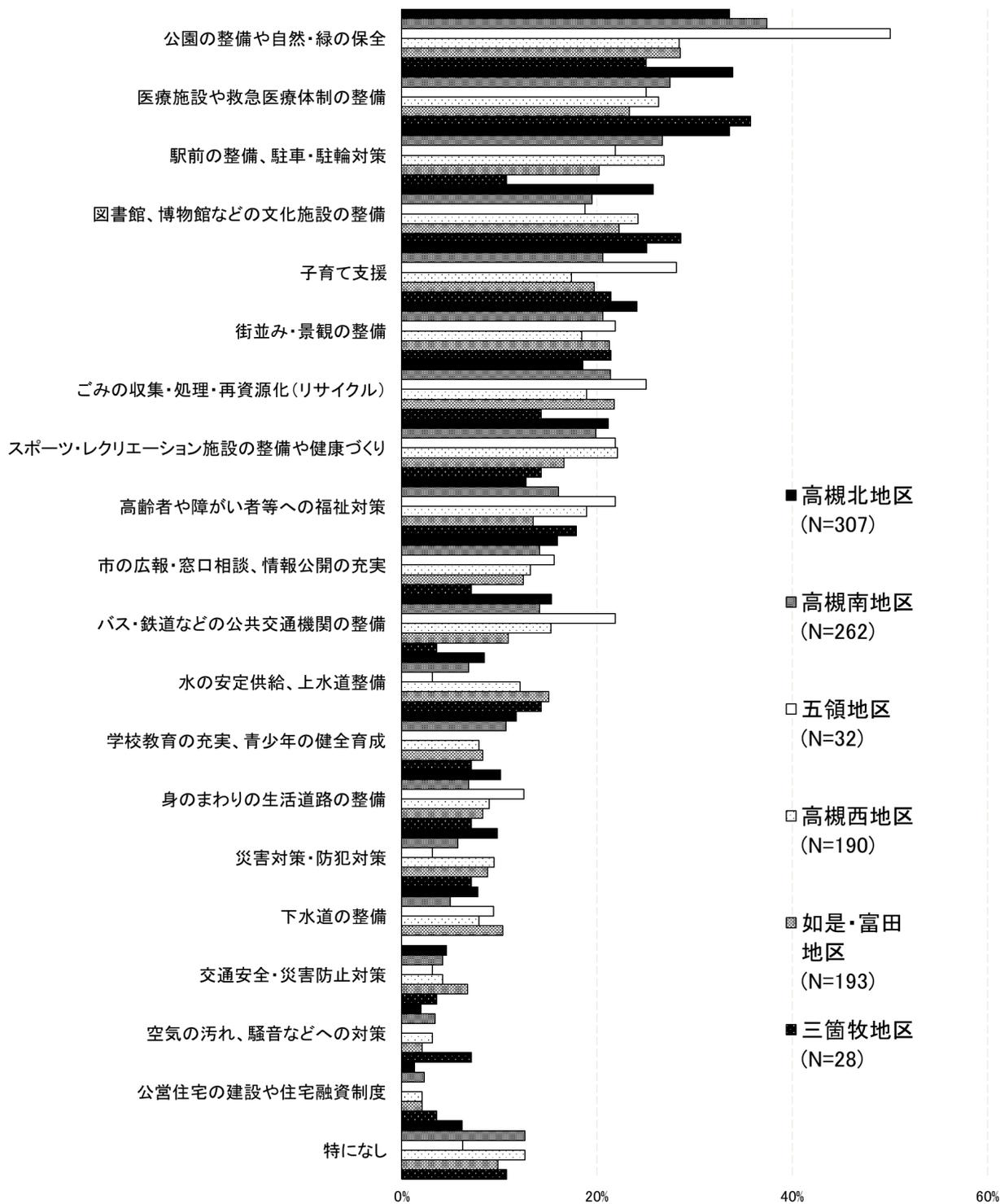


図 98 Q44① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの
(複数回答・居住地域別)

Q44①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、居住年数別で見ると、「公園の整備や自然・緑の保全」は1年未満を除き20%以上であり、5年以上10年未満が39.1%と最も高い（表7、図99）。

表7 Q44① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・居住年数別）

	公園の整備や自然・緑の保全	医療施設や救急医療体制の整備	駅前の整備、駐車・駐輪対策	図書館、博物館などの文化施設の整備	子育て支援	街並み・景観の整備	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	(%)
1年未満 (N=21)	14.3	9.5	9.5	23.8	19.0	9.5	14.3	
1年以上3年未満 (N=31)	32.3	19.4	16.1	9.7	22.6	12.9	16.1	
3年以上5年未満 (N=13)	30.8	15.4	15.4	15.4	7.7	15.4	15.4	
5年以上10年未満 (N=69)	39.1	39.1	21.7	26.1	37.7	29.0	11.6	
10年以上20年未満 (N=126)	33.3	27.0	29.4	23.0	27.0	24.6	11.1	
20年以上30年未満 (N=184)	33.2	26.6	27.2	19.6	22.8	25.0	15.8	
30年以上40年未満 (N=173)	34.7	22.0	26.6	23.7	20.8	20.2	17.9	
40年以上50年未満 (N=190)	28.4	35.3	31.1	25.8	21.6	22.6	27.4	
50年以上 (N=242)	32.2	29.8	24.8	22.7	15.7	15.7	25.6	
	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	高齢者や障がい者等への福祉対策	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	水の安定供給、水道整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	身のまわりの生活道路の整備	
1年未満 (N=21)	9.5	4.8	9.5	0.0	4.8	4.8	0.0	
1年以上3年未満 (N=31)	9.7	6.5	19.4	12.9	6.5	9.7	9.7	
3年以上5年未満 (N=13)	7.7	7.7	15.4	30.8	7.7	0.0	0.0	
5年以上10年未満 (N=69)	29.0	11.6	18.8	14.5	10.1	11.6	10.1	
10年以上20年未満 (N=126)	15.9	11.1	11.9	12.7	6.3	8.7	9.5	
20年以上30年未満 (N=184)	16.3	9.8	10.3	8.2	4.9	12.0	8.2	
30年以上40年未満 (N=173)	23.7	17.3	13.9	13.3	8.1	8.1	9.8	
40年以上50年未満 (N=190)	20.0	18.4	15.8	15.8	13.7	11.6	7.9	
50年以上 (N=242)	21.1	20.2	13.6	18.2	14.5	7.4	9.1	
	災害対策・防犯対策	下水道の整備	交通安全・災害防止対策	空気の汚れ、騒音などへの対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	特になし		
1年未満 (N=21)	9.5	0.0	4.8	0.0	0.0	28.6		
1年以上3年未満 (N=31)	3.2	3.2	6.5	6.5	0.0	12.9		
3年以上5年未満 (N=13)	0.0	7.7	20.5	0.0	0.0	23.1		
5年以上10年未満 (N=69)	13.0	5.8	5.8	2.9	7.2	4.3		
10年以上20年未満 (N=126)	5.6	4.0	4.0	2.4	2.4	15.1		
20年以上30年未満 (N=184)	7.6	3.3	2.7	2.2	1.6	7.1		
30年以上40年未満 (N=173)	9.8	6.4	9.2	1.2	0.6	12.7		
40年以上50年未満 (N=190)	5.8	11.6	4.2	3.2	2.1	8.4		
50年以上 (N=242)	8.3	10.7	2.9	3.3	2.1	8.3		

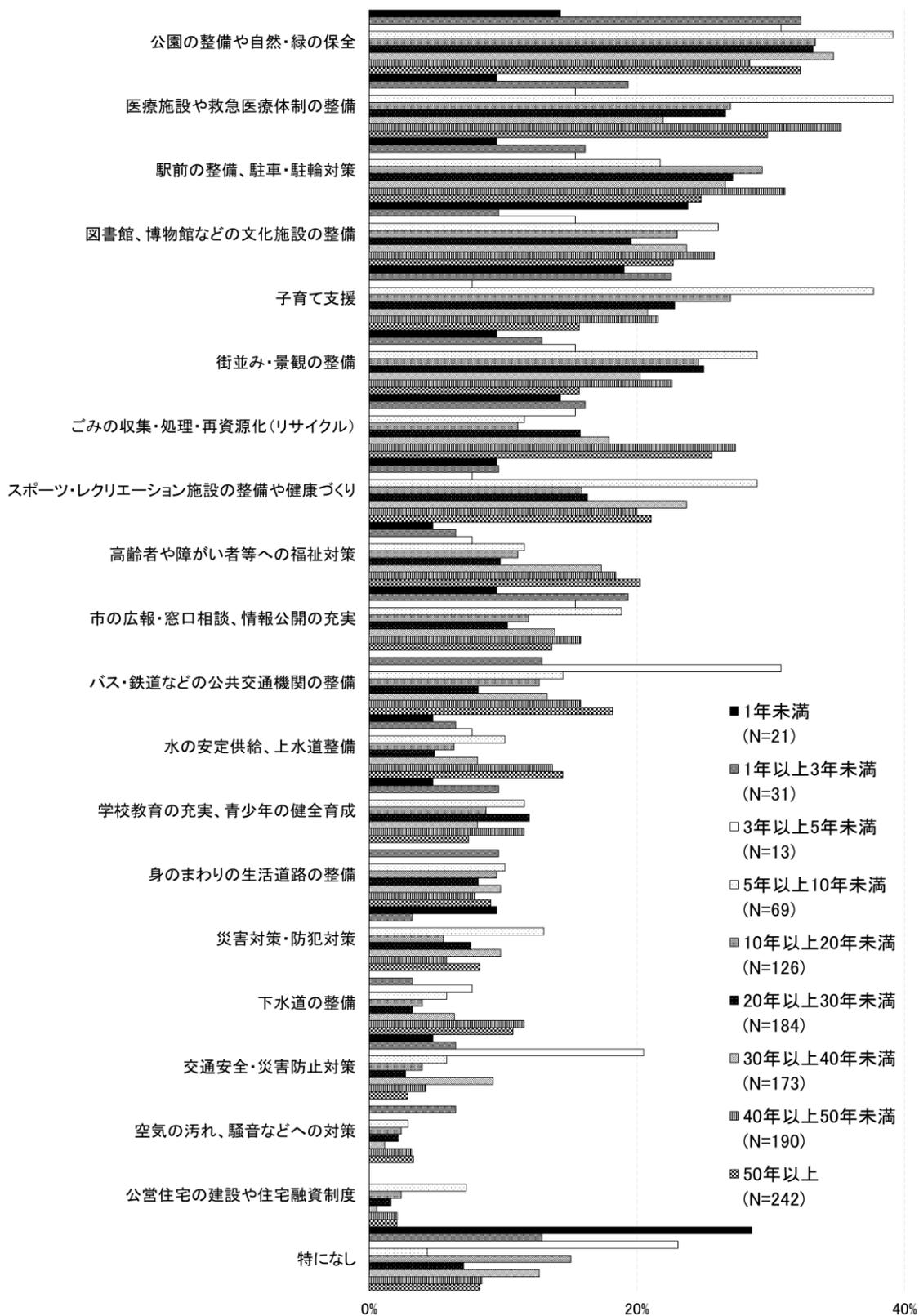


図 99 Q44① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの
(複数回答・居住年数別)

Q44②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、「高齢者や障がい者等への福祉対策」が26.7%と最も高く、「災害対策・防犯対策」が25.0%と続く（図100）。

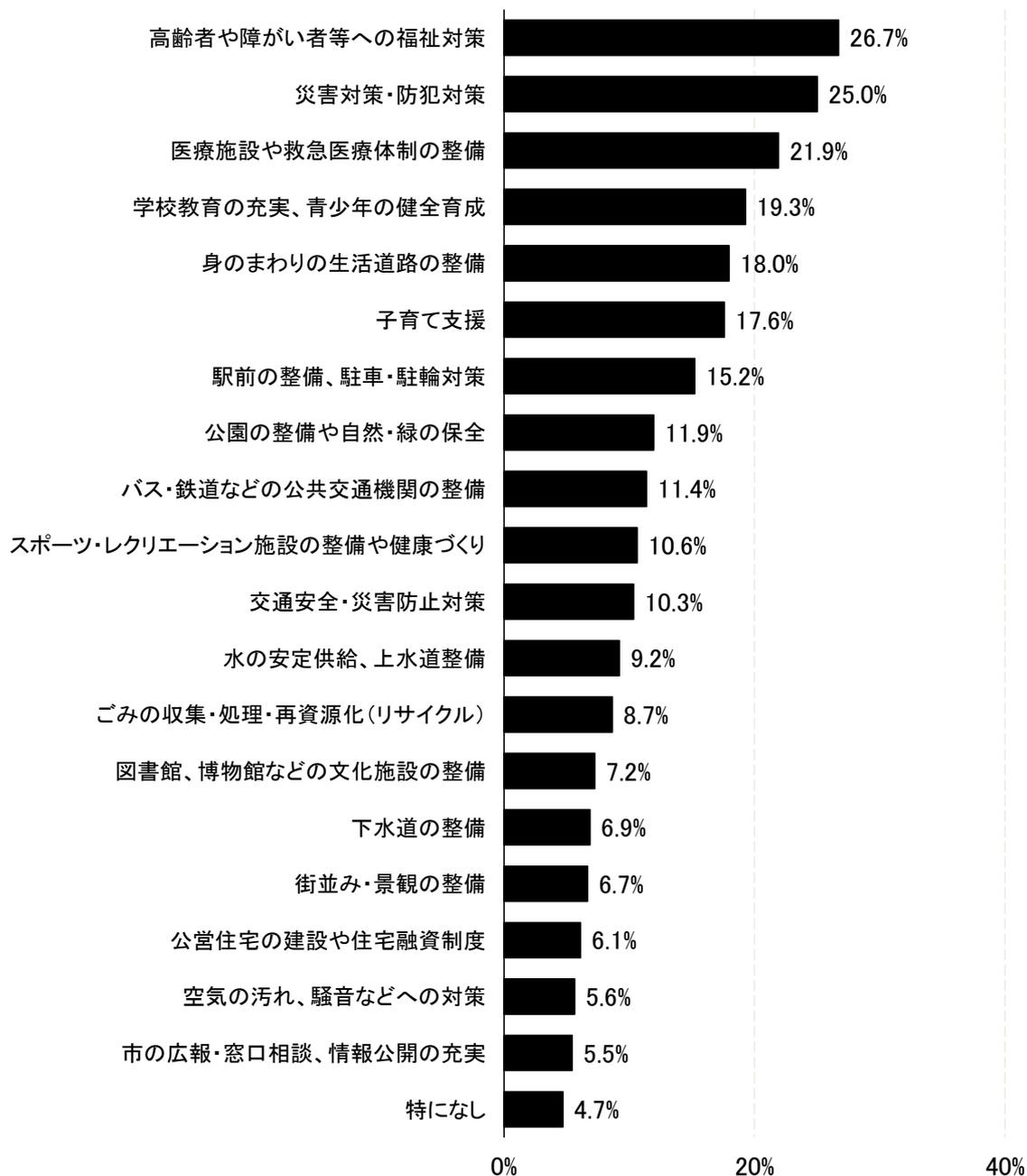


図100 Q44② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの
 (複数回答・全体 N=1063)

Q44②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、男女別で見ると、「災害対策・防犯対策」では、男性よりも女性の方が3.5ポイント高い（図 101）。

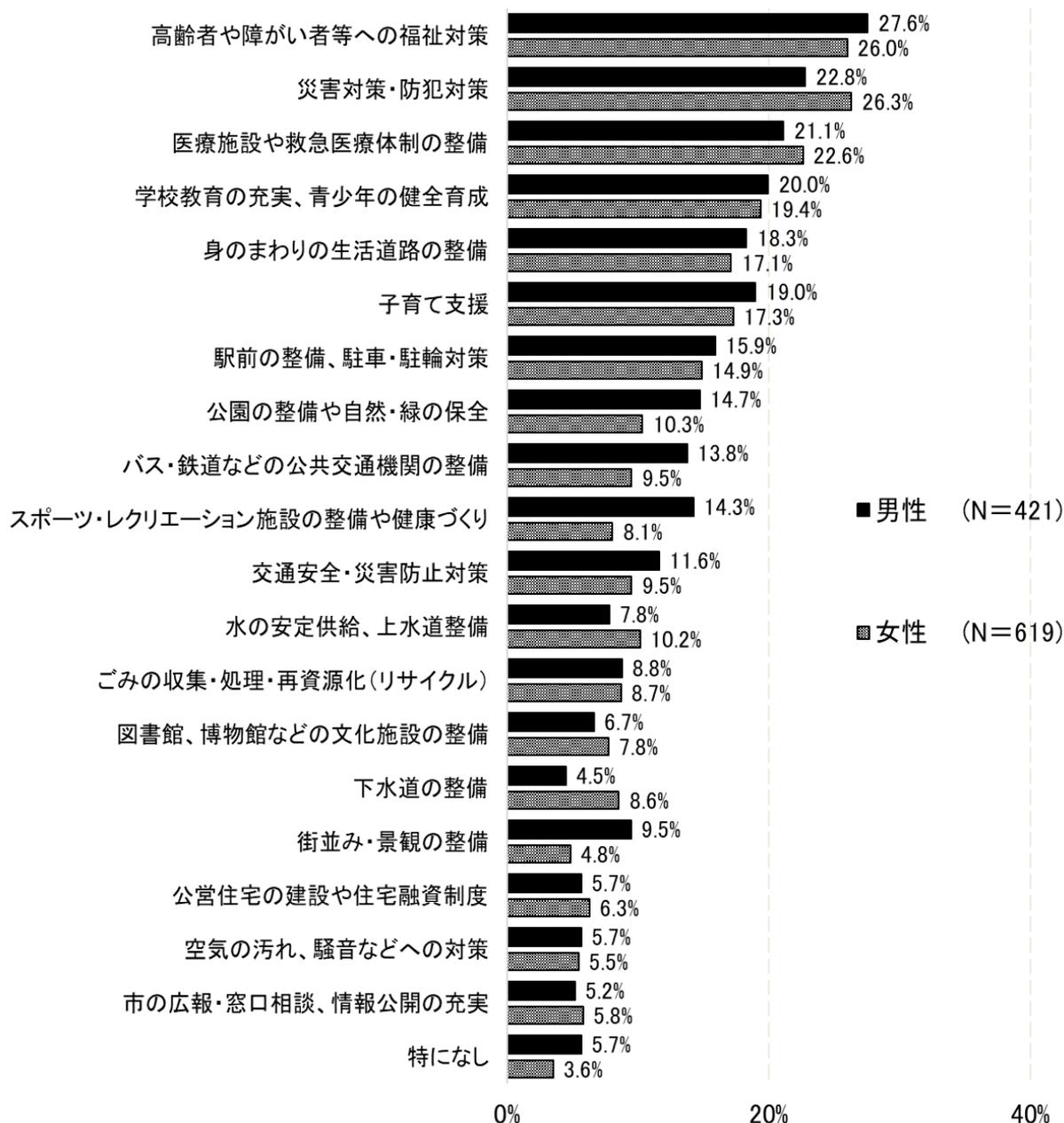


図 101 Q44② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・男女別）

Q44②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、年代別で見ると、「子育て支援」は若い世代で高く、30代は44.8%と最も高い（表8、図102）。

表8 Q44② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

	高齢者や障がい者等への福祉対策	災害対策・防犯対策	医療施設や救急医療体制の整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	身のまわりの生活道路の整備	子育て支援	駅前の整備、駐車・駐輪対策	(%)
10・20代 (N=77)	2.6	23.4	18.2	19.5	11.7	23.4	19.5	
30代 (N=105)	11.4	18.1	11.4	31.4	21.9	44.8	15.2	
40代 (N=153)	17.0	29.4	16.3	28.8	21.6	28.1	17.6	
50代 (N=212)	25.9	32.1	24.5	16.0	23.1	15.6	18.4	
60代 (N=167)	43.1	21.6	32.3	10.8	18.0	10.2	15.0	
70代以上 (N=328)	34.1	22.3	20.7	18.0	12.5	8.5	10.7	

	公園の整備や自然・緑の保全	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	交通安全・災害防止対策	水の安定供給、上水道整備	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	図書館、博物館などの文化施設の整備
10・20代 (N=77)	16.9	9.1	10.4	15.6	6.5	7.8	10.4
30代 (N=105)	16.2	12.4	9.5	17.1	8.6	4.8	10.5
40代 (N=153)	12.4	7.8	11.1	10.5	9.2	6.5	6.5
50代 (N=212)	9.9	16.0	12.3	9.0	12.3	11.3	8.0
60代 (N=167)	13.2	10.8	12.6	6.6	7.8	7.8	6.6
70代以上 (N=328)	10.7	10.7	8.5	9.8	8.8	10.4	6.1

	下水道の整備	街並み・景観の整備	公営住宅の建設や住宅融資制度	空気の汚れ、騒音などへの対策	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	特になし
10・20代 (N=77)	5.2	3.9	3.9	10.4	3.9	6.5
30代 (N=105)	3.8	10.5	8.6	6.7	5.7	2.9
40代 (N=153)	5.2	4.6	4.6	4.6	3.3	5.9
50代 (N=212)	9.0	8.5	6.1	6.6	2.8	2.8
60代 (N=167)	6.0	4.8	8.4	6.0	6.6	6.6
70代以上 (N=328)	8.2	6.7	5.2	3.7	8.2	4.3

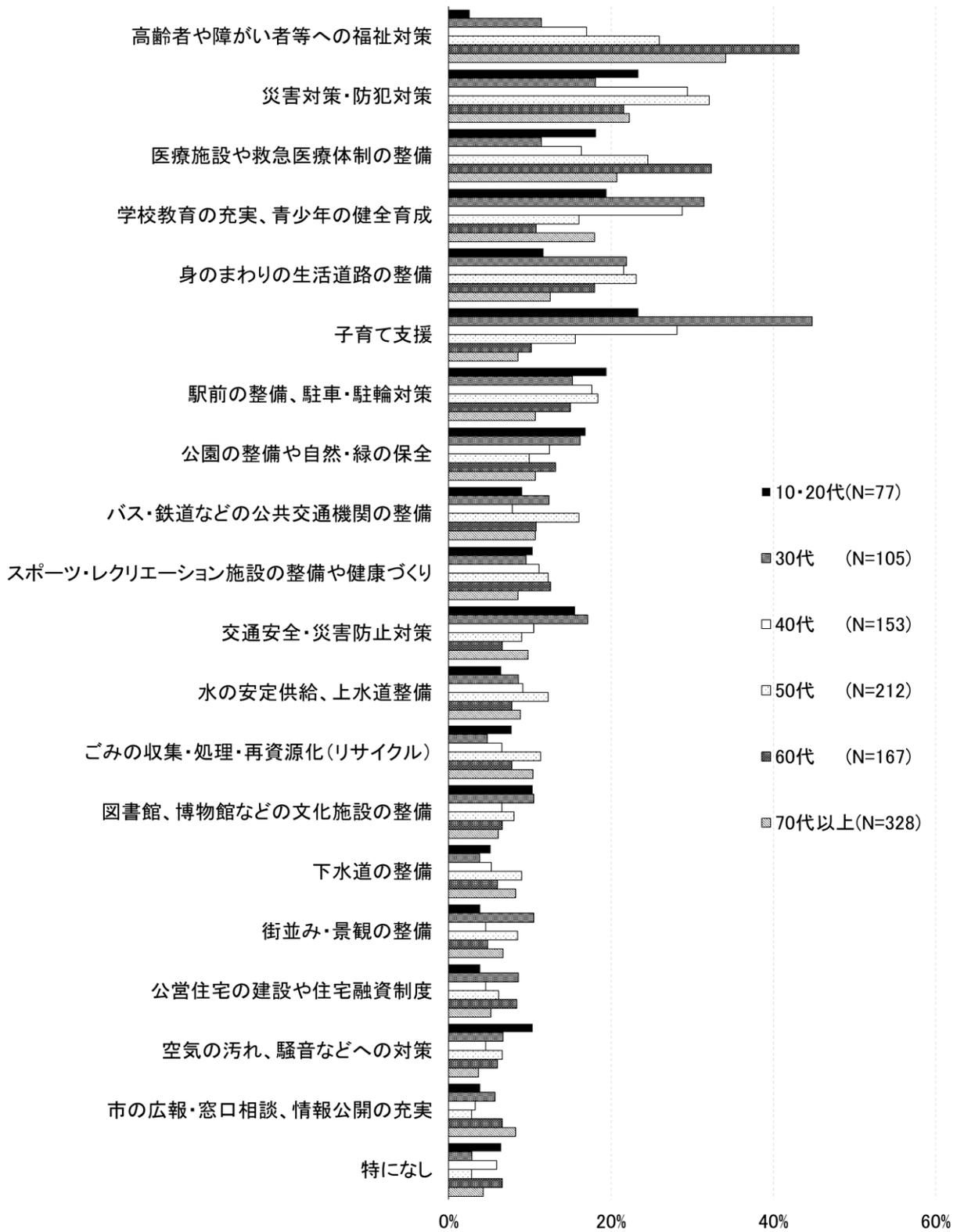


図 102 Q44② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

Q44②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、居住地域別で見ると、「高齢者や障がい者等への福祉対策」及び「医療施設や救急医療体制の整備」は全地域で20%を超えている（表9、図103）。

表9 Q44② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住地域別）

	高齢者や障がい者等への福祉対策	災害対策・防犯対策	医療施設や救急医療体制の整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	身のまわりの生活道路の整備	子育て支援	駅前の整備、駐車・駐輪対策	(%)
高槻北地区 (N=307)	29.6	27.7	21.8	21.2	14.7	20.8	12.7	
高槻南地区 (N=262)	28.2	22.5	22.1	22.1	14.5	17.6	20.6	
五領地区 (N=32)	25.0	12.5	21.9	15.6	12.5	12.5	6.3	
高槻西地区 (N=190)	22.6	26.3	21.6	16.3	20.5	15.8	17.9	
如是・富田地区 (N=193)	26.4	26.9	22.8	16.6	26.9	16.6	11.4	
三箇牧地区 (N=28)	25.0	10.7	21.4	17.9	7.1	25.0	3.6	
	公園の整備や自然・緑の保全	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	交通安全・災害防止対策	水の安定供給、上水道整備	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	図書館、博物館などの文化施設の整備	
高槻北地区 (N=307)	14.0	8.5	13.7	10.7	7.8	8.1	9.4	
高槻南地区 (N=262)	12.2	7.6	8.4	11.1	8.0	10.3	4.6	
五領地区 (N=32)	6.3	28.1	12.5	15.6	6.3	21.9	12.5	
高槻西地区 (N=190)	15.3	18.9	7.9	11.1	13.2	7.4	8.4	
如是・富田地区 (N=193)	8.3	9.3	12.4	8.8	8.8	6.2	6.7	
三箇牧地区 (N=28)	7.1	17.9	0.0	7.1	10.7	10.7	0.0	
	下水道の整備	街並み・景観の整備	公営住宅の建設や住宅融資制度	空気の汚れ、騒音などへの対策	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	特になし		
高槻北地区 (N=307)	7.2	8.8	5.2	5.9	3.9	4.6		
高槻南地区 (N=262)	8.4	7.6	4.6	6.9	7.3	4.2		
五領地区 (N=32)	9.4	6.3	6.3	0.0	12.5	3.1		
高槻西地区 (N=190)	3.7	5.8	5.3	5.8	4.7	4.7		
如是・富田地区 (N=193)	6.7	3.1	8.3	4.7	6.2	3.6		
三箇牧地区 (N=28)	7.1	3.6	10.7	3.6	0.0	3.6		

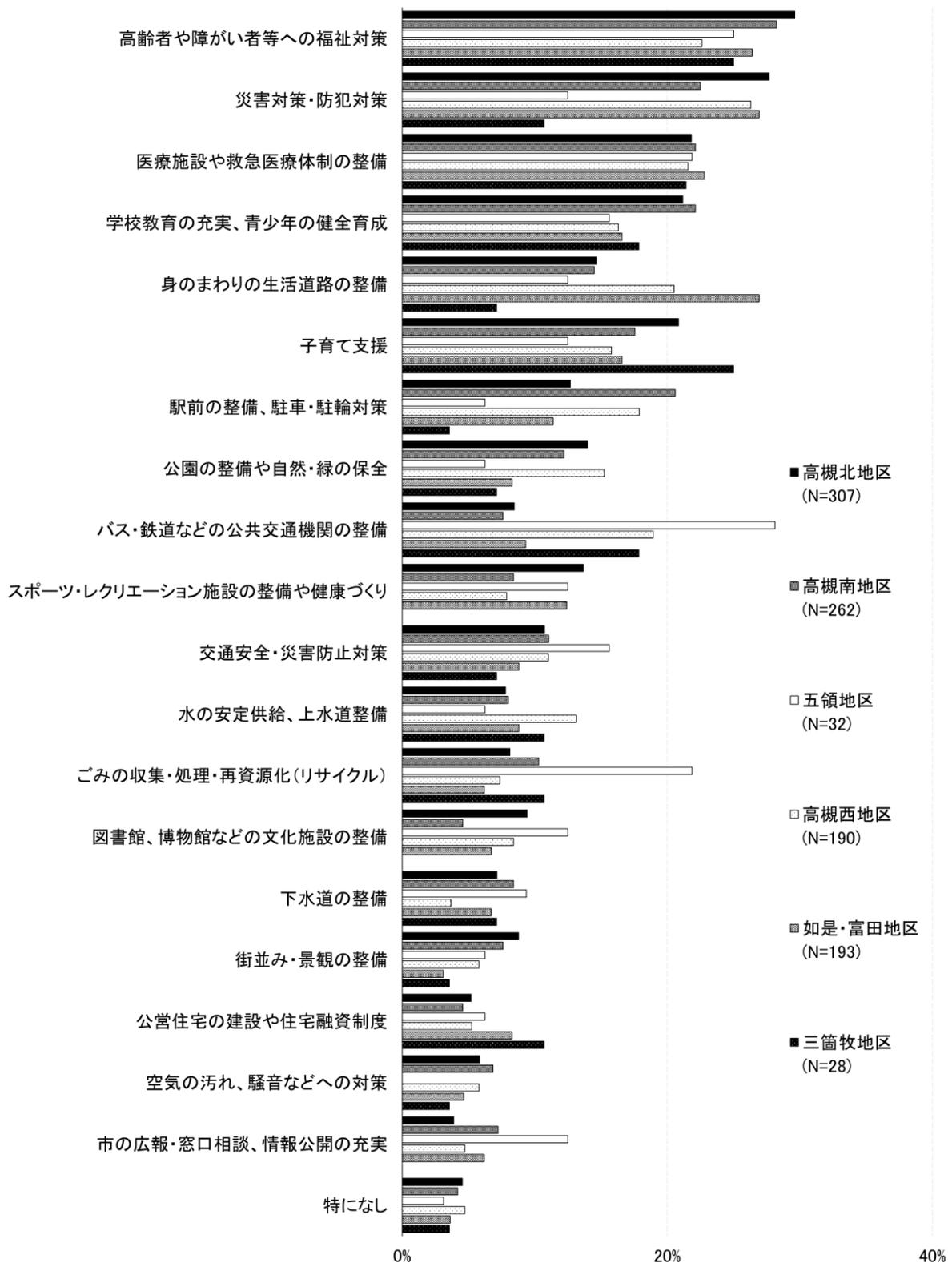


図 103 Q44② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住地域別）

Q44②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、居住年数別で見ると、「子育て支援」は3年以上5年未満の区分では69.2%と最も高く、1年以上から10年未満の区分では3割を超えている（表10, 図104）。

表10 Q44② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

	(%)						
	高齢者や障がい者等 への福祉対策	災害対策・防犯対策	医療施設や救急医療 体制の整備	学校教育の充実、青少 年の健全育成	身のまわりの生活 道路の整備	子育て支援	駅前の整備、駐 車・駐輪対策
1年未満 (N=21)	19.0	4.8	14.3	4.8	9.5	19.0	4.8
1年以上3年未満 (N=31)	12.9	32.3	22.6	35.5	35.5	35.5	6.5
3年以上5年未満 (N=13)	23.1	15.4	23.1	15.4	46.2	69.2	15.4
5年以上10年未満 (N=69)	14.5	15.9	14.5	31.9	20.3	33.3	15.9
10年以上20年未満 (N=126)	20.6	26.2	17.5	23.0	15.1	19.8	14.3
20年以上30年未満 (N=184)	17.9	32.1	19.6	15.8	15.8	18.5	20.7
30年以上40年未満 (N=173)	34.7	21.4	22.5	22.0	19.1	19.1	19.1
40年以上50年未満 (N=190)	31.6	26.3	24.2	17.4	21.1	13.7	13.7
50年以上 (N=242)	34.3	24.8	26.4	15.7	14.0	9.1	11.6
	公園の整備や自然・ 緑の保全	バス・鉄道などの公 共交通機関の整備	スポーツ・レクリ エーション施設の整 備や健康づくり	交通安全・災害防止対 策	水の安定供給、上 水道整備	ごみの収集・処 理・再資源化（リ サイクル）	図書館、博物館な どの文化施設の整 備
1年未満 (N=21)	9.5	4.8	14.3	9.5	14.3	0.0	4.8
1年以上3年未満 (N=31)	16.1	12.9	9.7	0.0	6.5	6.5	9.7
3年以上5年未満 (N=13)	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	15.4	0.0
5年以上10年未満 (N=69)	13.0	8.7	11.6	18.8	11.6	5.8	15.9
10年以上20年未満 (N=126)	8.7	12.7	8.7	9.5	6.3	9.5	5.6
20年以上30年未満 (N=184)	20.1	14.1	11.4	14.7	8.7	10.3	7.6
30年以上40年未満 (N=173)	8.7	12.7	7.5	7.5	8.7	5.2	8.7
40年以上50年未満 (N=190)	10.0	14.2	11.1	11.1	10.0	10.5	3.7
50年以上 (N=242)	11.6	7.4	12.0	8.3	9.9	9.5	7.9
	下水道の整備	街並み・景観の整備	公営住宅の建設や住 宅融資制度	空気の汚れ、騒音など への対策	市の広報・窓口相 談、情報公開の充 実	特になし	
1年未満 (N=21)	4.8	0.0	9.5	0.0	0.0	28.6	
1年以上3年未満 (N=31)	3.2	9.7	0.0	12.9	0.0	3.2	
3年以上5年未満 (N=13)	7.7	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0	
5年以上10年未満 (N=69)	8.7	7.2	2.9	7.2	5.8	1.4	
10年以上20年未満 (N=126)	4.8	7.9	6.3	7.9	6.3	8.7	
20年以上30年未満 (N=184)	6.5	7.6	4.9	5.4	4.3	2.2	
30年以上40年未満 (N=173)	5.2	3.5	8.1	4.0	4.6	4.6	
40年以上50年未満 (N=190)	11.6	5.8	6.8	5.3	5.3	2.6	
50年以上 (N=242)	5.8	7.9	6.6	5.8	8.3	4.1	

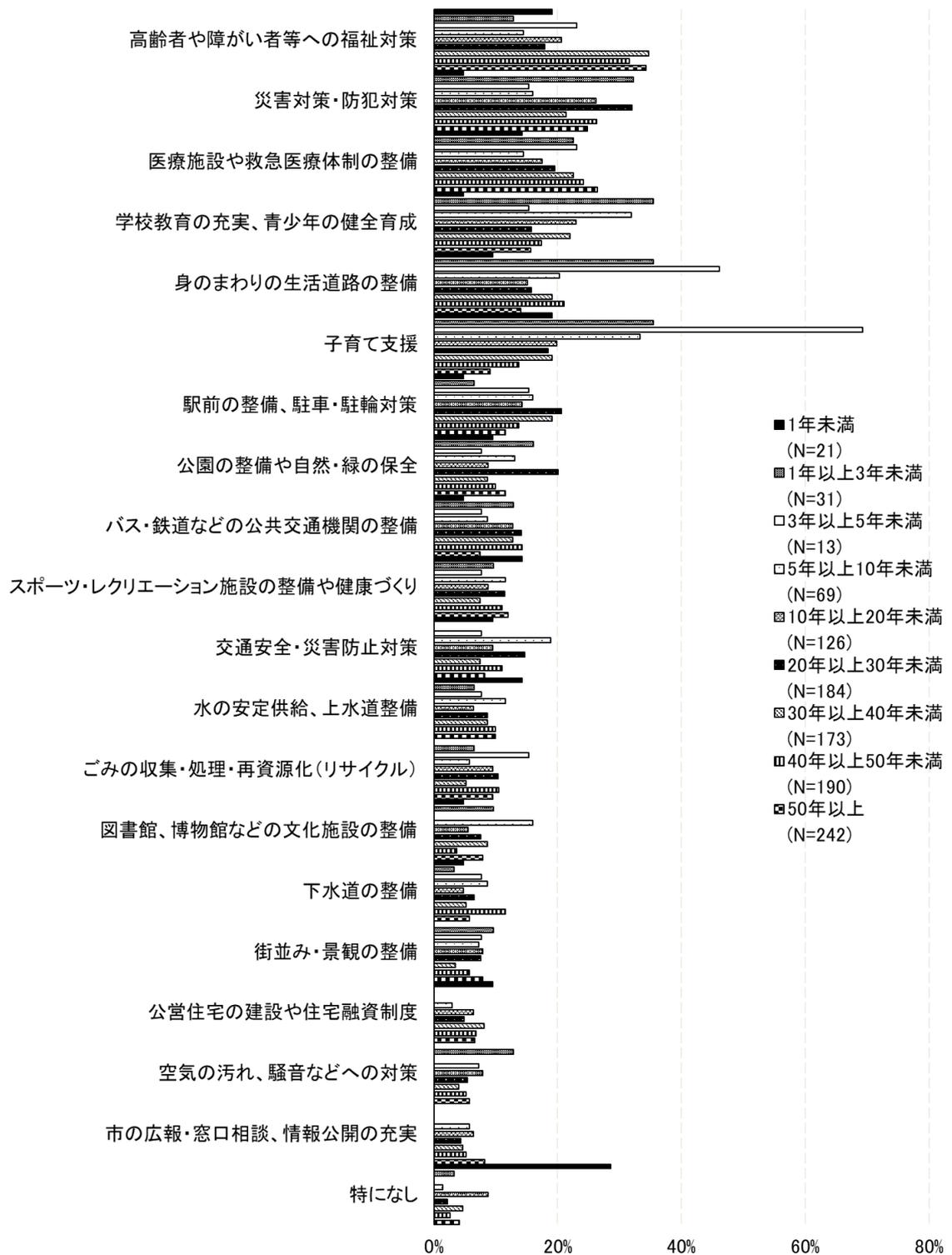


図 104 Q44② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

Q45の「高槻市みらいのための改革方針」の認知に関して、男女別・年代別のすべての層で「知らない」と回答した人が7割以上である。年代別で見ると、「名前も内容も知っている」または「名前だけ知っている」と回答した人の割合は70代以上が18.6%と最も高く、10・20代が6.5%と最も低い(図105)。

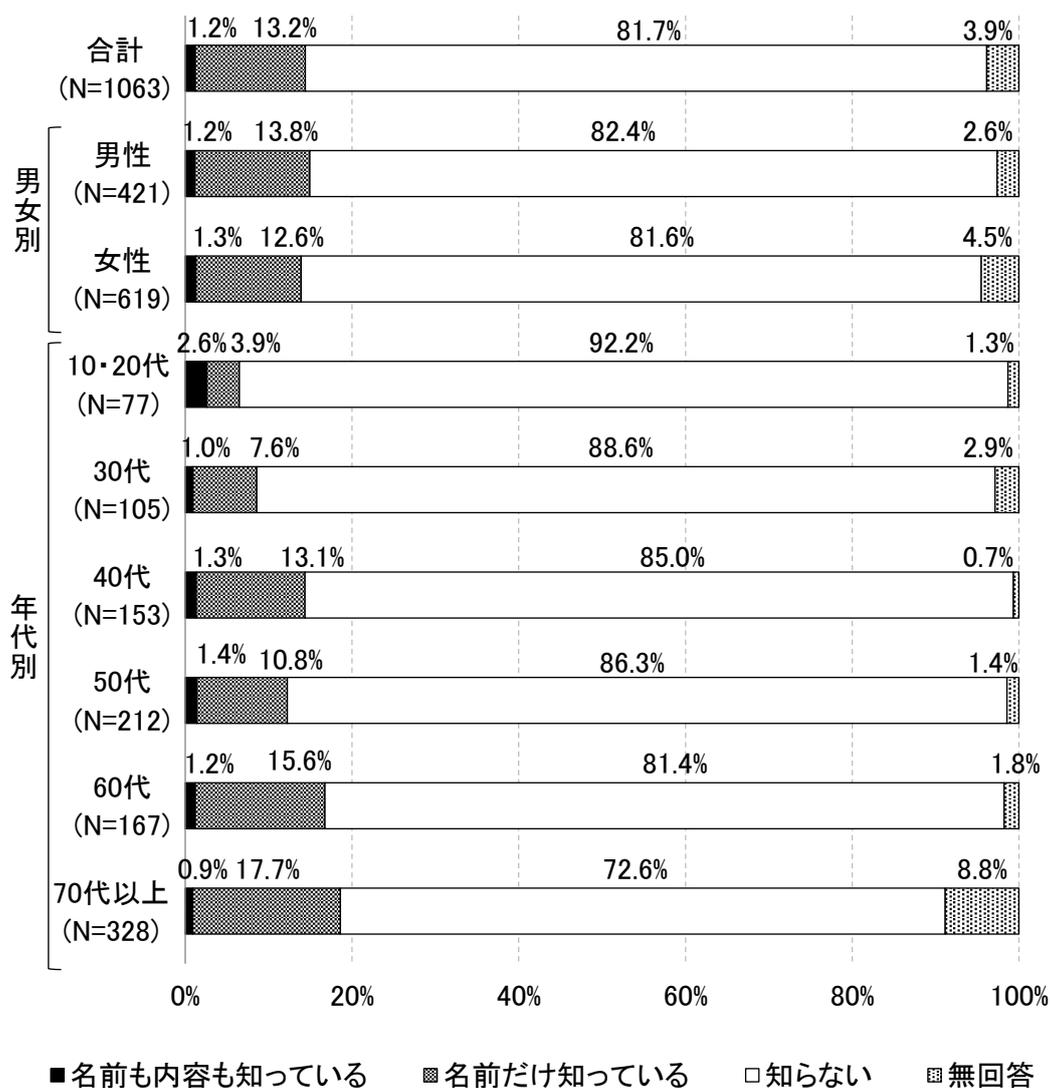


図 105 Q45 「高槻市みらいのための改革方針」の認知

Q46 の高槻市の 20 年後、30 年後を見据えて行財政改革に取り組むべきかに関して、男女別・年代別のすべての層で「感じる」または「やや感じる」と回答した人が 7 割以上である。年代別で見ると、「あまり感じない」または「感じない」と回答した人の割合は 10・20 代が 26.0%と最も高い（図 106）。

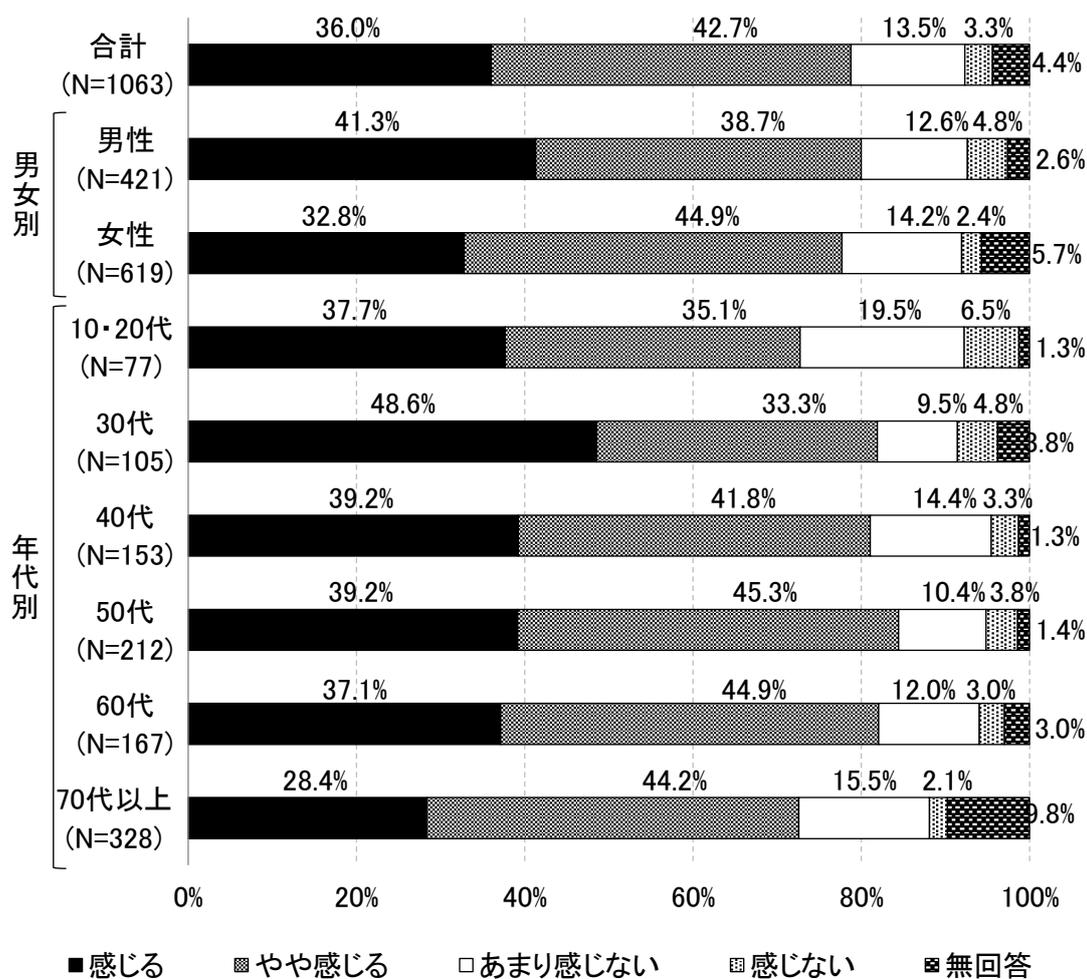


図 106 Q46 高槻市の 20 年後、30 年後を見据えて行財政改革に取り組むべきか

最後に、質問項目ごとの設問提案者と例年の質問項目との対応関係の一覧を以下に示す。

No.	質問項目	高橋市	関西大学	R06	R05	R04	R03	R02	R01	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23	備考	
Q1	生活満足度			Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1										
Q2	幸福度			Q2	Q2	Q2	Q2	Q2											
Q3	高橋市に愛着を感じるか			Q15	Q3	Q3	Q3	Q3	Q3	Q3	Q3	Q3	Q6	Q8	*Q19			JGSS2002 留置票 Q41	
Q4	居住地域は暮らしやすいか			Q3	Q3	Q3	Q3	Q3	Q4	Q2	Q2	*Q2	*Q2	*Q3	*Q2	*Q2			
Q5	地域に住み続けたいか			Q4	Q4	Q4	Q4	Q4	Q5			*Q3	*Q3	*Q4	*Q3	*Q3			
Q6	地域活動に参加しているか			Q47								*Q18	*Q21	Q13	*Q21				
Q7	近所での世間話の頻度											Q4	Q6	Q9	Q5	Q1		JGSS2012 留置票B票 Q59	
Q8	近い近所付き合いの頻度								Q20									SSP2015問7a	
Q9	近所の人は手助けしてくれるか																	SSP2015問7b	
Q10	近所の人は強いきずなで結ばれているか														Q15				
Q11	農畜りの商店街での買い物の頻度																		
Q12	公園に行く頻度																		
Q13	一日の平均歩数					Q11			Q25					**Q13	**Q30				
Q14A	音楽を聴く時間(自宅内)																		
Q14B	音楽を聴く時間(自宅外)																		
Q15	JR高槻駅の利用				Q10	Q10													
Q16	JR高槻駅周辺が高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力がある都市空間と感じるか				Q11	Q11													
Q17	阪急高槻市駅の利用				Q12	Q12													
Q18	阪急高槻市駅周辺が高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力がある都市空間と感じるか				Q13	Q13													
Q19A	交通手段満足度 徒歩					Q10A			Q8A										
Q19B	交通手段満足度 徒歩					Q10B			Q8B										
Q19C	交通手段満足度 バイク					Q10C			Q8C										
Q19D	交通手段満足度 自転車					Q10D			Q8D										
Q19E	交通手段満足度 自転車					Q10E			Q8E										
Q19F	交通手段満足度 バイク					Q10F			Q8F										
Q19G	交通手段満足度 バイク					Q10G			Q8G										
Q19H	交通手段満足度 バイク					Q10H			Q8H										
Q19I	交通手段満足度 バス					Q10I			Q8I										
Q19J	交通手段満足度 バス					Q10J			Q8J										
Q19K	交通手段満足度 バス					Q10K			Q8K										
Q19L	交通手段満足度 バス					Q10L			Q8L										
Q19M	交通手段満足度 電車					Q10M			Q8M										
Q19N	交通手段満足度 電車					Q10N			Q8N										
Q19O	交通手段満足度 自動車					Q10O			Q8O										
Q19P	交通手段満足度 自動車					Q10P			Q8P										
Q19Q	交通手段満足度 タクシー					Q10Q			Q8Q										
Q19R	交通手段満足度 その他								Q8R										

注) *印は、質問文の表現・形式が異なるため、比較する際に注意が必要である。変更の程度は、*の数に応じて、下記の通りである。

* : 分析にそのまま使用できる（「てにをは」、濁点の位置、末尾などの変更）

** : 分析には注意が必要である（選択肢の数が異なるなどの変更）

*** : 同一の変数として分析に使用するの難しい（概念範囲が異なる）

第3章 地域社会におけるつながりと満足度の関係

音田真希

1. はじめに

近年、日本における近所付き合いの減少が指摘されている。厚生労働省（2006）の調査によると、1975年から2004年にかけて、地方・都市部を問わず近所付き合いの程度が減少していることがわかる。これは、地方から都市部への人口の一極集中による社会の変化が背景にあると考えられる。長年にわたる一極集中は、都市部での人間関係の希薄化、地方での高齢化による地域行事の減少と交流機会の喪失を引き起こしている。

内閣府（2018）によると、家族や友人との会話頻度が多いほど主観的な健康状態が良い傾向が読み取れる。また、Eisenberger NIら（2003）によると社会的孤立が肉体的苦痛と同等のストレスを引き起こすことがわかった。中込 敦士（2024）によると社会とのつながりの希薄さが心理的ストレスを招き、心血管疾患の発症リスクが増加する可能性が示されている。認知症や心疾患のリスク増大にもつながるといことがわかっている。

以上のことから、近所付き合いに代表される地域の交流は生活満足度に大きく影響すると考える。本研究では、この仮説を検証するために、地域の交流が生活満足度を与える影響について分析を行う。

2. 仮説

2.1. 先行研究

原田ら（2015）によると自分が住んでいる地域の社会的結束や信頼（社会的凝集性）が高いと評価している者ほど居住満足度が高い傾向にあることがわかった。また、自分が居住する地域が荒廃していると評価している者ほど居住満足度が低く、自分が住んでいる地域の犯罪被害を認知している者ほど居住満足度が低いことが示されている。

石川ら（2009）の研究では、ソーシャルネットワークを複数の特徴に分類し、それらが生活満足度を与える影響について調査しており、親しい親戚の人数、近所の人々の人数、友人の人数といったネットワークサイズが高齢者の生活満足度に大きな影響を与えることがわかっている。

2.2. 仮説

原田ら（2015）の研究によると、居住満足度において、地域の社会的凝集性と、地域の荒廃度合いや地域における犯罪被害認知では反対の結果が生じることがわかる。その要因としては、社会的凝集性の高い地域において、逸脱的な秩序違反行動に対する社会統制が強くなり、犯罪被害認知や荒廃度が低くなる可能性が示唆されている。そのため、社会的凝集性

が生活満足度に大きな影響を与えていると考えられる。今回は、SSPプロジェクト(2022)で用いられている質問を参考に、近隣への手助け意識と近所との絆の二つの観点から分析する。

石川ら(2009)の研究では、ネットワークサイズ以外に交流頻度や主観的健康観、既婚状況などの個人の属性と生活満足度の関係性についても調査を行っている。調査の結果、ネットワークサイズ以外の単独の要因では、生活満足度に影響がなく、歴史の長い地域ほど、豊かなソーシャルネットワークが維持されていることがわかる。

このことから、高槻市内における調査においても、ネットワークサイズと交流頻度は居住満足度に影響を与えると仮定した。ネットワークサイズについては、研究では親戚数・近所の人数・友人の数三つそれぞれの数を求めているが今回の調査では近所の人数に限定して行う。

仮説1 近所の人との助け合いが高いほど生活満足度が高い

仮説2 近所の人との絆が高いほど生活満足度が高い

仮説3 親しくしている近所の人数が多いほど生活満足度が高い

仮説4 近所との交流頻度が多いほど生活満足度が高い

3. データと変数

3.1. データ

データは令和七年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する18歳以上85歳未満の男女で、計画標本は2,000、有効回答数は1,063、回収率は53.2%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q1: あなたは、現在の生活全体にどのくらい満足していますか。

1. 満足 2. やや満足 3. どちらともいえない 4. やや不満 5. 不満

Q7: あなたは、近所の人とどの程度世間話をしますか。

1. ほぼ毎日 2. 週に3~4回 3. 週に1~2回 4. 月に1~2回 5. 全く話さない

Q8: あなたは、親しい付き合いをしているご近所の方が多いですか。少ないですか。

1. 多い 2. やや多い 3. やや少ない 4. 少ない

Q9: あなたは、困っているとき、近所の人たちは手助けしてくれると思いますか。

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらともいえない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

Q10：あなたの近所の人たちは、強いきずなで結ばれていると思いますか。

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらともいえない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

4. 分析

困っているとき、近所の人たちは手助けしてくれると思うかと生活満足度の二変数間の関連について、クロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、近隣への手助け意識と生活満足度の関連についてクロス集計表を作成したものである。近隣への手助け意識に「そう思う」と回答した人で、生活満足度が「満足」と回答した人が 48%である一方で、近隣への手助け意識に「そう思わない」と回答した人で「満足」と回答した人は 23%である。また、近所の人たちは手助けしてくれると思うかの設問に「そう思う」と回答した人で、生活満足度を「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて 5%であるが、近隣への手助け意識に「そう思わない」と回答した人で生活満足度を「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて 27%である。ここから、近隣への手助け意識が低い人ほど生活満足度も低くなることがわかる。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 95.500 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.151 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、近所の人たちは手助けしてくれると思うかと生活満足度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果である。

表 1 Q1 生活満足度と Q9 近隣への手助け意識のクロス集計表

		Q1 生活満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満		
そう思う	N	45	35	8	2	3	93	
	%	48%	38%	9%	2%	3%	100%	
ややそう思う	N	76	128	36	31	4	275	
	%	28%	47%	13%	11%	1%	100%	
Q9 近隣への 手助け意識	どちらともい	N	65	139	63	31	9	307
	えない	%	21%	45%	21%	10%	3%	100%
あまりそう思	N	29	107	31	31	5	203	
	%	14%	53%	15%	15%	2%	100%	
わかない	N	39	58	29	26	20	172	
	%	23%	34%	17%	15%	12%	100%	
合計	N	254	467	167	121	41	1050	
	%	24%	44%	16%	12%	4%	100%	

$\chi^2(df=16, N=1050)=95.500^{***}$, Cramer V=.151^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

近所の人との絆と生活満足度の二変数間の関連について上記とは別の条件を設け、クロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、近所の人との絆と生活満足度の関連についてクロス集計表を作成したものである。近所の人との絆についての設問に「そう思う」と回答した人で、生活満足度が「満足」と回答した人が 68%である一方で、近所の人との絆が「そう思わない」と回答した人で「満足」と回答した人は 22%である。また、近所の人との絆が「そう思う」と回答した人で、生活満足度を「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて 3%であるが、近所の人との絆が「そう思わない」と回答した人で生活満足度を「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて 25%である。ここから、近所の人との絆が低いと感じる人ほど生活満足度も低くなることがわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 109.396 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.161 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、近所との交流頻度と生活満足度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 2 を支持する結果である。

表 2 Q1 生活満足度と Q10 近所の人との絆のクロス集計表

		Q1 生活満足度					合計	
		満足	やや満足	いけない	やや不満	不満		
そう思う	N	25	8	3	1	0	37	
	%	68%	22%	8%	3%	0%	100%	
ややそう思う	N	38	79	12	13	0	142	
	%	27%	56%	8%	9%	0%	100%	
Q10 近所の人 との絆	どちらともい	N	66	144	57	25	5	297
	えない	%	22%	48%	19%	8%	2%	100%
あまりそう思	N	58	122	52	37	5	274	
	%	21%	45%	19%	14%	2%	100%	
わかない	N	67	114	42	45	31	299	
	%	22%	38%	14%	15%	10%	100%	
そう思わない	N	254	467	166	121	41	1049	
	%	24%	45%	16%	12%	4%	100%	

$\chi^2(df=16, N=1049)=109.396^{***}$, Cramer V=.161^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

世間話の頻度が多いほど生活満足度が高いかを調べるためにクロス集計表を用いて検討する。

表 3 は世間話の頻度の設問に「ほぼ毎日」と回答した人で、生活満足度が「満足」と回答した人が 47.2%である一方で、世間話の頻度が「全く話さない」と回答した人で「満足」と回答した人は 20.9%である。また、世間話の頻度が「ほぼ毎日」と回答した人で、生活満足度を「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて 5.6%であるが、世間話の頻度が「全く話さない」と回答した人で生活満足度を「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて 23.3%である。ここから、世間話の頻度が低い人は生活満足度も低くなることがわかる。

表 3 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 45.040 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.104 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、近所との交流頻度と生活満足度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 3 を支持する結果である。

表 3 Q1 生活満足度と Q7 近所の人との世間話の頻度のクロス集計表

		Q1 生活満足度					合計	
		満足	やや満足	いけない	やや不満	不満		
Q7 世間話の 頻度	ほぼ毎日	N	17	13	4	2	0	36
		%	47%	36%	11%	6%	0%	100%
	週に3~4回	N	33	43	13	7	1	97
		%	34%	44%	13%	7%	1%	100%
	週に1~2回	N	53	109	33	20	4	219
		%	24%	50%	15%	9%	2%	100%
	月に1~2回	N	80	163	66	37	12	358
		%	22%	46%	18%	10%	3%	100%
	まったく話さ ない	N	71	138	51	55	24	339
		%	21%	41%	15%	16%	7%	100%
	合計	N	254	466	167	121	41	1049
		%	24%	44%	16%	12%	4%	100%

$\chi^2(df=16, N=1049)=45.040^{***}$, Cramer V=.104^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

親しいご近所数と生活満足度の二変数間の関連について上記とは別の条件を設け、クロス集計表を用いて検討する。

表 4 は、親しいご近所数と生活満足度の関連についてクロス集計表を作成したものである。親しいご近所数に「多い」と回答した人で、生活満足度が「満足」と回答した人が 75.8% である一方で、親しいご近所数が「少ない」と回答した人で「満足」と回答した人は 21.3% である。また、親しいご近所数が「多い」と回答した人で、生活満足度を「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて 6.1% であるが、親しいご近所数が「少ない」と回答した人で生活満足度を「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて 19.8% である。ここから、親しいご近所数が低い人は生活満足度も低くなることがわかる。

表 4 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 85.389 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.165 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、近所との交流頻度と生活満足度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 3 を支持する結果である。

表 4 Q1 生活満足度と Q8 親しいご近所数のクロス集計表

		Q1 生活満足度					合計	
		どちらとも						
		満足	やや満足	いえない	やや不満	不満		
Q8 親しいご 近所数	1多い	N	25	3	3	2	0	33
		%	76%	9%	9%	6%	0%	100%
	やや多い	N	41	76	14	10	1	142
		%	29%	54%	10%	7%	1%	100%
	やや少ない	N	57	133	44	25	3	262
		%	22%	51%	17%	10%	1%	100%
	少ない	N	131	254	107	85	37	614
		%	21%	41%	17%	14%	6%	100%
	合計	N	254	466	168	122	41	1051
		%	24%	44%	16%	12%	4%	100%

$\chi^2(df=12, N=1051)=85.389^{***}$, Cramer V=.165^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 5、表 6 は、生活満足度（反転）を従属変数、女性ダミー、年齢（実数）、世間話の頻度（反転）、親しい付き合いのご近所数（反転）、近所の人が助けしてくれると思うか（反転）、近所の人との絆（反転）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。なお、本調査において社会的凝集性を測定するために用いた Q9 および Q10 の質問項目は相互に強い関連が想定されるため、多重共線性を考慮し、それぞれの項目を個別に用いた分析を行うこととした。回帰式の調整済み R² 値は 0.016 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 1.6% が説明されている。

表 5 の結果をみると、年齢は負の有意な効果を示しており、その他の独立変数は正の有意な効果を示している。生活満足度は反転しているため、この結果は、年齢が低い人ほど生活満足度が高い傾向にあることを示している。標準化係数（ β ）をみると、世間話の頻度や親しい付き合いのご近所数、近所の人が助けしてくれると思うかの三つの値に大きな差は見られず、これら三つの独立変数はいずれも生活満足度に対して同程度の影響力を持つといえる。一方、女性ダミーは有意な効果がみられなかった。

表 6 の結果をみると、表 5 と同様に、年齢において負の有意、その他の独立変数では正の優位であった。このことから、年齢が低い人ほど生活満足度が高い傾向が確認できる。標準化係数（ β ）をみると、近所の人との絆が 0.131 と大きく、生活満足度に与える影響が強いといえる。一方、女性ダミーは有意な効果がみられなかった。

以上の分析結果から、仮説 1 から仮説 4 はいずれも統計的に有意であることが確認された。とくに、仮説 1 および仮説 2 が支持されたことは、個別の要因にとどまらず、社会的凝集性そのものが生活満足度に影響を及ぼしていることを示唆している。

さらに、重回帰分析の結果を比較すると、「近隣への手助け意識」よりも、「近所の人との絆」のほうが標準化係数（ β ）が大きく、生活満足度に対してより強い影響を持つことが明らかとなった。このことから、実際の支援可能性の認知以上に、日常的な関係性や心理的な

つながりの強さが、生活満足度を高めるうえで重要な役割を果たしていると考えられる。

表 5 生活満足度の重回帰分析 (Q10 を投入)

	B	SE	β
(定数)	3.559	0.140	***
Q47 女性ダミー	0.006	0.068	0.003
Q48 年齢(実数)	-0.009	0.002	-0.136 ***
Q7 世間話の頻度	0.092	0.044	0.094 *
Q8 親しいご近所数	0.135	0.056	0.104 *
Q9 近隣の手助け意識	0.094	0.034	0.105 **
調整済みR ²	0.061		
N	1005		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 6 生活満足度の重回帰分析 (Q9 を投入)

	B	SE	β
(定数)	3.602	0.133	***
Q47 女性ダミー	0.020	0.068	0.009
Q48 年齢(実数)	-0.010	0.002	-0.144 ***
Q7 世間話の頻度	0.089	0.044	0.091 *
Q8 親しいご近所数	0.111	0.058	0.086 †
Q10 近所の人との絆	0.125	0.038	0.131 ***
調整済みR ²	0.064		
N	1005		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5. 考察

本研究は社会的凝集性や近所の人との絆、近隣との助け合い年齢といった違いが生活満足度にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とし、仮説1「社会的凝集性が高いほど生活満足度が高い」仮説2「近所の人との助け合いが高いほど生活満足度が高い」仮説3「親しくしている近所の人数が多いほど生活満足度が高い」仮説4「近所との交流頻度が多いほど生活満足度が高い」という4つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、近所の人から助けられている人ほど「満足」、「やや満足」と回答する割合が高いことから仮説1が支持された。また、近所の人との絆がある人ほど「満足」、「やや満足」と回答している割合が高いことから仮説2が支持された。これら二つの結果が示されたことにより、社会的凝集性は生活満足度に対して影響を持つこ

とが確認された。

この関連をさらに詳しく検討するため、重回帰分析を用いた分析を行ったところ、近隣関係の「質」が生活満足度に与える影響が明らかとなった。分析によれば、近隣への手助け意識より、近所との絆が生活満足度を強く影響していることが判明した。行政や民間のサービスが充実した現代社会において、日常生活の課題を近隣間で完結させる必要性は低下しつつあるが、地域社会の一員として他者と結びついているという主観的な帰属意識は、依然として代替不可能な価値を持ち続けていると考えられる。すなわち、いざという時の実利的な支援の可能性よりも、情緒的な一体感こそが個人の精神の安定や生活の質を支える基盤となっている可能性が示された。

次に、仮説 3 および仮説 4 について検討する。分析の結果、「親しい近隣数」が多い者ほど、また「世間話の頻度」が高い者ほど、生活満足度が高いことが示された。これにより、仮説 3 および仮説 4 はともに支持された。この結果は、ネットワークサイズが生活満足度の重要な規定要因であるとした石川ら (2009) の知見と整合するものである。石川らは、交流頻度単独の影響よりも、親しい近隣の人数といったネットワークの広がりが高齢者の生活満足度に強く寄与することを指摘しており、本調査においても同様の傾向が確認されたといえる。

6. 文献

- [1]…厚生労働省 (2006) 「第 1 章 我が国の社会保障を取り巻く環境と国民意識の変化」 「平成 18 年度 厚生労働白書」 : pp.33-P34
- [2]…Eisenberger, N. I., Lieberman, M. D., & Williams, K. D. (2003) . Does rejection hurt? An fMRI study of social exclusion. *Science*, 302 (5643) : pp.290-292.
- [3]…「社会的孤立・孤独感が健康やウェルビーイングに及ぼす影響」 『医療と社会』 34 巻 1 号 2024 年 34 巻 1 号 : pp. 49-57
- [4]…内閣府 (2018) 『平成 30 年版高齢社会白書』
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/zenbun/30pdf_index.html(2026 年 1 月 13 日閲覧)
- [5]…原田謙, 杉澤秀博 (2015) 「居住満足度に関連する要因—地域環境に着目したマルチレベル分析—」 『理論と方法』 第 30 巻 第 1 号 : pp.101-115
- [6]…SSP プロジェクト (2022) 「2022 年階層と社会意識全国調査」
<https://ssp.hus.osaka-u.ac.jp/pdf/SSP-2022.pdf> : p.101(2025 年 12 月 23 日閲覧)
- [7] …石川久展, 冷水豊, 山口麻衣 (2009) 「高年者のソーシャルネットワークの特徴と生活満足度との関連に関する研究」 『人間福祉学研究』 第 2 巻 第 1 号: pp.49-60

第4章 地域性に着目した生活満足度の分析

櫻井 彰吾

1. はじめに

生活満足度は市民の生活の現状を把握する上で重要な指標である。そのため、市が行う施策を評価する上で生活満足度の変化は重要な指標となる。これまでの高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査においても木村（2014）、大野（2016）など生活満足度を利用した報告書は多く存在している。しかし、生活満足度がどのように決定されるかについては木村（2014）においてその要因が探られていたものの、非常に複雑な関連性を持つ指標であるため分析が不十分な状態となっている。

そこで、視野を広げ全国の居住満足度を調査した宗（2019）を参考にすれば、自治体によって満足度が異なることが示されていた。居住満足度は生活満足度と呼称が異なるものの、指標としての役割に大きな差異は見られなかった。この調査から、自治体を持つ地域の特性や特徴、つまり、地域性に注目することが居住満足度、それに類似する生活満足度を分析する助けになると考える。なお、本章における地域とは高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査における居住地域を指す。

本章では、生活満足度を地域性の観点から分析することにより、地域に関する施策がより生活満足度を向上させやすくなることを目的とし、自治体をより細分化した居住地域の地域性が生活満足度に与える影響を、先行研究に基づき関連性が予測される地域性を中心に検討する。

2. 仮説

2.1. 先行研究

まず、これまでの高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査において生活満足度の要因を調べた調査書を参考にすると、木村（2014）では、世帯収入や夫婦の会話時間、時間のゆとり、電車満足度が、関連性が高いことを示していた。家庭的な要素に注目した調査であるが、地域性と関わりのある電車満足度が関連していることが示されていた。電車やバスといった公共交通機関は地域生活において重要なインフラであるが、路線によって差があるため地域性につながる要素である。電車満足度が生活満足度との関連が示された一方で、バス満足度はこの調査書では関連性があるといえるものではなかった。しかし、大野（2016）は公共交通機関の満足度と生活満足度の関連性を分析し、電車満足度、バス満足度がともに生活満足度と関連があることを示した。これは木村（2014）と異なる結果である。木村（2014）と大野（2016）の分析が異なる結果となった要因として、当時の、交通

機関に対する満足度を調査する質問には「利用しない」という選択肢がなかったため、普段バスを利用しない人の態度が結果に影響を与えたことが考えられる。設問については、2013年度、2015年度と比べて、交通満足度を問う質問が細分化していることも留意する。高槻市以外で行われた地域交通が地域住民に与える影響の研究である佐々木ら（2012）では幸福度におけるバスの充実度の重要性が示されていることも踏まえ、バス、電車それぞれの満足度と生活満足度の関連を検討する。

また、宗（2019）は居住満足度についての調査であるがこの調査の居住地域は市区町村ごとであり高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査における生活満足度と性質は類似すると考えている。また、調査内容からも居住満足度と生活満足度に明確な違いはなく、類似した指標であると考えている。この研究では市区町村及び市区町村の特性によって居住満足度が異なることが示されており、特に、人口が多い都市の生活満足度が高い傾向にあり、人口が少ない都市では人口が多い都市と比べて顕著に居住満足度が低いことが示されていた。宗（2019）は居住満足度の低さが人口低下の要因の一つではないかと指摘していた。この分析に着目し、高槻市内の地域ごとの人口と生活満足度の関連性を検討する。さらに、宗（2019）において因子分析も行われており、親しみやすさ因子、静かさ治安因子、生活利便性因子、イメージ因子の順に居住満足度にプラスの影響があることが示されていた。もっとも影響が強いことが示されていた親しみやすさ因子が、地域との関わりが重要となるものであるため、親しみやすさを示す地域性にも着目して検討する。

2.2. 仮説

交通機関の満足度について、設問の細分化は行われたものの、2015年度から現在において、高槻市においての電車の重要度が下がる要素があると考えられない。バスについては、前述の通り 2013年度、2015年度の調査では選択肢に「利用しない」がなかったことが調査結果を不安定にしたと考えられる。そのうえで、佐々木ら（2012）の調査を踏まえ、高槻市においてもバスが生活に与える影響は少なくないだろうと考える。よって電車満足度、バス満足度ともに生活満足度と関連性があると推測する。

また、宗（2019）から、地域ごとに生活満足度が異なることから、居住地域の地域性が要因となっていると考えるため居住地域の満足度が高いほど生活満足度が高いと考える。加えて、宗（2019）の分析では人口が多い地域ほど生活満足度が高いとされており、人口が多い地域は発展しやすいと捉えることができることから、その関連が高槻市を地域ごとに分割した場合でも同様の関連があると考えられる。さらに、宗（2019）の因子分析から親しみやすさ因子に着目し、居住地域に親しくしている人が多いことが重要な要素であると考え、居住地域に親しくしている人が多いほど生活満足度が高いと推測する。一方で、地域の人と交流することができる地域活動が生活満足度を向上させるのではないかと捉えられるため、地域活動に参加する頻度が高いほど生活満足度が高いと考える。

仮説 1:電車満足度が高いほど生活満足度が高い。

仮説 2:バス満足度が高いほど生活満足度が高い。

仮説 3:居住地域の満足度が高いほど生活満足度が高い。

仮説 4:人口が多い地域ほど生活満足度が高い。

仮説 5:住んでいる地域に親しくしている人が多いほど生活満足度が高い。

仮説 6:地域活動の参加頻度が高いほど生活満足度が高い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和七年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,063、回収率は 53.2 である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q1：あなたは、現在の生活全体にどのくらい満足していますか。（生活満足度）

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満

Q4：あなたのお住まいの地域は、全体的に暮らしやすいと思いますか。

1.そう思う 2.ややそう思う 3.どちらともいえない 4.あまりそう思わない
5.そう思わない

Q6：あなたは、現在お住まいの地域で、地域活動に参加していますか。

1.よく参加している 2.ときどき参加している 3.ほとんど参加していない
4.まったく参加していない

Q8：あなたは、親しい付き合いをしているご近所の方が多いですか。少ないですか。

1. 多い 2.やや多い 3.やや少ない 4.少ない

Q19：高槻市の交通手段におけるそれぞれの現状について、あなたはどのくらい満足していますか。

I【バス】：路線・系統

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満 6.利用しない

J【バス】：ダイヤ

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満 6.利用しない

K【バス】：バス停

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満 6.利用しない

M【鉄道】：乗り方のわかりやすさ

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満 6.利用しない

N【鉄道】：駅のつかいやすさ

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満 6.利用しない

I~K を、数値を反転し、足し合わせてバス満足度、M と N を、数値を反転し、足し合わせて電車満足度とした。どちらも満足度が高いほど数値が高くなる変数である。

Q51：あなたのお住まいの地域はどこですか。（ ）内の小学校区を参考にしてお答えください。

1. 檜田地区（檜田小学校）
2. 高槻北地区（芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小校）
3. 高槻南地区（高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校）
4. 五領地区（五領・上牧小学校）
5. 高槻西地区（郡家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校）
6. 如是・富田地区（芝生・丸橋・寿栄・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校）
7. 三箇牧地区（三箇牧・柱本小学校）

人口が著しく少なく、地域としての分析が難しい檜田地区は近隣地区である高槻北地区に含める

4. 分析

電車満足度と生活満足度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、電車満足度と生活満足度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、電車満足度が「10」である人で、生活満足度が「満足」「やや満足」と回答した人が合わせて約 80%である一方で、「2」と回答した人で「満足」「やや満足」と回答した人は合わせて約 5%である。また、電車満足度が「2」と回答した人で、生活満足度が「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて約 44%であるが、電車満足度が「10」と回答した人で、生活満足度が「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて約 10%である。これらのことから、電車満足度が高い人ほど生活満足度が高くなる傾向がわかる。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 175.413 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.213 と一定の強さの関連が認められる。以上

のことから、電車満足度と生活満足度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果である。

表 1 電車満足度と Q1 生活満足度のクロス集計表

		Q1 生活満足度					合計		
		3 どちらと							
		1 満足	2 やや満足	もいえない	4 やや不満	5 不満			
電車満足度	2	N	1	1	3	1	3	9	
		%	11%	11%	33%	11%	33%	100%	
		N	1	1	1	0	2	5	
		%	20%	20%	20%	0%	40%	100%	
		N	5	3	1	1	5	15	
		%	33%	20%	7%	7%	33%	100%	
		N	3	10	5	9	1	28	
		%	11%	36%	18%	32%	4%	100%	
		N	19	68	40	26	9	162	
		%	12%	42%	25%	16%	6%	100%	
		N	12	40	17	12	2	83	
		%	14%	48%	20%	14%	2%	100%	
		N	72	174	50	28	7	331	
		%	22%	53%	15%	8%	2%	100%	
		N	23	39	9	7	1	79	
		%	29%	49%	11%	9%	1%	100%	
		N	102	100	24	18	8	252	
		%	40%	40%	10%	7%	3%	100%	
	合計		N	238	436	150	102	38	964
			%	25%	45%	16%	11%	4%	100%

$\chi^2(df=32, N=964)=175.413^{***}$, Cramer V=.213^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

バス満足度と生活満足度の二変数間の関連について条件を設け、クロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、バス満足度と生活満足度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、バス満足度の設問に「20」と回答した人で、生活満足度が「満足」「やや満足」と回答した人が合わせて約 80%である一方で、「4」と回答した人で「満足」「やや満足」と回答した人は合わせて約 38%である。また、バス満足度が「4」と回答した人で、生活満足度が「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて約 38%であるが、バス満足度が「20」と回答した人で、生活満足度が「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて約 9%である。これらことから、バス満足度が高い人ほど生活満足度が高くなる傾向がわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 142.078 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.209 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、バス満足度と生活満足度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考え

られる。これは、仮説 2 を支持する結果である。

表 2 バス満足度と Q1 生活満足度のクロス集計表

		Q1 生活満足度					合計	
		3 どちらと						
		1 満足	2 やや満足	もいえない	4 やや不満	5 不満		
バス満足度	4	N	1	2	2	0	3	8
		%	13%	25%	25%	0%	38%	100%
	5	N	2	0	0	1	0	3
		%	67%	0%	0%	33%	0%	100%
	6	N	0	4	3	6	2	15
		%	0%	27%	20%	40%	13%	100%
	7	N	1	5	3	1	0	10
		%	10%	50%	30%	10%	0%	100%
	8	N	3	11	1	8	0	23
		%	13%	48%	4%	35%	0%	100%
	9	N	7	14	3	3	2	29
		%	24%	48%	10%	10%	7%	100%
	10	N	10	26	7	15	2	60
		%	17%	43%	12%	25%	3%	100%
	11	N	11	22	8	7	2	50
		%	22%	44%	16%	14%	4%	100%
	12	N	20	57	32	12	3	124
		%	16%	46%	26%	10%	2%	100%
	13	N	10	24	13	8	2	57
		%	18%	42%	23%	14%	4%	100%
14	N	16	31	11	8	5	71	
	%	23%	44%	15%	11%	7%	100%	
15	N	13	26	6	5	3	53	
	%	25%	49%	11%	9%	6%	100%	
16	N	29	70	20	8	2	129	
	%	22%	54%	16%	6%	2%	100%	
17	N	18	29	5	3	2	57	
	%	32%	51%	9%	5%	4%	100%	
18	N	10	16	4	1	0	31	
	%	32%	52%	13%	3%	0%	100%	
19	N	11	10	6	2	0	29	
	%	38%	34%	21%	7%	0%	100%	
20	N	30	23	7	4	2	66	
	%	45%	35%	11%	6%	3%	100%	
合計		N	192	370	131	92	30	815
		%	24%	45%	16%	11%	4%	100%

$\chi^2(df=64, N=815)=142.078^{***}$, Cramer V=.209^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

居住地域は暮らしやすいかと生活満足度の二変数間の関連について条件を設け、クロス集計表を用いて検討する。

表 3 は、居住地域は暮らしやすいかと生活満足度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、居住地域は暮らしやすいかの設問に「そう思う」と回答した人で、

生活満足度が「満足」「やや満足」と回答した人が合わせて約 84%であるが、「そう思わない」と回答した人で「満足」「やや満足」と回答した人は合わせて約 10%である。また、居住地域は暮らしやすいかの設問で「そう思わない」と回答した人で、生活満足度が「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて約 90%であるが、「そう思う」と回答した人で「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて約 8%である。これらのことから、居住地域が暮らしやすいほど生活満足度も高くなる傾向があることがわかる。

表 3 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 284.725 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.259 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、地域満足度と生活満足度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 3 を支持する結果である。

表 3 Q4 居住地域は暮らしやすいかと Q1 生活満足度のクロス集計表

		Q1 生活満足度					合計
		3 どちらとも					
		1 満足	2 やや満足	いえない	4 やや不満	5 不満	
Q4 居住地域は暮らしやすいか	1 そう思う	N 195	201	39	28	9	472
		% 41%	43%	8%	6%	2%	100%
	2 やや思う	N 50	219	88	54	14	425
	う	% 12%	52%	21%	13%	3%	100%
	3 どちらとも	N 6	39	33	21	8	107
	いえない	% 6%	36%	31%	20%	7%	100%
	4 あまり思う	N 3	10	10	16	6	45
	思わない	% 7%	22%	22%	36%	13%	100%
	5 そう思わない	N 0	1	0	4	5	10
	い	% 0%	10%	0%	40%	50%	100%
合計	N 254	470	170	123	42	1059	
	% 24%	44%	16%	12%	4%	100%	

$\chi^2(df=16, N=1059)=284.725^{***}$, Cramer V=.259^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

人口ごとにならべた居住地域と生活満足度の二変数間の関連について条件を設け、クロス集計表を用いて検討する。

表 4 は、居住地域と生活満足度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。生活満足度において「満足」「やや満足」と答えた人は、三箇牧地域が約 53%と他の地域より低いものの他の地域は 70%前後であり差は少ない。また、生活満足度を「不満」「やや不満」と答えた人は、三箇牧地域が約 26%と高いものの他の地域は 15%前後である。ここから、三箇牧地域の生活満足度が低いものの居住地域ごとの生活満足度の傾向はほとんどないことがわかる。

表 4 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 16.857 であり、統計的に有意でない。また、Cramer の連関係数は 0.065 と関連が認められない。以上のことから、居住地域と生活満足度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連がないと考えられる。これは、仮説

4 を支持しない結果である。

表 4 Q51 居住地域と Q1 生活満足度のクロス集計表

		Q1 生活満足度					合計	
		3 どちらと			4 やや不満	5 不満		
		1 満足	2 やや満足	3 どちらと			4 やや不満	5 不満
Q51 居住地域	2 高槻北地区	N	76	149	42	29	11	307
		%	25%	49%	14%	9%	4%	100%
	3 高槻南地区	N	64	111	43	33	11	262
		%	24%	42%	16%	13%	4%	100%
	4 五領地区	N	7	16	5	4	0	32
		%	22%	50%	16%	13%	0%	100%
	5 高槻西地区	N	44	88	27	18	11	188
		%	23%	47%	14%	10%	6%	100%
	6 如是・富田地区	N	46	83	36	24	4	193
		%	24%	43%	19%	12%	2%	100%
	7 三箇牧地区	N	7	9	6	7	1	30
		%	23%	30%	20%	23%	3%	100%
	合計	N	244	456	159	115	38	1012
		%	24%	45%	16%	11%	4%	100%

$\chi^2(df=20, N=1012)=16.857$, Cramer V=.065

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

親しく付き合いしている人ご近所の数と生活満足度の二変数間の関連について条件を設け、クロス集計表を用いて検討する。

表 5 は、親しい付き合いをしているご近所の数と生活満足度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、親しい付き合いをしているご近所の数の設問に「多い」と回答した人で、生活満足度が「満足」「やや満足」と回答した人が合わせて約 85%であるが、「少ない」と回答した人で「満足」「やや満足」と回答した人は合わせて約 63%である。また、親しい付き合いをしているご近所の数の設問で「少ない」と回答した人で、生活満足度が「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて 20%であるが、「多い」と回答した人で「不満」「やや不満」と回答した人は約 6%である。これらのことから、親しい付き合いをしているご近所の数が多いほど生活満足度も高くなる傾向があることがわかる。

表 5 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 85.389 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.165 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、親しい付き合いをしているご近所の数と生活満足度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 5 を支持する結果である。

表5 Q8 親しい付き合いをしているご近所の数と Q1 生活満足度のクロス集計表

		Q1 生活満足度					合計	
		1 満足	2 やや満足	3 どちらとも いえない	4 やや不満	5 不満		
Q8 親しい 付き合いを している ご近所の数	1 多い	N	25	3	3	2	0	33
		%	76%	9%	9%	6%	0%	100%
	2 やや多い	N	41	76	14	10	1	142
		%	29%	54%	10%	7%	1%	100%
	3 やや少ない	N	57	133	44	25	3	262
		%	22%	51%	17%	10%	1%	100%
	4 少ない	N	131	254	107	85	37	614
		%	21%	41%	17%	14%	6%	100%
合計	N	254	466	168	122	41	1051	
	%	24%	44%	16%	12%	4%	100%	

$\chi^2(df=12, N=1051)=85.389^{***}$, Cramer V=.165^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

地域活動に参加する頻度と生活満足度の二変数間の関連について条件を設け、クロス集計表を用いて検討する。

表6は、地域活動に参加する頻度と生活満足度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、地域活動に参加する頻度の設問に「良く参加している」と回答した人で、生活満足度が「満足」「やや満足」と回答した人が合わせて約89%であるが、「まったく参加していない」と回答した人で「満足」「やや満足」と回答した人は合わせて約61%である。また、地域活動に参加する頻度の設問で「まったく参加していない」と回答した人で、生活満足度が「不満」「やや不満」と回答した人は合わせて約22%であるが、「多い」と回答した人で「不満」「やや不満」と回答した人は約9%である。これらのことから、地域活動に参加する頻度が高いほど生活満足度も高くなる傾向があることがわかる。

表6のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は51.457であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramerの連関係数は0.127と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、地域活動に参加する頻度と生活満足度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説6を支持する結果である。

表 6 Q6 地域活動に参加する頻度と Q1 生活満足度のクロス集計表

		Q1 生活満足度					合計	
		3 どちらと			5 不満			
		1 満足	2 やや満足	4 やや不満				
Q6 地域活動 に参加する 頻度	1 よく参加し ている	N	28	22	1	5	0	56
		%	50%	39%	2%	9%	0%	100%
	2 ときどき参 加している	N	67	124	38	23	9	261
		%	26%	48%	15%	9%	3%	100%
	3 ほとんど参 加していない	N	69	170	62	34	8	343
		%	20%	50%	18%	10%	2%	100%
	4 まったく参 加していない	N	90	152	69	61	25	397
		%	23%	38%	17%	15%	6%	100%
合計		N	254	468	170	123	42	1057
		%	24%	44%	16%	12%	4%	100%

$\chi^2(df=12, N=1057)=51.457^{***}$, Cramer V=.127***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 7 は、生活満足度（反転）を女性ダミー、年齢（実数）、電車満足度、バス満足度、居住地域は暮らしやすいか（反転）、親しい付き合いをしているご近所の数（反転）、地域活動に参加する頻度（反転）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R²値は 0.221 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 22.1%が説明されている。

結果をみると、電車満足度、居住地域は暮らしやすいか、親しい付き合いをしているご近所の数が正で有意、年齢が負で有意であった。これは、低年齢で電車満足度が高く居住地域が暮らしやすく親しいつきあいをしているご近所の数が多いほど生活満足度が高いことがわかる。一方、女性ダミー、バス満足度、地域活動に参加する頻度は有意な効果がみられなかった。標準化係数 (B) をみると、「居住地域は暮らしやすいか」が 0.343 と大きく、居住地域の暮らしやすさが生活満足度に与える影響が強いといえる。上記の結果は、仮説 2、仮説 6 を支持せず、仮説 1、仮説 3、仮説 5 を支持する結果である。

表 7 Q1 生活満足度（反転）の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	1.074	0.252	***
Q53 女性ダミー	-0.032	0.070	-0.015
Q54 年齢(実数)	-0.005	0.002	-0.074 *
電車満足度	0.106	0.025	0.169 ***
バス満足度	-0.003	0.012	-0.011
Q4 居住地域は暮らしやすいか(反転)	0.424	0.044	0.343 ***
Q8 親しい付き合いをしているご近所の数(反転)	0.177	0.046	0.143 ***
Q6 地域活動に参加する頻度(反転)	0.044	0.043	0.039
調整済みR ²	0.221		
N	755		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 7 ではバス満足度は有意ではなく仮説 2 は支持されなかった。しかし、表 2 のクロス集計表では二変数間の関連は 1%水準で有意であり、バス満足度が生活満足度に影響を与えないとは考えにくい。そのため、回帰分析では他の変数の影響を受けたと考える。表 7 で有意となった変数を見ると電車満足度と居住地域は暮らしやすいかがある。高槻市のバスは駅を中心に広がっているため、駅の使いやすさの観点からバス満足度が電車満足度に影響を与えていると考えられる。そこで、バス満足度が高いと電車満足度が高くなり、電車満足度が高くなると生活満足度が高くなる媒介が起きていると仮説を立てた。また、バスは最も居住地域に身近な公共交通機関である場合が多く、バス満足度が高いと居住地域が暮らしやすく感じるのではないかと考える。そこで、バス満足度が高いと居住地域が暮らしやすいと感じ、居住地域が暮らしやすいと感じるほど生活満足度が高くなるという媒介が起きていると仮説を立てた。これらの仮説を検証するために、まず、表 7 で行った回帰分析から電車満足度と居住地域は暮らしやすいかを取り除いた回帰分析を行い、独立変数からその二つの変数を取り除いた際にバス満足度の影響が有意であるか調べる。

表 8 は、生活満足度（反転）を女性ダミー、年齢（実数）、バス満足度、親しい付き合いをしているご近所の数（反転）、地域活動に参加する頻度（反転）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R²値は 0.095 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 9.5%が説明されている。

結果をみると、バス満足度、親しい付き合いをしているご近所の数、地域活動に参加する頻度が正で有意、年齢が負で有意であった。これは、低年齢でバス満足度が高く親しい付き合いをしているご近所の数が多く、地域活動に参加する頻度が高いほど生活満足度が高いことがわかる。一方、女性ダミーは有意な効果がみられなかった。標準化係数（ β ）をみる

と、バス満足度が 0.205 と大きく、バス満足度が生活満足度に与える影響が強いといえる。上記の結果は、仮説 2、仮説 5、仮説 6 を支持する結果である。

表 8 Q1 生活満足度（反転）の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	2.781	0.206	***
Q53 女性ダミー	-0.012	0.074	-0.005
Q54 年齢(実数)	-0.007	0.002	-0.109 **
バス満足度	0.060	0.010	0.205 ***
Q8 親しい付き合いをしているご近所の数(反転)	0.233	0.049	0.187 ***
Q6 地域活動に参加する頻度(反転)	0.079	0.045	0.069 †
調整済みR ²	0.095		
N	787		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 9 は表 8 に電車満足度を加えて回帰分析を行う。表 8 と比較し、バス満足度の影響の変化と電車満足度の影響を分析することでバス満足度の影響を電車満足度が媒介しているとする仮説を検証する。

表 9 は、生活満足度（反転）を女性ダミー、年齢（実数）、電車満足度、バス満足度、親しい付き合いをしているご近所の数（反転）、地域活動に参加する頻度（反転）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R²値は 0.125 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 12.5%が説明されている。

結果をみると、電車満足度、バス満足度、親しい付き合いをしているご近所の数、地域活動に参加する頻度が正で有意、年齢が負で有意であった。これは、低年齢で電車満足度が高くバス満足度が高く親しい付き合いをしているご近所の数が多く地域活動に参加する頻度が高いほど生活満足度が高いことがわかる。一方、女性ダミーは有意な効果がみられなかった。標準化係数（ β ）をみると、「電車満足度」が 0.232 と大きく、電車満足度が生活満足度に与える影響が強いといえる。上記の結果は、仮説 1、仮説 2、仮説 5、仮説 6 を支持する結果である。

さらに、表 8 と比較し、電車満足度とバス満足度の媒介分析を行う。表 8 では 1%水準で有意であったバス満足度が、バス満足度を加えた表 9 では 10%水準で有意であり標準化係数（ β ）が低下するという結果である。表 9 において電車満足度は 1%水準で有意であり標準化係数（ β ）が最も高い。よってバス満足度の影響を電車満足度が媒介しているとする仮

説は支持される結果である。

表 9 Q1 生活満足度（反転）の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	2.114	0.241	***
女性ダミー	-0.005	0.074	-0.003
年齢(実数)	-0.006	0.002	-0.087 *
電車満足度	0.146	0.026	0.232 ***
バス満足度	0.022	0.012	0.073 †
親しい付き合いをしているご近所の数(反転)	0.206	0.049	0.166 ***
地域活動に参加する頻度(反転)	0.082	0.045	0.072 †
調整済みR ²	0.125		
N	756		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 10 は表 8 に居住地域は暮らしやすいかを加えて回帰分析を行う。表 8 と比較し、バス満足度の影響の変化と居住地域は暮らしやすいかの影響を分析することでバス満足度の影響を居住地域は暮らしやすいかが媒介しているとする仮説を検証する。

表 10 は、生活満足度（反転）を女性ダミー、年齢（実数）、バス満足度、居住地域は暮らしやすいか（反転）、親しい付き合いをしているご近所の数（反転）、地域活動に参加する頻度（反転）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R²値は 0.202 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 20.2%が説明されている。

結果をみると、バス満足度、居住地域は暮らしやすいか、親しい付き合いをしているご近所の数、地域活動に参加する頻度が正で有意、年齢が負で有意であった。これは、低年齢でバス満足度が高く居住地域が暮らしやすく親しい付き合いをしているご近所の数が多く地域活動に参加する頻度が高いほど生活満足度が高いことがわかる。一方、女性ダミーは有意な効果がみられなかった。標準化係数（ β ）をみると、「居住地域は暮らしやすいか」が 0.354 と大きく、バス満足度が生活満足度に与える影響が強いといえる。上記の結果は、仮説 2、仮説 3、仮説 5、仮説 6 を支持する結果である。

さらに、表 8 と比較し、居住地域は暮らしやすいかとバス満足度の媒介分析を行う。表 8 では 1%水準で有意であったバス満足度が、居住地域は暮らしやすいかを加えた表 9 では 5%水準で有意であり標準化係数（ β ）が低下するという結果である。表 9 において居住地域は暮らしやすいかは 1%水準で有意であり標準化係数（ β ）が最も高い。よってバス満足

度の影響を居住地域は暮らしやすいかが媒介しているとする仮説は支持される結果である。

表 10 Q1 生活満足度（反転）の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	1.482	0.231	***
女性ダミー	-0.030	0.070	-0.014
年齢(実数)	-0.006	0.002	-0.093 **
バス満足度	0.025	0.010	0.085 *
居住地域は暮らしやすいか(反転)	0.440	0.043	0.354 ***
親しい付き合いをしているご近所の数(反転)	0.195	0.046	0.157 ***
地域活動に参加する頻度(反転)	0.048	0.043	0.042
調整済みR ²	0.202		
N	786		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 7 の回帰分析では地域活動に参加する頻度が有意ではなく仮説 6 が支持されなかった。しかし、表 6 のクロス集計表では二変数間の関連は 1%水準で有意であり、地域活動の参加頻度が生活満足度に影響を与えないとは考えにくい。そのため、回帰分析では他の変数の影響を受けたと考える。表 7 で有意となった変数を見ると親しい付き合いをしているご近所の数がある。地域活動に参加するとご近所と関わる機会が増え親しい付き合いをしているご近所の数が増えると考えられる。そこで、地域活動に参加する頻度が高いと親しい付き合いをしているご近所の数が増加し、親しい付き合いをしているご近所の数が多いと生活満足度が高くなる媒介が起きていると仮説を立てた。この仮説を検証するために、表 7 で行った回帰分析から親しい付き合いをしているご近所の数を取り除いた回帰分析を行い、その結果を表 7 と比較する。

表 11 は、生活満足度（反転）を女性ダミー、年齢（実数）、電車満足度、バス満足度、居住地域は暮らしやすいか（反転）、地域活動に参加する頻度（反転）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R²値は 0.213 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 21.3%が説明されている。

結果をみると、電車満足度、居住地域は暮らしやすいか、地域活動に参加する頻度が正で有意、年齢が負で有意であった。これは、低年齢で電車満足度が高く居住地域が暮らしやすく地域活動に参加する頻度が高いほど生活満足度が高いことがわかる。一方、女性ダミー、バス満足度は有意な効果がみられなかった。標準化係数（ β ）をみると、「居住地域は暮ら

しやすいか」が 0.351 と大きく、居住地域の暮らしやすさが生活満足度に与える影響が強いといえる。上記の結果は、仮説 1、仮説 3、仮説 6 を支持する結果である。

さらに、表 7 と比較し、地域活動に参加する頻度と親しい付き合いをしているご近所の数の媒介分析を行う。表 11 では 1%水準で有意であった地域活動に参加する頻度が、親しい付き合いをしているご近所の数を加えた表 7 では有意ではないという結果である。表 7 において親しい付き合いをしているご近所の数は 1%水準で有意である。よって地域活動に参加する頻度の影響を親しい付き合いをしているご近所の数が媒介しているとする仮説は支持される結果である。

表 11 Q1 生活満足度（反転）の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	1.090	0.254	***
Q53 女性ダミー	0.016	0.070	0.008
Q54 年齢(実数)	-0.004	0.002	-0.059 †
電車満足度	0.108	0.025	0.171 ***
バス満足度	-0.003	0.012	-0.011
Q4 居住地域は暮らしやすいか(反転)	0.434	0.044	0.351 ***
Q6 地域活動に参加する頻度(反転)	0.113	0.039	0.100 **
調整済みR ²	0.213		
N	756		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5. 考察

本研究は公共交通機関の満足度、居住地域は暮らしやすいかといった居住地域が持つ特性や特徴である地域性が生活満足度にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「電車満足度が高いほど生活満足度が高い。」仮説 2「バス満足度が高いほど生活満足度が高い。」仮説 3「居住地域の満足度が高いほど生活満足度が高い。」仮説 4「人口が多い地域ほど生活満足度が高い。」仮説 5「住んでいる地域に親しくしている人が多いほど生活満足度が高い。」仮説 6「地域活動の参加頻度が高いほど生活満足度が高い。」という 6 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、電車満足度が高い人ほど生活満足度が高い傾向があることから仮説 1 が支持された。バス満足度が高い人ほど生活満足度が高い傾向があることから仮説 2 が支持された。居住地域が暮らしやすい人ほど生活満足度が高い傾向があることから仮説 3 が支持された。親しくしているご近所の数は多い人ほど生活満足度が高い傾向があることから仮説 5 が支持された。地域活動に参加する頻度が高い人ほど生活満足度が高い傾向がある

ことから仮説 6 が支持された。一方、仮説 4 は支持されなかった。重回帰分析の結果をまとめると、低年齢で電車満足度が高く居住地域が暮らしやすく親しい付き合いをしているご近所の数が多いほど生活満足度が高いことがわかった。また、居住地域の暮らしやすさが生活満足度に与える影響が強いといえることがわかった。さらに、バス満足度、地域活動に参加する頻度について、バス満足度の影響を電車満足度、居住地域の暮らしやすさがそれぞれ媒介している、地域活動に参加する頻度の影響を親しい付き合いをしているご近所の数が媒介しているとする仮説を立て、媒介分析を行った。媒介分析の仮説はすべて支持された。

今回の分析結果から生活満足度を上昇させるためには、電車満足度を上昇させる施策、居住地域の暮らしやすさを上昇させる施策、親しくしているご近所の数の数を上昇させる施策が有効であることが分かった。また、バス満足度を上昇させると電車満足度、居住地域の暮らしやすさが上昇し、地域活動に参加する頻度が高くなると親しい付き合いをしているご近所の数が増加することが分かった。しかし、居住地域は生活満足度と関連がなかった。居住地域の暮らしやすさやその他分析に用いた地域性が生活満足度と関連があるにも関わらず居住地域が生活満足度と関連がないという納得し難い結果となった。このことから、この調査の地域区分では地域性を反映していない、もしくは市民が認識する居住地域を反映できていない可能性がある。今回の調査で使用した地域区分は小学校区を合成し 7 つに分類している。細分化された小学校区での分析や宗（2019）を踏まえ人口密度を参照し分けするなど地域区分を見直しての分析を行えば結果が変わる可能性がある。生活満足度を上昇させる施策の実行には高槻市における地域性をより理解する必要があると考える。

6. 文献

- [1]…関西大学総合情報学部・大野友也（2016）「生活満足度と公共交通機関の満足度の関連性」『平成 27 年度社会調査実習報告書 —高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査』 pp131-136
- [2]…佐々木公明・徳永幸之（2012）「地域交通と住民の幸福—「アマルティア・センの潜在能力」を反映した地域交通システムの評価—」『運輸政策研究』14（4） pp2-12
- [3]…宗健（2019）「居住満足度の構成因子と地域差の実証分析」『都市住宅学会第 27 回学術講演会』
- [4]…佐々木邦明（2014）「交通不便地域の交通環境が個人の生活満足度に与える影響に関する基礎的研究 重要な活動の利用可能選択肢と断念経験に着目して」『都市計画論文集』49（3） pp411-416
- [5]…関西大学総合情報学部・木村太一（2014）「生活満足度とその要因」『平成 25 年度社会調査実習報告書—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—』 p92-95
- [6]…高槻市（2025）「高槻市の人口（令和 7 年）」
<https://www.city.takatsuki.osaka.jp/soshiki/11/33243.html> （2025 年 6 月 5 日 閲覧）

第5章 年齢・性別と音楽聴取形態

玉野 涼聖

1. はじめに

現在、人々はイヤホンを持っていればスマホを使い手軽にどこでも音楽を楽しめる。そのため移動時間などを含め日常的に意識的な音楽聴取を行っている人は増加している。楽天インサイト株式会社が2021年4月9日（金）から4月11日（日）の3日間、楽天インサイトに登録しているモニター（約220万人）の中から、全国の20～69歳の男女1,000人を対象に行った調査によると普段音楽を聴く頻度が「ほぼ毎日」と答えた人が4割弱であった。調査対象者が日常的に音楽を聴く人が多い現在において、音楽を聴く環境（以下聴取環境）に対してどのような人の特徴が関係しているのだろうか。今回は聴取環境を自宅内と自宅外という尺度でとらえ人の特徴の関係を調査することで、それぞれの人々にあったデバイスの形などを考察していく。また新たな音楽サービスの形についても、これらの情報から考える。

2. 仮説

2.1. 先行研究

松田（2013）より118名の大学生に行った質問票調査でスピーカーよりもイヤホンで音楽聴取をする時間が長いことが分かった。また、「専念聴取」と「ながら聴取」にかける時間の比率を10分比で書いてもらったところ、専念聴取時間の占める割合が3以下だとする回答数の合計は78.8%（93人）にのぼった。このことからイヤホンが音楽聴取において重要なデバイスとなっていることがうかがえる。

NHKの国民生活時間調査（2020）において一日に音楽を聴いていた平均時間は行為者のみに絞ると平日1時間36分、休日2時間1分であり音楽聴取は生活の一部であると言えるだろう。平日の音楽聴取行為者割合が性別で見ると男性約8.1%に対して女性約11.7%であり、年齢で見ると10代約24.8%、20代約16.7%、30代約9.7%、40代約9.0%、50代約7.8%、60代約8.6%、70代以上6.0%であった。

遠藤（2014）より音楽ジャンルの視聴率と学歴の関係において、小中学卒のほうが視聴率の高い音楽ジャンルはなく、学歴が音楽への関心と関係していると考えられる。

2.2. 仮説

NHKの国民生活時間調査（2020）より10代20代の若年層のほうが、総音楽聴取時間が長いため、自宅内と自宅外に状況を絞っても同じ傾向がみられると考えた。先行研究より学歴別音楽の聴取率においていずれも低学歴のほうが、視聴率が高いものが見られなかったため、自宅内と自宅外の両方で学歴と音楽聴取時間に影響がみられると考えた。自宅外で

の音楽聴取時間が長いことは習慣として音楽を聴くという行動が染みついており、自宅内の音楽聴取時間にも影響するのではないかと考えた。

仮説 1 若年層のほうが自宅内での音楽聴取時間が長い

仮説 2 若年層のほうが自宅外での音楽聴取時間が長い

仮説 3 学歴が高いほうが自宅内での音楽聴取時間が長い

仮説 4 学歴が高いほうが自宅外での音楽聴取時間が長い

仮説 5 自宅内での音楽聴取時間が長いほど自宅外での音楽聴取時間も長い

3. データと変数

3.1. データ

データは令和七年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,063、回収率は 53.2 である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q 14 : あなたは、ふだん、1 日にどれくらい音楽を聴いていますか。自宅内で聴いている時間と、自宅外で聴いている時間、それぞれについてお答えください。(音楽聴取時間)

A. 自宅内で音楽を聴く時間

- | | |
|------------------|------------------|
| 1. 全く聴かない | 4. 30 分以上 1 時間未満 |
| 2. 10 分未満 | 5. 1 時間以上 2 時間未満 |
| 3. 10 分以上 30 分未満 | 6. 2 時間以上 |

B. 自宅外で音楽を聴く時間

- | | |
|------------------|------------------|
| 1. 全く聴かない | 4. 30 分以上 1 時間未満 |
| 2. 10 分未満 | 5. 1 時間以上 2 時間未満 |
| 3. 10 分以上 30 分未満 | 6. 2 時間以上 |

上記の選択肢に対して、全く聴かないを0、10分未満を5、10分以上30分未満を20、30分以上1時間未満を45、1時間以上2時間未満を90、2時間以上を150として、実数化を行った。

Q 47 : あなたの性別はどちらですか。(女性ダミー)

1. 男性 2. 女性

上記の選択に対して、男性を0、女性を1とする女性ダミーを作成した。

Q 48 : あなたの年齢をお答えください (年齢)

1.18歳、19歳 2.20代 3.30代 4.40代 5.50代 6.60代 7.70代以上

上記の選択肢に対して、18歳、19歳を18.5、20代を24.5、30代を34.5、40代を44.5、50代を54.5、60代を64.5、70代を74.5として、実数化を行った。

Q 50 : あなたの最終学歴を教えてください。(在学中の方は、いま通っている学校を選んでください) (教育年数)

1.中学 (旧小学校など) 2.高校 (または旧制中学など) 3.専門学校 4.短大・高専 (5年制) 5.大学 (旧高専)・大学院 6.わからない

上記の選択肢に対して、中学 (旧小学校など) を9、高校 (または旧制中学など) を12、専門学校を13、短大・高専 (5年制) を14、大学 (旧高専)・大学院を16として教育年数の実数化を行った上で、わからないは欠損値として処理した。

4. 分析

はじめに、年齢と音楽聴取時間の単純な変数間の関係についてクロス集計表を用いて検討する。

表1は、年齢と自宅内での音楽聴取時間についてクロス集計表を作成したものである。まず、年齢の設問に「20代」と回答した人で、自宅内音楽聴取時間が「まったく聴かない」と回答した人が8%である一方で、年齢が「70代以上」と回答した人で「まったく聴かない」と回答した人が28%である。また、年齢が「20代」と回答した人で、自宅内音楽聴取時間が「1時間以上2時間未満」「2時間以上」と回答した人は合わせて31%であるが、年齢が「70代以上」と回答した人で、「1時間以上2時間未満」「2時間以上」と回答した人は合わせて10%である。これらから、年齢を重ねている人ほど自宅内音楽聴取時間が短くなる傾向があることがわかる。

表1のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は56.555であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramerの連関係数は0.105と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、年齢と自宅内音楽聴取時間の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説1を支持する結果である。

表 1 Q48 年齢と Q14_A 自宅内での音楽を聴く時間のクロス集計表

		Q14_A 自宅内での音楽聞く時間						合計	
		まったく聴かない	10分以上30分未満				2時間以上		
			10分未満	30分以上1時間未満	1時間以上2時間未満	2時間以上			
Q48 年齢	18歳、19歳	N	0	1	3	3	1	4	12
		%	0%	8%	25%	25%	8%	33%	100%
	20代	N	5	13	12	15	13	7	65
		%	8%	20%	19%	23%	20%	11%	100%
	30代	N	25	21	17	27	9	6	105
		%	24%	20%	16%	26%	9%	6%	100%
	40代	N	42	34	25	27	12	12	152
		%	28%	22%	16%	18%	8%	8%	100%
	50代	N	54	48	40	40	16	10	208
		%	26%	23%	19%	19%	8%	5%	100%
	60代	N	47	38	32	25	17	6	165
		%	29%	23%	19%	15%	10%	4%	100%
	70代以上	N	89	67	63	66	20	13	318
		%	28%	21%	20%	21%	6%	4%	100%
	合計	N	262	222	192	203	88	58	1025
		%	26%	22%	19%	20%	9%	6%	100%

$\chi^2(df=30, N=1025)=56.555^{**}$, Cramer V=.105**

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

次に、年齢と自宅外音楽聴取時間の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、年齢と自宅外での音楽聴取時間についてクロス集計表を作成したものである。まず、年齢の設問に「20代」と回答した人で、自宅外音楽聴取時間が「まったく聴かない」と回答した人が 16%である一方で、年齢が「70代以上」と回答した人で「まったく聴かない」と回答した人が 71%である。また、年齢が「20代」と回答した人で、自宅外音楽聴取時間が「1時間以上2時間未満」「2時間以上」と回答した人は合わせて 37%であるが、年齢が「70代以上」と回答した人で、「1時間以上2時間未満」「2時間以上」と回答した人は合わせて 6%である。ここから、年齢を重ねている人ほど自宅外音楽聴取時間が短くなる傾向があることがわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 168.671 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.181 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、年齢と自宅内音楽聴取時間の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 2 を支持する結果である。

表 2 Q48 年齢と Q14_B 自宅外での音楽を聴く時間のクロス集計表

		Q14_B 自宅外での音楽聞く時間						合計
		まったく聴かない		10分以上30分未満		30分以上1時間未満		
		10分未満	30分以上1時間未満	1時間以上2時間未満	2時間以上			
18歳、19歳	N	3	2	2	1	3	1	12
	%	25%	17%	17%	8%	25%	8%	100%
20代	N	10	5	12	13	13	11	64
	%	16%	8%	19%	20%	20%	17%	100%
30代	N	39	12	18	21	8	7	105
	%	37%	11%	17%	20%	8%	7%	100%
40代	N	58	23	19	27	15	10	152
	%	38%	15%	13%	18%	10%	7%	100%
50代	N	89	19	30	44	16	11	209
	%	43%	9%	14%	21%	8%	5%	100%
60代	N	92	28	21	11	5	9	166
	%	55%	17%	13%	7%	3%	5%	100%
70代以上	N	227	32	22	19	11	8	319
	%	71%	10%	7%	6%	3%	3%	100%
合計	N	518	121	124	136	71	57	1027
	%	50%	12%	12%	13%	7%	6%	100%

$\chi^2(df=30, N=1027)=168.671^{***}$, Cramer V=.181^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

次に、学歴と自宅内音楽聴取時間の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 3 は、学歴と自宅内での音楽聴取時間についてクロス集計表を作成したものである。まず、学歴の設問に「高校（または旧制中学）」と回答した人で、自宅内音楽聴取時間が「まったく聴かない」と回答した人が 27%であり、学歴が「大学（旧高専）・大学院」と回答した人で「まったく聴かない」と回答した人が 22%である。また、学歴が「高校（または旧制中学）」と回答した人で、自宅内音楽聴取時間が「1 時間以上 2 時間未満」「2 時間以上」と回答した人は合わせて 15%であり、学歴が「大学（旧高専）・大学院」と回答した人で、「1 時間以上 2 時間未満」「2 時間以上」と回答した人は合わせ 13%である。ここから、学歴と自宅内音楽聴取時間にはあまり相関がみられないことがわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 24.387 であり、1%水準で統計的に有意でない。また、Cramer の連関係数は 0.077 と一定の強さの関連が認められなかった。以上のことから、年齢と自宅内音楽聴取時間の二変数間の関連は、統計的に有意な関連でないと考えられる。これは、仮説 3 を支持しない結果である。

次に、学歴と自宅外音楽聴取時間の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 4 は、学歴と自宅外での音楽聴取時間についてクロス集計表を作成したものである。まず、学歴の設問に「高校（または旧制中学）」と回答した人で、自宅外音楽聴取時間が「まったく聴かない」と回答した人が 57%である一方で、学歴が「大学（旧高専）・大学院」と

回答した人で「まったく聴かない」と回答した人が 43%である。また、学歴が「高校（または旧制中学）」と回答した人で、自宅外音楽聴取時間が「1 時間以上 2 時間未満」「2 時間以上」と回答した人は合わせて 9%であり、学歴が「大学（旧高専）・大学院」と回答した人で、「1 時間以上 2 時間未満」「2 時間以上」と回答した人は合わせ 15%である。ここから、学歴が高い人ほど自宅外音楽聴取時間が長くなる傾向があることがわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 38.673 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.097 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、年齢と自宅内音楽聴取時間の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 4 を支持する結果である。

表 3 Q50 学歴と Q14_A 自宅内での音楽を聴く時間のクロス集計表

		Q14_A 自宅内での音楽聞く時間						合計		
		まったく聴かない		10分以上30分未満		30分以上1時間未満			1時間以上2時間以上	
		かない	10分未満	分未満	間未満	時間未満	2時間以上			
Q50 最終 学歴	中学校（旧制	N	19	14	7	7	5	3	55	
	小学校など）	%	35%	26%	13%	13%	9%	6%	100%	
	高校（または	N	90	79	59	62	28	22	340	
	旧制中学な	%	27%	23%	17%	18%	8%	7%	100%	
	専門学校	N	41	20	21	30	17	5	134	
	短大・高専（5	%	31%	15%	16%	22%	13%	4%	100%	
	年制）	N	30	25	24	31	9	10	129	
	大学（旧高	%	23%	19%	19%	24%	7%	8%	100%	
	専）・大学院	N	80	86	82	71	28	17	364	
	専）・大学院	%	22%	24%	23%	20%	8%	5%	100%	
合計	N	260	224	193	201	87	57	1022		
	%	25%	22%	19%	20%	9%	6%	100%		

$\chi^2(df=20, N=1022)=24.387$, Cramer V=.077

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 4 Q50 学歴と Q14_B 自宅外での音楽を聴く時間のクロス集計表

		Q14_B 自宅外での音楽聞く時間						合計		
		まったく聴かない		10分以上30分未満		30分以上1時間未満			1時間以上2時間以上	
		かない	10分未満	分未満	間未満	時間未満	2時間以上			
Q50 最終 学歴	中学校（旧制	N	37	4	3	3	5	3	55	
	小学校など）	%	67%	7%	6%	6%	9%	6%	100%	
	高校（または	N	194	45	36	36	13	18	342	
	旧制中学な	%	57%	13%	11%	11%	4%	5%	100%	
	専門学校	N	66	14	18	19	6	11	134	
	短大・高専（5	%	49%	10%	13%	14%	5%	8%	100%	
	年制）	N	59	12	20	22	10	8	131	
	大学（旧高	%	45%	9%	15%	17%	8%	6%	100%	
	専）・大学院	N	155	49	49	55	36	18	362	
	専）・大学院	%	43%	14%	14%	15%	10%	5%	100%	
合計	N	511	124	126	135	70	58	1024		
	%	50%	12%	12%	13%	7%	6%	100%		

$\chi^2(df=20, N=1024)=38.673^{**}$, Cramer V=.097**

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

次に、自宅内音楽聴取時間と自宅外音楽聴取時間の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 5 は、自宅内での音楽聴取時間と自宅外での音楽聴取時間についてクロス集計表を作成したものである。まず、自宅内音楽聴取時間の設問に「まったく聴かない」と回答した人で、自宅外音楽聴取時間が「まったく聴かない」と回答した人が 72%である一方で、自宅内音楽聴取時間が「2 時間以上」と回答した人で自宅外を「全く聴かない」と回答した人が 27%である。また、自宅内音楽聴取時間が「まったく聴かない」と回答した人で、自宅外音楽聴取時間が「1 時間以上 2 時間未満」「2 時間以上」と回答した人は合わせて 7%であるが、自宅内音楽聴取時間が「2 時間以上」と回答した人で、自宅外が「1 時間以上 2 時間未満」「2 時間以上」と回答した人は合わせて 50%である。ここから、自宅内音楽聴取時間が長いほど自宅外音楽聴取時間が長くなる傾向があることがわかる。

表 5 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 278.204 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.231 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、自宅内音楽聴取時間と自宅外音楽聴取時間の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 3 を支持する結果である。

表 6 は、自宅内音楽聴取時間を従属変数、女性ダミー、年齢、教育年数を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2 値は 0.170 であり、投入した独立変数によって従属変数である自宅外音楽聴取時間の分散の 17.0%が説明されている。

結果をみると、年齢が負で有意であった。ここから、年齢が若い人であるほど自宅内音楽聴取時間が長いことがわかる。一方、女性ダミー、教育年数は有意な効果がみられなかった。標準化係数 (β) をみると、年齢が -0.139 と大きく自宅内音楽聴取時間に与える影響が強いといえる。

表 7 は、自宅外音楽聴取時間を従属変数、自宅内音楽聴取時間、女性ダミー、年齢、教育年数を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2 値は 0.167 であり、投入した独立変数によって従属変数である自宅外音楽聴取時間の分散の 16.7%が説明されている。

結果をみると、自宅内音楽聴取時間が正で有意、年齢が負で有意であった。ここから、自宅内音楽聴取時間が長い人であるほど自宅外音楽聴取時間が長いことがわかる。一方、女性ダミー、教育年数は有意な効果がみられなかった。標準化係数 (β) をみると、自宅内音楽聴取時間が 0.312、年齢が -0.235 と大きく、自宅内音楽聴取時間と年齢が自宅外音楽聴取時間に与える影響が強いといえる。

表5 Q14_A 自宅内と Q14_B 自宅外での音楽を聴く時間のクロス集計表

		Q14_B 自宅外での音楽聞く時間						合計	
		まったく聴かない		10分以上30分未満		30分以上1時間未満			
		1時間以上2時間以上	2時間以上	2時間以上	2時間以上	2時間以上	2時間以上		
Q14_A 自宅内での音楽聞く時間	まったく聴かない	N	191	20	20	15	8	11	265
		%	72%	8%	8%	6%	3%	4%	100%
	10分未満	N	108	58	33	17	7	6	229
		%	47%	25%	14%	7%	3%	3%	100%
	10分以上30分未満	N	90	25	43	20	8	8	194
		%	46%	13%	22%	10%	4%	4%	100%
	30分以上1時間未満	N	85	15	19	58	19	11	207
		%	41%	7%	9%	28%	9%	5%	100%
	1時間以上2時間未満	N	30	8	7	20	15	9	89
		%	34%	9%	8%	23%	17%	10%	100%
	2時間以上	N	16	1	4	8	15	15	59
		%	27%	2%	7%	14%	25%	25%	100%
合計	N	520	127	126	138	72	60	1043	
	%	50%	12%	12%	13%	7%	6%	100%	

$\chi^2(df=25, N=1043)=278.204^{***}$, Cramer V=.231^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表6 Q14_A 自宅内音楽聴取時間の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	58.748	11.534	***
Q47 性別 (女性ダミー)	0.800	2.517	0.010
Q48 年齢 (実数)	-0.336	0.080	-0.139 ***
Q50 教育年数 (年)	-0.774	0.648	-0.040
調整済みR ²	0.170		
N	998		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 7 Q14_B 自宅外音楽聴取時間の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	52.045	10.846	***
Q14_A 自宅内音楽聴取時間 (実数)	0.313	0.029	0.312 ***
Q47 性別 (女性ダミー)	-4.009	2.333	-0.050 †
Q48 年齢 (実数)	-0.572	0.075	-0.235 ***
Q50 教育年数 (年)	-0.244	0.602	-0.012
調整済みR ²	0.170		
N	998		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

5. 考察

本研究は自宅内、または自宅外という限定的な環境における音楽聴取時間の違いに対して年齢がどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「若年層のほうが自宅内での音楽聴取時間が長い。」仮説 2「若年層のほうが自宅外での音楽聴取時間が長い。」仮説 3「学歴が高いほうが自宅内での音楽聴取時間が長い。」仮説 4「学歴が高いほうが自宅外での音楽聴取時間が長い。」という 4 つの仮説を立てて分析を行った。また自宅内と自宅外の音楽聴取時間が互いにどれほど影響しているかを明らかにすることを目的とし、仮説 5「自宅外での音楽聴取時間が長いほど自宅内での音楽聴取時間も長い。」という 1 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、年齢が若い人ほど自宅内と自宅外双方の音楽聴取時間が長くなることがわかり仮説 1、2 が支持された。また、学歴が高い人ほど自宅外音楽聴取時間が長くなることがわかり仮説 4 が支持された。自宅内音楽聴取時間が長い人ほど自宅外音楽聴取時間が長くなることがわかり仮説 5 が支持された。しかしながら学歴と自宅内音楽聴取時間には関係性が見られず仮説 3 が支持されなかった。重回帰分析の結果をまとめると、自宅内音楽聴取時間では自宅外音楽聴取時間以外に強い影響を及ぼしている要素は、本研究で見られなかった。自宅外音楽聴取時間では自宅内音楽聴取時間や年齢の若さが強い影響を及ぼしており、男性であることも弱い影響が見られた。

年齢の音楽聴取時間への影響は自宅内よりも自宅外のほうが、強く見られた。これは自宅外で音楽聴取するための環境が整っているかが影響していると考えられる。より高齢の方にとって使いやすいデバイス、特にイヤホンの在り方こそ年齢層が高い方の自宅外音楽聴取時間を延ばすことにつながるのではないだろうか。

6. 文献

- [1]…楽天インサイト株式会社「音楽に関する調査」
<https://insight.rakuten.co.jp/report/20210518/>
- [2]…松田健（2013）「音楽のデジタル化と音楽聴取形態の変化について:デジタル世代のミュージッキング」『関西外国語大学 研究論集』 第97号
- [3]…NHKの国民生活時間調査（2020）<https://www.nhk.or.jp/bunken/yoron-jikan/>
- [4]…遠藤薫（2014）「音楽ジャンルの嗜好は何によって決まるか —2014年3月インターネット全国調査より—」『学習院大学 法学会雑誌』 50巻1号

第6章 歴史遺産への訪問頻度

吉田伊織

1. はじめに

日本では、少子高齢化による人口の減少や東京圏への人口集中が問題となっている。この問題を解決し、活気ある日本社会を維持していくために、平成26年度に「まち・ひと・しごと創生法」が制定された（国土交通省）。これに合わせて高槻市は地方創生を目指し、今城塚古墳や安満遺跡など歴史遺産を活用する計画を平成27年度に立て（高槻市まち・ひと・しごと創生総合戦略）、令和3年には安満遺跡を活用した安満遺跡公園を全面開園した（まちの魅力をいかしたにぎわいづくり）。このように、高槻市はまちを活気づけるための歴史遺産活用に積極的である。そこで、これまでの施策により人々の歴史遺産に対する訪問頻度に影響が出たか知る必要がある。

また、歴史遺産については市報、ホームページ、SNS などさまざまな手段によって情報が発信されている。加えて、友人・家族など人から直接情報を得ることもある。このように、住民は公的な媒体、または私的なつながりから、多様な方法で歴史遺産に関する情報を得ることが出来る。そのため、多様な情報源が存在する中で、どの情報源を基にして歴史遺産へ訪問したか明らかにすることは、今後の地域資源活用の際に重要な手がかりになる。

本研究では歴史遺産へ訪問する人の特徴に変化があるのか、平石（2012）の調査と比較する。また、住民が歴史遺産について情報を得ている手段を確認し、その違いが歴史遺産の訪問頻度に影響があるのかを明らかにすることを目的とする。

2. 仮説

2.1. 先行研究

平石（2012）の調査において、どの年代を見ても訪問頻度について「週に数回」「ほぼ毎日」と回答する割合は低かった。20代で最も回答が多かったのは「過去に1回だけ」、30代～70代以上では、「年に数回」と回答する割合が最も高かった。

また、居住地域について、平石（2012）によると、檜田・高槻北地区、高槻南地区、高槻西地区、如是・富田地区では、「年に数回」と回答した割合が最も高いのに対して、五領地区と三箇牧地区では「過去に1回だけ」が最も高かった。

有馬（2014）の調査において、住民が文化・歴史情報の情報について得る情報源を見ると、「広報誌」と回答した割合が最も高く、次に「ホームページ」が高かった。一方で、SNS（Twitter, Facebook）で情報を得る人の割合は極めて低かった。

2.2. 仮説

安満遺跡公園が開園され、子育て世代である保護者層が子どもと遊びに行くようになり、他の年齢層に比べて歴史遺産が身近なものになったと考えられる。そのため、平石（2012）が分析した調査に比べて、30、40代の訪問頻度の増加が顕著に出ると推測する。また、高槻北地区、高槻南地区、五領地区の住民にとって、安満遺跡公園が近隣にできことで歴史遺産が身近なものになったと考えられる。そのため、平石（2012）が分析した調査に比べ、高槻北地区、高槻南地区、五領地区の住民の訪問頻度の増加が顕著に出ると推測する。

有馬（2014）の調査によれば、文化・歴史に関する情報源として「広報誌」を選んだ住民の割合が最も高く、SNS（Twitter, Facebook）を利用する住民はごくわずかであった。このことから、広報誌で情報を収集する住民は歴史への関心が高く、訪問頻度が他の媒体に比べて高くなると推測する。よって、本研究の仮説は以下の通りである。

仮説 1 30代、40代の訪問頻度が以前の調査に比べて最も増加している。

仮説 2 高槻北地区、高槻南地区、五領地区の訪問頻度が以前の調査に比べて最も増加している。

仮説 3 歴史遺産に関する情報を「広報誌」から得た住民は、SNSを情報源とする住民に比べて訪問頻度が高い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和七年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する18歳以上85歳未満の男女で、計画標本は2,000、有効回答数は1,063、回収率は53.2%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q22：Q21でお答えになった中で、最も身近な歴史遺産には、どのくらい訪れていますか。

（訪問頻度（反転））

1.ほぼ毎日 2.週に数回 3.月に数回 4.年に数回 5.過去に1回だけ 6.ない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q25：あなたは、高槻市の文化財や歴史遺産についての情報を何から得ていますか。主なものの1つにマルをつけてください。（市の情報源ダミー）

1.市の広報誌 2.市のホームページ 3.チラシ・ポスター 4.家族や知人 5.SNS

6.情報誌 7.その他 8.とくに情報を得ていない

上位の選択肢を 4.家族や知人、5.SNS、6.情報誌、7.その他、8.とくに情報を得ていない、これら市の情報源以外を 0 とし、1.市の広報誌、2.市のホームページ、3.チラシ・ポスター、これら市の情報源を 1 とし、2つのカテゴリに合併した。

Q48：あなたの年齢をお答えください。(年齢(実数))

1. 18、19歳 2. 20代 3. 30代 4. 40代 5. 50代 6. 60代 7. 70代以上

上記の選択肢に対して、18歳、19歳を18.5、20代を24.5、30代を34.5、40代を44.5、50代を54.5、60代を64.5、70代を74.5として、実数化を行った。

Q51：あなたのお住まいの地域はどこですか。()内の小学校区を参考にしてお答えください。(高槻北地区・高槻南地区・五領地区ダミー)

1. 榎田地区(榎田小学校)

2. 高槻北地区(芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小学校)

3. 高槻南地区(高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校)

4. 五領地区(五領・上牧小学校)

5. 高槻西地区(郡家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校)

6. 如是・富田地区(芝生・丸橋・寿栄・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校)

7. 三箇牧地区(三箇牧・柱本小学校)

上位の選択肢を 1. 榎田地区(榎田小学校)、5. 高槻西地区(郡家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校)、6. 如是・富田地区(芝生・丸橋・寿栄・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校)、7. 三箇牧地区(三箇牧・柱本小学校)、これら安満遺跡公園から離れた地域を 0 とし、2. 高槻北地区(芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小学校)、3. 高槻南地区(高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校)、4. 五領地区(五領・上牧小学校)、これら安満遺跡公園に近い地域を 1 とし、2つのカテゴリに合併した。

4. 分析

はじめに、年齢と歴史遺産の訪問頻度の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表1は、年齢と歴史遺産の訪問頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、年齢の設問に「18歳、19歳」と回答した人では、歴史遺産の訪問頻度を「ない」と回答した人が17%、「20代」と回答した人では「ない」が16%とどちらも一定割合存在

する。一方で、「70代以上」の人では「ない」が、9%と最も低くなっている。

また、「18歳、19歳」と「20代」回答した人では、歴史遺産への訪問頻度を「過去に1回だけ」「ない」と答えた人は合わせて40%以上いるが、それ以外の年齢の人は40%未満である。特に「30代」の人は30%以下で最も低くなっている。最後に全ての年齢をみると、「年に数回」と回答した割合がどの年齢でも最も高くなっている。この結果から、どの年代も日常的に訪問する人が少ないことがわかる。

表1のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は49.422であり、5%水準で統計的に有意である。また、Cramerの連関係数は0.098である。以上のことから、年齢と歴史遺産への訪問頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。

表1 Q48 年齢と Q22 最も身近な歴史遺産の訪問頻度のクロス集計表

		Q22 最も身近な歴史遺産の訪問頻度						合計	
		過去に1回だ					合計		
		ほぼ毎日	週に数回	月に数回	年に数回	け			ない
Q48 年齢	18歳、19歳	N	2	0	2	3	3	2	12
		%	17%	0%	17%	25%	25%	17%	100%
	20代	N	1	2	11	22	17	10	63
		%	2%	3%	17%	35%	27%	16%	100%
	30代	N	0	4	16	55	16	14	105
		%	0%	4%	15%	52%	15%	13%	100%
	40代	N	4	6	20	74	33	15	152
		%	3%	4%	13%	49%	22%	10%	100%
	50代	N	1	4	17	109	53	25	209
		%	0%	2%	8%	52%	25%	12%	100%
	60代	N	2	4	15	88	38	16	163
		%	1%	2%	9%	54%	23%	10%	100%
	70代以上	N	6	10	24	164	84	28	316
		%	2%	3%	8%	52%	27%	9%	100%
	合計	N	16	30	105	515	244	110	1020
		%	2%	3%	10%	50%	24%	11%	100%

$\chi^2(df=30, N=1020)=49.422^*$, Cramer $V=.098^*$

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

図1は、年齢と歴史遺産の訪問頻度の二変数について積み上げ棒グラフを作ったものである。「年に複数回」は、訪問頻度について「ほぼ毎日」「週に数回」「月に数回」と回答した人を足し合わせたものである。「過去に1回、ない」は、訪問頻度について「過去に1回だけ」「ない」と回答した人を足し合わせたものである。また、図2は平石(2012)の調査結果を同じ手順で積み上げ棒グラフにしたものである。

まず、30代と回答した人で「年に複数回」に当てはまる人の割合をみると、2012年では45%、2025年では71%であり、2012年から26%増加していた。次に、20代と回答した人で「年に複数回」に当てはまる人の割合をみると、2012年では25%、2025年では57%であり、2012年から32%増加していた。つまり、30代より20代のほうが増加している割合が大きいため仮説1は成り立たなかった。

また、どの年代を比較しても 2012 年に比べて 2025 年は、訪問する人の割合が高くなっている。このことから、高槻市の幅広い年代の住民にとって歴史遺産は身近なものになったといえる。

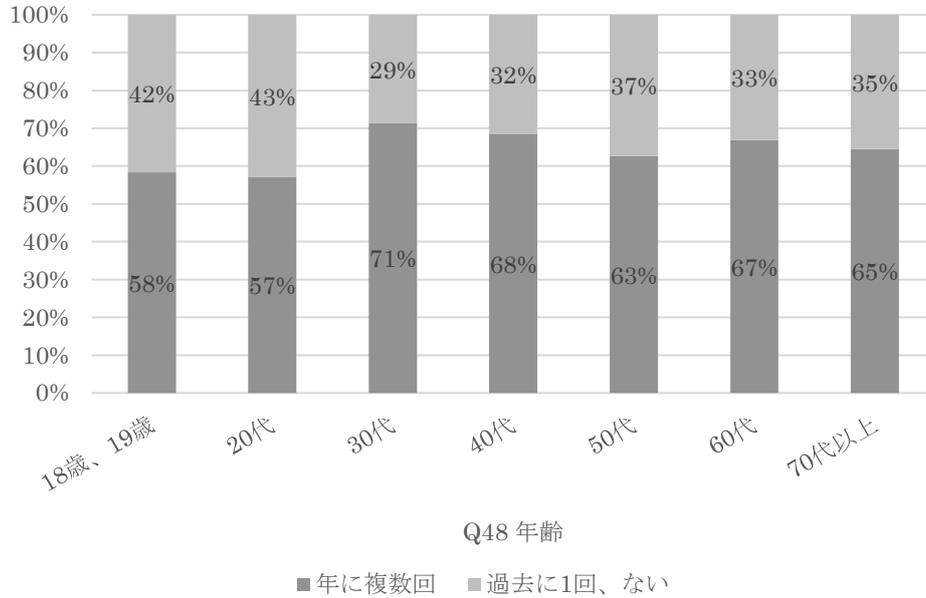


図 1 Q48 年齢と Q22 最も身近な歴史遺産の訪問頻度の積み上げ棒グラフ (2025)

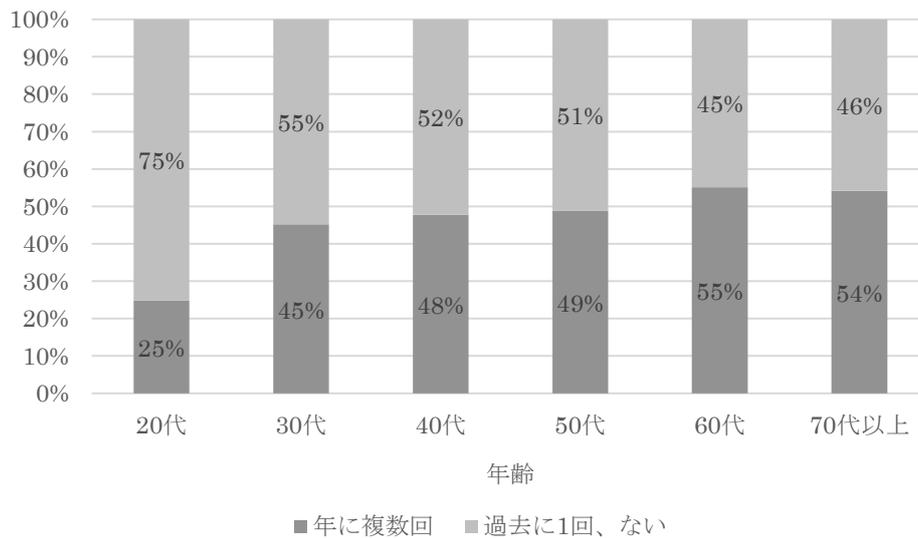


図 2 年齢と最も身近な歴史遺産の訪問頻度の積み上げ棒グラフ (2012)
(平石 (2012) を基に作成)

次に居住地域と歴史遺産の訪問頻度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、居住地域と歴史遺産の訪問頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、居住地域の設問に「三箇牧地区」と回答した人では、「ほぼ毎日」「週に数回」と答えた人はどちらも 0%だった。

また、「高槻北地区」「高槻南地区」「五領地区」と回答した人では、歴史遺産への訪問頻度を「過去に 1 回だけ」「ない」と回答した人が 32%である一方で、「三箇牧地区」では過去に 1 回だけ」「ない」と回答した人が 59%である。このことから、三箇牧地区の住民は歴史遺産への訪問頻度が低い傾向にあることがわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 43.755 であり、5%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.094 である。以上のことから、居住地域と歴史遺産への訪問頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。

表 2 Q51 居住地域と Q22 最も身近な歴史遺産の訪問頻度のクロス集計表

		Q22 最も身近な歴史遺産の訪問頻度						合計	
		過去に1回だけ					ない		
		ほぼ毎日	週に数回	月に数回	年に数回	け			
Q51 居住地域	2 高槻北地区	N	4	13	35	156	74	20	302
		%	1%	4%	12%	52%	25%	7%	100%
	3 高槻南地区	N	4	7	38	124	57	26	256
		%	2%	3%	15%	48%	22%	10%	100%
	4 五領地区	N	2	0	1	19	6	4	32
		%	6%	0%	3%	59%	19%	13%	100%
	5 高槻西地区	N	4	6	15	96	43	21	185
		%	2%	3%	8%	52%	23%	11%	100%
	6 如是・富田地区	N	1	4	13	94	52	26	190
		%	1%	2%	7%	49%	27%	14%	100%
	7 三箇牧地区	N	0	0	3	9	8	9	29
		%	0%	0%	10%	31%	28%	31%	100%
	合計	N	15	30	105	498	240	106	994
		%	2%	3%	11%	50%	24%	11%	100%

$\chi^2(df=25, N=994)=43.755^*$, Cramer V=.094*

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

図 3 は、居住地域と歴史遺産の訪問頻度の二変数について積み上げ棒グラフを作ったものである。「年に複数回」は、訪問頻度について「ほぼ毎日」「週に数回」「月に数回」と回答した人を足し合わせたものである。「過去に 1 回、ない」は、訪問頻度について「過去に 1 回だけ」「ない」と回答した人を足し合わせたものである。また、図 4 は平石 (2012) の調査結果を同じ手順で積み上げ棒グラフにしたものである。

まず、「高槻北地区」と回答した人で「年に複数回」に当てはまる人の割合をみると、2012年では53%、2025年では69%であり、2012年から16%増加していた。次に、「高槻南地区」と回答した人で「年に複数回」に当てはまる人の割合をみると、2012年では55%、2025年では68%であり、2012年から13%増加していた。次に、「五領地区」と回答した人で「年に複数回」に当てはまる人の割合をみると、2012年では30%、2025年では69%であり、2012年から39%増加していた。最後に「高槻西地区」と回答した人で「年に複数回」に当てはまる人の割合をみると、2012年では48%、2025年では65%であり、2012年から17%増加していた。この結果から、仮説2は支持されなかった。

また、図3と図4を比較すると、どの居住地域も2012年に比べて2025年の方が、訪問する人の割合が高くなっている。このことから、一部の地域に限らず市全体で歴史遺産への訪問頻度が増加していることがわかる。

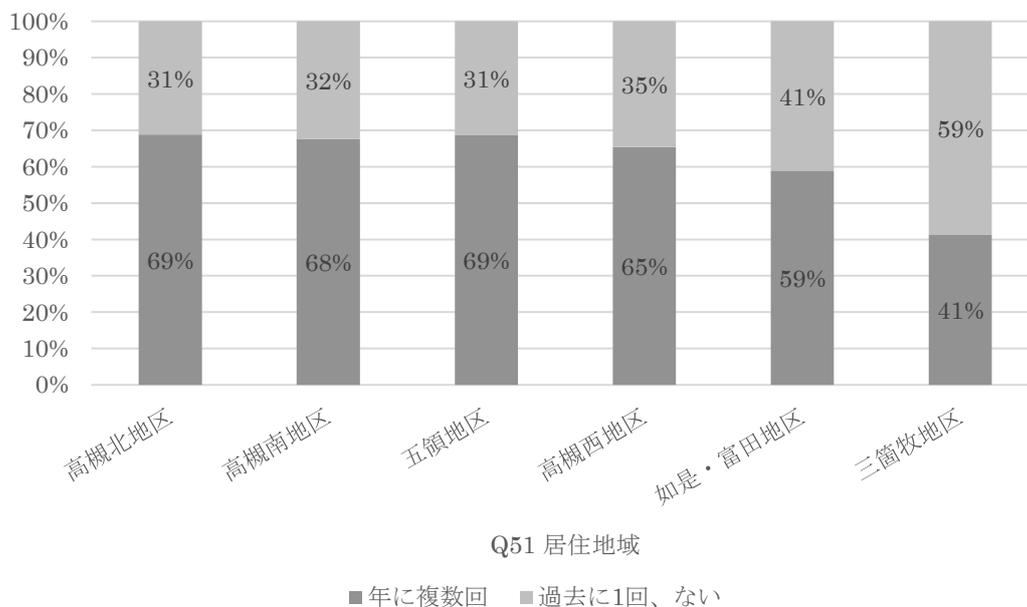


図3 Q51 居住地域と Q22 最も身近な歴史遺産の訪問頻度の積み上げ棒グラフ (2025)

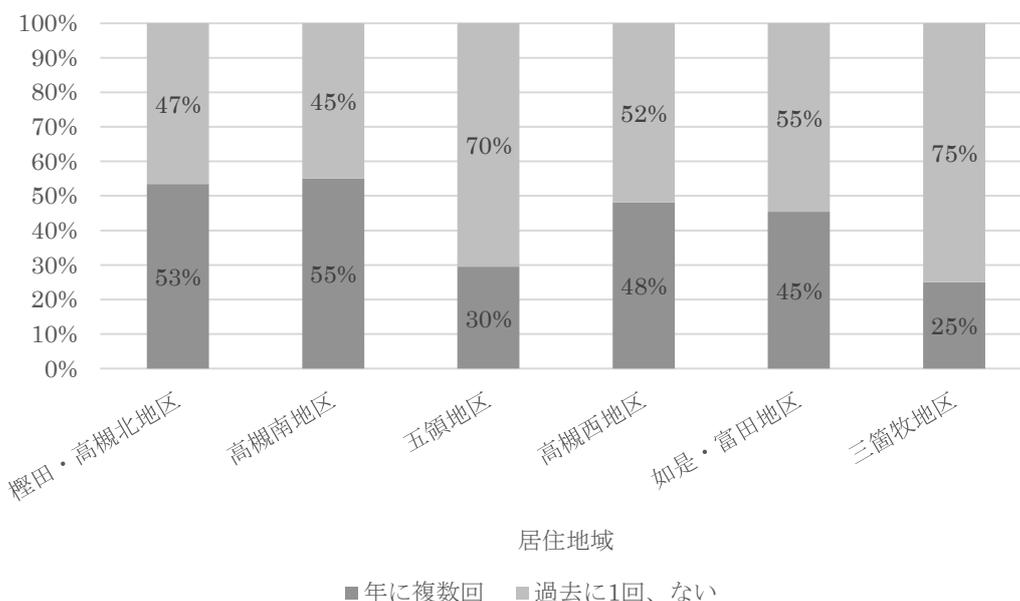


図4 居住地域と最も身近な歴史遺産の訪問頻度の積み上げ棒グラフ（2012）
（平石（2012）を基に作成）

次に文化財についての情報源と歴史遺産の訪問頻度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表3は、文化財についての情報源と歴史遺産の訪問頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、「SNS」と回答した人では、歴史遺産への訪問頻度を「ほぼ毎日」「週に数回」と答えた人が16%と一定割合存在する一方で、「市の広報誌」を情報源とする人では「ほぼ毎日」「週に数回」が、4%である。さらに、「市の広報誌」と回答した人では、「過去に1回だけ」「ない」と答えた人が31%である一方で、「SNS」を情報源とする人では「過去に1回だけ」「ない」と答えた人が27%である。このことから、SNSを情報源にする人の方が市の広報誌を情報源にする人に比べて訪問頻度が高いことがわかるので、仮説3が否定された。

また、「とくに情報を得ていない」と回答した人では、歴史遺産への訪問頻度を「過去に1回だけ」「ない」と回答した人が48%と最も大きい。このことから、文化財についての情報源がある人の方がいない人に比べて訪問頻度が高いことがわかる。

表3のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は72.626であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramerの連関係数は0.118である。以上のことから、文化財についての情報源と歴史遺産への訪問頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。

表 3 Q25 文化財についての情報源と Q22 最も身近な歴史遺産の訪問頻度の
クロス集計表

		Q22 最も身近な歴史遺産の訪問頻度						合計	
		ほぼ毎日	週に数回	月に数回	年に数回	過去に1回 だけ	ない		
Q25 文化 財につい ての情報 源	市の広報誌	N	7	14	59	296	127	43	546
		%	1%	3%	11%	54%	23%	8%	100%
	市のホーム ページ	N	1	2	8	14	10	5	40
		%	3%	5%	20%	35%	25%	13%	100%
	チラシ・ポス ター	N	0	2	6	23	8	3	42
		%	0%	5%	14%	55%	19%	7%	100%
	家族や友人	N	2	0	9	43	18	5	77
		%	3%	0%	12%	56%	23%	6%	100%
	SNS	N	3	4	3	22	8	4	44
		%	7%	9%	7%	50%	18%	9%	100%
	情報誌	N	0	1	3	11	4	3	22
		%	0%	5%	14%	50%	18%	14%	100%
	その他	N	0	0	3	20	15	3	41
		%	0%	0%	7%	49%	37%	7%	100%
とくに情報を 得ていない	N	3	7	17	92	59	49	227	
	%	1%	3%	7%	41%	26%	22%	100%	
合計	N	16	30	108	521	249	115	1039	
	%	2%	3%	10%	50%	24%	11%	100%	

$\chi^2(df=35, N=1039)=72.626^{***}$, Cramer V=.118^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 4 は、歴史遺産への訪問頻度（反転）を従属変数、女性ダミー、年齢（実数）、市の情報源ダミー、高槻北地区・高槻南地区・五領地区ダミーを独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R2 値は 0.017 であり、投入した独立変数によって従属変数である歴史遺産の分散は 1.7%が説明されている。

結果をみると、市の情報源ダミー、高槻北地区・高槻南地区・五領地区ダミーが正で有意、年齢（実数）が負で有意であった。これは、安満遺跡公園近隣の地域に住んでいる人は歴史遺産への訪問頻度が遠い人に比べて高いことがわかる。また、市の情報源ダミーが正であることより、市が制作する広報誌、ホームページ、チラシ・ポスターを情報源とする人の方が歴史遺産への訪問頻度が高いことがわかる。若者であればあるほど訪問頻度が高いけれども、B をみると-0.003 と小さいので、年齢の影響は情報源や居住地域に比べて影響力が小さい。一方で、女性ダミーでは有意な効果がみられなかった。これは、性別に関係なく幅広い人が歴史遺産へ訪れていることを示している。標準化係数（ β ）をみると、情報源ダミーが 0.106 と大きく、情報源が訪問頻度に与える影響が強いといえる。

表4 Q22 最も身近な歴史遺産の訪問頻度（反転）の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	2.726	0.124	***
Q47 女性ダミー	-0.039	0.063	-0.020
Q48 年齢(実数)	-0.003	0.002	-0.057 *
Q25 市の情報源ダミー	0.213	0.068	0.106 *
Q51 高槻北地区・高槻南地区・五領地区ダミー	0.197	0.063	0.099 *
調整済みR2	0.017		
N	977		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

5. 考察

本研究は年齢、居住地域、文化財についての情報源の違いが歴史遺産の訪問頻度にどのような影響を及ぼしているのか、また過去の平石（2012）に比べて訪問頻度が増加しているのかを明らかにすることを目的として、仮説1「30代、40代の訪問頻度が以前の調査に比べて最も増加している。」仮説2「高槻北地区、高槻南地区、五領地区の訪問頻度が以前の調査に比べて最も増加している。」仮説3「歴史遺産に関する情報を広報誌から得た住民は、SNSを情報源とする住民に比べて訪問頻度が高い。」という3つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、最も顕著に増加していたのは20代であったことから仮説1は支持されなかった。また、地域ごとの増加割合をみると高槻北地区16%、高槻南地区13%、五領地区39%、高槻西地区17%となっていて、高槻西地区の方が高槻北地区、高槻南地区に比べて増加した割合が高いことより仮説2は支持されなかった。さらに、SNSを情報源にする人の方が市の広報誌を情報源にする人に比べて訪問頻度が高いことから、仮説3は支持されなかった。仮説2が支持されなかった理由として、高槻北地区、高槻南地区は面積が広く、安満遺跡公園から比較的離れた地点も含まれている。一方で、最も訪問頻度が増加した五領地区は面積が比較的狭く、多くの地点が安満遺跡公園に近くなっている。そのため、安満遺跡公園との物理的距離が訪問頻度の増加に影響している可能性が考えられる。仮説3が支持されなかった理由として、近年ではスマートフォンが普及したことでSNSが身近な存在になった。その結果、行動の際にSNSの情報を優先する人が増えたと考える。この点を踏まえると、年齢層による訪問頻度の違いにもSNSの影響が反映された可能性が考えられる。特にSNSをより身近に感じ、日常的に利用している20代は、30代に比べて情報接触の機会が多いため、結果として訪問者の割合が最も増加したと考える。重回帰分析の結果をまとめると、性別、年齢の影響は小さく、市の情報源を主な情報源としていて、高槻北地区・高槻南地区・五領地区に居住している人は訪問頻度が高い傾向にあることがわかった。

しかし、年に数回と回答する人がどの項目においても最も多くいた。このことから、過去の調査に比べて訪問者数は増加したものの、いまだ多くの人にとって日常的に訪れる場所にはなっていないといえる。今後も、より多くの人に日常的に歴史遺産へ訪問してもらうための取り組みを続ける必要がある。そのためには、歴史遺産を訪れる人々の「訪問する目的」を把握し、訪問頻度に差が生じている原因を明らかにしていくことが重要である。

6. 文献

- [1]…国土交通省(2017)「第4章 地域活性化の推進」『平成29年度 国土交通白書』:pp.176-177.
- [2]…高槻市ホームページ「まちの魅力をいかしたにぎわいづくり」
<https://www.city.takatsuki.osaka.jp/uploaded/attachment/1952.pdf> (2025年5月1日閲覧)
- [3] 高槻市ホームページ「高槻市まち・ひと・しごと創生総合戦略(令和2年3月改定)」
<https://www.city.takatsuki.osaka.jp/uploaded/attachment/49925.pdf> (2025年5月1日閲覧)
- [4]…平石恵理(2012)「高槻身近な歴史遺産」関西大学総合情報学部『平成24年度社会調査実習報告書 一高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査』:pp.128-133.
https://www.kansai-u.ac.jp/Fc_inf/ug/certificate/pdf/2012.pdf#page=137
- [5]…有馬昌宏(2014)「自治体のソーシャルメディアによる情報発信と住民による情報入手の現状と課題」『経営情報学会 全国研究発表大会要旨集』:pp.73-76.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jasmin/2014f/0/2014f_73/_pdf/-char/ja

第7章 地域資源・愛着と地域ブランドの認知

渡邊 宏基

1. はじめに

近年、地域ブランドというワードを目にする機会が増えている。これは、地域活性化の一手段として地域ブランドへの関心が高まっているためである。国は、人口減少に歯止めをかけるとともに、東京圏への過度な人口集中を是正し、それぞれの地域で住みよい環境を確保して、将来にわたって活力ある日本社会を維持していくことを掲げている。平成26年に成立した「まち・ひと・しごと創生法」では、都道府県・市町村による「地方版総合戦略」策定の努力義務が規定されている。これに伴い、多くの自治体で地域の実情に応じた総合戦略が策定され、人口減少や地域経済の縮小といった課題に対応する取り組みが進められている。高槻市もその一つである。本市は、平成28年に、「高槻市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、地方創生の取り組みを推進してきた。第3期高槻市まち・ひと・しごと創生総合戦略では、具体的な施策として、「まちの魅力をいかしたにぎわいづくり」を掲げており、「まちの魅力に市民が愛着や誇りをもち、地域ブランドが醸成され、国内外から多くの人々が訪れるまち」を目指しており、ここでも地域ブランドという言葉が見受けられる。このような背景を踏まえ、地域ブランドの重要性がますます増している。

そこで、本章では、まちの魅力を形づくる地域資源への接触と地域への愛着が、地域ブランドの存在の認知にどのような影響を与えているのかを明らかにする。

2. 仮説

2.1. 先行研究

地域ブランドの概念にはさまざまな捉え方がある。(電通 abic project (2009)、特許庁 (2009) など) 鈴木・木南 (2009) は、地域ブランドを「地域と結びつきのあるブランド」と捉え、ブランドの概念を次のように定義している。「物の価値を備え、他の商品またはサービスと差別化することを意図した情報を供えた商品またはサービスであり、その『もの』の価値と情報の組み合わせに対して、消費者がイメージを抱き信頼を寄せているもの」とされている。このように、地域ブランドとは、その地域がもつ地域資源(自然、歴史・文化など)を活用した、他地域の商品またはサービスと差別化することを意図した情報を供えた商品またはサービスであると言える。

さらに、地域資源が地域への愛着に肯定的な影響を与えていることが明らかにされている。引地・青木・大淵 (2009) は、地域環境(物理的環境・社会的環境)に対する評価を高く評価する人ほど、地域に対し強い愛着を持つことを明らかにしている。物理的環境においては、景観の美しさおよび医療施設の充実度が、地域への愛着の形成に統計学的に有意な影

響を与えていた。社会的環境においては、すべての変数（住民交流、イベントなど）が地域への愛着に有意な影響を与えることが示された。また、鈴木・藤井（2008）は、交通などの移動途上における風土（<自然>と<人々>における様々な関わりの総体）への接触が、地域への愛着のような醸成に時間を要する感情にも影響を与えることを示した。

2.2. 仮説

先行研究において、地域ブランドは地域資源から生み出されるものであることが示されている。地域資源への接触は、地域ブランドに関する情報に触れる機会を増やすため、認知に対して一定の直接的な効果を持つと考えられる。また、地域が持つもの（環境や風土）が愛着の醸成に寄与していることが示唆されている。これにより、地域資源への接触が地域への愛着形成にも寄与する可能性があると考えられる。さらに、地域ブランドの認知は、地域に暮らす人々の共感や誇り、そして地域への愛着といった内面的な要素によって支えられると考えられる。渡邊（2006）は、地域ブランドの開発・構築において、地域住民自身が自らの住む地域を肯定的に捉えることが重要であると述べている。

以上の議論を踏まえ、3つの仮説を設定した。

仮説1 地域資源への接触が多い人ほど、地域ブランドの存在を認知しやすい。

仮説2 地域資源への接触が多い人ほど、地域への愛着を持ちやすい。

仮説3 地域への愛着を持っている人ほど、地域ブランドの存在を認知しやすい。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和七年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する18歳以上85歳未満の男女で、計画標本は2,000、有効回答数は1,063、回収率は53.2%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。また、地域資源への接触頻度を測定するために、地域資源を商店街・歴史遺産・地域イベント（高槻まつり、高槻ジャズストリート）に細分化し、それぞれへの接触頻度を訪問頻度として捉える。

Q3：あなたは、高槻市に愛着を感じますか。それとも感じませんか。（地域愛着（反転））

1.感じる 2.やや感じる 3.どちらともいえない 4.あまり感じない 5.感じない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、地域への愛着が強まるように、尺度の反転を行った。

Q 11 : あなたは、最寄りの商店街へはどの程度買い物に行きますか。(商店街(反転))

1. ほぼ毎日
2. 週に2~3日程度
3. 月に2~3日程度
4. 年に2~3日程度
5. まったく行かない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、商店街への訪問頻度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q 22 : Q21でお答えになった1~30の中で、最も身近な歴史遺産には、どのくらい訪れていいますか。(歴史遺産(反転))

1. ほぼ毎日
2. 週に数回
3. 月に数回
4. 年に数回
5. 過去に1回だけ
6. ない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、歴史遺産への訪問頻度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q 27 : あなたは、高槻市内で行われている次のようなイベントにどのくらい参加したことがありますか。(地域イベント(反転))

A. 高槻まつり

1. よく参加している
2. たまに参加する
3. 参加したことがある
4. 参加したことがない

B. 高槻ジャズストリート

1. よく参加している
2. たまに参加する
3. 参加したことがある
4. 参加したことがない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、地域イベントへの訪問頻度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q 33 : あなたは、高槻市には地域ブランドと呼べるような特産品や観光地があると思いますか。(地域ブランド認知(反転))

1. そう思う
2. ややそう思う
3. どちらともいえない
4. あまりそう思わない
5. そう思わない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、地域ブランドの認知が強まるように、尺度の反転を行った。

Q49 : あなたの年齢をお答えください。(年齢(実数))

1. 18歳 19歳
2. 20代
3. 30代
4. 40代
5. 50代
6. 60代
7. 70代以上

Q52 : 高槻市には現在までどのくらいお住まいですか。(市内居住年数)

1. 1年未満
2. 1年以上3年未満
3. 3年以上5年未満
4. 5年以上10年未満
5. 10年以上20年未満
6. 20年以上30年未満
7. 30年以上40年未満
8. 40年以上50年未満
9. 50年以上

4. 分析

はじめに地域資源への接触頻度と地域ブランドの認知の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、商店街への訪問頻度と地域ブランドの認知の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、商店街への訪問頻度の設問に「ほぼ毎日」と回答した人で、地域ブランドの認知の設問に「そう思う」と回答した人が 13%である。一方で、「まったく行かない」と回答した人で「そう思う」と回答した人は 7%にとどまった。また、商店街への訪問頻度の設問に「ほぼ毎日」と回答した人で、地域ブランドの認知の設問に「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した人は合わせて 31%であるのに対し、「まったく行かない」と回答した人で「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した人は合わせて 45%と高い。これらの結果から、商店街への訪問頻度が高い人ほど地域ブランドの存在を認知する傾向がみられる。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 40.754 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.099 とある一定の関連が認められる。ここから、商店街への訪問頻度と地域ブランドの認知には正の関連があり、統計的に有意である。

表 1 Q11 商店街への訪問頻度と Q33 地域ブランドの認知のクロス集計表

		Q33 高槻市に地域ブランドがあると思うか					合計
		そう思う	う	いえない	思わない	い	
ほぼ毎日	N	14	28	31	22	10	105
	%	13%	27%	30%	21%	10%	100%
週に2~3日 程度	N	18	90	98	69	15	290
	%	6%	31%	34%	24%	5%	100%
Q11 最寄り の商店街に いく頻度 月に2~3日 程度	N	17	83	92	72	13	277
	%	6%	30%	33%	26%	5%	100%
年に2~3日 程度	N	5	47	58	41	17	168
	%	3%	28%	35%	24%	10%	100%
まったく行 かない	N	13	37	59	58	29	196
	%	7%	19%	30%	30%	15%	100%
合計	N	67	285	338	262	84	1036
	%	6%	28%	33%	25%	8%	100%

$\chi^2(df=16, N=1036)=40.754^{***}$, Cramer V=.099***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

同様に、歴史遺産、地域イベント（高槻まつりと高槻ジャズストリート）についても、地域ブランドの認知とのクロス表を作成し（表は割愛）、検討した。その結果、歴史遺産への訪問頻度、高槻ジャズストリートへの参加頻度が、地域ブランドの認知と正の関連があり、統計的に有意（ $p < 0.05$ ）であった。一方、高槻まつりへの参加頻度に関しては統計的に有

意な関連が見られなかった。

以上から、商店街への訪問頻度が高い人ほど地域ブランドを認知する傾向があり、歴史遺産への訪問頻度と高槻ジャズストリートへの参加頻度についても、地域ブランドの認知と有意な関連が確認された。よって、地域資源に関するすべての変数で関連が見られたわけではないが、多くのケースで地域ブランドの認知との関連が確認されたことから、これは仮説1を支持する結果であるといえる。

次に、地域資源への接触頻度と地域への愛着の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表2は、商店街への訪問頻度と地域への愛着の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、商店街への訪問頻度の設問に「ほぼ毎日」と回答した人で、地域への愛着の設問に「感じる」と回答した人が45%である。一方で、「まったく行かない」と回答した人で「感じる」と回答した人は38%にとどまった。また、商店街への訪問頻度の設問に「ほぼ毎日」と回答した人で、地域への愛着の設問に「あまり感じない」「感じない」と回答した人は合わせて7%であるのに対し、「まったく行かない」と回答した人で「あまり感じない」「感じない」と回答した人は合わせて13%と高い。これらの結果から、商店街への訪問頻度が高い人ほど地域への愛着を感じる傾向がみられる。

表2のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は39.434であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramerの連関係数は0.097とある一定の関連が認められる。ここから、商店街への訪問頻度と地域への愛着の二変数間には正の関連があり、統計的に有意である。

表2 Q11 商店街への訪問頻度と Q33 地域への愛着のクロス表

		Q3 高槻市に愛着を感じますか					合計	
		どちらとも あまり感じ						
		感じる	やや感じる	いえない	ない	感じない		
Q11 最寄りの商店街に行く頻度	ほぼ毎日	N	47	42	9	4	3	105
		%	45%	40%	9%	4%	3%	100%
	週に2~3日	N	140	122	23	7	1	293
	程度	%	48%	42%	8%	2%	0%	100%
	月に2~3日	N	143	95	31	7	3	279
	程度	%	51%	34%	11%	3%	1%	100%
	年に2~3日	N	76	59	25	7	2	169
	程度	%	45%	35%	15%	4%	1%	100%
	まったく行かない	N	76	76	21	15	10	198
		%	38%	38%	11%	8%	5%	100%
	合計	N	482	394	109	40	19	1044
		%	46%	38%	10%	4%	2%	100%

$\chi^2(df=16, N=1044)=39.434^{***}$, Cramer V=.097***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

同様に、歴史遺産および地域イベント(高槻まつり・高槻ジャズストリート)についても、

地域ブランドの認知とのクロス表を作成し（表は割愛）、検討した。その結果、これらの変数すべてが、地域ブランドの認知と正の関連があり、統計的に有意な関連（ $p < 0.05$ ）を示した。これは、仮説 2 を支持する結果である。

次に、地域への愛着と地域ブランドの認知の二変数間の関連について、クロス集計表を用いて検討する。

表 3 は、地域への愛着と地域ブランドの認知の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、地域への愛着の設問に「感じる」と回答した人で、地域ブランドの認知の設問に「そう思う」と回答した人が 11%である。一方で、「感じない」と回答した人で「そう思う」と回答した人は 5%にとどまった。また、地域への愛着の設問に「感じる」と回答した人で、地域ブランドの認知の設問に「あまりそう思わない」「思わない」と回答した人は合わせて 27%であるのに対し、「感じない」と回答した人で「あまりそう思わない」「思わない」と回答した人は合わせて 79%と高い。これらの結果から、地域への愛着がある人ほど地域ブランドの存在を認知する傾向がみられる。

表 3 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 157.796 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.194 とある一定の関連が認められる。以上のことから、地域への愛着と地域ブランドの認知の二変数間には正の関連があり、統計的に有意である。これは、仮説 3 を支持する結果である。

表 3 Q3 地域への愛着と Q33 地域ブランドの認知のクロス表

		Q33 高槻市に地域ブランドがあると思うか					合計	
		ややそう思		どちらとも	あまりそう	そう思わな		
		そう思う	う	いえない	思わない	い		
Q3 高槻市 に愛着を感 じますか	感じる	N	53	152	150	107	24	486
		%	11%	31%	31%	22%	5%	100%
	やや感じる	N	12	110	142	107	25	396
		%	3%	28%	36%	27%	6%	100%
	どちらとも	N	1	25	35	33	12	106
		%	1%	24%	33%	31%	11%	100%
	あまり感じ ない	N	1	6	11	14	10	42
		%	2%	14%	26%	33%	24%	100%
	感じない	N	1	0	3	2	13	19
		%	5%	0%	16%	11%	68%	100%
	合計	N	68	293	341	263	84	1049
		%	6%	28%	33%	25%	8%	100%

$\chi^2(df=16, N=1049)=157.796^{***}$, Cramer V=.194^{***}

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

次に、地域ブランドの認知に与える影響を調べるため、回帰分析を行った。この分析では、年齢と市内居住年数を変数として含めた。年齢や市内居住年数は、地域への関与や愛着に影

響を与える重要な要因と考えられるため、これらの変数を含めることで、地域ブランド認知に対する影響をより正確に捉えることができると考えた。

表 4 は、地域ブランドの認知（反転）を従属変数、地域資源（商店街・歴史遺産・地域イベント）への接触頻度、年齢、市内居住年数を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.034 であり、投入した独立変数によって従属変数である地域ブランドの認知の分散の 3.4%が説明されている。分析結果を見ると、商店街、歴史遺産、高槻ジャズストリートへの接触頻度が正で統計的に有意（ $p < 0.05$ ）であった。一方、高槻まつりに関しては、有意であるとはいえない結果となった。これらの結果から、地域資源に関するすべての変数が地域ブランドの認知に影響を与えているわけではないが、多くのケースで地域ブランドの認知に対する影響が確認された。これは、仮説 1 を支持する結果であるといえる。一方、年齢、市内居住年数は有意な影響を及ぼしていなかった。標準化係数（ β ）をみると、高槻ジャズストリートが 0.090 と大きく、高槻ジャズストリートへの参加頻度が地域ブランドの認知に与える影響が強いといえる。

表 4 Q3 地域ブランドの認知の重回帰分析（仮説 1）

	B	SE	β
(定数)	2.373	0.184	***
Q11 商店街反転	0.085	0.030	0.101 ***
Q22 歴史遺産反転	0.090	0.035	0.084 ***
Q27A 高槻まつり反転	0.039	0.047	0.031
Q27B 高槻ジャズ反転	0.103	0.041	0.090 ***
Q48 年齢(実数)	0.001	0.003	0.008
Q52 市内居住年数	-0.025	0.020	-0.046
調整済みR ²	0.034		
N	985		

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表 5 は、地域への愛着（反転）を従属変数、地域資源（商店街・歴史遺産・地域イベント）への接触頻度、年齢、市内居住年数を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.114 であり、投入した独立変数によって従属変数である地域ブランドの認知の分散の 11.4%が説明されている。分析結果を見ると、すべての地域資源および市内居住年数が正で統計的に有意（ $p < 0.05$ ）であった。この結果は、地域資源への接触頻度が高く、また市内での居住年数が長いほど、地域への愛着が強い傾向にあ

ることを示している。これは、仮説 2 を支持する結果である。一方、年齢に関しては有意な影響がみられなかった。標準化係数 (β) をみると、市内居住年数が 0.241 と大きく、市内居住年数が地域への愛着に与える影響が強いといえる。

表 5 Q3 地域への愛着の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	2.828	0.150	***
Q11 商店街反転	0.049	0.024	0.069 **
Q22 歴史遺産反転	0.104	0.029	0.113 ***
Q27A 高槻まつり反転	0.132	0.038	0.121 ***
Q27B 高槻ジャズ反転	0.086	0.033	0.088 ***
Q48 年齢(実数)	-0.003	0.002	-0.054
Q52 市内居住年数	0.111	0.017	0.241 ***
調整済みR ²	0.114		
N	992		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

表 6 は、地域ブランドの認知（反転）を従属変数、地域資源（商店街・歴史遺産・地域イベント）への接触頻度、地域への愛着、年齢、市内居住年数を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R² 値は 0.092 であり、投入した独立変数によって従属変数である地域ブランドの認知の分散の 9.2% が説明されている。分析結果を見ると、商店街への訪問頻度、地域への愛着が正で統計的に有意 ($p < 0.05$) であった。また、市内居住年数が負で統計的に有意であった。この結果は、商店街への訪問頻度が高く、地域への愛着が強いほど、地域ブランドを認知する傾向にあり、一方、市内での居住年数が長いほど、地域ブランドを認知しない傾向があることを示している。これは、仮説 3 を支持する結果である。さらに、表 4 のときに統計的に有意 ($p < 0.05$) であった歴史遺産、高槻ジャズストリートが、表 6 では有意であるとは言えない結果となった。

表 6 Q33 地域ブランドの認知の重回帰分析（仮説 3）

	B	SE	β
(定数)	1.513	0.209	***
Q11 商店街反転	0.071	0.029	0.085 ***
Q22 歴史遺産反転	0.060	0.035	0.056 †
Q27A 高槻まつり反転	-0.001	0.045	-0.001
Q27B 高槻ジャズ反転	0.077	0.039	0.067 †
Q3 地域への愛着反転	0.300	0.038	0.257 ***
Q48 年齢(実数)	0.001	0.003	0.023
Q52 市内居住年数	-0.057	0.020	-0.107 ***
調整済みR ²	0.092		
N	984		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

5. 考察

本章はまちの魅力を形づくる地域資源への接触と地域への愛着が、地域ブランドの認知にどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「地域資源への接触が多い人ほど、地域ブランドの存在を認知しやすい。」仮説 2「地域資源への接触が多い人ほど、地域への愛着を持ちやすい。」仮説 3「地域への愛着を持っている人ほど、地域ブランドの存在を認知しやすい。」という 3つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果、地域資源に関するすべての変数が地域ブランドの認知と関連していることは確認できなかったものの、多くのケースで地域ブランドの認知との関連が確認された。これは、仮説 1 を概ね支持されたと考えられる。また、地域資源に関するすべての変数が地域への愛着と関連があること、地域への愛着が地域ブランドの認知と関連があることが確認され、仮説 2、3 を支持する結果が得られた。重回帰分析の結果から、地域資源への接触は、多くのケースで地域ブランドの認知に肯定的な影響を与えており、同時に地域への愛着にも肯定的な影響を与えていることが明らかになった。さらに、地域への愛着が地域資源への接触より地域ブランドの認知に対し強い影響を与えていることが示された。一方で、表 4 において有意であった歴史遺産や高槻ジャズストリートが、表 6 では有意であるといえない結果となった。このことは、地域への愛着が地域資源への接触と地域ブランドの認知との関係において、媒介的な役割を果たしている可能性を示唆している。

以上の結果を踏まえると、地域ブランドの認知度を高めるためには、住民が愛着を持って暮らせるまちづくりが重要であることが分かる。愛着を高める手段の一つとして、地域資源

に積極的に触れる機会を提供することが考えられる。地域資源への接触が住民の愛着を深め、その結果として地域ブランドの認知にもつながる可能性があることから、地域資源を活用した施策の展開が求められる。

6. 文献

- [1]…国土交通省(2017)「第4章 地域活性化の推進」『平成29年度 国土交通白書』p176
<https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h29/hakusho/h30/pdf/np204000.pdf>
- [2]…高槻市ホームページ「第3期高槻市まち・ひと・しごと創生総合戦略（令和7年2月）」p19（2026年1月9日閲覧）
<https://www.city.takatsuki.osaka.jp/uploaded/attachment/50268.pdf>
- [3]…電通 abic project 編『地域ブランド・マネジメント』有斐閣、2009年、p4
- [4]…経済産業省・特許庁『地域団体商標2009』特許庁、2009年、p329
- [5]…鈴木聡、木南莉莉（2009）「地域ブランドに関する一考察」『新潟大学農学部研究報告』62(1): pp1-7.
- [6]…引地博之、青木俊明、大淵憲一（2009）「地域に対する愛着の形成機構—物理的環境と社会的環境の影響—」『土木学会論文集 D』65(2): pp101-110
- [7]…鈴木春菜、藤井聡（2008）「「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究」『土木学会論文集 D』64(2): pp179-189
- [8]…渡邊勉（2006）「地域に対する肯定観の規定要因—愛着度、住みやすさ、地域イメージに関する分析—」『地域ブランド研究』2巻、pp99-130

第8章 歴史的興味と地元への愛着

西田カピéria 桜良

1. はじめに

高槻市は、北に北摂の景勝地である摂津峡を有し、淀川へと流れる芥川が市内を貫く自然豊かな都市である。また、古くから人々の生活が営まれてきた歴史ある地域でもある。古墳時代の今城塚古墳や、弥生時代から大規模な集落の存在を示す安満遺跡など、歴史を身近に感じることでできる歴史的資源が市内各所に点在している。

高槻市は、これらの歴史的資源を活用し、公園としての整備や博物館の設置を行うことで、市民が日常的に歴史や文化に触れられる環境を整えてきた。このような取り組みは、「歴史のまち たかつき」としての市の魅力向上を目的としたものであり、市民の地域への関心や愛着を高める役割を果たしていると考えられる。

本章では今城塚古墳や高槻城跡公園といった歴史的遺産、ならびに歴史館・歴史資料館などの歴史系施設への接触が、高槻市への愛着形成にどの程度寄与しているのかを明らかにすることを目的とする。

具体的には、第1に、身近な歴史的遺産への訪問頻度と高槻市への愛着との関連を検討する。第2に、歴史館・歴史資料館への訪問頻度が愛着形成に与える影響を分析する。第3に、文化財の現地説明会や体験学習会への参加経験が、高槻市への愛着とどのように関連しているのかを検討する。

2. 仮説

2.1. 先行研究

第1の調査に対して、鈴木・藤井（2007）は、「地域風土」への移動途上接触が地域愛着に及ぼす影響を検証している。本研究は、移動途上接触や地域風土という要素に焦点を当て、より具体的な地域愛着の形成メカニズムを解明しようとした。寺社や公園などの風土資源が多い地域では、風土との接触が地域愛着（選好）により強く影響する傾向があることを明らかにしている。単なる場所ではなく、意味のある風土との接触が愛着を高める鍵となると考察している。

第2、第3の調査に対して、五島（2022）は、地域の文化的・歴史的資源への関心や体験活動への参加が影響することを指摘している。具体的には、特定の地域を屋根のない博物館と捉え、自然や歴史文化といった様々な地域の財産を住民自ら発掘して保存や普及を行うもので、地域資源の保護とともに活動を通じて参加住民の地域愛着を育むことが期待されている。これらの研究は、地域の歴史や文化に親しむことが住民の地域愛着を育み、地域の結びつきやアイデンティティ形成に寄与することを示唆している。

2.2. 仮説

歴史的な遺産が多い高槻では、歴史に触れる機会が多くある。2011年に公開された今城塚古墳や、2021年に全面開園された安満遺跡公園など、歴史的遺産が整備され、イベント等も開催されることによって知名度が上昇したことにより、それらが市民に対する地元への愛着に直接起因しているのではないかと考えた。そのことを調べるために、最も身近な歴史遺産への訪問頻度を調べたい。

また、先行研究では歴史講座や現地説明会、体験学習会などの参加が地域への愛着を高めるとされていたことから、実際に市民の歴史館や歴史資料館への訪問頻度、歴史講座や市内の文化財の現地説明会・体験学習会への参加度を調べて仮説が真であることを確かめたい。よって、地域の歴史に触れることで高槻市への愛着は形成されるのかということ調べるため以下の仮説を上げる。

仮説1 歴史・文化財への関心が高いと、高槻への愛着度が高い

仮説2 文化財や博物館などの訪問頻度が高い人ほど高槻への愛着度が高い

仮説3 高槻市の歴史講座や市内の文化財の現地説明会・体験学習会などに参加する人は高槻への愛着度が高い

3. データと変数

3.1. データ

データは令和七年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する18歳以上85歳未満の男女で、計画標本は2,000、有効回答数は1,063、回収率は53.2である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q3. あなたは、高槻市に愛着を感じますか。それとも感じませんか。

1.感じる 2.やや感じる 3.どちらともいえない 4.あまり感じない 5.感じない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q22. Q21でお答えになった1～26の中で、最も身近な歴史遺産には、どのくらい訪れていますか。

1.ほぼ毎日 2.週に数回 3.月に数回 4.年に数回 5.過去に一回だけ 6.ない

Q23. あなたは、高槻市にある歴史館や歴史資料館に、どのくらい訪れていますか。

- 1.ほぼ毎日 2.週に数回 3.月に数回 4.年に数回 5.過去に一回だけ 6.ない

Q24. あなたは、高槻市の歴史講座や市内の文化財の現地説明会・体験学習会などに、どのくらい参加したことがありますか。

- 1.よく参加している 2.たまに参加する 3.参加したことがある 4.参加したことがない

4. 分析

はじめに、歴史的遺産への訪問頻度と高槻市に愛着を感じるかの二変数間の関連について条件を設け、クロス集計表を用いて検討した。表1は歴史的遺産への訪問頻度と高槻市に愛着を感じるかの二変数についてクロス集計表を作成したものである。表1より、高槻市「愛着を感じる」「やや感じる」と回答した人は全体の83%を占めている。そのうち、歴史的遺産を「ほぼ毎日」訪れている人では、愛着を「感じている」、「やや感じている」と答えた人の割合が75%であった。また、「週に数回」訪問している人では愛着を「感じている」、「やや感じている」と答えた人の割合が90.3%と非常に高くなっている。このことから、歴史的遺産への訪問頻度が高い人ほど、高槻市への愛着を感じやすい傾向が確認できる。

一方で、歴史遺産へ「一度も訪問したことがない」人では、愛着の回答が分散しており、「あまり感じない」「感じない」と回答した人の割合が最も高くなっている。これは、歴史的遺産との接触経験の有無が、地域への愛着形成に影響している可能性を示唆している。

カイ二乗検定の結果、カイの二乗値は58.183となり、1%水準で統計的に有意であった。また、Cramerの連関係数は0.118であり、弱いながらも有意な関連が認められた。以上より、歴史的遺産への訪問頻度と高槻市への愛着の間には、統計的に有意な関連があるといえる。

表 1 歴史的遺産への訪問頻度と高槻市に愛着を感じるかについてのクロス集計表

		Q3 高槻市に愛着を感じますか					合計
		感じない	あまり感じない	どちらともい	やや感じる	感じる	
ない	N	7	10	18	44	36	115
	%	6.1%	8.7%	15.7%	38.3%	31.3%	100.0%
過去に一回だけ	N	4	13	33	103	97	250
	%	1.6%	5.2%	13.2%	41.2%	38.8%	100.0%
Q22最も身近な歴史遺産の訪問頻度	年に数回	N	4	13	44	191	268
	%	0.8%	2.5%	8.5%	36.7%	51.5%	100.0%
月に数回	N	1	4	7	41	55	108
	%	0.9%	3.7%	6.5%	38.0%	50.9%	100.0%
週に数回	N	0	0	3	12	16	31
	%	0.0%	0.0%	9.7%	38.7%	51.6%	100.0%
ほぼ毎日	N	1	0	3	2	10	16
	%	6.3%	0.0%	18.8%	12.5%	62.5%	100.0%
合計	N	17	40	108	393	482	1040
	%	1.6%	3.8%	10.4%	37.8%	46.3%	100.0%

$\chi^2(df=20, N=1040)=58.183^{***}$, Cramer V=.0.118***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

次に歴史館や歴史資料館への訪問頻度と高槻市に愛着を感じるかの二変数間の関連について条件を設け、クロス集計表を用いて検討する。表 2 は、歴史館、歴史資料館の訪問頻度と高槻市に愛着を感じるかの二変数についてクロス集計表を作成したものである。

表 2 を見ると、歴史館・歴史資料館を「月に数回」訪問している人のうち、91.7%が高槻市に愛着を「感じる」「やや感じる」と回答している。また、「年に数回」訪れている人で、高槻市に愛着を「感じる」「やや感じる」と回答している人が 90.8%であるのに対し、「一度も訪れたことがない」と答える人で高槻市に愛着を「感じる」「やや感じる」と回答した人は 76%と、14.8%の差があった。このことから、歴史館や歴史資料館への訪問頻度が高い人ほど高槻への愛着を感じる割合が高い傾向がみられ、歴史を学ぶ施設への継続的な訪問が、地域への愛着と関係している可能性が示された。

また、カイ二乗検定の結果、カイの二乗値は 52.332 であり、1%水準で統計的に有意であった。Cramer の連関係数も 0.112 であることから、歴史館・歴史資料館への訪問頻度と高槻市への愛着には有意な関連が存在すると判断できる。

表 2 歴史館・歴史資料館の訪問頻度と高槻市に愛着を感じるかについてのクロス集計

		Q3 高槻市に愛着を感じますか					合計	
		感じない	あまり感じない	どちらともいやや感じる	感じる			
Q23歴史館・歴史資料館の訪問頻度	ない	N	11	29	48	140	138	366
		%	3.0%	7.9%	13.1%	38.3%	37.7%	100.0%
	過去に一回だけ	N	6	9	39	169	193	416
		%	1.4%	2.2%	9.4%	40.6%	46.4%	100.0%
	年に数回	N	1	3	19	82	145	250
		%	0.4%	1.2%	7.6%	32.8%	58.0%	100.0%
	月に数回	N	0	0	1	6	5	12
		%	0.0%	0.0%	8.3%	50.0%	41.7%	100.0%
	ほぼ毎日	N	0	0	0	0	1	1
		%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
	合計	N	18	41	107	397	482	1045
		%	1.7%	3.9%	10.2%	38.0%	46.1%	100.0%

$\chi^2(df=16, N=1045)=52.332^{***}$, Cramer V=0.112^{***}

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

続いて、文化財の現地説明会・体験学習会への参加経験と高槻市への愛着への関連について、クロス集計表を用いて検討した。表 3 は文化財の現地説明会・体験学習会の参加経験と高槻市に愛着を感じるかの二変数についてクロス集計表を作成したものである。

表 3 から、文化財の現地説明会・体験学習会によく参加している人で、高槻市に愛着を「感じる」、「やや感じる」と答えた人の割合は 83.3%であった。「たまに参加する」、「参加したことがある」と答えた人で、高槻市への愛着を感じる「やや感じる」と答えた人の割合は両者とも 85%を超えていたため、文化財の現地説明会・体験学習会への参加経験は愛着形成を促していると言える。これは、単に歴史的遺産を「見る」だけでなく、学習や体験を通じて歴史に関わることが、地域への愛着形成を促している可能性を示している。

一方で、「参加したことがない」と回答した人は全体の中で最も多かったが、それでも高槻市に愛着を「感じる」「やや感じる」と回答した人の割合は 82.9%と高い値を示している。このことから、文化財の現地説明会・体験学習会への参加経験は高槻市への愛着と関連しているものの、愛着の形成は参加経験のみによって説明されるものではなく、居住年数や日常生活環境など、他の要因も影響している可能性が考えられる。

カイ二乗検定の結果、カイの二乗値は 20.737 であり、1%水準で統計的に有意であった。Cramer の連関係数も 0.081 であることから、文化財の現地説明会・体験学習会への参加経験と高槻市への愛着には有意な関連が存在すると判断できる。

表 3 文化財の現地説明会・体験学習会の参加経験と高槻市に愛着を感じるかについてのクロス集計

		Q3 高槻市に愛着を感じますか					合計	
		感じない	あまり感じない	どちらともいえない	やや感じる	感じる		
	参加したことがない	N	16	41	95	338	397	887
		%	1.8%	4.6%	10.7%	38.1%	44.8%	100.0%
Q24文化財の現地説明会・体験学習会の参加経験	参加したことがある	N	1	1	12	46	76	136
		%	0.7%	0.7%	8.8%	33.8%	55.9%	100.0%
	たまに参加する	N	0	0	1	9	11	21
		%	0.0%	0.0%	4.8%	42.9%	52.4%	100.0%
	よく参加している	N	1	0	0	3	2	6
		%	16.7%	0.0%	0.0%	50.0%	33.3%	100.0%
合計		N	18	42	108	396	486	1050
		%	1.7%	4.0%	10.3%	37.7%	46.3%	100.0%

$\chi^2(df=12, N=1050)=20.737^{***}$, Cramer V=0.081^{***}

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

表 4 は、高槻市への愛着（反転）を従属変数とし、年齢（実数）、女性ダミー、歴史遺産への訪問頻度（反転）、歴史館・歴史資料館訪問頻度（反転）、文化財の現地説明会・体験学習会への参加経験（反転）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示している。重回帰式の調整済み R^2 は 0.16 であり、投入した独立変数によって高槻市への愛着の分散の約 16% が説明された。

β 値の分析結果を見ると、「歴史遺産への訪問頻度」と「歴史館・歴史資料館訪問頻度」が正で統計的に有意な影響を示しており、歴史遺産や歴史館・歴史資料館により頻繁に訪れる人ほど高槻市への愛着が高い傾向が確認された。一方で、女性ダミーはわずかながら正の有意な係数を示し、関連は低いものの有意であることが伺えた。これに対して、年齢は 0.07、文化財の現地説明会・体験学習会への参加経験については 0.018 と低く、統計的に有意な影響は確認されなかった。

標準化係数（ β ）を見ると、歴史遺産への訪問頻度が 0.146 と最も大きく、高槻市への愛着形成において相対的に重要な要因であることが示された。

以上の重回帰分析の結果から、最も身近な歴史遺産への訪問頻度が高いほど高槻市への愛着が高まるという仮説 1 と、歴史館・歴史資料館への訪問頻度が高い人ほど愛着が高いとする仮説 2 については統計的に有意な効果が確認されたため支持された。また、文化財の現地説明会・体験学習会への参加経験が愛着を高めるとする仮説 3 については、 β 値が 0.018 と、有意な影響は認められず、本分析の結果からは支持されなかった。

表 4 Q3 高槻への愛着の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	3.867	0.140	***
年齢(実数)	0.000	0.002	0.007
Q53 女性ダミー	0.084	0.057	0.049
Q22 歴史遺産訪問頻度	0.080	0.035	0.077 *
Q23歴史館・歴史資料館訪問頻度	0.157	0.039	0.146 ***
Q 24文化財の現地説明会・体験学習会への参加経験	0.031	0.061	0.018
調整済みR ²	0.016		
N	1005		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

5. 考察

本研究では、高槻市の歴史的遺産や歴史関連施設への接触が、市民の地域愛着形成にどのように関係しているのかを検討した。その結果、重回帰分析においては、歴史遺産への訪問頻度と文化財の現地説明会・体験学習会へ参加が一貫して高槻市への愛着に正の影響を与えていることが明らかになった。

この結果は、今城塚古墳や安満遺跡公園といった屋外の歴史的遺産や、高槻市今城塚古代歴史館などの高槻の歴史に関する資料館や博物館が市民の日常生活空間と密接に結びつき、繰り返し訪れることを通じて場所への親近感や帰属意識を高めている可能性を示唆している。これは、鈴木・藤井（2007）が指摘する「意味のある地域風土との接触が地域愛着を高める」という知見とも整合的である。

一方で、文化財の現地説明会・体験学習会への参加経験は、クロス集計分析では高槻市への愛着との有意な関連が確認されたものの、他の要因を統制した重回帰分析では有意な効果を示さなかった。このことから、この活動が単独で地域愛着を形成するというよりも、もともと地域への関心や愛着が高い人が参加している可能性が示唆される。また、文化財の現地説明会・体験学習会への参加経験を有する回答者自体が少なかったことも、統計的に有意な結果が得られなかった一因であると考えられる。以上より、高槻市への愛着形成においては、身近な歴史的遺産に日常的に接する経験が重要であると結論づけられる。

6. 文献

- [1]…鈴木春菜、藤井聡(2007) 「「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究」『土木学会論文集 D』Vol64 No.6:pp179-181
- [2]…五島薫(2022) 「博物館的市民活動を通じて醸成される地域愛着に関する研究-神奈川

県内のエコミュージアムと類似活動団体への調査から」『令和四年度建築学教室修士論文・ポートフォリオ梗概集・博士論文梗概集（横浜国立大学建築学教室 2023 年 3 月 23 日）』

資料：
予告はがき・調査票

高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査

(調査実施) 高槻市・関西大学総合情報学部

高槻市と関西大学は共同で、市政と市民生活に関する調査を行っています。市は、今後の施策を検討するうえでの基礎資料とすることを目的に、大学は、高槻市民の生活とものの見方に関する研究と教育を行うことを目的に実施するもので、調査の対象は、住民基本台帳から無作為に選ばれた18歳以上の市民の方です。**封筒宛名のご本人様ご自身の回答を**、この調査票にご記入いただきますようお願いいたします。調査の回答は、調査の目的以外には、一切利用いたしませんので安心してお答えください。

調査結果につきましては、本年12月頃に速報版を、翌年3月中に最終報告書を発行し、高槻市と関西大学で閲覧できるようにいたします。できるだけ多くの方のご意見を反映した調査を目指しておりますので、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

*ボールペンを同封しております。回答の際にご利用ください(返却の必要はありません)。

*ご回答は、とくに断りがなければ、選択肢番号を1つだけ選んでマルをつけてください。いくつでもマルをつけられたり、マルをつける個数が決められていたりするものは、指示に従ってお答えください。

*お忙しいところ誠に恐縮ですが、**9月12日(金)**までに、同封の封筒(切手貼付済み)でご返送いただきますようお願いいたします。

*この調査票と封筒には、ご住所やお名前を記入されないようお願いいたします。

(どなたがどのような回答をされたかわからないようにするためです。)

<調査に関するお問い合わせ> 高槻市 市民生活環境部 市民生活相談課 tel : 072-674-7130
関西大学 総合情報学部 tel : 072-690-2151

Q1. あなたは、現在の生活全体にどのくらい満足していますか。

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Q2. あなたは、現在どのくらい幸せですか。

1	2	3	4	5
幸せ	やや幸せ	どちらともいえない	やや不幸せ	不幸せ

Q3. あなたは、高槻市に愛着を感じますか。それとも感じませんか。

1	2	3	4	5
感じる	やや感じる	どちらともいえない	あまり感じない	感じない

Q4. あなたのお住まいの地域は、全体的に暮らしやすいと思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Q5. あなたは、現在お住まいの地域にどのくらい「住み続けたい」と思いますか。

1	2	3	4	5
ずっと住み続けたい	住み続けたい	まあ住み続けたい	どちらともいえない	機会があれば引っ越したい

Q6. あなたは、現在お住まいの地域で、地域活動に参加していますか。

1	2	3	4
よく参加している	ときどき参加している	ほとんど参加していない	まったく参加していない

Q 7. あなたは、近所の人とどの程度世間話をしますか。

- | | | | | |
|------|--------|--------|--------|----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ほぼ毎日 | 週に3~4回 | 週に1~2回 | 月に1~2回 | まったく話さない |

Q 8. あなたは、親しい付き合いをしているご近所の方が多ですか。少ないですか。

- | | | | |
|----|------|-------|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 多い | やや多い | やや少ない | 少ない |

Q 9. あなたは、困っているとき、近所の人たちは手助けしてくれると思いますか。

- | | | | | |
|------|--------|-----------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう思う | ややそう思う | どちらともいえない | あまりそう思わない | そう思わない |

Q 10. あなたの近所の人たちは、強いきずなで結ばれていると思いますか。

- | | | | | |
|------|--------|-----------|-----------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう思う | ややそう思う | どちらともいえない | あまりそう思わない | そう思わない |

Q 11. あなたは、最寄りの商店街へはどの程度買い物に行きますか。

- | | | | | |
|------|----------|----------|----------|----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ほぼ毎日 | 週に2~3日程度 | 月に2~3日程度 | 年に2~3日程度 | まったく行かない |

Q 12. あなたは、どのくらいの頻度で、市内の公園にでかけますか。

- | | | | | |
|------|----------|----------|--------|----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ほぼ毎日 | 週に3~4回程度 | 週に1~2日程度 | 月に1~2日 | 公園には行かない |

Q 13. あなたは、1日に平均して何分くらい歩いていますか。

- | | |
|---------------|----------------|
| 1. 10分未満 | 6. 50分以上60分未満 |
| 2. 10分以上20分未満 | 7. 60分以上70分未満 |
| 3. 20分以上30分未満 | 8. 70分以上100分未満 |
| 4. 30分以上40分未満 | 9. 100分以上 |
| 5. 40分以上50分未満 | |

Q 14. あなたは、普段、1日にどのくらい音楽を聴いていますか。自宅内で聴いている時間と、自宅外で聴いている時間、それぞれについてお答えください。

A. 自宅内で音楽を聴く時間

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. まったく聴かない | 4. 30分以上1時間未満 |
| 2. 10分未満 | 5. 1時間以上2時間未満 |
| 3. 10分以上30分未満 | 6. 2時間以上 |

B. 自宅外で音楽を聴く時間

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. まったく聴かない | 4. 30分以上1時間未満 |
| 2. 10分未満 | 5. 1時間以上2時間未満 |
| 3. 10分以上30分未満 | 6. 2時間以上 |

Q 15. あなたは、普段、JR高槻駅を利用しますか。

- | | |
|---------|----------|
| 1. 利用する | 2. 利用しない |
|---------|----------|

Q 16. JR高槻駅周辺について、高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間であると感じますか。

- | | | | |
|-----|-------|---------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 感じる | やや感じる | あまり感じない | 感じない |

Q 17. あなたは、普段、阪急高槻市駅を利用しますか。

- | | |
|---------|----------|
| 1. 利用する | 2. 利用しない |
|---------|----------|

Q 18. 阪急高槻市駅周辺について、高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間であると感じますか。

- | | | | |
|-----|-------|---------|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 感じる | やや感じる | あまり感じない | 感じない |

Q19. 高槻市の交通手段におけるそれぞれの現状について、あなたはどのくらい満足していますか。

A. 【徒歩】：歩道の整備の状況

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

B. 【徒歩】：バリアフリー化

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

C. 【自転車】：通行するために必要なスペース

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

D. 【自転車】：駐輪場

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

E. 【自転車】：乗っている人々のマナー

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

F. 【バイク】：通行するために必要なスペース

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

G. 【バイク】：駐車場

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

H. 【バイク】：乗っている人々のマナー

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

I. 【バス】：路線・系統

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

J. 【バス】：ダイヤ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

K. 【バス】：バス停

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

L. 【バス】：乗り方の分かりやすさ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

M. 【鉄道】：駅の使いやすさ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

N. 【鉄道】：列車ダイヤ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

O. 【自動車】：道路の整備の状況

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

P. 【自動車】：駐車場

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

Q. 【タクシー】：利用しやすさ

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

R. 【その他】：駅前広場

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	利用しない

Q20. あなたは、直前(Q19. R)の質問で「駅前広場」の満足度を回答した際、どこの「駅前」をイメージしましたか。あてはまるものをいくつでも選んでください。

1. JR高槻駅
2. 阪急高槻市駅
3. JR摂津富田駅
4. 阪急富田駅
5. 阪急上牧駅
6. その他 ()
7. どの駅もイメージしていない

Q 2 1. あなたは、高槻市の歴史遺産や施設についてご存知ですか。知っているものにマルをつけてください。

(マルはいくつでも)

- | | | |
|------------------|-------------------------|------------------|
| 1. 芥川城跡 | 1 2. 西国街道と芥川一里塚 | 2 3. 本山寺 |
| 2. 阿武山古墳 | 1 3. 嶋上郡衙跡附寺跡 | 2 4. 本照寺 |
| 3. 安満遺跡 (安満遺跡公園) | 1 4. 上宮天満宮 | 2 5. 三輪神社 |
| 4. 安満宮山古墳 | 1 5. 新池埴輪製作遺跡 (ハニワ工場公園) | 2 6. 八阪神社 |
| 5. 安岡寺 | 1 6. 高槻城跡 (高槻城公園) | |
| 6. 伊勢寺 | 1 7. 高山右近高槻天主教会堂跡 | 2 7. 今城塚古代歴史館 |
| 7. 今城塚古墳 | 1 8. 鬮鷄山古墳 | 2 8. しろあと歴史館 |
| 8. 磐手杜神社 | 1 9. 能因塚・不老水・花の井 | 2 9. 埋蔵文化財調査センター |
| 9. 神峯山寺 | 2 0. 野見神社・永井神社 | 3 0. 歴史民俗資料館 |
| 1 0. 慶瑞寺 | 2 1. 昼神車塚古墳 | |
| 1 1. 古曾部窯跡 | 2 2. 普門寺 | 3 1. どれも知らない |

↓
Q 2 2へ

Q 2 2. Q 2 1でお答えになった1～26の中で、最も身近な歴史遺産には、どのくらい訪れていますか。

- | | | | | | |
|------|------|------|------|---------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| ほぼ毎日 | 週に数回 | 月に数回 | 年に数回 | 過去に1回だけ | ない |

Q 2 3. あなたは、高槻市にある歴史館や歴史資料館に、どのくらい訪れていますか。

- | | | | | | |
|------|------|------|------|---------|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| ほぼ毎日 | 週に数回 | 月に数回 | 年に数回 | 過去に1回だけ | ない |

Q 2 4. あなたは、高槻市の歴史講座や市内の文化財の現地説明会・体験学習会などに、どのくらい参加したことがありますか。

- | | | | |
|----------|---------|-----------|-----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| よく参加している | たまに参加する | 参加したことがある | 参加したことがない |

Q 2 5. あなたは、高槻市の文化財や歴史遺産についての情報を何から得ていますか。主なもの1つにマルをつけてください。

1. 市の広報誌
2. 市のホームページ
3. チラシ・ポスター
4. 家族や知人
5. SNS
6. 情報誌
7. その他 ()
8. とくに情報を得ていない

Q 2 6. あなたは、この1年以内に、摂津峡・三好山周辺を訪れましたか。訪れた場合、その目的は何でしたか。該当するものをいくつでもお選びください。

- | | |
|--------------------|----------------|
| 1. 花見 (桜など) | 8. 公園利用 |
| 2. 紅葉見物 | 9. キャンプ |
| 3. ハイキング | 1 0. 宿泊・温泉 |
| 4. 川遊び | 1 1. カフェ・レストラン |
| 5. 歴史散策 (芥川城跡など) | 1 2. その他 () |
| 6. 自然観察 (ホタルなど) | 1 3. 特に目的はない |
| 7. 環境活動 (ボランティアなど) | 1 4. 訪れていない |

Q 2 7. あなたは、高槻市内で行われている次のようなイベントにどのくらい参加したことがありますか。

A. 高槻まつり

- | | | | |
|----------|---------|-----------|-----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| よく参加している | たまに参加する | 参加したことがある | 参加したことがない |

B. 高槻ジャズストリート

- | | | | |
|----------|---------|-----------|-----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| よく参加している | たまに参加する | 参加したことがある | 参加したことがない |

Q28. あなたの関心が高い、環境問題に関する話題は何ですか。3つ以内でマルをつけてください。

- | | | |
|---------------|----------------|-----------------|
| 1. 地球温暖化 | 8. 悪臭 | 15. 食の安全性 |
| 2. ヒートアイランド現象 | 9. 水質汚濁 | 16. 食品ロス |
| 3. 異常気象 | 10. 土壌汚染 | 17. ごみの減量、リサイクル |
| 4. 省エネルギー（節電） | 11. 生物多様性、外来生物 | 18. 不法投棄 |
| 5. 再生可能エネルギー | 12. 森林荒廃 | 19. その他() |
| 6. 大気汚染、PM2.5 | 13. 景観保全 | |
| 7. 騒音、振動 | 14. 都市緑化 | 20. いずれにも関心がない |

↓
Q29へ

Q29. 次に、現在の高槻市の環境に関するA～Dの項目について、あなたのお考えをおうかがいします。

A. 高槻市には、身近な自然環境とのふれあいがあると思いますか。

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | ややそう
思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

B. 高槻市は、不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちだと思いますか。

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | ややそう
思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

C. 高槻市には、良好な環境づくりを目指した活動が豊富にあると思いますか。

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | ややそう
思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

D. 高槻市には、環境活動に関する情報や呼びかけが十分にあると思いますか。

- | | | | |
|----------|------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| そう
思う | ややそう
思う | あまりそう
思わない | そう
思わない |

Q30. 自宅周辺（徒歩圏内）でみどりを感じる場所はどこですか。3つ以内でマルをつけてください。

- | | |
|---------------|----------------|
| 1. 公園・緑地 | 9. 公園花壇 |
| 2. 河川など水辺 | 10. 学校 |
| 3. 田畑 | 11. 公民館などの公共施設 |
| 4. 神社や寺 | 12. 自宅 |
| 5. 山林 | 13. 商業施設など |
| 6. 街路樹 | 14. 駅周辺 |
| 7. 庭や生け垣など住宅地 | 15. その他() |
| 8. 集合住宅の植栽など | 16. 特にない |

Q31. あなたは、高槻市は子育て環境が整っているまちだと思いますか。

- | | | | | |
|----------|------------|---------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう
思う | ややそう
思う | どちらとも
いけない | あまりそう
思わない | そう
思わない |

Q32. あなたは、高槻市は教育環境が整っているまちだと思いますか。

- | | | | | |
|----------|------------|---------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう
思う | ややそう
思う | どちらとも
いけない | あまりそう
思わない | そう
思わない |

Q33. あなたは、高槻市には地域ブランドと呼べるような特産品や観光地があると思いますか。

- | | | | | |
|----------|------------|---------------|---------------|------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| そう
思う | ややそう
思う | どちらとも
いけない | あまりそう
思わない | そう
思わない |

Q34. あなたは、「食品ロス」が社会的に問題となっていることを知っていますか。

- | | | | |
|-------------|---------------|-------------|--------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| よく
知っている | ある程度
知っている | あまり
知らない | まったく
知らない |

Q35. 「食品ロス」を減らすために取り組んでいることはありますか。 いくつでもお選びください。

1. 残さずに食べる
2. 「賞味期限」を過ぎてもすぐに捨てるのではなく、自分で食べられるか判断する
3. 冷凍保存を活用する
4. 料理を作り過ぎない
5. 日頃から冷蔵庫などの食材の種類・量・期限表示を確認する
6. 飲食店等で注文しすぎない
7. 期限間近による値引き商品・ポイント還元の商品を率先して選ぶ
8. 小分け商品、少量パック商品、バラ売り等 食べきれぬ量を購入する
9. 残った料理を別の料理に作り替えるなど、工夫して食べる
10. 商品棚の手前に並ぶ期限の近い商品を購入する (いわゆる「てまえどり」)
11. 外食時には、小盛りメニュー等希望に沿った量で料理を提供する店舗を選ぶ
12. その他 ()
13. 取り組んでいることはない

Q36. あなたは、「生物多様性」という言葉とその意味を知っていますか。

- | | | |
|-----------------|----------------------|------|
| 1 | 2 | 3 |
| 言葉も意味も
知っている | 言葉は知っている
が意味は知らない | 知らない |

Q37. あなたは、この1年以内に「生物多様性」の保全に向けた取り組み※をしましたか。該当するものをいくつでもお選びください。

※「生物多様性」の保全に向けた取り組みとは、地球上の生物の多様さとその生育環境の多様さを維持するための活動のことです。

1. 日常生活で取り組んだ
2. 仕事を通じて取り組んだ
3. 市民活動に参加した
4. 講座やイベントに参加した
5. その他 ()
6. 取り組んだことはない

Q38. 自殺で亡くなる人の数は全国で年間約2万人となっています。あなたは毎年、このように多くの方が自殺で亡くなっていることをご存知ですか。

- | | |
|----------|---------|
| 1. 知っている | 2. 知らない |
|----------|---------|

Q39. あなたは、自殺について相談できる機関があるのをご存知ですか。(例えば、保健所 ところの健康相談など)

- | | |
|----------|---------|
| 1. 知っている | 2. 知らない |
|----------|---------|

Q40. あなたは、これまでの人生の中で本気で自殺したいと考えたことがありますか。

- | | |
|-------|-------|
| 1. ある | 2. ない |
|-------|-------|

Q41. あなたは、もし身近な人から「死にたい」と打ち明けられたとき、どう対応するのが良いと思いますか。適切と思われるものをいくつでもお選びください。

1. 相談に乗らない、もしくは話題を変える
2. 「死んではいけない」と説得する
3. 「つまらないことを考えるな」と叱る
4. 「がんばって生きよう」と励ます
5. 「死にたいぐらい辛いんだね」と共感を示す
6. 「医師など専門家に相談した方が良い」と提案する
7. ひたすら耳を傾けて聞く
8. その他 ()
9. 適切と思われる対応はない

Q42. 今後の自殺対策について、おうかがいします。今後、どのような自殺対策が求められるとあなたは思いますか。いくつでもお選びください。

1. 自殺の実態を明らかにする調査・分析
2. 危険な場所、薬品等の規制
3. インターネットにおける自殺関連情報の対策
4. 自殺対策に関する広報・啓発
5. 適切な精神科医療体制の整備
6. 職場におけるメンタルヘルス対策の推進
7. 自殺対策に関わる民間団体の支援
8. 様々な分野におけるゲートキーパー※の養成
9. 様々な悩みに対応した相談窓口の設置
10. 地域やコミュニティを通じた見守り・支え合い
 11. 子どもの自殺予防
 12. 自殺未遂者の支援
 13. 自死遺族等の支援
 14. その他 ()
 15. 特になし

※「ゲートキーパー」とは、悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聴いて、必要な支援につなげ、見守る人のことです。

Q43. 自殺したいという気持ち乗り越えるには、どのような方法が適切と思われますか。適切と思われるものをいくつでもお選びください。

1. 家族や友人、職場の同僚など身近な人に悩みを聞いてもらう
2. 医師やカウンセラーなど心の健康に関する専門家に相談する
3. 弁護士や司法書士、公的機関の相談員など、悩みの元となる分野の専門家に相談する
4. できるだけ休養を取るようになる
5. 趣味や仕事など他のことで気を紛らわすよう努める
6. 特に何もしない
7. その他 ()
8. 適切と思われる方法はない

Q44. 次のa～sは、市の仕事のうち、生活に関係の深いものをあげています。

以下から、①あなたが、最近良くなってきたと思うもの(マルはいくつでも)、また、②あなたが、今後力を入れてほしいもの(マルは3つまで)をそれぞれ選んでください。

② 力を入れてほしいもの (3つまで)		
① 良くなってきたもの (いくつでも)	↓	
a. 学校教育の充実、青少年の健全育成	1	1
b. 図書館、博物館などの文化施設の整備	2	2
c. スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	3	3
d. 高齢者や障がい者等への福祉対策	4	4
e. 医療施設や救急医療体制の整備	5	5
f. 空気の汚れ、騒音などへの対策	6	6
g. 公園の整備や自然・緑の保全	7	7
h. 街並み・景観の整備	8	8
i. 駅前の整備、駐車・駐輪対策	9	9
j. ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	10	10
k. 下水道の整備	11	11
l. 水の安定供給、上水道整備	12	12
m. バス・鉄道などの公共交通機関の整備	13	13
n. 身のまわりの生活道路の整備	14	14
o. 交通安全・災害防止対策	15	15
p. 公営住宅の建設や住宅融資制度	16	16
q. 市の広報・窓口相談、情報公開の充実	17	17
r. 災害対策・防犯対策	18	18
s. 子育て支援	19	19
t. 特になし	20	20

Q45. あなたは、「高槻市みらいのための改革方針」をご存知ですか。

1	2	3
名前も内容も知っている	名前だけ知っている	知らない

Q46. あなたは、高槻市が20年後、30年後を見据えて行財政改革に取り組む必要性を感じますか。

1	2	3	4
感じる	やや感じる	あまり感じる	感じない

執筆者紹介

阪口 祐介	(さかぐち ゆうすけ)	編集・はじめに・第1章	(関西大学総合情報学部教授)
松本 渉	(まつもと わたる)	編集・第1章	(関西大学総合情報学部教授)
雷 新雨	(らい しんう)	第2章	(関西大学ティーチング・アシスタント)
音田 真希	(おんだ まさき)	第3章	(関西大学総合情報学部生)
櫻井 彰吾	(さくらい しょうご)	第4章	(関西大学総合情報学部生)
玉野 涼聖	(たまの りょうせい)	第5章	(関西大学総合情報学部生)
吉田 伊織	(よしだ いおり)	第6章	(関西大学総合情報学部生)
渡邊 宏基	(わたなべ ひろき)	第7章	(関西大学総合情報学部生)
西田カピーリア 桜良	(にしだかぴーりあ おうら)	第8章	(関西大学総合情報学部生)

2025 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—

編集 関西大学総合情報学部、発行 関西大学総合情報学部、発行年月 2026 年 3 月

※ 関連する資料として、同時期に発行された『高槻市と関西大学による市民意識調査報告書—令和 7 年度—』（関西大学総合情報学部[編集]，高槻市・関西大学総合情報学部[発行]）があります。本報告書の 3 章～8 章が省略されたものになります。